とあるオーバーテクノロジーの転生者のバトン

模造堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とあるオーバーテクノロジーの転生者のバトン

【Ｎコード】
Ｎ２１５３Ｕ

【作者名】
模造堂

【あらすじ】
第一その者は科学的な転生者、
第二不幸体質である、
第三賢者の石の所有者である。

0－1（前書き）

チートではない強さを持っております、主人公はペルソナファンで模造品を賢者の石から作り出しました、設定は現在書きながら作っております、もしかすれば直すかも知れません、ご容赦ください

0－1

0－1

転生を繰り返し合計3度目の人生、年齢にしたら１００歳は超えるが精神年齢は肉体年齢に沿ったものだと実感している。

中学生で引きこもりＰ3、Ｐ４にはまり、その召喚器を作ったが肝心の弾薬は難しく中学卒業に間に合って無事卒業し、第一希望の高校に入学したまでは良かった。

問題は勉強熱心な学生が大半で特に事件も無いまま半年が過ぎた。

実に退屈な日々が続き夏休みも終った後期の１０月、秋の木漏れ日がと言いたい所だが現在警察に家宅捜索中、どうも実験の音が聞こえ通報を受けたらしい。

散々捜索された後警察は帰り、ごちゃごちゃになった自宅を魔法で元に戻した。

新しい物件を探して土地つき中庭があって防音設備が充実した地下は1階、地上は三階の新市街にある物件を購入した、今までの荷物は魔法で転移させ、今までの家は不動産屋を通して賃貸にしておいた。

学校に行く時間になり、バイクに乗って登校した。

賢者の石は魔法で認識できないようにしてあり、ペル3の召喚器も同じく、ベレッタ１７のロングマガジンが最高だった。

「おはようございます」

笑顔の女子だ、今までの経験から女性の恐ろしさは知っている。

「おはよう、で用は」

「つれないですねこれでも生徒会長ですよ」

「朝、女性、笑顔は裏ごと丸出しと直感が告げている」

「まあまあお暇なら生徒会に入りませんか？」

「暇じゃないで断る」

「そういわずに体験からでも」

「厨二病になんだ」

「なおさら入りませんか」

「一年後にでも考えておく」

「回答は明日ということで、それ以上は待ちません」

「分かった今答える、断る」

「断らないでくださいよ」

「回答は得ただろうではさようなら」

素早く立ち去っていく、厄介事は教室に来ると予想したので、保健室に入りだるいと言って寝た。

眠りながらうなされ、起き上がるとびっしり嫌な汗をかき呼吸も荒

かった。

「あらあら本当に何か有ったの？」

「少し嫌なことが合ったので、トラウマが再発したのでしょう」

「話せること？」

「いえ」

「そう、何事も逃げてばかりじゃ何もならないわよ」

心に響く痛みが疼く、こっちは幕末から生きているんだよと叫びたくなった。

色々なものを背負って生きていくしかなく、間違いも悔いも、何もかもが過去になった今になって苛むように心に痛みとして疾る。

「あらあら、渋い顔ね、今なら童貞卒業できるわよ」

「もう卒業しています」

「最近の子は速いわね」

「あまり変わりないかと、授業に戻ります」

「それは無理よ、もう下校時間よ」

「生徒会空いていますか」

「会長さんが心配していたわよ、一種の予感だけど、恋愛相手に

思われているんじゃない」

「じゃないといいですね」

色々と物騒な保険医から逃げるように靴を履いて保健室から飛び出した。

スローモーションで生徒会長の真正面を飛びぬけ、危うくガラスと正面衝突しそうになり常識外れの反射神経で屈み壁に当るだけで済ませた。

「あら、仮病？」

「仮病から病気になって立ち直った頃です、生徒会から何か御用ですか」

「個人的にね頼みたいことがあるの」

「それって」

「一生の頼み、彼氏になってじゃないと結婚させられるのよ」

「それは不幸ですね、分かりました次の馬が出るまで彼氏役を演じましょう」

「恩に着るわ、早速生徒会に来て」

「何故に生徒会ですか」

「結婚相手がいるからよ」

「致し方ないですね」

生徒会に赴き、その結婚相手とやらを見た瞬間殴りたくなるほど嫌味な奴だった。

服から何まで毎日交換しているように新品で、笑顔で人をだます性格の持ち主に見える。

「こちらが私の彼氏の紗江忍よ」

「こんにちは、婚約者の日医石川です」

「彼氏ができたので婚約は破棄ね」

「何故、その紗江さんを選んだのです」

「簡単よ勉強しなくても首席の頭のよさと、顔よ、渋めでしょ？」

「私にすれば所詮は一年生の帰宅部と思いますが」

「なあ殴っていいか？どうしてかお前みたいな奴は殴りたくてしょうがない、あれだろ使用人にお帰りなさいませを、列を作らせて言わせる性格だろう」

「単細胞はこれだから困る」

「なら科学は得意」

「もちろんだ」

「なら問題です猫の夜目を説明してください」

「それは正直分からないな」

「答えは猫類にあるタペータムという反射板で通過した光を再び網膜に反射する、光を二度利用することで人間の視界限界光量の六分の一でも見えるからです、では次の質問です」

と永遠と価額の知識について問題攻めにして余裕を失わせた、これぐらい事は中学生でも知っている者なら知っている程度の問題で、それを科学は得意というのだから困りもものだ。

余裕を失わせた後は選択肢を出し簡単そうにして、数学系の問題を出しまくった。

もちろん現在の大学の専門学科で学ぶ物だ、答えられるはずも無くキレて殴りかかったところをクロスカウンターで殴り倒した。

「やった正当防衛、合法的に殴り倒せた」

嫌味な気障野郎は口から泡を吹いて悶絶していた、それを生徒会員はデジカメで取り何度も写真に収めていた。

「ありがとう忍君」

「いやいやこんな奴が一秒でも消えてくれるなら喜んで殴るね、後で礼参りに来るだろうが」

「お父様に電話しないと」

携帯で電話し伝え、何度か変わり彼氏一号になった。

彼女の手を取り歩き出した久しぶりに人助けと、嫌いな奴を殴れて上機嫌で歩いていた。

一瞬影が揺らめいたそこから放たれた礫が、額に当る前に避けた、同時にグロッグ17を抜いて個性と呼んでいる、隠れた自分の欠片が飛び散る。

それはスローモーションで頭部に銃口を当てトリガーを引いて、引き起こされた事象。

飛び散る欠片は渦を巻き一つの形になった。

アポロ、輝くばかりに美しい男神がギカラリアットを繰り出す、それを影が受けブロック塀に叩きつけられる、後が残るような一撃でブロック塀から崩れ落ちる。

「えーと、何」

「個性、パーソナルと呼んでいる自分の隠れた個性とでも言おうか、パーソナル使いの常識と言っても使うのも初めてだし、他の者は見たこと無いし」

「超能力？」

「いや科学的な精神具現化装置だよ素質が無いと無理だけど」

「へ、へー私にも使える？」

「素質と、後使用後に相応の負担が有るから、昏睡に陥るかも」

「一度試したいわ」

「その前に」

グロッグ17を片手に影に近寄る、礫を投げた張本人は生徒会長ミズキ・麒麟・ラフォードの元婚約者のボディガードだったようで、起こされて事情を散々聞かされて大人しく帰ってもらった。

ミズキは自宅まで押しかけ、新築同然の自宅に手料理を振る舞い、まあプロとは行かないが相応に上手だった。

グロッグ17の予備を渡し、試し撃ちさせたら適合者でエロスと名乗ったパーソナルが現れ、効果が消えると消えた、それでグロッグ17に小細工をして帰らせた。

本人はまだ居たかった様で何度も渋ったが、明日会うことになるので帰ってもらい静かな夜を迎えるはずだった。

0－1（後書き）

ご評価、ご感想がありましたら嬉しいです、作者としても駆け出しなのでどれだけかけるか自信が有りませんが、お読みになった方には謝辞を

0－2青天の霹靂

0－2

ミズキが家出して自宅に転がり込んだ、どうも友人から断られたようだ。

「彼女が着たから喜びなさいよ」

「素直に喜べない、そもそも彼氏ができたら結婚から逃れられるのでは」

「今度はお見合いうんざりして逃げ出した」

俺は爆笑してミズキは苦笑している。

そんな訳でパーソナル使いの俺達はお気に入りの3階は共同で、二階がミズキ、1階が俺になった、風情のある中庭に蝋燭を立てて火を灯し夜の夜景を見ていた。

自宅は丘にあり、周囲には空き地が目立つ開発中止になって廃墟になった建設中の家がある程度、駅から遠かったために開発が中止になった土地。

それを買い叩き、廃墟をなくしてもらうことで合意した。

朝の六時、廊下で眠っていたらしく布団がかけられている。

部屋に入り着替えを持って魔法で体を清め、体臭衛生のサプリメントを飲んで魔法でミズキが居ない場所を掃除し、意外に家庭的で家事をこなしていた。

「おはよう」

「お、は、よ、う」

「布団ありがとう」

「いえいえ、彼女ですから和風美人が彼女でよかったわね、今時珍しいヤマトナデシコよ」

「なら嬉しいな、年齢差があるけど」

「ご両親は」

「財産を残して蒸発したよ」

「意外ね」

「財産を残したこと？蒸発したこと？」

「君がぐれなかったこと」

「ぐれるほど子供じゃないよ」

彼女が笑い、とても笑顔の似合う少女だったが、調理は俺の方が上かと点数をつけていた。

働き者で掃除洗濯の家事一切を受け持ち、二人でやった方が速いというと笑顔で断り、男は家事をしないで勉強してなさいと言われまるで古妻の様だ。

このまま過ぎると結婚というゴールインが見えるが、現実はそう容易くないことを経験が物語る。

朝の9時を回った頃、チャイムがなる、友人らしい関係はなく、覚えがあるのは機能のこととミズキのことだ。

用心の為にインターホンを見ると警察で、居留守を使い建物の防音効果を高めた。

警察官はしつこかったが、居ないことを確かめ拳銃を取り出した、瞬時にドアに防弾効果を取り付け、発砲されると弾き返され、逆に警察官の一人が負傷した、それで引き下がった。
画像を警察署に送り、同時に弁護士を通じて起訴することになった。

警察から示談の連絡があったがスルーして、ミズキに映像を見せ現在起訴中と話した。

警察が強硬な姿勢をとるとインターネット上に画像を載せると脅した。

強硬な姿勢を崩し、懐柔しようと躍起になったが、正式に起訴され警察官二人は容疑者になった。

「物騒な世の中ね」

「拳銃を携帯していたことも怪しい」

「普通は持たないの？」

「持っているけど最初から実弾が出ることは無い、最初は威嚇の為に空砲だ」

「怪しいなら調べてきたら」

「誰が来てもあけるなよ」

「分かったわ」

自室に戻りライダースーツを着込んで電気エンジンのスポーツバイクに跨り、警察署に走った、警察署で二人と面会したいと申し出たら断れかけ、ネットに流すと脅すとすんなり通してくれた。

二人と対面すると根掘り葉掘り聞き、訴えが不起訴にならないことを祈るか、それとも誰が頼んだか、選択肢を迫った。

二人はあっさりと口を割った県警の検察と、さらに情報を引き出し県警の本部長の差し金。

その後警視庁と取引して本部長に責任を取らせるか、それとも警察全体の信用を破壊するかと脅した、警視庁はあっさりと本部長を懲戒処分し、何れ実刑が待っていると話した。

証拠のデータを渡し、それで終了、ただ警察庁は知らなかったが、内容は全て記録済み。

マスコミが騒いだが、真相は裁判よって分かる。

「世の中わからないモノね」

「分かっていることは本部長が何故そんな命令を二人に指示したか、おそらく元婚約者の差し金だろうと思うよ、俗に言う、嫌がらせ、本部長がべらべらと話したら芋づる式に捕まるわけだ、十中八九」

「あの馬鹿にそんな知能があったかと思うと情けないわね」

「馬鹿だから出来たのだと思うよ、普通なら止めるし」

「二人の警察官は」

「左遷されると思うけど不起訴」

「弁護士には」

「伝えてある」

「一安心ね」

「いやこれから衣類を買いに行こう、どのみち当分はいるんだし」

「よし」

着替えてから体臭のサプリメントを飲んでライダースーツを着込み、バイクのキーを取って車庫に向かったミズキは既にいて、バイクの後部座席に座っていた、運転席に座ると抱きつきバイクの電気エンジンを起動させた。

スポーツタイプだが燃費はよく一回の充電で１００?は疾る。

新市街のショッピングモールに到着しバイクを降りキーを抜く、ミズキも下り風で靡いた黒髪の長髪が気になるらしくしきりに触っている。

「形状記憶スプレーでもかければ」

「丁度切らしていたのよ」

「じゃ買い物に行きますか」

結局夜まで買い物に付き合わされた挙句に支払いは俺だった。

唯一の救いは全部宅配だったことだ。

バイクで帰り、次からは車にすることにした。

翌朝、宅配業者がやってきて荷物を二階に運んでいった、それを朝食を食べながら暇潰しに眺め、その多さに呆れる。

宅配の支払いも俺で、相当貢いだことになる。

二階で片づけが終るまで地下の実験室に入り、魔法の研究に精を出した。

地下のドアを叩く音がして魔法の研究機材一式を認識不能にして出た。

「遅めの朝食よ」

「分かった、地下は科学実験室になっているから立ち入らないようにね」

「了～解」

「何か言いたそうだね」

「お互い名前で呼び合うのはどう」

「じゃミズキ」

「よろしくね忍」

多少照れたように頬を染めるが、俺は無表情のままだった、何故って慣れているから。

そのままブランチになり、昼は中庭でパーソナルの訓練をしていた。

消耗が激しく、直ぐに精根が尽き果てる、そして眠って食べて訓練をしてそれを繰り返す、連休明けには数回の発動が出来、ロングマガジンの意味が無いが、趣味として残しておいた。

「あ～あ学校か、面倒くさい」

「そう言わないの忍」

「飛び級でもするか」

「できるの？」

「出来るけどしなかった」

「じゃ三年生になって」

「分かった」

「やった愛妻弁当ね」

「それは勘弁してくれ」

同じように登校し、周囲から男子からは敵意が、女子からは不思議そうな視線が送られる。

職員室でと飛び級制度は無いが、三年生までの単位を取ることは可能だと説明された。

三年生の前期まで単位の試験を受け五日で三年生の後期に入った。

生徒会に入り、生徒会委員からは愛の巣と呼ばれた。

嫌味野郎は転校しており、学校の裏サイトにアップされた、口から泡を吹いた顔の写真が致命的だったらしい。

職員室に呼び出され生徒指導の教師と担任が居た。

「君達の進路は」

「忍と結婚します」

「いやそれは速すぎでは、もうちょっと時間をかけて考えよう」

「もはやいうことは無い結婚生活をお幸せに」

人の話しを聞かず生徒指導の教師と担任だった。

生徒からは婚約おめでとうと言われる始末、いくらなんでも早すぎないかと思うが、誰も気にしないあたりが、理由が知りたいほど

だ。

あまりの速さに適応できない俺とミズキは嬉しそうに語っているあたりで、邪魔が入りそう、いやむしろ邪魔が入るのが王道ではないか。

しかし月日が過ぎても邪魔者は現れなかった。

そんな期末テストを終えた１２月本格的に愛妻弁当と言って作り出す始末、俺にどうしろというのだ？

調子こいて三年生までの単位を取ったのがそもそもの間違えだ。

そして時は無情に流れ高校卒業の日を迎えた、卒業生と在学生の間に色々とあったが、俺は二年生になり、全単位を取っていることから登校する意味は無い。

「忍後一年ね」

「敢えて言いたいがご両親は？」

「猛反対よ、でも保護者いらないし」

「もう少し真剣に考えよう、結婚するためには手に職が必要だ」

「安心して株式で儲けているから」

世の中何故かこんな風に回ったのは理由と原意があるはずだといいたい。

ミズキは基本的に頭がよく、株式の勉強をこつこつと子供の頃からやっていたらしく、株式で本当に儲けているために何もいえない。家事の一切を引き受け、料理はついに俺を超えた、その上に株式で儲けて結婚式に貯めている、日々の生活資金は俺が出している。そんな生活がもう一年立ち、卒業式の日に全校生徒を集めて結婚式を挙げられた。

もはやこれまでと腹をくくり、二十歳で子供を設けた。ミズキの両親は孫の顔見たさに結婚を認め、そして子供はすくすくと成長した。

保育園には行かず周囲の空き地で遊び、幼稚園になって初めて同い年の子供と遊ぶようになった。

それまでは良かった。

病弱な子になり、なんども入退院を繰り返していた。

魔法で研究し魔法により病弱な体を強化した、それで病院に入ることは無くなり、医師は不思議がっていた。

頭がよく、子供の頃から入退院を繰り返していたために内向的な性格から、小学校に上がると俺が教えた剣術と魔法を覚え始め、パーソナル使いとしても成長し始めた。

小学校低学年で長年の学習から強くなり始め、心も一緒に成長していった。

小学校高学年になると一端の剣士になり、格闘技も教え口癖は父さんを超える。

中学一年で俺が作り出したゴーレムと戦い勝利を辛くも得た。

魔法使いの父親に株式運営で富を得た母親に囲まれ成長していった。

中二の剣術で俺を超え、格闘技で拮抗し、魔法は未だに未熟、パーソナルとしては全弾を撃ち尽くすほどだった。

母親としても荒修行に近い訓練を心配し、何度もパーソナルで癒していた。

ミズキも俺も三十を超えた３５と３７歳だった。

１－０３０代の厨二病

１－０３０歳のファンタジーの世界（厨二病）

まさにファンタジーの世界に居る、しかしここまできて分かった、何の特技も無い私が活躍する分野が無いことだ。

兵士に志願してぎりぎりで合格し、毎日鍛えられる日々、傷つけば宮廷魔導士が癒し何度も兵に戦いを挑んだ。

半年が過ぎると一平卒並みに戦えるようになり、周囲からは成長が早いといわれたが、特に特異体質でもないので気にしなかった。

実戦にも駆り出され、何度も負傷しては宮廷魔導士に癒された。

国王に功績を認められ、何かの希望があれば聞くというので、兵士にも魔導士としての訓練を与えてくださいといった。

それは問題になったが、国王の決断で兵士にも魔法が教えられるようになった。

才能があったらしく魔法を直ぐに習得し、その成長率は他の兵士の数倍達し、いち早く魔法兵士になった、魔導士と兵士の役目を持った戦闘のプロだ。

夜遅くまで同僚に魔法を教え、朝になればモンスター討伐に赴き、月日がたつごとに名前を知られるほどになった。

国王が崩御くし次期の国王を巡って内乱寸前になった。

そこで一計を案じて他国が攻め込むと噂を流し、両者を和解させ、その功績から伯爵の地位についた。

同僚だった者に魔法を教え、鍛えて、新設された魔法騎士団の試験に受かるように教育した。

それが二年、３４になり魔法騎士団長に推薦されその地位についた、魔法騎士団はもはや軍事力の中核で下に魔法兵団、ペガサス騎士団、ドラゴン騎士団を置く巨大な組織だった。

ペガサス、ドラゴン騎士団は女性で構成され、軍紀が徹底していた。
対して魔法騎士団はエリートと勘違いし、軍紀が徹底されていなかった主な理由は貴族がコネで入ったからだ。
軍紀に反した者は処罰することを明言し、厳しく育成した。

侵略を受ければ即時に応戦し、どの国も攻めてこない不敗神話を打ち立てた。
その時には４０で、もう中年で同僚だった者も結婚して引退する者が多かったが、残った者は出世していった。
五十になりもう引退することを国王に告げた、国王は引きとめたが、歳には勝てないと与えられたアッズーラは天然の良港で開発に尽力し、最後に転生の秘術を使って赤ん坊に戻った。
家中の者が育てて、十五になって伯爵の地位を承認された。
騎士にはならず、領地の運営に尽力した、その甲斐あって港が整備され外国船が来るようになり、王家が作った港にも来るようになっても衰えずその莫大な富を王家に直訴して国営銀行を作り、王国内部に銀行を作りつづけた。

灌漑事業にも資金面で貢献し、ついに侯爵にまで昇格した。

それから二百年近く王国に貢献し、必ず結婚はせず、秘密を知る忠臣に育児を任せた。
王国が揺らぐと政治の舵取りをして乗り切り、信頼されることから公爵にまで昇格した。

そんな事もあり名門中の名門になった。
容姿からもてる事は無かったが、必ずお見合いの話しはきた。

時代はナポレオンが暴れまわった十八世紀で、その頃に雷管が発

明され高価な銃が作られるようになった。

居間までの富から国民に教育を行う事を進言して国王に了解を得て十五歳未満の子供に読み書き、数学、魔法などの初歩的な学問を教え始めた。

結論から言えば銀行が普及し、学問が普及し、魔法が普及し、社会保障が普及した。

結果的に最初に居た世界と似たような唯一魔法があるファンタジーの王国になった。

秘術で転生して１６世紀頃から１９世紀初まで王国に貢献したが、もう領主が運営する次期を越えたとして領地の変わりに資金を与えることで政治的に合意し、立憲君主制の王国に切り替わった。

南方には民主制の国家、北方には帝政の国家が存在する中の話しだ。

実家を支えてきた家臣に見合った資金を渡し職に就け、蓄えていた資金は激減したが、王国より与えられる給付金で生活が出来る、秘密を知っている一族の家臣は残り仕え続けた。
長年の魔法の研究で不老長寿の秘術を得てそれをその一族に托し、私も同じように不老長寿の者になり大陸を渡った。

異なる大陸で銃もなく、まだ貴族や王族が統治する世の中、国が進んでいないことを示すが、同じような制度があり公爵だった大陸よりも先に行っていたらしい。

そこで魔法研究を行い、数百年が過ぎた、大陸では国が立憲君主制に変わろうとする時代。

不老長寿のおかげで五百年の歳月を経て老衰した。

若さを取り戻し青年になって、別の大陸に渡った。

そして私は気づいた誰の関係も持っていない孤独な人生だったと、唯一忠臣達が代を重ねて守ってくれた感謝を、今はもう居ないことは分かっている。

だから私は守るための剣になることを決めた。

「やっと気づいたか、孤独な者よ」

船の上で振り返れば戦装束に身を固めた女性が居た、俗に言うヴァルキリーだろう。

「死神とは運が無い」

「貴様と私の差は無い」

「神格でも持っていると？」

「そのとおりだ、お前は風の神格を持っている、愚か者よ」

「悪いが神の剣にはなれない」

「私の役目はお前にふさわしい世界に連れて行くことだ、今度こそ守る剣であれ」

こうして一つの節目を終えた、誰かの体の中で夢を見ていた。

もちろんあの神格を持つ神でも記憶を持ったまま転生は出来ない

と思う、私が使う体を分子レベルまで分解し誰かの体に宿らせる秘術を使ったのだと思う。

１－０３０代の厨二病（後書き）

話がかなり代わりますが出来れば末永くお読みください

１－１守る剣

１－１守る剣

二卵性双生児という奴で妹が生まれた、同時に俺も生まれたわけだが二人とも強力な魔力を秘めていた。

私達は三ヶ月で離乳食を食べ母親が寂しそうに眺めていたが、精神的なダメージが大きすぎる、そして三歳児になった。

幼い子供ながら妹は勉強好きでおそらく読んでいるのだろう。

私は賢者の石からこの世界の事を学んでいた。

この世界ではこの国は中堅どころで隣国との同盟で侵略を防ぐ魔法国家だ。

五歳児で白魔法をかなり習得し私も習得した。

五歳児の時に人を助け、その者は妹の護衛についた、私では力不足が否めないらしい。

五歳児で皇子と親しくなり、私も親しくなった、それはこんな出来事だ。

妹の名はアルベルタ、略してアルと呼んでいる、私はヘルメス、略してヘスと呼ばれているが、略すほど長くは無い。

両親のお茶会で私達の倍の１０歳ぐらいの男の子が着た、最初は

素っ気ない態度だったが、アルを変質者から助け、そのまま去ろうとした所を私が引きとめた。

「妹を助けてもらい感謝します」

「それ程のことではない」

「いえ二卵性双生児の片割れとしても、助けてくださった貴方には感謝しきれない」

「なら次からは自分で守るのだな」

「残念なことにまだ五歳児で、アルも同じです」

「そうか五歳児か、知らないのも当然か」

「貴方が皇子という事ですか」

「知っていたのか？」

「いえ純粋な直感です」

「これは驚いた、直感で言い当てる子供は初めてだ」

「貴方も子供ですよ、大人からすれば」

「随分風変わりな兄妹だ妹の方はシューと呼んだが、お前はどうする」

「さあ名前を知らないもので」

「シュリオン」

「私はヘルメスです」

「でどうする」

「そうですねシュリオン閣下と呼ぶには年齢が幼すぎますし、リオンにしておきましょう」

「じゃお前は」

「ヘスです」

「よろしくなヘス」

「こちらこそよろしくリオン」

私達の間に妹を介して友情が芽生えた、まだ芽吹いたばかりだが。

私達が七歳ころ、父親のシュタインに連れられて総合アカデミーに見学していた、リオンやアベル、アルの知り合いのメイスが入学しているところだ。

総合アカデミーは実力主義一辺倒、実力が無い物は入ることも許されない、ただ全ての学校の中で一番規模が大きく、そして権威あるアカデミーなのだ。

その性質上貴族であっても実力が無ければ入れない。

十歳からの制限があるためにそれまで安心だ。

リオンとアベルに挨拶して、メイスを紹介された美少年という奴

だ。

「珍しいな魔法王国の異端とは」

「異端？」

「魔法は白と黒に分かれているだけの魔法文明だ、古文にあるエルファの民の末裔か」

「知らないな」

「別にどうもせん、見た通り子供だ」

「知らないものは知らない、俺は行く」

メイスが去りアルが済まなそうに謝った。その後に気になるので追い、昼寝の邪魔をされたといってさらに奥に進んでいった。

立ち入り禁止の看板が立ち、メイスはさらに奥に済んだようで奥に入りまた出会うとうんざりした顔で口を開きかけたが、その口を覆うように奥から悲鳴が聞こえた。

「急ぐぞ」

身体強化で体を強化しメイスと同じ速度で森を掻き分けて進んだ。

アルも同じように身体強化で追いつき建物の中に入ろうとする。

その時に学園の生徒か、逃げるように飛び出し一応中に入ってみた。

「メイジキラーか」

「何だそれは」

「魔法封じ」

「危険だな戻ろう」

「そうだね」

アルが色違いの床を踏む、言おうとした瞬間床かが崩落し、気づけば天井まで数メートルはある。

「ふむ、困ったな」

「仕方ないか」

「無理に精霊を出さなくてもいいぞ、符術があるからな」

「符術？」

「家の図書室にあった東方の魔法だ、厳密には違うが」

「そうか、子供なのに知らない魔法すら操るか、精霊を出そう」

松明から火の精霊が現れる、符術を使い明かりを作ってく、アルが起き現状を知ると謝るが、脱出が最優先と説き伏せ、通路を進む松明の揺らめきから風向きがわかり風上を目指した、途中誰かの痕跡を見つけ急ぐように進む。

学園の生徒らしい一年生、つまり十歳の少女が棍棒を片手にスケルトンの群れと戦っていた。

「加勢するぞ」

「頼むわ」

符術を針と共に投擲し一体ずつ確実に塵に返した。

メイスも火の精霊で焼きながら塵に返したがいかせん数が違う、苦戦していたところを暴風が吹き荒れ、振り向くとおぼろげながら女性がアルの傍にいて暴風の元凶らしく、火の精霊に命令して火の風が吹き荒れスケルトンを塵に返し、その熱が上部の壁を破壊した。

「やれやれ、風の王が味方するとはな」

「ほう、わらわが分かるかえ」

「まあな」

「お主本当に人なのか」

「まあな」

「まあ良い主のよき兄でもあるようだし」

「精霊使いが二人も、後は知らない魔法じゃない術の使い手」

「君、助けてもらった、らありがとうと名乗ることぐらい出来な

いのかい」

「ファルシオン、シオンで通っているわ、助けてくれてありがとう特に小さなレディーには感謝ね」

「えーと風塵さんとメイス、兄のヘルメス、私はアルベルタ」

「よろしくね二人と一人の王」

「ひとまず出ようか」

「そうだなヘルメス」

メイスが少しだけ笑いかけ、全員が出ると、アルに精霊語を教え、簡単に自己紹介した。

メイスが最年長の十二歳、シオンが十歳で入ったばかり、僕らが七歳意外に驚かれた。

白黒魔法以外はお互いに秘密にした。

父親のリシュテン公爵が用事を済ませ帰るときになり見送ってくれた。

馬車の中で疲れから休み、自宅に帰ると１１歳のアベルが心配そうにしていた。

「どうしんですお二人とも汚れて」

「軽い冒険でもしたのだろう、怒らないでやってくれ」

「分かりました」

そんなやり取りを知らず部屋に運ばれ一日が過ぎた。

毎年事件続きで、今で猫と犬が仲良く暮らしている。

十歳になる前にマジックアイテムの蓄音機を作り、それを製造する工房を開いた。

蓄音機は高価な物と一般向けの物に別けられて作り、それでヒット商品に一躍なった。

「ヘルメス、アルベルタ用意はいいかい」

「はい」

「もちろんですお父様」

「ヘルメス偶には友人を作れよ」

「既に居ます」

「アルベルタなら問題ないか」

「まるで私が問題児のようですね」

「ヘルメスの場合、色々とやらかすからな」

「不都合なことは忘れることにしているので、記憶にございません」

「私が覚えているのだよアベル護衛を頼むよ」

こうして私と妹に友人のアベルが総合アカデミーに入学することになった。

入学式は誰にでもあると思いたいほど年齢にばらつきが合った。

十代、二十代、三十代と別れており、それぞれの学科に担任の教師が居た。

私と妹は１０歳でアベルが１４歳、リオンが１５歳、メイスが１５歳、シオンが１５歳。

私達兄妹とアベルは魔法学科に入り、早いか遅いかは個人次第で最高八年間学ぶことになるが私は全力で行くつもりだ。

最初に配られた教科書を丸暗記して、進級テストを受け合格し配られた教科書を丸暗記して理解し、二度目の進級試験を受け、合格し、三度目、四度目、五度目にまでいったが、それ以上は実技が必要なので断念した。

学科はリオン、メイスとシオンと同じで実技は妹と同じ初期に入り、妹と競うように何度も実技を繰り返していた。

そんな幸せな一年が通り過ぎようとしていた。

だが世の中そう甘くないのが世知辛い物で、宿題という難関にぶち当たっていた。

隣国まで普及した蓄音機が、模造されるようになり外交的な問題になっていた。

それは私の知らないことで、父親が厳しく隣国を糾弾していたことを全く知らなかった。

重要な輸出品なので問題は暗礁に乗り上げていた。

話しは変わるが、いつもの如くシオンと一緒に学園を冒険して回り、何故か私が変わりに怒られていた、理由を尋ねると兄妹なら兄が責任を持つのが当然だと。

要すれば妹は注意で留まり、代わりに私が怒られる羽目になっていたが、別に自分がしたことでもないので怒られても気にしなかった。

アベルと剣術の試合をしたが才能が無いのかあっさりと負けた。

私が珍しく落胆していると、友人のアベルが訓練といって一から教わり、自宅に帰ってもアベルの剣の師匠に師事を請い、同じように学んだ。

そんな頃に父親であるリシュテン公爵に呼ばれた、いい加減父親と呼ぼう。

質素なしかし細部まで装飾された地味に見えながらも、華やかさは隠し切れない。

「失礼しますお父様」

「はいれ」

ドアを開けるとリオンが居た、軽く会釈して挨拶し、どうも剣呑な事態に発展しているようだ。

「リオン皇子から説明があるので、聞いてくれ」

「分かりました、しかし私見ですが１０歳の子供を剣呑な事態に巻き込むのはどうかと」

「致し方あるまい、ベルが作った蓄音機が隣国で模造されている、これは外交的な問題だ、そしてこれは簡単に行かない問題でもある」

「そういうことだ王宮まで着てくれ」

「分かりました、しかしリオンも立派に成長しましたね、昔はグレていたのに」

「よく分からない用語だが、相応の理由があると思わないか？」

「当たり前ですよ理由も無くグレません」

「なら理由があればグレるのか」

「ええ、特に反抗期は」

「どこからそんな知識と言葉を覚える」

「若者文化に汚染されていませんね」

「お前な・・・急いで王宮に行くぞ」

「やれやれ」

自宅の豪邸から猫と犬に見送られ、リオンが用意した馬車に乗る御者が急がし、王宮への石畳を走らせた、その途中で御者が止めた。

符を取り出しリオンにわたし、自分にも腕に貼り付ける、リオンも真似し外に出る。

御者は笑っていた喉が開かれるという悪趣味な美的感覚を持つなら。

「物理、魔法療法に特化した符です、壊れたら自分で作ってください」

「どうも手回しがいい隣国じゃないな」

「切り口から東方から流れてきた忍者でしょう、忍ぶ者と書きます」

「確かにこの国の剣ではああは出来ない」

「御者は残念ですが、王宮に急ぎましょう」

リオンが身体強化の上級版を私にかけ、自らにもかける。

道を走る、途中忍びが襲い掛かりそれを符術の符で投擲して刺さる前に力を解放して爆発させた、それでも忍びは悠然と動き、ついに前後左右を囲まれた。

「囲まれましたね」

「不味いな連中は手誰の前に鍛え方が半端ではない」

「爆発を食らっても悠然と動くのですから生き物の範疇に入るか不思議です」

「範疇に入るから襲ってきたのだろうよ」

「残念なことに知性もあるようです毒に気をつけてください」

夕暮れに近い街中で毒を塗って鈍く煌く忍刀を構えていた。

私達が囲まれながらも安全なのは、私が符術を使い魔法と物理を両方遮断しているために忍者達は襲えない。

「皇子殿下！」

忍者達は一斉に引き上げ、難を逃れた。

メイスにアベルが馬に乗ってやってきた、とっさとはいえ忍者達が引き上げるような声を出すなら恩に着るものだ。

「助かった、恩に着るよ二人とも」

「私からも感謝する、急ぐので乗せてくれないか」

「乗ってください」

「ベルはこちらに」

「王宮に急いでくれ」

夕闇も染まり始め、急ぎ走った。

王宮で馬から下り、礼を述べて謁見の間に急いだ。

国王は無事で威たる所に血の後が続いている。

「父上」

「さすがに死ぬかと思ったぞ、そちらは」

「忍者に教われました毒を塗った刀で、相手は魔法防御を施した魔法使い殺しです」

「メイジキラー！？」

「毒を見せてもらえませんか」

「よかろう、外交の話しは後回しだ、シュリオン案内してやってくれ」

「分かった」

「今回のことはいささか難しいぞ」

「いえ違います」

「なんと？」

「国王がいるように、父がいるように、世代を超えて悩み、間違

え、何度もくじけそうになりながらも若者は未来に走るのです、それは同じ時間かもしれませんが誰もが直面する問題です、難しいではなく当たり前の様に難関にぶつかったのです」

「まるで老人の様だな急ぐぞ」

「では国王陛下失礼します」

「うむ」

急ぎ毒の取り扱いをする医務室に入った、正体不明の毒で傷つけられた者は熱病の様に厚いと繰り返している。

「森から緑コケを取ってきてください、それをすり潰して飲ませてください」

「治るのか？」

「恐らく、もし出来なくても時間稼ぎにはなります」

毒を念入りに調査して何度も分析し、可能な限り手を尽くし毒にはコケが効いたようでうなされていた者が立ち直っていった。

毒の分析で解毒薬を作り、それを伝え、出来る限り作るように頼んだ。

丸一日徹夜で疲れ果てて不覚にも眠ってしまった。

1－1守る剣（後書き）

ご評価、ご感想お待ち申しております

1－2守る剣2

起きた時は王宮の客室で久しぶりに風呂に入れた。着替えも準備され派手な衣類だったので昔を思い出す、それを辞めて腹が減ったために臭いに釣られ食堂に入った。

「ありがとうございますヘルメス殿」

「貴方方も無事で何よりです薬は効きましたか」

「もう全快ですよ医師より完治といわれました」

そんな風に話し掛けてくる兵士は多く、特に重傷者が多かった近衛兵からは感謝の言葉を度々受けた。

食事をしてゆっくりとお茶と考えたときリオンと国王のことを思い出し、急いで向かった。

「お父様！」

「全く心配させるなメイジキラーに襲われたと聞いて飛んできたぞ、アベルに礼を言っておけ何度も忍者という連中から切り抜け自宅を往復した、全く全域に魔法妨害を発生させる厄介な連中だ」

「全域ですか？」

「もしかして解除可能とか言わないよな」

「一部でしたら可能ですが」

「ふむ、それを複数の個所にくれるか？」

「作れますが時間がかかり忍者達は逃げでしょう」

「全くどこまで迷惑な連中なのだ」

「むしろ逃げてもらった方が今は無難かと」

「ふむ、確かに対抗手段も無い我々では意味が無い」

「私の研究ですが、文字魔法を使ってみればよろしいのでは」

「あれは、今になればもう少し早く公表しておくのだったな」

「でヘス、その文字魔法とは」

「文字通り文字で魔法を発動する全く新しい魔法大系です」

「いくらなんでも１０歳の子供が考えつくことか？」

「五年も研究していたのですが」

「五歳から！？お前なもう少し子供並みの興味をもて」

「ですから、新しい魔法が作れないかと研究していたのです」

「五年の成果で一定度の効果を確認した、どうするラカン」

「要すれば使い方もこれからの魔法大系を伝えるということだな」

「現在は軍人に制限し様、後魔法学科生徒にも教えておこう、分かったなヘス」

「はいお父様、しかし１０歳の子供が教師だと」

全員が沈黙した、親子同士目線を合わせ、どうするかを思案していた、結局１０歳で教師は無理として同好会から始めることになった。

「次はカコンシスとの外交問題だが、工房を買い取らせてもらえないか、そうすれば模造品を作れなくなる」

「無料で構いません、どの道文字魔法でまた新しい物を作ればいいわけですし」

「そこなんだがヘス俺も入っていいか」

「もちろんですよ、さすがに五歳差は有りますが二三年で基礎は覚えられます、後は研究あるのみですね」

「それはこの黒獅子が責任を持って研究しよう」

「ありがとうございます、肩の荷が下りたようです」

「もう学園に戻れ、皇子お頼みします」

「無論だ兄妹揃って手間がかかる」

「そういうことにしておきましょう」

親同士が豪快に笑い、私とリオンは苦笑するしかなかった、学園に戻り、その間近衛兵が何十人も囲み、学園に到着してやっと一安心、早速同好会活動内容と共に提出し初代部長になった。
友人を片っ端から突っ込み、後で愚痴る者も居た。
授業の後部室に集まり、ひたすら文字を間違えることも無く精密に描く、それを繰り返すのが魔法の精度を高めるように根気強くやるしかない。

一年が半年過ぎ残る半年の半分の三ヶ月でアルは出来た、それを祝して部室で飲み物を持ち寄ってお茶会を開いた。

「つまりなこの文字魔法は特殊な文字体系によって構築され、それを発動することで今までの魔法のように詠唱なしで発動できる」

「誰だ酒を持ってきたのは！」

「皆さんお酒好きかと思い持って参りました」

アルの親友で私の友人でもある天然的な四年生のシルク・ロム・ロメール、通称はシルク、シオンも参加しているが、この天然系に手を焼いており常に突っ込みを入れるのが担当になってしまった。
学科は五年生でリオン、メイス、シルク、シオン、シルクは一学年を飛び級し、シオンは五年生まで飛び級した、美男美女の部活動で周りからはハイレベルなコンテストと呼ばれているが、別段と私が容姿に優れているわけではない、妹が飛びぬけて美貌を持っているに違いないだけで、私は平凡だと主張したい。

年長者で常識者のリオンにはいささか肩身が狭いようだが、楽しんでいるのは間違いない。
妹が嫁ぐとしたらこの中から出ることは間違いないようで、本人達

も気が気でない。

「まあ飲め」

「１０歳に酒を勧める青年もどうかと」

「まだ少年だ」

「馬を射ろという格言を知っていますか」

「いや」

「知らないでするのだから確信犯ですね」

「どういう意味かわからないな」

「おうおう楽しんでいるかい厳つい皇子に軟弱幼児」

「シオン酒が入っていますね、分解してあげましょう」

「ごめん、本当に二度としないから」

「何を勘違いしているのか、アルコールを分解するのですよ」

「ほう、それは便利だ」

文字魔法でアルコール分解と書き、それを指で弾く、そうすると発動し部屋で酔っていた者はしらふに戻る。

「失礼しました！」

「いやこちらも酔って邪念に支配されていた」

「ええ、子供に酒を勧める皇子として、歴史に名を残そうとしていました」

「う！」

「まあ酔っていたことにしておきましょう」

「すまん」

「いえいえ」

「申し上げにくいのですが、自宅では毎日ワインを飲んでいましたが」

「アベル、君とは仲良く出来そうだ」

「アベル、今、皇子と私を天秤にかけたね」

「起きてくださいメイスさん」

全く無視して泥酔し酔いつぶれそうだったメイスを起こしていた、その後ちくちくとリオンに責められた、見かねてアルが助けに入り今度はアルがちくちくと責められていた。

文字魔法について語り始めると、突っ込み担当のシオンが「魔法オタク」と妨害し、それを文字魔法で止めようとすると椅子で殴られた。

「偶には鍛えなさい！」

「そうですよ、軟弱のままでいいですか」

ノックの音がする、席を直し片づけして自席に座る。

「どうぞ」

入ってきたのは文句のつけ様が無い美貌の持ち主兼巨体だった。

一番体格が大きいリオンが１７５、そのリオンと同じ妹、その妹より大きい兄１８０、私からすれば巨人族で筋肉質な北辺民族のスノー王国の人だと分かる。

「ここでいいのか文字魔法同好会は」

「ええ」

「随分可愛らしい坊やね」

「訂正しないと入れませんよ」

「分かったわ、僕にしてはなかなかよで部長はそこの黒服」

「残念だが、その坊やだ」

「リオン！？」

「二度言わない」

「ならいいですが、ひとまず中に」

細身に見えるがかなり鍛えられ傷跡もちらほら見える。

中に十人掛けの為に二人が座ると椅子が軋んだ。

「武神焔だ」

「武神吹雪よ」

「アベル・ロウ・ブレーン」

「メイス・ローリエン」

「シュリオン・ハーバード・ゴルデーン・ビーン」

「ファルシオン・コプリート」

「シルク・ロメ・ロメール」

「アルベルタ・デ・リシュテン」

「ヘルメス・デ・リシュテン、二卵性双生児でね」

「そうか、で入部には何か条件があるか？」

「僕としてはさっさと習いたいね」

「特にないよ」

「じゃあ兄妹ではいるこれでも十四歳でな先程四年生までの学科を終らせてきたところだ、学年を言ってくれないか」

「一年です」

「五年です」

「五年だ」

「五年よ」

「五年ですわ」

「一年生」

「五年生、ただし実技は一年生」

「四年生二人ほど追加だな何処の民族だ」

「北方のスノー王国の者だ」

「よく入れましたね」

「子供の頃こちらに引っ越した育ちはこちらという訳だ」

「そういうことよろしく、ちなみに僕の基準は兄さん並み」

「そんな話しは誰も聞いていない」

「一応説明しておかないとうるさいハエが飛び回るから」

こんな乱入者で部活動は常に文字魔法をひたすら学び、時には遊ぶ事をして過ごし一年目が過ぎた。

十一歳になったところが大きく成長して１６５センチまで背が伸びた、部活の友人達に比べれば一回りは小さいアルベルタは女の子としては身長があまり伸びずスタイルも変わらない。

「兄さん、符術って文字魔法だよね」

私は苦笑した誰も気づかないことをアルベルタは気づいた。

そうだよと頷き、嬉しそうに符術を覚え、文字魔法をスポンジの様に覚えていった。

一年間の内長期休暇の一ヶ月、毎年トラブルが発生するが、今のところ無事に暮らしている、それがあの戦乙女が運んだ、守る剣の決意の場所、私は兄妹を、家族を、友人達を全力で守るつもりだ。

それが私の生きる証である、例え妹が本当の意味での天才だとしても。

部屋がノックされ、お父様が入ってきた。

「問題が起きた、我々では解決できない、来て貰えるか」

「行きましょう」

「お兄様が行くなら私も」

「いや安全策としてアルベルタは残っておいてくれ、もし私が失敗したらアルベルタ」

「はいお兄様」

「後を頼む」

「いいえ兄妹ですよ一人にしないでください」

「分かった一緒に行くぞ」

「その前に確かめたい、その符術の符はアルベルタが？」

「ええ」

「なるほど最近見かけないと思ったら兄の部屋でお勉強か、感心だな」

「親ばかはそこまでにしていきますよ」

「何気なく似てきたなお前も」

「お父様の育児で似てきたのでしょう」

「立つ瀬が無いな、悪いが行くぞ」

場所は王宮の近くにある魔法研究所だった、要すれば実験に失敗し文字魔法が乱列して発動し難解なダンジョンと化していた。

「これほどの研究の失敗は間直でみると畏怖を感じますね」

「確かにでも初歩的な失敗だよ」

「だからこそです、もしこれが最上位の失敗だったらどうします」

誰も言葉が出ない、もしかすれば王都はなくなる可能性すらある。

「その時にはお兄様と私で解決すればいいのよ」

「その時間が有ればいいのですが」

「あるよ、人が失敗した術は学べばいいのだから」

「どうも感情的になり過ぎたようですね、行きましょうアルベルタ」

「はいお兄様」

「その前に国王陛下」

「何だ」

「失敗した者を処罰しないで、失敗から学ばせる要素にしたほうがよろしいかと」

「発想の転換だな、兄妹揃って規格外らしい何時の日か息子を支えてやってくれ」

「我が誇りに変えても」

「心強いものだな、子供とは未来に走っていく馬車の様だ」

「では失礼します」

ダンジョンに入る、一番危険な魔法系のダンジョンの為に下手な動きは出来ない。

「アルベルタ読めるかい」

「読めるけど何か意味不明」

「これが文字魔法の失敗作だ、つまり何の意味も持たないために何の意味もなさない、要すれば安全ということだ」

「じゃ足元は」

「安全だ、文字魔法のリジェネートと記載されている、つまり再生だ」

「もしかしてこれが主な原因」

「鋭いな、その推測は半分当っている、残る半分は研究所の装置だ、恐らく文字魔法を刻んで動力にしようと考えたのだろう、私も考えたがそれに耐えられる素材が無い」

「代わりになる物は無いの？」

「考案中だ、それに文字魔法自体が、最高までに浸透していない段階では危険すぎる」

「そっか意外に国家機密並みの同好会だったんだね」

「広く浸透すれば、初歩的な動力源の確保は可能だと、私は思っているが」

「ひとまずはこのダンジョンを戻さないとね」

後は地道な作業だった効果を発揮しているリジェネートを分解し、こつこつと奥へと歩いていった。

最後に動力を供給する動力源を分解して終った、神経を使うためにアルベルタは倒れそうだ、疲れを取る白魔法をかけて回復させ、迷路のような研究所から脱出した。

国王の計らいで処分を免れた職員は感謝の言葉を述べ、私達は自宅に戻り直ぐに眠った。

1－3守る剣？

1－3守る剣？

翌朝、朝食を食べた後、自室にこもり報告書を作成していた。

部屋のドアがノックされ蓄音機を外して、開いた。

「やあアベル」

「忙しいようですねヘス」

「報告書を書いていたんだ」

「報告書ですか？」

「ああ、今回の事件の詳細についてだ」

「出来れば読ましてもらってもいいですか？」

「別に構わないけどまだ途中だよ」

「では中でお待ちします」

「どうぞ」

アベルが中に入り椅子に腰掛けた、さすがに侍女達が喜ぶような美少年の洗練された動きは一目に値したが、報告書を書くために机に向かった。

報告書を書くこと一時間で完成しアベルに見せた。

報告書を読むこと三十分、読み終えると返し質問をしてきた。

「文字を刻む素材の耐久度を越えたですか」

俺が正確に小さな小文字を作る、アベルが理解し言いたいことが伝わったようだ。

「なるほど、文字魔法は奥深いですね」

「これが普及すれば精霊魔法も薄らぐというわけだ、メイスが危惧するようなことが起きないようにな」

「不思議でネアルにヘスは私よりよっぽど大人に感じられます」

「老けていて悪かった」

「いえ大人びたという感じです」

「ありがとうアベル、ついでといっては何だが報告書を持って王宮まで行かないか」

「アルに伝えておきましょう」

「済まない」

「家族同然ですから」

アベルがにっこり笑い、私も笑ったアベルがアルを呼んで三人で王宮に向かった。

途中忍者らしき人影を見たがこちらに手を出さなかった。

「ヘス」

「分かっている、おかしい」

「お兄様、もしかして忍者とう存在ですか」

「まあな狙われているらしい、アベルと違い私は剣術が苦手だ」

「姿かくしの魔法でも使えばどうでしょう」

「やったが相手は気配で近寄ってきた」

「・・・・人間でしょうか？」

「ある種武術の達人は気配を読めるのです」

「噂には聞いたことがあるけど、それよりも中に入ろう」

中に入りすでに何十回も来ているので門番も、近衛兵も咎めない。

謁見の間に入り、国王に報告書を出した。

「あいつの息子らしい、だがあいつよりマメだな」

「読み終わったらリオンに読ませてやってください、後研究所の職員に」

「分かった、それでその動力とか作れるか？」

「現在研究中です」

「国王陛下これを」

アベルが小文字を使う、国王は目を見開き理解したようで近衛兵を呼び、その近衛兵に話して研究所に行かせた。

「アベルよ感謝するぞ」

「身に余る光栄です」

「好きな酒を持っていけ」

「さすがに子供にお酒はどうかと」

「なら大人になったら持って行け」

「はい」

「それとメイジキラーの忍者達がまた」

「奴らが！？く、一体意図は何だ」

「おそらく、この国の根幹を断ち切ろうと指示されているのかと」

「厄介も者どもめ」

「一箇所に集められれば対応策もあるのですが」

「近衛兵！リシュテン公爵の子息と協議せよ」

近衛兵の長がやってきて連れて行かれた、協議の内容は簡単だ忍者を出来るだけ数多く纏め、符術の結界の中に閉じ込める作戦だ、その際符術は文字魔法の応用だと伝えた。

リオンも出るらしく前に渡した符を張り、近衛兵にもその符を配った、そして解毒剤を持たせた。

作戦は始まっていて場所は丁度王都の出入り口の南門、一番出入りが少ないからだ。

街中で忍者と近衛兵が戦う鈍い剣戟の音が木霊する、掃討作戦で他の兵士も駆り出された。

作戦は順調に行きリオン自身が囮になり忍者達をひきつけたその忍者達が罠の中に収まり発動させると結界が張り巡らされ、その結果の中に符を飛ばした。

即効性のある麻痺の毒が突き刺さるたびに発動し、忍者達を倒していく、忍者達も逃げ出そうと足掻くが難しい難題だ。

一刻をかけ忍者達を麻痺させて、結界を解いた。

「捕獲せよ」

「やれやれ難儀なことが終った」

とっさに声の周りにいた者が武器を向けるが迅速な速度で恐らく寸頚を食らわせ、失神させていった。

「敵意は無い、落ち着け」

兵士達が武器を下ろす、老人のような男性が苦笑して符術の符を見る。

「素晴らしい技術だ古今東西探してもこれだけの物を作る者はおらんじゃろ」

誰もが次の言葉を待った。老人は苦笑を深め。

「要すればじゃ、そちらの坊主に雇ってもらいたかったんじゃ、全快敗れたから依頼主から前金だけで終ってのう」

「嘘は言ってないな」

「どうするのですヘス」

「雇う以外で問題を処理できるか？もちろん雇うさ、どの道まだ忍者はいる様だし」

「寝首を掻かれるぞ」

「それならとうにしているさ、だろ爺さん」

「そのとおりじゃて、寝首を掻こうと思えばいつでも出来たが、殺すのは惜しいし、それに財産もあってワシ等のような失業者には助かるのでの」

「では当座の間は父様に従ってください、何せ子供ですから」

「良かろう、麻痺している馬鹿どもはその内治るじゃろう」

「いえ治りません、符を抜かない限り永続的に麻痺します」

「誰か符を抜け」

兵士達も戸惑ったが、リオンの言葉を聞き、符を抜き取っていく、忍者達は襲わず、むしろ悠然と体の調子を確かめていた。

その後父様の指示に従い追うとの治安維持、王国の悪徳の貴族から商人まで調べさせていた、化け物の異名を取る忍者達は一言も発せず、黙々と作業する様から、兵士達は味方になってよかったと囁かれているらしい。

忍者の中で引退間じかの忍びから体術を学び、才能があったのかぐんぐんと成長していった。アベルは剣士、私は拳士と言ったところだろう。

一ヶ月の休暇が終わり、忍者達は毎日休むことも無く働いていた。

登校日になり実技の試験で五年生まで上がり、アルは飛び級しないと告げた。

それなりの理由があるのだと判断し、何も言わなかったが、部活動は本格的に大文字の練習と小文字の練習に明け暮れ、時には問題を出して実力査定を行った。

自宅に帰る二日間は師匠より体術を学び、ひたすら研鑽を積んだ。父様の笑顔は毎日のようで獲物を捕まえたら召喚し、そのまま牢獄行き、財産は没収で領地は王家直轄になる。

三年に一度の学園祭が前期に行われるらしく本来なら二年生の私はクラスメイト兼部活動の仲間と話し合い、学園祭は剣術大会に出場することでクラスの出し物から抜けた。

一週間ほど暇になるので、師匠の忍者に軽い剣術を習って後はひたすら体術を習った。
学園祭当日、忍者の要人警護が済むと予選が始まった。
いかにも弱そうな私は相手にされず、残った最後の者と戦うことになった。
木刀を防具代わりに一瞬で詰め寄り顎を打ち抜いて気絶させた。
予選は終わり本選になる、合計八名で、リオン、メイス、シオン、シルクが勝ち残っていた、本選で走らない騎士過程の巨漢と戦うことになった。

（いくらなんでも体格差があるか、なら溝だ）

木刀を構え、相手が接近すると超低空跳躍で接近し、木刀で相手の木剣を吹き飛ばし、一撃で溝に寸頸を食らわせた、一撃では倒れず、二撃目で倒れた。
周囲から歓声が上がり、弱い者が勝ったと行った所だろう。
本選の二回戦で残ったのはリオン、シオンで残りは騎士過程の者が一人、その相手が私。
相手は隙が無かった、本格的にある程度の強みに達し、こちらも木刀を垂らして
相手の本格的な一撃は重く、受け流すだけで精一杯、次第に追い詰められ壁際まで着た、そこで初めて木刀で一撃を加えた、習った連続攻撃で相手を追い詰め接近するその瞬間に木刀を放り出し、相手が硬直しているときに顎を打ち抜いた。
「勝者ヘルメス」

また歓声が沸いた１１歳の子供が勝った事に惜しみない賞賛だ。

今度はリオンとシオンの戦いで、木剣で戦い迅速な攻撃でシオンが勝った。

今度は女性が勝ったことで惜しみない賞賛の拍手喝采だった。

「今年の決勝戦は随分風変わりです剣術より体術に優れた選手に、神速の突きを可能とする女剣士、あのシュリオン皇子を破ったのですから実力は相当のものでしょう」

試合が始まる前に入念なチェックを受け会場に出る、シオンも同じく木剣を持って現れた。

木刀を捨て、蟷螂拳の構えを取り、シオンが苦笑して走りながら上段に構え神雷の一撃を繰り出しそれを素手で受け流し片手で喉を突いた。

勢いから滑り倒れこんで困窮困難に陥り、もがいていた。

「勝者ヘルメス」

癒しの魔法で呼吸が元に戻り、シオンがニコリと笑い会場から去った。

残された私は優勝者として贈呈品が送られ、それを部室に飾った。

「よく戦ったな」

「木剣だから成せる技だよ、後で手の甲が痛くて薬を塗ったのだ

から」

「魔法で癒せばいいではないか」

「師匠よりなるべく痛みに耐えろと、師匠から軽氣功、硬氣功を習ったけどまだまだ未熟、功夫がいるとね」

「ほう、忍者の技か」

「らしいよあれを出されたら魔法使いでもない限り勝てないね」

「忍者か」

ドアが開かれる、焔が現れその巨体から想像出来ない身軽さで、跳躍し棍棒の上に座った。

「お前は忍びだったのか？」

「いんや、単に教育係りがそちらの坊主と同じような技を知っていたからだ」

「ほう、世の中面白いではないか、どうだ一勝負」

「遠慮するその坊主に勝ってから勝負してやる」

「こらこら部長に難題を振付けない」

「なら戦ってみるか？」

「望むところだ」

「面白そうだ見物しよう、武道館で戦うのはどうだ」

私も焔も頷き拳士同士戦うことになったのだが、ふさげているとしか思えない2メートルはある長刀を持ち出し、腰には刀ほどの小太刀が納まっている。

対して私は身体強化の重複版をかけて強化し鉄甲を付けて望んだ。

猛禽類の巨雷のような長刀の一撃を軽氣功で避けて長刀の先に立った。

「化け物のような忍術だな」

「どうします」

「こうする」

片手で小太刀を抜き突くが、軽氣功の技で羽の様に飛んだ。

着地しても音は出ず、武道館で戦いを見守る部活動の部員は唖然としていた。

「完全に忍術を学んだか、そうこなくてはな、行くぞ」

怒涛の進撃、しかし私には無意味だと思っていたが、繰り出された長刀の一撃が私の首皮一枚を切った、正直ありえない筈だったが、対気功法を学んでいたらしい。

「完敗です、技が通用しなければ勝ち目は有りませんから」

「まだまだだな、今度は功夫を積んで再戦に来い」

「しかし、これもありますよ」

一瞬で大文字と小文字を混ぜた魔法文字を完成させ指で弾く、爆発の閃光が煌き一瞬にして焔を壁際まで吹き飛ばす。

「これを使えば勝てますが功夫だけにしておきましょう」

「なかなかやるじゃないヘス君」

「兄さん並みじゃないといけないのでは」

「何言っているの１１であれだけよ招来兄さんを超えるわ」

一騒動合って男性陣は集まり、軽く酒を飲んでいた。

「文字魔法は奥が深いな」

リオンが感慨深げに話す、それをメイスが頷き口唇を開く。

「大文字小文字を組み合わせて、符にもなる、学んでおいて正解だった」

「確かに、魔法は奥深い」

「あれは対気功法ですね」

「ああ、師匠から学んだ」

「何れ教えてもらいますよ」

「別に減るものではないが、習得するのに時間がかかるぞ」

「私も学びたい」

「俺も」

「俺も」

「じゃ朝練だ、暁に運動場に来い」

こうしてハードなスケジュールになった、朝練の対気功法訓練、午前の授業、午後の実技、放課後の部活、さすがに体力で溢れかえっている十代でもきつい。

寮に帰れば夕飯を食べ共同浴場で汗を流して湯船に漬かることなく脱衣所で着替え、即自室で寝た。

前期のテストはあったが、基本がしっかりしているために全員が十位以内にいた。

後期までの短い休みは忍術の習得に励み、休みが終ると怒涛の日々が過ぎた。

二年目が過ぎ、三年目になる前の一ヶ月の長期の休み。

１２歳になるとアルは女の子らしくなりスタイルの凹凸が出るようになったが、本人はまた服を新調しければならないといって困っていた。

１２になった私は鍛えられた成果で１７２センチ、男の友人達と５ｃｍほど小さいが、中には８センチも違うが、長身になりアベルと剣術と拳法で拮抗するほどになった。

１－４守る剣？、バニッシャー

１－４守る剣？バニッシャー

２年間も基礎を着実に学んだ部員達はそれぞれ独自の術を研究するまでに至り、私の研究する動力源も完成した、魔方陣に文字を刻みながらそれを上の魔方陣と重ねることでエネルギーを生み出し、小出力ではあるが、それは歴史的な研究成果だった。
後は出力を増幅させるだけで様々な用途に使える。

「公表してから二年か、我が息子ながら賢くて強く優れた容姿は兄妹と分かるな」

「親ばかはそれまでにしてください、正式な国家事業なのですよ」

「何故だろう息子が子供と同じような趣味をもてないのは」

「忍術を学んでいるのですが」

「彼らには励んでもらっている、今までの功績から王家直轄地に領地を与えるとか」

「良かった」

「優しいな」

「妹のおかげでしょう私は今度八年生ですが、アルベルタは二年生で今度三年生ですから、未だに婚姻期にはなりません、まあ結婚するのは後数年か、父様と私を倒した相手しょう」

「お前はどうする来年で卒業だ、まだ隠居しないぞ」

「学園で色々と教えようと思っています」

「教師になるのか？」

「はい」

「そうか、お前らしいな」

「そこで父様に頼みたいことが」

「おお！息子から初めて頼られた、何でもいえ」

「学科を卒業した者を対象にさらに上に学校大きな学校と書いて大学を」

「その大学で文字魔法を教えるのか？」

「はい」

「このリシュテンが絶対に作らせよう、あのラカンも頷くだろう」

「お頼みします、この国の命運を左右する切り札ですから」

「うむ、しかし、この事業はどうするのだ」

「もちろん助言いたします、子供がでしゃばることではありません」

「謙虚な息子を持った賢く美しい娘にも恵まれ、私は幸福者だ」

「そろそろ時間です」

起動させるためのキー、物質的なカギではなく文字魔法のキーワードを打ち込んで、起動させる、実験は成功し、未知の動力からマナと名づけられ、マナ動力炉と名づけられた。

後は研究者が改良していくしかない、帰宅すると部員が集まっており、今か今かと実験の成否を気にしていた。

自室で説明してから成功したと伝えるとそのまま宴会に突入した。

宴会で大学の話しになり八年生に上がる私、リオン、メイス、シオン、シルクは乗り気で、どのみち文字魔法を学び、忍術、対気功法を習得したいと意欲的な好奇心に押されたようだ。

父様の進言を受け王家が直轄でアカデミー内に大学を創設することになりその中には魔法大系の白、黒、文字の三種にメイスを説き伏せて精霊語も学科として作り出した。

精霊使いが増えれば珍しくも何とも無いという訳になる、それでメイスは渋々頷いた、そして今までの功績から子爵になり、父親が領地を与えられ、次期子爵になることになった。

捕獲されていた精霊使いは開放され、メイスの領地に集まった。

王家が資金的に援助して、精霊魔法を王国内で自由に使えるように法も作った。

それで今まで隠されていた精霊使いが精霊魔法を大学で教えることになり、王国は白黒魔法に文字魔法と精霊魔法を公式発表し、学科として創設した。

大学はアカデミーを卒業した者が四年間学ぶことで決まり、アルベルタも将来は大学に進学することを決めたようで、早急に婚姻す

る必要は無くなった。
三年目、アカデミーの八年生になり、武神兄妹は七年生、アベルとアルベルタのみが三年生。
毎日のスケジュールは変わらず、男性陣は鍛えられる毎日で、女性陣は吹雪より武術を学んでいたアルベルタが一番似合わないが。
後期は進学の為に朝練を止め、ひたすら魔法についての勉強会の毎日。
八年目が終わりに近づき大学進学の試験を受けた。
合否が出るまでの二日間男仲間同士で回答の言い合いから、紅茶の香り当てなどの文化的な遊びもしていた。
合否が出た日全員が合格なので仲間内でお茶会をして過ごし、私は文字魔法の基礎を担当し、同時にメイスが授業する精霊学科の生徒でも有った。
メイスも同じで精霊魔法学科の教員ながら文字魔法学科の生徒でもあった。
シオン、リオン、シルクは両方を学ぶ生徒になり、教えながら学ぶ、さすがに１４歳のアルベルタは誰にも比べられない美貌と純粋な碧眼から学園の高嶺の花と呼ばれていた。
部活動は大学部の五名とアカデミー部の四名で成り立ち、それぞれの長所を教えあい、時としてぶつかることもシバシバ有った。
「やれやれ文字魔法の素人は大変だ」

「お兄様ご苦労様」

「ありがとうアル」

「いえいえ、お兄様が天才で嬉しいです」

「お前ほどではない」

「そうですか？」

「ああ誰よりも早く符術を文字魔法の応用だと気づいた」

「それと動力炉の開発はどうなっていますか」

「今のところ、出力の増強に励んでいるが、正直私並みの専門家がいないと実験すら小文字でしなければならない」

「文字魔法の実験は厳しく制限されていますから、昔あった暴走の様に文字が建物すら変えてしまうのですから」

「アベル入ってきていいぞ」

質素な作りが好みの私の自室にアベルが入ってくる、気を使ったのだろうが気配でわかるようになってから、忍術も極みに達し、今は引退した極忍と呼ばれる忍者の秘奥義を伝える口伝者から学んでいる。

「よく気づきましたねヘス」

「さすがに三年になると気配が分かるようになってね、そして私

には忍者の才能が有ったらしい」

「公爵が忍者だと国王も気が気でないでしょう」

「少し嬉しげだな」

「少しだけ嬉しいですね」

「それで父様か？」

「いえ夫人より部員の家族も呼んでお茶会を開こうと申されまして、現在準備中です」

「珍しいな母様がそんな事をするのは、いつも父様といちゃついているのに」

「逆ではないかと思いますが、一応伝えておきました、子供の成長祝いのようですので」

「思えばアベルが家にきたのが九年前か」

不思議と時間を感じさせないがアベルはもう十八歳だ、騎士の修行ということになっているが、十八になり男友達と仲良くなり、親友といってもいい、常にですますの口調を直さないが、怒るとアルは必死に逃げ惑ったものだ。

思い起こせば、メイスも最初は素っ気無い少年だったが、今は笑顔が良く似合う好青年になっている、問題は女顔でよく男に声をかけられ、その度に不機嫌な一撃を食らわせて笑顔を取り戻す、人は換わるものだとつくづく思う。

リオンは無愛想且つ冷淡な性格からはあまり代わっていないようだが、一人だけ王族という厄介な家業を愚痴るほどに仲間意識が芽生えている。

焔の方は元々飄々とした性格だが、男女区別無くちゃんと礼節を重んじる、それに一度もかけたことが無いのだから驚かされる。

女の親友からいえばまずシオン、最初はダンジョンの迷宮に一人で挑戦していた変わり者だったが、今では女の色気を振りまくような美女になり、俗に言う女剣士の様に剣術の稽古を重ねて吹雪から一番弟子と呼ばれる。

シルクは天然系が相変わらずで少しずれもあり、大学生になってから部活が終ったら飲み会に連れ出す、みんなのけん引役のようなムードメーカーでスタイルは一番だ。

吹雪はブラコンの一言に尽きるが、意外にも女らしいところもあり家事全般を得意とするアルに料理や様々な家事を教え込む良き姉のような存在だ。

「どうしたのです黙り込んで」

「四年前と現在を比べていたわけだ」

「変わりましたね、みんな何と言うかヘスとアルのお二人から心の強さを与えられた感じですね、最も一名は要注意ですが」

「何もしていないよ本当だよ」

「校内でダンジョン巡りをしている生徒がいると聞きまして、アル違いますよね」

「も、もちろん違うよ」

「アベル、そこまでにしてやってくれ、己の力量を確かめたいのだろう、お前がついていれば安心だろ」

「そうですね、確かに力量をつけなければなりませんし、要らぬ不届き者は絶えませんし」

「そういえば戦の噂を聞いたか」

「は？」

「え？」

「何でもどこぞの大国が、この国に圧力をかけているとリオンから聞いた」

「それで何が狙いとは簡単すぎますか？」

「魔法技術の全てだそうだ」

「ふさげているのですか？」

「違う、噂だ、しかし噂ではないだろう、ただ用が有るとすれば」

「マナ動力炉に文字魔法ですか」

「この国の切り札だおいそれと渡すわけには行かない、となると戦になるのも必定の事」

「お兄様は戦に出るのですか？」

「アル、もう少し考えろ、わが国には動力がある、それを破壊用に活用すればどれほどの被害が出ると思う？父様はそれに気づいている国王も、最も文字魔法に長けた者がだされるのは必定のことかもしれないが」

「血を流すのですか」

「アル、直接当てる意味は無い、その威力を見せればいいそうすれば無用な戦は避けられる上に相手から賠償金も頂ける、その上に禍根も無い」

「お兄様天才」

「伊達に九年も文字魔法を研究しているわけではないのだが、何故か忘れがちなのだよな」

「影が薄いからでしょう」

「アベル、偶に実験に付き合わないか」

「いえいえ、私のような生徒なら意味は無いでしょう」

「冗談は此処までにして、研究所に向かうアル、アベル用意してくれ」

「脅し号を作るのですね」

「名前が不適切かと」

「名前はバニッシャー、罰する者とでもいおうか、それを作る」

それぞれが部屋を去り、戦の脅し様に破壊兵器を作ることになるが、基本的に罪悪感はあまり覚えない、戦を求める連中が間違って食らい、蒸発しても戦を起こしたほうが悪いに決まっているのは当たり前のこと。

研究所まで忍び達が警護し、研究所のところで去っていった。

研究所の外でマナ動力炉を作り、それを伝達する魔法装置に使われるクリスタルを媒介に低出力なマナ粒子砲を撃った、壁は見事に貫通し、何十と作った鋼鉄の壁をエネルギーの限界要領まで突き破る破壊力、どうやらクリスタルが増幅機能を持っていたようだ。

まさに知は力なり。

アカデミーの仲間はそのまま学業に専念してもらい、大学を一時的に休学し大学の仲間と一緒に土台を作り、砲座になるために機動力を持たせて、砲門にクリスタルを何十個と合成した物を砲身代わりにした。

近衛兵に忍者達が警護する中、研究員も手を貸し土台の完成を間に合わせた。

開戦になり外交的な交渉は破断した、土台無理な話しでもあるため両者共に軍事のことが終るまでを、外交という手段だけで終らせ

ようとしたに過ぎない。

「宣戦布告されました」

「分かった、ヘス本当に当てないでいいのか」

「当てたら余計に油を注ぐことになる、むしろ脅して外交で蹴りをつけたほうが短期間で容易だ」

「分かった、照準敵軍の後方、伝達開始」

「何か別世界」

「それはそうだ、魔法装置の数々が土台になっているのだからちなみに建造費は国家予算並みだ、それを貯蓄していた金庫から持ち出したのだと思う、元は取るとな」

周囲は機械に覆われ、研究員が様々な装置を操作し砲台にエネルギーを送っていた。

「マナ動力炉と伝達率８９パーセント」

「構わん、撃て」

「バニッシャー主砲発射」

私がレッドランプを押し敵軍の後方に向けマナを解き放つ、その桁違いのマナの量から居敵軍の結界を容易く撃ち破り、上空を掠め、そして後方の草原にぶつかり大爆発を引き起こし、敵軍は慌てて退却し始めた。

グレートリヴァ王国軍が進軍し敵軍は武器を捨てて組織的な動きも無く、無我夢中で逃げ出した。

敗戦国から領土の割譲、賠償金を勝ち取りクレートリヴァはそのクレヴァルーロ大国に近い国土を持つようになって、新たな領地は王家直轄地として治め、バニッシャーは王都の均衡に厳重に封印された。

1－5守る剣難題編

1－5守る剣？

今までの設計から建設、戦時に至るまで急がしかったために大学一年目が過ぎ、休学を解いて復学した。

15歳になったアルはすっかり女の子、その美貌名容姿に抜群のスタイルから求婚されること、と数える前に同年代ではないが、同学年のアベルが壁になった。

武神兄妹も大学に進学し、文字魔法、精霊魔法の二つの学科を受ける生徒なった。

バニッシャーの設計図は燃やされ、残っていた資料も焼かれた。バニッシャーがある限り戦争にはならないだろうといわれていたが、戦乱の時代があるなら使うしかないのか現実で、バニッシャーは歴史に名を残す兵器となった。

バニッシャーがマナ粒子砲で撃ちだした跡地は、大地が破壊され滝になって下流に流れていた。

大学の教員には研究室が与えられ、メイスと隣り合わせで生徒に教えることを確かめ合い、また学び合う事を学んで、私は文字魔法と現存する魔法装置を作り変え安価で性能のいい冷暖房装置を作っていた、それを聞いたメイスは呆れ精霊に頼み常小春になってしまった。

意地で作り上げ、販売したもちろんヒット商品となり文字魔法が細かく複雑に使われているので模造できず、元々安価の為に大ヒッ

トを記録して資産を得た。

「全く、問題ごとを引き起こして」

「面目ありません」

「まあ今日のお茶会は貴方個人の資産から差し引きます、よろしいですねヘルメス」

「はい」

「あまりお金に執着するのはよろしくありません」

「違います、安価で性能のいい冷房装置があれば市民も安心して暮らせるというものです、寒さで凍死する者は毎年でます、資産は貧しい家庭に冷暖房装置を送ることにしております」

「ならいいのですが、貴方がこの国で蓄音機に始まり文字魔法、バニッシャーと続いて冷暖房装置を作れば嫌というほど目立つのですよ」

「申し訳ありません」

「はい、もう遊んでらっしゃい今日ぐらい息抜きしても誰も文句は無いでしょうし」

「そうだぞ坊主」

武神の父親、母親は細君で、父親一人で育てたらしい、しかも傭兵団の団長という強面の割には知的な瞳をしている不思議な大人だ。

「さあ行きなさい」

フレイの父親の子爵、精霊魔法と穢れの浄化の専門家、つまり学者だ。

「では失礼します」

子供達とはいうが私とアルベルタ、シルク、シオンを除けば成人でそれを感じさせないアベルとは１０年間、他の者は5年間の長い付き合いがある。

アルベルタの場合直ぐに誰とも仲良く出来る特技があるが、私には無い、生徒から丁寧な授業だが慣れすぎて老人みたいと言われる始末だ。

「また気にしているのか」

「メイスか、何故だろう」

「生徒からすれば天才のお前が、授業までこなすのが悔しいので、一言文句をつけていると思え、少なくても俺はそう思っている、ちなみに天才の部分は無い」

「要すれば年下に教わるのが気に食わないか？」

「それはそうだ今は１５歳だが、前は１４歳だったんだぞ、飛び級で五年生まで上がり四年間で卒業し、今では研究室を持つ大学の教師で精霊魔法の生徒、気に食わないと思う者も多いということだ」

「困ったものだ」

「常に優れている者は妬まれる、嫌われる、そんな事は当たり前と知っているのではないか」

「生徒の前ではいえないな」

大学生の五名が苦笑する、教師の二人はお互いの苦労と愚痴を話し、誰も責めないというよりそれぐらい吐き出したほうがいいとアルが話したからだ。

「その生徒から言いたいことがあるが、魔法装置も研究か」

「まさか焔、専門分野が違う、単に模造した物を文字魔法で彫ったのさ、後は職人が彫ったものにキーワードを打ち込んで起動という訳だ」

「一応軍事技術なんだが？」

「冷暖房が広まれば社会は激変するだろう」

「お兄様、まさかと思いますがその為に」

「いやこいつにそんな政治的なことは出来ない、単に意地になって作っただけだ」

「ふっ、その通り」

「お兄様、意地で作ります？」

「苦労して文字魔法で冷暖房装置を考案したのに、メイスが常春にするから悔しくて」

「お兄様も偶には子供のところがあるのですね、初めて知りました」

「じゃ今まで私はどんな風に思われていたのだい」

「大人が子供になった感じ、今は列記とした少年なんだなと思うけど」

「老けすぎたか」

「ふけけるというより五歳児からさほど苦労もせず白黒魔法を操れたし、十歳のときに知らされた文字魔法を研究するし、こりゃ完璧な天才だなと思ってその応用すら考えていたし、もしリオンが国王になったら腹心はお兄様だなと思って」

「私なりに努力したのだが、何故だろう」

それには全員が笑うしかなかった、アルベルタは誰からも愛されるような女の子とすれば、ヘルメスはどんなことにも打ち勝つまさに用意がいい上に用心深さを持ち合わせない不器用ながら、誰にでも打ち勝つような強さを感じさせる。

つまりこの双子はお互いに無い物を持ち合わせた兄妹。

「お兄様が努力したから、この国はあるのですよ誇りに思ってください」

「そうだぞヘス、お前のおかげでこの国は滅ばずに済んだ本当な

ら英雄だ」

「別に英雄になりたくて作ったわけじゃない、戦争が嫌いなんだ、馬鹿馬鹿しい理由で殺しあうなんて愚か過ぎる、その為に泣く者が居る事にもう少し早く気づけばいいのに」

「優しいですな」

「これは椿先生」

「やれやれ、危うく殺すところでしたよ」

「どういうことです」

「バニッシャーを作るほどの人物が戦好きなら暗殺するしかないでしょう、弟子の言う通り、泣くものが居る為に、成長しましたな」

「先生？」

「隣国から依頼を受けましてな同盟国だが、バニッシャーを量産するなら殺せと、雇われた訳ではなく引退したからこそ正義を行うとしたまでです」

「申し訳ありません」

「いやいや、貴方を良く知らず行動に出ようとした軽率さが悪かったのです、皇子良き友に巡りあいましたな」

「私の英雄だ」

「今は貴方が英雄でいいのです、それで国民は納得します、後は歴史の中で誰かが英雄はこの人物だというのが時流れと申すものでしょう」

「貴方は？」

「さてさて、もう歳です、この豪邸で弟子の成長を見届けましょう」

好々爺のような老人は跳躍し一瞬で姿を消す、極忍という忍術を極めた、生きる武神のような存在。

その後忍術の話しになり、危険なほど忍術を学んでいた私が言えない事も多かった。

対して焔と吹雪は易々と対気功法を話す、対抗手段を持つことから師匠というのは忍者との戦闘経験のある人物と推測できる。

今年学園祭があるらしく、今度から毎年恒例になる予定になったそうだ。

大学の教員同士それなりに関係は成り立っている、身分というものが有りながらも新しい教育制度に情熱を燃やす教員は多いが、問題は学園祭の前例が無いことで誰が何をするか決め様にも決められないジレンマに陥っていた。

そこで私が文字魔法で芸術を作るのはどうかと提案した。

意外な使い道に困惑を隠せない教員も多かったが、学園長は面白いと話し採用した、他にも幾つかの案が採用され、その為に様々な学科から学生が集められた。

学園祭の前で学園で推薦された女性、男性の５：５の割合で集め、軽い振り付けで踊る、もちろん不満も有ったが、学園祭初の文字魔

法による芸術仮装と説明したら乗り気になった。基本的に娯楽の少ない学園生活で男女の踊りは刺激的で、文字魔法による仮装となればノリノリで踊っていた、実際に男女２０名に魔法文字学科の二年生までの学生が文字を書いていく、こんな使い方をされたら毒気も抜けると判断した一面もある。

実際に踊ってもらったら幻想的でまさにファンタジーの仮装、文字を細かく修正し明日には衣装を揃えると言って解散、衣装は二年生から一年生までを集め徹夜して作り上げだ。

生徒一人一人に礼を述べると照れくさそうに笑い、握手すると誇らしげに胸を張り、いつか貴方の様に社会を変えるような物を作って見せますと言ってのけた。

私は私の成長を理解できなかったが、生徒の成長を通して私自身が成長した事を気づいた。

そんなこんなを繰り返し、学園長に直に合い生徒に四年間を通して研究するテーマを選んでもらおうと話した、学園長はまるで子供の教師だねと話したが許可し、生徒たちに伝えた、そうすると色々と話し始め、一年生、二年生の垣根を越えて互いにテーマを共有する者達が現れた。
そうすると学科を越えてまでテーマを共有する者達が現れ、それぞれの学科として意味があるものを許可し、正直あんまり関係ないかなというものは説得した。

そんな時間も過ぎ、テーマの問題は持ち越された。

ちなみに白黒魔法は詠唱し印を紡ぎ発動させ、音声と才能と魔力に左右される、対して精霊魔法は素質のみに左右され、素質がない

ものは見えないし使えない、文字魔法は前者と異なる、正確に文字を紡ぎ文字と文字を組み合わせ僅かな魔力で、組み合わせ次第で強力にも微弱にもなる、要すれば正確に文字を紡ぐ器用さと組み合わせて効果を得る学習と、個人によって左右される魔力によるものだ、早い話しどれだけ強力な魔力を持っても文字魔法の達人には適わない将来性を持ちながら汎用性を持つ、次世代の魔法なのだ。
問題点は文字の組み合わせが天文学的数字ということだ。
文字魔法の応用にバニッシャーがあるように強力さは裏付けされている。
また高価だった魔法装置を安価で販売できるコスト面も頼もしい、それが社会を変えるほどの発明だとしても。

それゆえリシュテン公爵も躊躇ったほどだ。

その難しさ故に白黒魔法や精霊魔法を模造する文字魔法が数多く生み出されたが、あまり意味はなく、魔法装置と組み合わせることで安価に農民にも行き渡る装置の開発が可能だった。

また新しい文字を作ろうとするテーマのグループもある、野心的な挑戦だが困難を極めるのは目に見えているが。

王国の新領土などでごたごたした二年間、大学は四年生にまで学生は進級していた。

大学四年生になると卒論という論文を発表しないといけない、その為に学生は忙しく新設される第二魔法研究所、魔法装置開発所の二箇所に新設された文字魔法、精霊魔法は引く手遍くの引っ張りだこ。

私達双子は困っていた、七年生のアルベルタはついに四名に求婚

され、私は三名の年上に求婚された、この場合どうするかなど考えても無かったために保留させてもらい、一応一年間の保留期限を設けてもらった。

私はどうにかするとしてもアルベルタは未成年だ、まあ私も未成年だが来年に成人を迎えるから適切な措置だったと思う。

「う～ん」

「四名とも大人だから断られても文句は無いと思うぞ」

「でもそしたら進学できないでしょう？」

「それはまあ確かにあるな」

「お兄様は」

「三人のうち誰を選んでも尻に敷かれる上に禍根が残る」

「三人が肉食系だ何て」

「肉食系？つまり積極的ということか？」

「お兄様頭いい」

「あのな、現代を作ったのは私とその生徒達と研究員と仲間達と思うが」

「私というところが自意識過剰ですよ」

「アベルみたいに言うな実際私が貢献した分野は数知れず」

「おかげで資産家になってしまったけどね」

「これでも基金を創設して運営しているのだぞ」

「む、私だって色々と貢献したんだから」

「それは知っているが、お前は金に無頓着だからな、家が金持ちじゃなかったら破産しているぞ」

「ごめんなさい」

「偶には金勘定もしてくれ家計簿が赤くならないか心配だ」

基金を創設し貧しい家庭に学校を行かせる資金を無利子で貸している、実際帰ってくるのは今のところ十分の一程度、それでもヒット商品からの売上でなんとか維持しているところだ。

「ところで話しは変わるが、三人を説得できないか、俺も四人を説得して大卒まで時間を稼ぐ」

「お兄様」

「なんだい」

「まさか三人と結婚するとか、言いませんよね？」

「うむ、断ると殺されそうで三人纏めて結婚しておきたい」

「お兄様」

「頼む」

「仕方有りません、四人と交渉してくださいよ」

「無論だ」

色々と問題があるが話しがまとまり、四人の懐柔策を実行した。

要すれば求婚するぐらい好きなら大学を卒業するまで待て、お前らも卒業するだろうがと乱暴な交渉だったが、四人が本気の為に上手く行った。

三人の方はアルベルタが説得して上手く纏まらず兄妹相反して嘆きと喜びになった。

1歳差のシルクと結婚し学生結婚で学生より祝福された。

新婚生活2年目で大学部の仲間は卒業でリオンは皇子として政治に参加し、三人の男仲間を無理やり仕官させ、顎で使うつもりらしいが、アルベルタの事で譲らないことで一致している。

私は文字魔法研究所の所長兼魔法装置開発所所長という重役の重役、焔はモンスター討伐などの専門家を率いる軍人の中でもエリートが所属するロイヤルガードの若手の長、メイスは精霊魔法研究所の所長兼精霊使い保護機構の事務総長。

どれも重役ばかりを押し付けられた。

皇子直轄の為に下手に貴族達が手を出せない、社交界でもアルベルタに求婚にした四人は有名で、それぞれ個性的な美青年で、女性達は惜しむ声が聞こえていた。

私は新米の貴族達を悪い方に行かないように誘導し、過去の話しをネタに人脈を構築していた。
その頃にクレヴァルーロで内乱が発生し、一人の青年が半年で収束させ、その動向を用心深く見守っていた。

「全くいつもながら厄介な事を押し付ける」

「焔、一応静かにしておけ、一応だが」

「仮にも次期国王なのだが」

「私としても動向が気になる」

「無理無理、連中はバニッシャーのことを恐れている、それに文字魔法が普及した今、攻めるとしたな他の国だ、仮に攻められたらバニッシャーを使い主力戦力を叩き潰し、後にマージナイト隊を出して掃討作戦だ」

「現在の技術だとバニッシャー二号が改良されて作れるが」

「出来れば自然を傷つけて欲しくないのだが」

「分かっている、だがこちらは四方を国に囲まれ実際動かせるとしても二万が精精、兵站を傭兵に委託しても二万をきる」

「質の方はどうだ」

「毎日魔法練習だからな、強力だぜ、実際の兵士の三倍近い戦力で会戦なら負けなしだ」

「悲観的に見積もって四万としよう、対する相手は」

「ざっと七万」

「ふむ。参ったな」

「外交交渉でどうにかできないか」

「その伝手が無い」

「参ったな」

「ひとまず軍備増強とバニッシャー二号の建造を決定するメイス、お前には精霊使いたちで伝手が無いか当ってくれ」

「分かった」

「了解した」

「困ったな建造に金がかかりすぎる」

「その為に国庫はあるのだよ、急げよ」

「分かった」

解散しそれぞれの役目を果たすべく尽力した、バニッシャーの建造で戦争の噂が流れ募兵に参加するものが増え始めた。

バニッシャー二号は今までの問題点である地上移動による機動力

の無さ、それを克服するために空中飛行船を作り、それに吊り下げる形で砲門を作った。

問題点は多かったが、それを超える機動力という武器があるので、建造を完成間じかまで尽力した。

1－6守る剣?、四カ国戦争

1－6守る剣?、バニッシャー再び

「これがバニッシャー二号か」

リオンが見上げる、文字魔法で刻まれた飛行船、それを完璧に扱うための艦橋が下にあり、さらに吊り下げ式の合成クリスタルの結晶砲門が付いていた。

「素晴らしい出来具合だが、資金的に厳しかった」

「こっちも節約したぞ」

「それでも国庫が空になるかと思ったぞ」

「どうしても機動力が問題でな、職員も苦労したが機動力を確保しないと今回の戦には間に合わないと判断した」

「後はメイスに頼るしかないか」

「そうなるな」

「この戦に破れるわけには行かないからな」

「敗れれば亡国か、まさに浮世の侘しさだな」

「怖い事を言うな」

「魔法国家だが軍事国家ではないのが問題だな」

「軍事を支える人材が不足中だ」

「早速飛び出すが、渓谷で良いのだな」

「そこしか裏を掻けん」

「分かった」

「済まないな」

「友人の頼みだ」

「恩に着る」

「所長、準備完璧です」

「よし行くぞ」

心配そうに見つめるリオンを除いて残る者は安心して見送った。

渓谷とはモンスターの巣窟で出入りも難しいために誰も使わない、飛行船のバニッシャー二号が一撃加えるだけで退路が無くなる。

「宣戦布告の知らせです」

「ついにきたか、諸君、無事に帰るべき場所に帰ろう」

「マナレーダーに反応が渓谷を歩いてきています」

「福砲チャージ」

「福砲チャージします、伝達率９８パーセントで安定」

「光学式迷彩起動」

「光学式迷彩起動します」

「主砲チャージ」

「主砲チャージします伝達率低下８８パーセントです」

「本軍より入電戦闘状態にあります」

「バニッシャー一号はどうした」

「間に合わなかったようです」

「進路０－９－０急げ」

「アイサー」

敵の後方に回り込み、後方から副砲で渓谷の出入り口を破壊し進軍した敵軍は退路をたたれた状態にある、急ぎ本軍の元に戻ると敵軍に文字魔法を解き放ち散弾の様に敵軍を寄せ付けない主砲を敵後方に撃ち、また爆発し敵軍は撤退した。

元の場所に戻り降伏する事を求めた。

敵軍の本隊は降伏し、渓谷を渡っていた敵軍を本軍から捕虜として扱うよう入電した。
敵軍を捕獲し、交戦状態にあった敵軍の生き残りも捕虜になり治療を受けていた。
外交官を派遣して捕虜の返還、賠償金の話しがまとまり、ついに不可侵条約が結ばれた。

「間に合わなかったか」

「のようだ」

「致し方ない、あれだけの軍を退けただけでも十分だ」

「今回立証された事は機動力の優位性だな」

「バニッシャー三号でも作るのか」

「済まんな国庫の問題で不可能だ」

「いやこの図面だ」

「おいおいこっちにも予算をくれよ」

「間に合わなかったが精霊魔法の装置も開発中だ予算を」

後は四人で詰めの協議に入り、予算配分をした。

バニッシャー三号からは小型で少ない人員で稼動できるようになり、合計六機が作られた。

戦争になるまで封印し、また開発の勤務になった。

自宅に帰ると三人が待っており今まで手紙一つ出さなかった事を怒り、両親にもしかられた、

シルクにも叱れ、ちなみに両親は大規模な商会で今は公爵家が後ろ盾になり着実に商売をしている。

焔が委託したのは父親の傭兵団で本来なら継ぐはずの話しだ。

バニッシャーは皇子直轄部署となり、操舵から全てを私の研究所に委託された。

時折改良を行い一号機は王都防衛専属になって二号機は大軍用、残りは何度も改良が加えられ、優良な戦闘艦になった。

しいて言うなら戦艦の一号、重巡洋艦の二号、軽駆逐艦の三号以降になる。

優しくするので長い時間を係り、新婚二年目で妊娠した。それぞれの友人より贈り物が絶えなかった。

度々不可侵条約を破り、攻め込むアヴァルーロはどうしようもない戦争狂で、困り果てていた。

「あの国はどうにかならないのか」

「いっそのこと国王を暗殺するか、いい加減うんざりする。六機を整備するのもそれなりの資金が要る」

「全くだぜ、親父達に頼んで暗殺してもらおうぜ戦馬鹿にはウンザリだ」

「短期は損気というが、いい加減勝てない事を理解してくれないだろうか」

「全会一致で暗殺だな」

「家の者にやらせよう」

「忍者達なら確かに確実だ」

それを国王に進言すると却下された、理由は相手国より得られる賠償金が国庫を潤しているからだと、実戦部隊としては困りモノだ。

「それでワシに暗殺を」

「そうなります椿先生」

「ふむ、国王が却下した事をすればいかにお主とて無事ではすまないだろう」

「分かるのですが、不可侵条約をもう十二回も破っております」

「普通なら諦めると思うがのう、ちと探った方が良かろう」

「お頼みします」

「しかし小型バニッシャーでよく耐えたな」

「改良してきましたし、何より実戦経験からデータが集まりより最適な物に変わったのです」

「なるほど、防衛のために作ったものが、皮肉にも相手によって洗練されるとはな」

「後南方の方を調べてもらえませんか、若干塩の価格が上がったが気がしますので」

「ふむ、そちらも探るか、報告は一ヵ月後にしておこう」

「ありがとうございます」

「しかしあの小僧が、今ではこの国の中枢にいるとはのう」

「まだ小僧の身ですが」

「いや妻が1人もいれば十分大人じゃて」

「ではは失礼します、先生の育児を楽しみにしております」

「やれやれ親子揃って手間がかかるの」

好々爺のような椿先生は嬉しげに話す、研究所にも取り、六機で対応してきたがさすがに実戦を重ねすぎてオーバーホールが必要だ、その為に重駆逐艦のような戦闘艦を作るしかない、リオンに話し予算を貰い建造した、新型だけに最新鋭の技術がふんだんに使われ、今まで戦闘データから実戦的な装備も取り付けられた。

人員が多いために一ヶ月で三機が完成し、六期の小型はオーバーホールに出した。

この最新鋭の三機には精霊魔法装置もついており今まで風の抵抗で機動力を維持できないときも有ったが、これからは無い。

椿先生の報告で南の国と同盟国とアヴァルーロが手を結び攻め込む計画が立てられていると情報を掴んだ、それをリオンに伝え王都防衛専門の一号機、王国の切り札である二号機、三方向に配置できる最新鋭の九号機から十一号機の三機。

それらを使えるようにしてオーバーホール中の六機を急がして整備させた。

さすがに経験豊富な整備スタッフに支えられ半月でオーバーホールは終わり、六機が三方向に二機ずつ配置された。

少しずれ三カ国からの宣戦布告、一国で3カ国を相手にする異常な事態に陥った。

「軍議を開始する、これよりの発言は記録にとどめる事になる、以後注意せよ」

「まずお手元の資料をご確認ください、現在配置されている一号機から十一号機までの戦略及び作戦内容が記載されております」

軍議で説明役になったのは簡単、今までの実戦経験とバニッシャー開発及び建造の専門家でもあるからだ。

「王都方面が手薄すぎないか」

「それにつきましては現在訓練中の兵士見習が補います」

「王都までは来させないわけか、これだけの戦力があるなら確か

に一時的には防衛できる、しかし持続的な防衛は可能か？」

「俺もそう思う」

「私もです」

「クロム団長、レイシモ子爵、ご存知かと思いますが今まで退けられてきたのはバニッシャーと魔法によるものです、特に文字魔法はご存知の通り実戦により洗練されより軍事的なものへ変わりました、射程距離も伸びる方法が見つかり今後ますます軍事的な一面が強くなるでしょう」

「それで持続的な防衛が可能だと」

「可能と判断しております、同盟国を失ったのは痛手ですが、今回の戦で被害が少なければ同盟も可能でしょう」

長々と説明し、解説し終え、戦略と作戦が承認された。

十一号機まで配置に付き、二号機に乗り込み、一号機にはリオンが乗っている。

地上の軍は三方向の、焔軍、クロム軍、リシュテン軍に分かれ、区分けした小型機が各方面二機、中型が一機、巡洋艦の大型機は王都に留まっている。

「しかし、好ましくないな」

「そうだな精霊と生きる我々には好ましくない、本来自然を破壊すれば精霊も乱れ、穢れから魔物になる、近年の魔物出現率の多さ

は戦争に比例している」

「全く、戦などを思いつく愚かな者のせいだとしておく」

「それは一理ある、外交的に上手くいかないのは、我々が戦に勝ちすぎたからだろうと思うが、負け訳にも行かないのが現実だ」

「思うに普通は逆ではないか？」

「バニッシャーの威力を知りながらも、傷つけない事からある意味安心しているのだろう」

「困ったものだ、今度の戦は本気で主力を叩き潰す作戦だ、アルベルタが泣くな」

「悲しいが、致し方ないこと、そうでなければまた戦を興す事は分かりきっている」

「各方面より入電我ら交戦にあり、作戦の決行を待つ」

「ブラッククランプを許可する」

「各方面に通達ブラッククランプを許可する」

「我々は悲しいな」

「何故三カ国が戦を始めたか、調べる必要があるな」

「各方面より入電作戦成功せり、我ら追撃す」

「南方方面に通達、そのまま南国を制圧せよ」

「南方方面に通達南国を制圧せよ」

「これで南国の王国も終わりか」

「あっけないものだ」

戦はそうして時間をかけて終えた、南国は併合され、同盟を破棄した王国には賠償金と従属要求が突きつけられ、ヴァルーロ王国には今までの賠償金の十倍が要求され、領土も一部割譲の憂き目に遭った。

戦には勝ったが、新しい領土を得て、また時間をかけ統治しなければならない。

1－7守る剣？、困った事

1－7、守る剣？、困った事。

第十三次防衛戦争で南国、アヴァルーロの一部の領地から大国になり、アカデミーは学科の定員を増やし、大学も学科の定員を増やしたが、競争率は高く、それを低く抑えようと努力した方で、退役軍人から教師になる者もいた。

「なるほど飛行船による旅客から貨物か、発想の転換だな」

「元々こちらの方が当たり前だったんだがな、軍事に優先されがちだが国内の航空路が作れれば、様々な社会的問題が解決する」

「分かった許可する王家よりも支援をこぎつける」

「これで一つの歴史が変わるな」

「ああ、お前がいて本当に助かった」

「それとアルベルタにデートぐらいは申し込んでおけ、俺は経験が無いが」

「・・・なあ本当に1名でよかったのか」

「三人なら後ろから刺されかれない」

「お前も大変だな、1児の父親よ」

「少し泣きたくなる」

「泣くなら酒場で泣け」

「じゃ飛行船を作ってくる」

「ああよろしく頼む」

王城から研究所に入り研究員に説明し、民間の飛行船、軍用の輸送船の開発がはじまっただがそれは易い事だったのが今までの研究成果で、民間航空会社を創設し、空港を各地で作った。

王家の支援あり直ぐに軌道に乗り、今までの物流を一新する画期的な事で、膨大な利潤から何度も飛行船、輸送船を作り、その為の学科も新設された。

かつての教え子達から出産祝いを貰い、それを大切に保管した。

1人の妻が要るが、出産祝いは大変だった。

「お兄様も大変ですね」

「お前ほどでもない、今度の春に進学するのだろう」

「ええアベルと一緒です」

「強くなっただろうなアベルも」

「ええ、最も若くしてロイヤルガードの長になり将軍にもなった焔を羨んでいましたが、ちなみにお兄様はこの国にもたらされた英知だと、それとメイスは精霊魔法の立役者だと、リオンは言いませんでした、いつもながら感情が出て性格の相性ですね」

「そうか、二十二の終わりに決める事だ、最善だと思っている」

「分かっています、私も誰かを選ばないといけません、一人じゃ寂しいから、もちろん家族も増えて嬉しいけど」

「誰に嫁ぐとしても失恋の痛みは大きいだろうな」

「それはお兄様が言う言葉ですか」

「いやいやデートした事が無いの出で分からないな」

「う、お兄様何処から」

「教え子から」

「お兄様の教え子はもう卒業したはず」

「同じテーマを受け継いだ後輩達が色々と伝えてくれてね」

「ううう」

「別に他意はないぞ」

「良かった、てっきり結婚前にデートするなと怒るかと思った」

「デートは結婚前するものではないか」

「あ、知っていたんだ」

「相応にね」

「アベルです入りますよ」

質素なドアをアベルが入ってくる、アルを見て微笑み、アルが若干頬を染める。

「リシュテン公爵がお呼びです」

「二人共か？」

「はい」

「分かった」

直ぐに向かい、1人の初孫に囲まれ幸せそうにしている両親と妻が居た。

「どうされました」

「おお、飛行船事業の事だのことだ」

「基本的に相応に割引制度を導入していますよ」

「郵便、銀行も兼ねている事知っているが大きすぎるので郵便はメイスに委託し、銀行は焔に任せた方がいいだろうと中年議会で決まった」

「中年らしくもう少し考えて欲しいものですが別に構いませんよ、二人もやりたい事があるでしょうし」

「理由は求婚した四人のうち二人が元庶民なので、箔をつけようという話しになった」

「なるほどそれはいい」

「十分重役の役職にいるのに？」

「一人で何でもしていたら大変だろうが、兄の苦労を考えるといいアル」

「そうですね、分かりました、アベルはどうします」

「非常に簡単ないつも傍にいるからなしだ」

「別に構いませんよ」

「まあ別に困る事でもないし、アベル自身文字魔法の古参でもあるしな」

「ええ今では部活動はしておりませんが、大学部に精霊魔法と文字魔法を受けるつもりです」

「私も同じだけど八年間文字魔法を学んだから別の学科に移るかも」

「ふむ、アベルはどう思う」

「本人の好きなようにしてやればよろしいのでは」

「なら問題ないが年齢制限はあるぞ」

「分かっています」

少し遊んでから子供達の相手をして、自室に戻り、役職の魔法装置兼文字魔法研究所、飛行船商会の仕事を終え、シルク、妻と昔話に興じた。

四カ国戦争から一年、アルは最初から四年生になり、精霊魔法も、文字魔法も四年生で二つの研究室を往復の毎日、アベルも同じで往復の毎日。

アルの美しさは言葉がなく、神姫と詠われる程だ。

さすがに旧式と言われる、一号機は首都防衛に不適格と判断され、封印された。

二号機はその性能の良さから旗艦になり、小型機を巡回させ、中型を国境警備に当て、巡回させた。

飛行船が襲われる事があるので、時折モンスターが襲ってきても文字魔法を使う職員が撃退していた。

大国と貸したグレートリヴァ王国でも内部は人材不足で悩んでいた。

軍事面も、経済面も、技術面も、文化面も優れていたが唯一政務がこなせる人員が少ない。

そこでアカデミーで大臣職を募集し、筆記試験に実技試験と面接を行い、何人かの大臣を置いた、その結果政務の方も楽になり、最近は国王も皇子に政務を任せ、妃と幸せな隠居生活を始めていた。

大国と化しても奢らない事から周囲の国に頼られ、従属国だった

王国も同盟国に戻り、周囲の王国と同盟関係を結び大きな勢力圏になっていた。

文字魔法の発達で武器も変わった、今まで高価であった魔法剣が刻まれ発動するキーワードを知る事で効力を引き出させ、白兵戦において優位にたつことが出来た。

一番に優れた物は銃、他国より伝わったもので、それを私が改良し、ライフルにしバレルに文字魔法を書き込んで様々な効果を発揮させる魔法銃ともいうべき品物。

卒業生に符術の書籍を送り、それから符術が普及して、それが元で符爆薬が生まれた。

火薬と雷管の役目を果たす符を取り付け、己の意思で雷管の効果を発揮させた。

大陸の中央で近年急速な発展と領土の拡張が進んだグレードリヴァ王国は、その支える軍事面にそれなりの国防予算を与えていた。

ライフルは国営企業が行い、火薬は王家直轄として取り扱い、その資金で海岸の整備に乗り出した、昔取った杵柄で使える港町を再整備し、どこの港も再整備して大型外洋船が入るような大規模な湾岸設備を整えた。

港町は王家直轄地で、王家の利権も巨大化したが、それでも国家予算はいつも協議を続ける難事業でもあった。

王国は二つの会議がある、一つは国王と重鎮が行う正式な会議、皇子会議と呼ばれる若手が集まって作られた軍事的な一面が強い会議だが、今までに無い事業を何度も成功させたのでその発言力は馬

鹿にならない、特に私の発案から改良したものまで王国にとって優れた技術者でもあり次の重鎮でもある。
残る二人も王国からの信頼が厚く、少数ながらその影響力は大きい。
そして功績としても華々しい功績を残しているのも事実だ。
それは血塗られたものに変わっても、他の若手貴族が参加したがるほどその影響は大きかった。

「しかしだな、地上軍に要るのか」

「何だまだ兵器を信頼できないか？」

「いやな、いろいろ作ってもらって言うのもなんだが、輸送艦があれば歩兵に騎兵を直ぐに輸送できるし、一々値が張り手間がかかる兵器は正直扱い辛い」

「私も同感だ、ヘスは少し兵器に頼りすぎては無いか？」

「やれやれ分かっていない、歩兵が無い戦争は無い、兵器の無い戦争も無いのもまた然り」

「なら整備の手間がかからない簡単なものにしてくれ」

「ふむ。となると粒子砲台か」

「マナ粒子砲の廉価版か？」

「正確には違う、真正面からぶつかる時に丘のような場所からマナ粒子砲の小型版を使うのだ、都市攻略にも役立つ、逆に防衛にも役立つ優れものだ」

「で値段と維持費は」

私が黙る、言えば即却下するのが目に見えたからだ。

「要すれば高価な廉価版なのだな」

「済まないな、出来るだけ押さえたが、クリスタルの値段が暴落しない限り高いのだ」

「精霊装置で防衛陣を作った方が遥かに安上がりで効果的だな」

「今回はメイスに予算を重点に置く、異議は無いだろ」

「ああ」

「もちろんだ」

「俺としちゃ手間がかからず、維持費も安く、値段も安い方がいい」

「やれやれ、そんな都合のいいものは早々にない」

部屋のドアがノックされた、私が手を上げ、入れと伝えた。

そうするとシルク、シオン、吹雪が入ってきた。

「女性陣が居ないと男女平等の理念が損なわれると思ってな」

「あのな」

「いや、政治的には文字魔法専門家だ、問題は無い」

「やれやれ、軍議に参加しても面白くないぞ」

「兄さんまた憎まれ口を叩いていたのアルに伝えるわよ」

「済みません」

私はあまりの変わり身の速さに驚くと共に、双子だと良く分かるものだと思ってしまった。

「人数が少ないから国王陛下より入ってくれって頼まれてね、僕としては修行に専念したいんだけどね」

「私の場合はやはり軍人としての血が騒ぎます」

「どちらかと言えば旦那様がどのような事をしているか興味があって」

「いいよな妻子もち」

「あの国王陛下に泣きつかれてな、息子が少数でしか軍議を開かないと言って」

「あの親父め」

「ちなみに建前としては女性の地位向上です」

「それは理念としては素晴らしいが、今だ統治が進んでいないの

が現状だ」

「だから提案があってね」

それは初等部、中等部、高等部までの男女別々の学校の創設、病院の創設、教師、看護士、医師、薬剤師の公務員化でもあった。

さすがに大学は自力で合格するしかない、その為に大学を増やす事か決定された。

後は教え子達や人脈をフル活用して確保に当った、特に医師は大変だったが、実りある制度になると誰もが頷きこの国の将来を思っていた。軽く給与に一年に一度半年分の給与を与える事も定めた。

今まで研究されていたマナ動力炉の出力が、ついに王都全域に行き渡るほどの量になり王都で夜でも明るく、冷暖房装置が常に使えるようになり、それを各地に建設して村々までエネルギーを行き渡らせた。

マナ動力炉は重要な国家機密でもあるために、その修理、点検、整備は軍隊の工兵が行い、整備員も付き添った。

兵士も送り出され一個辺り十人と近くの村々、町々から自警団を集め、常に守る事になった。

その時に普及したのがライフルより安価なリボルバー、弾はマナ弾薬と呼ばれる安価でそれなりに威力のある弾薬が普及し、女性にも普及した。

口径としては３８口径、リボルバーとしては致命傷を与える事が出来る数字だ。

リボルバーの会社は無い、皇子直轄研究機関の私の下請けが行っているが、今度は独立して生産を行うらしい。

銃は確かに強力な兵器では有るが、問題は口径と弾薬に比例するリボルバー、ライフルの文字魔法を刻むバレルも現在は未発達で、ライフルを失えば、立ち上がって空中に文字を描きその文字の文章でキーワードを撃ち込み発動するしかない、ライフルに比べれば随分遅くなる、ただその分身軽で要られる利点も多い。

今は剣と銃と魔法の時代なのだ。

対拠点破壊ライフルも作られたが、値段の割には使い勝手が悪いと判断され未だに研究所で研究段階。

大きな戦争もなく子供達が三歳になる頃まで平和だった。

ついに数えで二十二歳になったアルベルタは、卒業までに４人から一人を選ぶ事になる。

リオンは２７歳、メイスは２７歳、アベルは２６歳、焔２６歳、誰を選んでもいい相手と思うほどに歴史的にも優れた人物達だ。残った仲間の女性二人も狙っているとか聞く

本人も悩んでいるらしく、最近は奥様方と会談中。

「ついにこの年が来たか」

「待って五年目だな、来年の卒業式の日に決まる事になるが、選ばれなかったらとか言って妙な事はしないように」

「むしろリオンが心配だな、選ばれなかったら」

「安心しろ妃になるのは当たり前だ」

「余裕があって結構だが、困るのは逃げ出す事だ」

「ああその確率は無い、もしひそうならアベルが気づく」

「ふむ。話しは変わるが統治巡業とは何だ」

「国王からのお達し、全員で地方から都会まで見て回れ、アベルも一緒」

「つまり一年間考えさせる時間を与えろと」

「要すればそうだろう」

「国王の命令だから全員で旗艦に乗るぞ」

「バニッシャー二号か、あれはいささか威圧感があり過ぎないか」

「仕方ないだろう、王国軍の旗艦なのだから」

と軍議はお開きになり、バニッシャー二号に乗り込み、地方を見て回った、意外に受けはよく、問題点が有れば改善策を話し合いそれで対応した。

実際に見て回れば火種が燻っており国王命令の意味を知った。

グレートリヴァ王国に割譲された領土、併合された南方、未だに残る戦争の傷跡、憎しみの瞳、嘆きの顔、届かない地方の悲鳴、そ

れらを解決しながら私達は王国の問題を良く知った、大きければその分問題も多いと。

三ヶ月が過ぎ大半が終ったところで、港町の空港に着艦した。

バニッシャー二号は旧式で専用の階段を必要とする、今の飛行船から見れば随分型遅れな物だろうが、改良されつづけたので居住性についてはどの艦より優れている特質をもっているが、やはり時代に取り残された感じは否めない。

理由は未だにプロペラで移動しているからだ、それでもその威圧感は中型艦を上回る。

とっさの判断で白魔法を紡いだ、バチ、と音が鳴り狙撃された事が分かる。

場所は限られているために管制塔から、護衛のロイヤルガードと近衛兵の忍者が疾る。

「とっさに文字魔法をかけないのはどういうことだ」

「簡単だ範囲が狭すぎる」

「なるほど、初めて文字魔法の欠点を知ったぞ」

「白黒魔法が万能ではないように文字魔法も万能では無い、まだ未発達な魔法大系だ、今度はメイスに風の魔法をかけてもらってから下りよう」

「そうしよう」

「しかし狙撃とはね、元軍人だな、それも管制塔からここまでになると凄腕だ」

「ふむ、少し調べてこよう」

転移の魔法を紡ぎ白魔法で転移する、管制塔で捕獲されている隻眼の狙撃手が居た。

「聞こうか」

「別に金が欲しかっただけだ」

「何のために」

「簡単だ医療費だよ」

「済まないが医療費はこの国には無い、医療は全部この国の国家予算で補う、それとも闇医者か」

「いや、そんなはずは無い」

「どうやら困った事をしている者がいるようだな」

「頼まれたのは医療費を支払う先の病院だ」

「察しがよくて助かる、当座は捕獲しておくので特に問題でもあるか」

「娘が病気で出来れば傍にいたい」

「その場所に連れて行ってやってくれ」

「よろしいのですか」

「子供を持つと分かるものだ、私が責任を取る。連れて行ってやってくれ」

「了解しました」

「では転移で戻る」

再び転移の白魔法を紡いで飛んだ。

四人に事情を話し、久しぶりにリオンが不機嫌になり、他の者も顔つきが鋭くなる。

病院に行き、関係者を捕獲し、その後事情を聞いた後、市長の横領及び背任だと知り、捕縛命令を出した。

捕まえた市長は、冤罪だと喚いていたが、文字魔法の嘘を判別できる魔法を使い、あっさりと分かった、簡単な尋問に知らないようで素直に話した嘘が見事に引っかかった。

他にも余罪が有ると判断し散々小突き回して喋ったら二桁の違法だ。

財産は当然没収し、関係して汚職をしていた警察も捕獲して余罪を追求し、洗いざらい話させた。

芋づる式に引っかかり、捕らえたものは二桁に上り、没収した資産から被害者に返された、足りない分は私が出し、どのみち航空路

を独占しているので膨大な富が毎月の様に流れ込む、そのお礼のようなものといえば失礼だが、お詫びの印に当てた。

そんな事件があったので、回っていないところで犯罪をかぎ回り、芋づる式に捕まえ、前回同様に同じ処置をした。

そんな事が噂になり、行く先々で直訴する者が絶えなかった。

もちろん警察と軍人が曖昧な時代なので犯罪者は容赦なく捕まえ、財産は没収、そして監獄行き。

最初の狙撃兵だった者は元を正せば統治が不届きだった、それで罪は問われず娘の病気も無料で受けられた。

他の国に比べ貴族を除き税金は重いほうだが、それ以上に手厚い福祉、医療、保護、自立支援、無利子での銀行からの借金、教育資金の提供、高等部までの学校。

私の資産からも様々な支援に当てられているために、教え子達に会ったら頑張った贈り物を必ずした。

手紙は度々だし、メイスが微妙な顔でポストを見ていた。

メイスは郵便局の長でもある、下手な大臣より思い重役だ。

だが、本人が知らないところで実は女とか言われているので、それを匂わせた者は即金的を入れる。

リオンが暇潰しに女顔をからかって、精霊にボコボコニされた経験を学生時代にもつために、誰もその話しはしない、下手に怒らせると怖いのだ。

メイスは次期精霊使いが多く集まる領地の一人息子なので、亡く

なったら王国として大変困る、この中で王国に被害が小さいのは意外にアベル一人、ただアベルは焔と剣術を拮抗させるほどの剣士の為に、亡くなられると来年のロイヤルガードが減る。

考えてみればこれほど凶悪な武装集団もそうはない。

統治を行き届かせているが、行うのは犯罪者の一掃、回ったところで直訴があればそれを調べ、なければ本当に無いかを調べる。

調べた後はご存知のとおりだ。

少しだけ哀れに思う事は有るが、犯罪者が減れば泣くものも減るという世の中の方程式があるために、遣り甲斐もある。

１－８守る剣？、守るべきもの大戦の序章

１－８守る剣？、守るべきもの大戦の序章

半年かけ入念に地方を回ったおかげで現状が把握でき、腐敗の根本にあるのが法や制度を知らない事だ。そこで村々まで役所を作りそれを伝える役割を果てしてもらった。
戻ったら自然を壊すのを嫌うメイスが珍しく灌漑事業を提案した、それは国家１００年の計になるような大規模な灌漑だった。

地図から入念に調べ、灌漑事業に国王も了承し、精霊使いたちも協力したおかげで僅か三ヶ月に機能を有し始め、五ヶ月目で灌漑の事業の難関を突破した。
後は事業を進ませるだけだとして計画を担当の大臣に引き継いだ。
王宮では若手が目立つようになった、世代交代の時期に迫っている呼び鈴だろう。
残り一ヶ月になり、四人は大物よろしくとでも言おうか、慌てる事もなく待っていた。

「今日の軍議は今月の予算配分を如何するかだ」

危うく突っ込むところだったが、大真面目にはなすことから予算が珍しく余った事を示す。書面に出た額に唖然とした、恐らく灌漑事業で成功した王国がその配分を任せたのだろう。

「ふむ、旗艦の建造に使うか？」

「俺もその方がいいと思うぜ、いくら暮らしやすくてもあれは古すぎる」

「私としてはもう少し街道を整備した方が良いのでは」

「灌漑が行われれば今までの街道は廃れるぞ、ついでに航空路もある」

「水路と航空路か、もしかしたら今王国は急成長している新興国か？」

「そうだが」

「ふ、断然忘れていた、学科を変えたから卒業するのは来年だ」

少し沈黙があって殺意の視線が集まった、身の危険を感じ転移でにげた。

少して戻ると収まっており、今度は各国との国境からの街道、水路の構築だった、意外に盲点な話しで、真っ先に思いつかなかったのはこの国が輸出と輸入で、輸入は少ない方で輸出の方が遥かに多いためだ、それは他の国からすれば困るもの、戦争の火種にもなりやすいので国境から整備する事になってその事業を押し付けられた。

地道に事業を進め、水路と街道が上手く混ざり合う様にして二ヶ月をかけほぼ完成させた。

残りは再整備がされていない王都方面、四名が奇よを衝かれる羽目になるとは思いもしなかったが考えてみれば最初から四年生で、次は他の学科で一年生から始まる合計五年いることに気づかなかったのはまさに盲点だったのが、笑える。

王都方面を終らせて王都に戻るとアルベルタが待っていた。

「お兄様」

「済まない」

「分かっていませんね、卒業したらと話したから学科を変更したのに、バレテしまったではないですか、それは嫌いではありませんよ、ですがあの四人から選ぶのも大変なんですから」

「済みません」

「分かればよろしい二度は無いですよ」

「二度はないと思うが」

「何かいいましたか？」

「いや何も」

怒っているアルベルタを一生懸命宥め、双子の妹には分かっているようで悪気は無かった事が分かってもらい、助かった。

あの四人なら喜んで私を捕まえてなにかをするだろう。

恐らくアベルと結婚すると思うが、そうするとアベルは大変そうだ、今からでも酒を送ろう。

アルヴァルーロは着実に勢力を伸ばしあちらこちらを侵略していたその速度は凄まじいものだった、その間に内政に励み、軍事開発を続けていた事が王国の運命をかき消す事は無かった希望になった。

今までの航空路の富と王家の支援が合わさり、十二隻の新造艦が建造された、一号機は旗艦戦艦ヨムンガイド、二号機電撃空母マティウス、三号機重巡洋艦シュミハザ、四号機重巡洋艦ハシュマリム、五号機軽巡洋艦ファムフリート、六号機軽巡洋艦アドラメスイク、七号機重駆逐艦キョクレイン、八号機重駆逐艦カオス、九号機軽駆逐艦ゼロムス、十号機軽駆逐艦エクスデス、十一号機揚陸艦アルテマ、十二号機修理艦ゾデァークを合わせて旗艦を除く姉妹艦の為にイレブンシスターズと暗号名がつけられた。

特に初めての試みになる電撃空母は単座型戦闘機を収納する為に、この十二隻を主力戦力とした。

中古はリシュテン航空事業商会が買い取り、護衛艦として使われる事になった。

実質予備戦力でもある。

十二隻を八ヶ月で完成させ、初航空に出る事になったのはアヴァルーロが帝国化し、他の国を次々に侵攻し、それに対抗するためにグレートヴァリ王国が母体に連合軍が結成された。そして今までに無い大陸規模の大戦が開かれた。

大陸の西方を統一したアヴァルーロ帝国、中央の連合軍、東方は物資の支援に当たる事で合意し、連合軍が会戦を挑んだのが建造されて訓練と準備が整い合計十ヶ月の事だった。

今度は研究員ではなく訓練を受けた正式な軍人だ。

各艦に艦長、副艦長、主任オペレーター、参謀、幕僚等の実際に戦わない命令を出したり、作戦を立てたりする軍人が集まっていた中で、皇子が旗艦に乗り、空母に私が乗り、メイスが三号機に乗り、

シオンが四号に乗り、吹雪が五号に乗った、十一号機に焔が乗った。

残りは航空路の元艦長、空軍を持たない国家にとって頼もしい味方である事は間違いないが、帝国軍七十万、連合軍二十万の劣勢でもあった。

「厳しい」

「何を申されますヘルメス艦長、我々の優位は確実です」

「違うな相手が優位なのだ、乱戦になれば砲撃は使えない、故に距離を詰めるだろう、それを近づけず蹴散らすために空母が作られたのだよ」

「お兄様は見越していたのですか空母が造られる必要があることを」

「いや純粋な好奇心でミニチュアを作って練習してみた、これからは空母の時代だと確信したが、それを支える戦闘機乗りが居ない今回作られた超小型戦闘艦、もう戦闘機か、それが足止めになればいいが」

「力不足ですと？」

「さあな戦争は分からない、特に空中と陸上が合わさった会戦は」

「前例がありませんからな」

「その通りです椿参謀」

「しかし、戦闘機乗りも初めての戦いですから慣れない戦いです」

「それが怖いのですよ」

「しかし彼らの愛国心は若さゆえとは申せませんぞ、真に愛するから生き残ろうとするものです」

「飛翔長、操縦士に吐く為の袋を渡しておけ」

「は？」

「初めて戦に出たものは吐く、大抵だ」

「そうですか、私も初めてですから分かりませんが、用意させます」

「済まないな操縦士に後の空港で酒を奢ると伝えておいてくれ、整備員にもな」

「我々オペレーターはどうされます」

「酒の変わりに飯を奢ってやるよ、しかし生まれてからこれで何度目の戦争だろう」

「確か最初の宣戦布告の際には戦場に居たとか」

「居たな」

「というと十五度目です」

「私は23なんだが子供が四歳になる頃なのに」

「親として負けて帝国に下りたくは有りませんな」

「そのとおりだな、飯の変わりに酒の方が良かったか？」

「同じ艦ですから」

「ならそれで決まりだ」

「話しがまとまりましたようで渡しに行って来ますが」

「頼む」

「ハッ」

飛翔長が立ち上がり急いで指で音を鳴らしてドアを開け、そのままドアの向こうに消える、かなり急いで渡して伝えたようで、戻ってきたときは三十代というのに肩で息をしていた。

「渡して伝えてきました、高い方から選ぶそうです」

「なるべく破産させないでくれよ」

「ヘルメス艦長が破産するほどお金に困っていましたか」

「新造艦の建造費でかなり使った、まあ王国が安泰ならいつでも元は取れるが」

「我々庶民の年収をふさげていますね」

「そのおかげで新造艦が作れたわけだよ諸君が座る効果な椅子もね、一つ一つがもし魔法の魔法装置だぞ」

「さすがに新種の艦になりますと金の使い道が違いますな」

「お喋りはここら編までの様だ、第一種戦闘配置」

「こちら艦橋、第一種戦闘配置が発令されました、繰り返します第一種戦闘配置が発令されました、持ち場についてください」

「部隊に発進許可を」

「もちろんだ、許可する」

「お兄様、もう切り札のカードを切るのですか」

「致し方ない事情がある、どの艦者も新米で昔のような慣れた者ではない、士気は馬鹿にできないという事だ」

「士気を鼓舞するために切り札を切るのですか？」

「どのみち、砲撃の方が遥かに効果的だ、その時間稼ぎだよ」

「さすがに慣れておりますな、防衛戦争を十三回もしただけはあります、十四回目は南国を併合しましたが、帰ってよかったのでしょう、結果的に内乱の傷跡は薄れたようですし」

「ハイペリオン部隊出撃します」

「白き翼が折れない事を切に祈る」

「ハイペリオン隊長機です」

隊長機に続いて五十機が出撃した、戦闘機ではあるが前方に専用のガトリング機構の二十ミリ機関砲が搭載されており、マナ動力炉の小型版を搭載しており、ほぼ無制限に飛びまわれるが、砲弾を撃つとなると稼働時間は最高率で９０分だ。

５１機が相手陣地を砲弾の嵐を浴びせ、次々と物資を破壊していく、指揮官と思われるものは標的にされ、砲弾が当るたびに大地を朱に染める。

散々暴れ、五十分で燃料から帰還し始めた。

敵軍はそれでも焼け石に水だ、数千人が倒れてもこの会戦には今だ意味を成さない。

「他の艦に伝達、砲撃戦を開始せよ」

「旗艦はどうされます」

「チェスでキングが動く事は無い、動くのはクィーンだ」

最後の一機が帰還して、それを期に砲撃戦が始まった。

旗艦、揚陸艦、修理艦は動かず、残る八艦が砲撃を繰り返し敵軍に甚大を与えているが、今までの経験から密集せず、分散し進軍する肉薄する事で砲撃を避けようという狙いが見え隠れするが、それを寄せ付けないように地上のグレートヴァリ王国軍のライフルが連射される、見事に撃ち倒していく。

今までの砲撃戦で十万は倒れただろうと悲観的に推測し、ライフル連射でさらに五万は削れると踏んだ。

後は作戦どおり地上軍が引いていきながら砲撃を繰り返す。

相手が学習したように、こちらも作戦から戦術の欠点を見つけ、それを補う作戦を行うに過ぎない。

会戦は長引くように連合軍の後退で相手軍は少しだけ混乱した、いや戸惑った。

砲撃が続く中、散開した敵軍はさらに散開し八艦は徐々に埋まる距離に高度を上げて対応し揚陸艦は敵軍の後方に向かって動き始めた。

敵軍も魔法で応戦するが、原始的な魔法では王国軍の誇る空中艦隊の装甲一つすら破壊できない、複合装甲を一枚一枚文字で刻む魔法文字があり全体でバリアようなものを作り出している、相手がバリスタなどを用いれば対空砲火で破壊するまでの事。

敵軍は散開しながら接近するが、後退していく連合軍に追いつけない、楔形の艦隊編成から反転すれば敵軍の後ろを砲撃する事になる。

敵軍にとって最善と思われた平原地帯が、思わぬ足かせになってしまったのが運の尽きだろう。

「飛翔長、発進できるか」

「まだです、今ですと最高率で三十分程度です」

「ふむ、そろそろ頃合か予備戦力に伝達、我ら包囲せり」

「予備戦力投入許可を出します」

二号機から十一号機まで姿を表し、敵軍は大混乱に陥った。

後退していた連合軍が進軍を開始すると、もう士気はボロボロで指揮系統も合ったものではない、戦う者、逃げる者、降伏する者、様々な地上軍の動きに帝国軍の主力軍は崩壊した。壊滅的な打撃を受け、もう攻める余地はなくなったようで追撃戦が始まり、後方に回っていた揚陸艦からロイヤルガードや近衛兵の忍者達が飛び出す、もう崩壊を終え、降伏するしかなかった。

戦死者は約二十万人、捕虜約五十万人、連合軍被害なし、負傷者少々の程度。

後は外交的なものだが、相手は外交に応じなかった。

１－９守る剣？、大戦終盤の月日

１－９守る剣？、大戦終盤の月日

五十万人の捕虜は一箇所に集められ畑仕事に精を出してもらった。
鋼鉄の壁に鉄条網、軽駆逐艦二隻が張り付いていた。
連合軍は解散せず、陣地を構築し、次の戦いに備えた。

予備戦力は航空路に回し、新造艦の九隻が修理艦のメンテナンスを受けていた。
軍議は長引いた結集するにも、分散して守るにも数の劣勢は覆せない。
今度の戦いは平原という開けた場所での会戦だったために、作戦は成り立ったが相手も戦術を見る限り、学習する、今度は負けない地形で戦う事になる。
空軍には男女の区別は無い、優れていれば誰でもどんな身分でも地位につくことが出来る実力主義一辺倒のだ。

「やれやれ、敵軍が捕虜交換に応じない理由が見えないな」

「分かりきった事だろう、飯と水だよ、こちらの兵站を消耗させる気だ」

「だから畑仕事をしてもらっているですが」

「どのみち逃れられない、鋼鉄の壁は一メートルは打たれている」

「どうして戦争を止めないの？」

「非常に簡単だ大陸統一の野心に陥っている」

「二十万人だよ！都市一つ分の亡くなったんだよ、残る五十万人を捕虜にしておくなんて人の上に立つ人じゃない！」

アルの慟哭が分かる、双子だから伝わる、そして愛のためか四名も分かっていた。

「一つだけだ、己が全てを支配したいという悪役の配役としては適任すぎるほどの馬鹿さ、いずれ部下に殺されるよ」

「どうしてだ」

「そうだね、考えてみてくれ、七十万の人間が戦いで消えて捕虜の交換に応じなかった、あれほどの国家なら易々と払えたのを、戦略的に疲弊させるために交換に応じなかった、それは分からなくても今まで侵略を受けた国々の人々が黙って従うかい、七十万だよ消えたのは」

「王都の人口が１００万だから七割か、確かに疲弊させるにしては多すぎる」

「だが歴史的に初めての大陸規模の戦いだ長期戦になるな」

「その為に東があるわけだよ」

「そうそう敵兵さんが持っていた銃を見たけど、火打石で火薬を引火させ鉛球を発砲するようだよ」

「唯一技術だけはこちらが上か」

「それが光となるか闇となるかは分からないぞ」

「戦争は数だといったものは確かに頷ける、技術が咲きに進んでいるから攻めるときなのだと思う」

「攻める？この数でか？」

「逆だよ、攻めるから相手は防がないといけない」

「軍議にかけてくる」

リオンが行くと残った面々は、今後の艦運営をどうするかとかに付いて話し合っていた。

アベルとアルベルタは空母にいるので、運営言うより助言を行っていた。

リオンが戻ってきて直ちに帰艦せよと命令された。

艦に戻ると事情を伝えた。

離陸してマナ粒子によってハリアーの様になっている翼が非常に短いだけだ。

「一年戦争か」

「は？」

「お兄様？」

「この戦争は一年で終る、それ以上は連合国がもたない」

「期限は一年ですか、困ったものです」

「少し用事がある、アルベルタ副艦長として暫く指揮をとっておいてくれ」

「はい」

転移の魔法を唱え王都に戻る、銀行の社長より話しをつけ資金を借り受け、また新造艦の建設に当てた、そして帰還の魔法で空母に戻り。

新しい新造艦を作るそれは空母五隻と話すと驚かれた。

「空母に絶対の自信がおありのようですな」

「あるのだよ」

「確かに空母一隻で駆逐艦二隻分の効果もあるし」

「空母一隻で駆逐艦二隻が作れますぞ」

「私なら空母を取ります」

「アルの言うと下り私もです」

「お若いなお二人とも、まあいいでしょう」

「今まで監視役だった事かの？」

「ええその通りですね軍にも派閥がありますから、ヘルメス艦長に付いていきましょう」

「ほほほ、珍しい事もあるものじゃて」

「勝つために借金してまで国に貢献するのは真の愛国者です」

「それは少し語弊が生まれそうですが」

「言い換えましょう、これだけの空母を五隻も借金して作るのは真の愛国者でしょう」

幕僚がこちら側についたので艦橋の者はホッと一安心、今までの地上軍の軍閥について愚痴るようになり、私にも情報が入るようになった。

「先行している四号機より入電、我敵と遭遇せり応援求む」

「ハイペリオンを出せ、飛翔長」

「了解しました」

「隊長機、出撃許可を申請中です」

「飛翔長」

「許可する」

「許可します、隊長機出ます」

ちなみに現在の戦闘機は、今だ音速の壁は超えられないが７２０キロの高速で飛行できる戦闘機なのだ。

隊長機が出撃し艦橋に近づいて操縦室で敬礼し出て行く、残りも同じように敬礼して出て行った。

「全速前進」

「巡航速度より全速前進に切り替えます」

すでに日は落ち、地上軍は夜道を付き走る、軍隊が凄いところは普通じゃない記録を打ち立てることだ、魔法で強化された地上軍は時速１０キロで孟進撃を続けている。

結果的に一つの国を解放し敵軍の要所を落とした、その国の捕虜を解放して連合軍の一員とした。

リオン以下艦長、副艦長達が集まって軍議を開く。

「まず地図をご覧ください」

敵軍から手に入れた帝国の地図、落とされた国は二桁に昇る。

「まず我々が捕虜を潜入させ、レジスタン活動、解放運動をしてもらいます」

「その後我々が各自進行するわけか」

「そのとおり、旗艦、三号機、五号機、七号機の四艦、二号機、四号機、六号機、八号機の四艦残りの九号機、十号機は捕虜の監視に、十一号機は遊撃活動、十二号機は地上軍と連動してください」

「旗艦艦隊は首都を目指し、空母艦隊は解放運動を行う事で連合

軍を強化する、残りは先程と一緒です」

「つまり二手に分かれるので敵軍も二手に分かれるしかないわけだな」

「要すればそのとおり、それで敵軍は常に危険をはらんで会戦に望まないといけません」

「策士だな」

「なんとも」

「まあいい旗艦は地上軍と行動を共にする、空母艦隊は奮闘を期待する」

「では会議を終えますご苦労様でした」

解散し、空母艦隊は本隊と別に動き出し、占領されている帝国の国境付近を南側から開放していった、おかげで連合軍に参加する者は増え、総軍４０万の大軍になった。

北方の方も解放していくと、連合軍は膨れ上がり五十万に達した。

帝国軍は会戦で敗れつづけ、背走を重ね、帝国軍は疲弊していった。

空母に新型戦闘機の生産が終わり、訓練を終え本隊と合流するとその効果は絶大で、一隻５１機を収納し、合計２５５機の総攻撃は破竹の勢いの連合軍をさらに急がせた。

残るは帝国本領のみになり、一旦集まる事になった。

旗艦、空母６隻、重巡洋艦２隻、軽巡洋艦２隻、重駆逐艦二隻、軽駆逐艦二隻、揚陸艦一隻、修理艦一隻の構成で戦闘機は新型になり３０６機。

「もう半年か」

リオンが感慨深げに話す、全員ではないが艦内の者も半年になり、これが後少しで終る事でホッとしていた、故郷から離れる者も残してきた者達がいる。

「お手元の資料をご覧ください」

１７人の艦長、１７人の副館長、もちろん私も含めて合計３４人。

「帝国軍本軍１００万、各地から集められた傭兵団２０万、合計１２０万、地上軍の二倍以上です、相手も必死の為に起伏に富んだ山岳地を選んだ訳です、そして此処を超えなければ首都に進軍できません」

「新型のフォーゲル二式には適任ですな」

「そのとおりであるが、不味いのは此処から」

「何だ」

「敵軍は新型のライフルを開発し、機関砲を作ったようです」

「さすがに尽力を尽くしたわけか」

「そこで敵軍は坑道を掘ったようです、そこで空中から狙われる

心配をなくしたわけですが、欠点が火攻めという事です」

「これだけの山地を焼き払うのか？」

「ええ、そうすれば来年には緑豊かな草原地帯になるでしょう」

「なるほど一石二鳥という訳か」

「まあ策の一つですが、残りは兵糧攻めですね」

「メイスには悪いが火攻めにしよう」

「致し方ない」

「では空母の戦闘機に焼夷弾を付けて、燃えやすい場所に落としましょう」

「残りはどうする」

「本隊の護衛です」

「次から揚陸艦も建造したほうがいいな」

「さすがに次は無いでしょう」

「それでは解散だ」

それぞれ帰艦し、離陸して戦闘機に焼夷弾を搭載させた、後は爆撃で燃やしていく。

敵軍は慌てて坑道から逃げ出し、傭兵団は逃げ出した、あっさりと

焼け野原になった山岳部、地道な坑道を潰し、燃え終えるのを待つのみだ。

一ヶ月間燃えつづけ、広範囲で山火事が連続していた。

地上軍が進軍し始め、ついに帝国、条件付降伏を提案したが、無条件のみと妥協せず、進軍し

空中艦隊は帝国軍の軍事施設を破壊して回り、ついに帝国は無条件降伏を受け入れた。

連合軍が突きつけた財産の没収で帝国の財政は破綻寸前で、国境線から十キロを隣国に譲る事で合意した。

連合軍は解散し、国際線が開港し、船舶、飛行船の二つが行き来する。

空中艦隊の者を集め空港で盛大なパーティを開いた、酒は好きな物を選んでもらい丸一日騒いだ。

グレートヴァリ王国にとって一文の得にもならなかったが、帝国の勢力拡充は封印され、復興に当る国々国に支援を惜しみなく行った。

空中艦隊の提督はリオンがなり、メイスは郵便大臣兼精霊魔法兼精霊魔法装置研究所所長、焔はロイヤルガードの長兼国営銀行の社長、吹雪は陸軍大臣兼陸軍大将、シオンは海軍大臣兼海軍大将、私は文字魔法兼文字魔法装置所長兼航空商会会長、見事なまで重役になってしまったわけだ。

戦争の爪痕から立ち直るのに、三ヶ月を要し、国営銀行に借金を

返し終えた。

捕虜は返還され、各地で職を失った傭兵が暴れまわっているので傭兵を雇うと宣伝し、集まった傭兵を焔の父親の傭兵団に入れてもらい、平坦の問題はほぼ解決した。

残り二ヶ月となってアルベルタはアベルと結婚する事になって、失恋の三人は引きこもった、アベルに国王から領地が与えられ、子爵から始まり、俺からは航空商会をアルベルタに譲り、軍事民事の開発に専念した。

リオンは吹雪と結婚しメイスはシオンと結婚し、焔はロイヤルガードの一人と結婚した。

争いの時代はなくなり、平和が訪れたが、リオンのアベルに対する嫌がらせは止まなかった。

さすがに国王も歳には勝てないとして王位をリオンに譲り、本格的に王国の世代交代が始まる、その競争は熾烈だったが、女性も地位につけられるので男女の比率は解消された。

そのまま歳をとり仲間の誰よりも早く８８歳で天命を全うした。

２－０、守るべきもの（前書き）

第二部になりましたが今回は現代編です、主人公は相変わらず物質的な転生をしますが、胡散臭い空想科学の転生です。
一応、ヴァルキュリーに選ばれたわけではないのですが、出ます最初だけですが、今回は現代編で元の時代です。
長々書きましたがお楽しみください

２－０、守るべきもの

２－０、守るべきもの

「守る剣よ」

戦乙女のヴァルキュリーだ。

「久しいな」

「穏やかな獅子よ、時代は流れたかもしれないがお前にはまだ天命が残っているどうする」

「そうだな、転生の秘術は常に発動するから天命も残るか、また生を受けよう」

今度は現代の日本だった、故郷の亜熱帯の南西諸島、その湿気の感じで思い出したが、どうも普通ではないらしい直ぐに孤児院に預けられ、親の顔は覚えているが、会わない方がいいだろう、普通に小学校に行った時は施設の子供としてイシメの標的に遭いそうだったが、殴ったてきたら殴られたように見せかけて百倍にしてボコボコにして、散々脅し理解できなかったら小突き回すを繰り返し、無事小学校を卒業した。

中学校では生徒会に入り、虐め問題を解決していった、もちろん小学校時代と同じように。

高校に進学し、施設を出たので錬金術のような技術を開発し、特許を申請して許可を取ると都市のゴミを回収しては技術で、同じの金属同士の延べ棒を溜まった分だけ再利用して大儲けした、その資金を孤児院にも提供し、進級した。

二年生になり、普通に過ごす日々にうんざりし、部活動に入ろうか迷っていたところを怪しい部活に誘われ、退屈しないかもしれないという安直な考えで入ってしまい。
その名も夜の会、何の目的かさっぱり読み取れないが天体観測機器があるからそんな部活と思っていた。
一応挨拶して説明を軽く聞いてまた夜に学校に来る事になった。
指定の時間まで仕事をこなし、リサイクルの資源は国内に供給している。
指定の時間に学校に行くと、武装した部長以下部員が居た。

「ああこっちえーと」

夜道を通り近寄り、女子2名、男子1名、私を入れて合計4名。

「石田です」

「そうそう石田与一君ね」

「それで何をするのです」

「簡単に言うとね異世界から流れてくる魔物を倒す部活動、総本山みたいなのが国連にあるわ」

「つまり国連付けの特務機関？」

「そう言った方が適切かな」

「それで私に何をしろと」

「うーん、直感だけどね、君は実戦経験があるんじゃないかな」

「まあ似たような事をしてきましたから、あながち間違いではないのでが」

「少し説明が必要ではないでしょうか」

「ごめんね、ついついはぐらかして、特務機関バニッシャー、罰する者という意味、世界的に時空がおかしくなって、エルフのゲートが開いた次期からずれているから違うと思うけど、そんな人々から国連には協力的でね、兵器を供給してくれるんだ、だけど適正者のみで、人材不足で使えるなら学生でも使うんだ悲しいけどね、それで君に給与と正式な職をというわけ、施設を出てから大変そうだし」

「お心遣いは感謝しますが、自分で稼いでいますので給与はいりません職も要りません、変りにアルバイトのような感じで、あまり規則に縛られない方が遣り甲斐がありますね」

「稼いでいるって調べたけどアルバイトもしていないんでしょう」

「リサイクル技術で都市の資源を買い集めて国内に供給しています、年収は億単位です」

「最近噂になっているリサイクル技術の話しって本当だったんだ、凄いね君」

「それでどんな兵器です」

「どうしよう、アルバイトの様に扱う事は出来ないんだけど、ま

あ体験という事で」

「そういうことにしておけばいいのですよ」

渡されたのはどこか見覚えがあるグロッグ17のロングマガジン、確か33発撃てるはず、弾倉を確認すると弾頭が無く、空砲のようなものだったが明らかに内部の成分が違う。

「精神感応機？」

「どうして知っているの？」

「昔どこかで見た事が合って、どこかで聞いた事があって、おぼろげなのですよ」

「そうか、まあいいや、それで自分の頭を撃てば発動するよ」

「正気ですか？」

「うん」

「試してみますか」

実際にこめかみに当て銃口の金属が当る感覚が冷たく感じる、特に考える事も無く引き金を引いた、飛び散る硬質な蒼い欠片、それが渦を巻き頭上で形を作る槍、それを持った王冠をイメージさせる冠、顔は無く、片目の部分に黒い線が走る、肉体のような体は細く、長身である、槍を構えて雄雄しく獅子吼を上げる。

そして役目を終えたように消えた。

精神感応機から空の薬莢が飛ぶ、意識が途絶え気づけば保健室で眠っていた。

「あっ気づいた」

「ええ、オーディンと言っていました」

「オーディン、確か散文のエッダで手段を選ばない神々の王だったかな」

「神話には詳しくないので、分かりませんが、どうやら素質があったようですね」

「その通り、これで君も戦えるよ、そういえば僕の名前わかるかな」

「神楽いずみ、七荻鏡花、新開武人の三人だと思っていますが」

「頭良いね、僕は何度も間違うのに」

「同じ学年ですが敬語は地なので気にしないでください」

「特別に教えてあげる、僕はね傷を癒す癒し手なんだ」

「なら神楽さんのスリーサイズを当てましょう、Ｂ８９Ｗ５８Ｈ９０」

「当てなくて良いから、何で知っているの？」

「目分量です」

「凄いけど多用しないでね」

「あまりしませんよ、私の特技は分からないでしょうが、魔法です」

「魔法？ゲームとかの魔法？」

「ええ、最もゲームのような魔法ではない方が多いですが、白黒魔法、文字魔法、精霊魔法の四種です」

「えーと、報告しない方が良いね」

「エルフの人たちが法術を使う事と同じですよ、科学も進めば紐解けますし、最も教える気はありませんから」

「そっか、訳ありなんだね、まあ僕もそうだけど、ひとまず渡しておくね」

機械が渡された、ポータブルＰＣと呼ばれる物だ。

ハンドブックＰＣ以上に大きく、ノートＰＣより小さい、そんな扱いやすい物だ。

起動させると説明があり、ナビゲートの軽いＲＰＧを終え、理解したところで仲間になった三人のパーソナル、エルフは個性と呼んだが、英語に置き換えパーソナルと書いているので、そう呼ぶことにした、パーソナルの要らないスキルを貯め、もしくは交換して使いあう道具のようで、コミュニケーションツールにもなる。

私の個性が神話のオーディンと分かり解説も簡略的にあった。

スキルはグングニール、スレイプニル、武道の心得、瞬間回復、不屈の闘志、仙人、アムリタ、神々の武具からイノセンタック、プララヤ、真意の雷。

「おお凄い、最高レベル物ばかり、新しいのはグングニール、スレイプニル、仙人だね、これは使い込んで効果がわかってから報告だね」

「しかし、こうなると群れる必要はなさそうですね」

「基本的に四人一組なんだ、今まで三人だったけど」

「なら三人でした方が良いでしょう、私は他にもつかえる物がありますし」

「ごめん正式登録させてもらいました」

「怒る事ではないですね、ただ事後承諾はよろしくない」

「ごめんなさい」

「まあいいでしょう、煩くなったら辞めますから」

「そう、以外にドライなんだね」

「一応仲間意識ももっておきます、学校を拠点代わりに使っているようですし」

「そうなんだよ、人材不足に資金不足から公的設備を使わせてもらっているの」

神楽いずみを表すなら
愛くるしい灰褐色の瞳の切れ目、優美な眉は形が好く、鼻梁は高く小口は桜色の花弁のよう口唇、東欧的美少女の顔立ち、スリーサイズは見応えがありモデルのような痩身ではなく砂時計体型の豊かな胸に見事に張った腰回りから伸びるスラリとした足。

七荻鏡花は長い火のような赤髪、冷たい灰褐色の瞳と美貌、首元で切りそろえられている赤色の髪は艶があり、輪郭が整っている顔を赤髪の髪が彩っている赤色の時雨の髪に赤の双眉。可愛いとか綺麗とか言われるより格好いいと言われる女子の顔、
体をみてみると変わらないがかなり鍛え上げられた肢体。

新開武人を表すなら
筋肉質の巨漢ではないもの、逞しい腕をした少年だ、顔は広めで角張っており、バンダナとカラーシャツをこよなく愛する。無鉄砲、性格は前向き、周囲の視線を気にしてしまう所もある。

私を表すなら光の中で浮かぶ美貌は、月光に溶ける乳白色のきめ細かい肌、銀細工のような長髪に冬の空を思わせる、澄み切った瞳、銀嶺の鼻梁と濡れた桜花の花弁の口唇。
体格は細身ながら引き締まっており、見るに値すると思う容姿。

「で、今日の所は解散ですか」

「それがその、好きな武器を選んでね担任が居るから」

「なら針はありますか」

「針？針って投擲する針？」

「ええ」

「多分あると思うよ」

「なら案内してください」

「分かった。いずみでいいから、他の部員も下の名前ね、君も、えーと与一君」

「石田与一です、最も両親は帰化した東欧系らしいですけど」

「うん、わかるよ、見た目で」

「一応学校にはきていますので、英語なら話せます」

ベッドの上で座りながら話したので靴が何処にあるかは分かりそれを履き、案内に任せて歩いていた、途中夜なのに購買部もあいている事に驚いた。

学校の旧館に拠点があり、いずみの上司らしき人物、教官らしき人物、医療スタッフなどの人員も用意されていた。

武器庫で針の束を取り、投擲する、上手く突き刺さり、鍛えていた忍術が発揮できた事になる、それに符を作り、針に突き刺して符術を使う、効果覿面で音も無いために扱いやすい。

「ほう符術士か、はじめて見るな」

「教える事はありますか」

「いや無い投擲も忍術の覚えがあるようだし、体動きもいい、俗に言う、忍ぶ一族なのだろ」

「遠からず」

「まあいい、七荻も神術を使うな、新開は金剛力を使う」

「精神感応機は必要だったんですか？」

「ああ必要だ、それぞれの術が効かない相手に有効だからな」

「仲間を守りますよ、見知らぬ人も」

「それでいい、国連の特務機関かもしれないが、ロボットが行うわけではないのだよ。結局最後は人間だ」

「ハートで仕事をしていますね」

「まあな」

「嫌いではないですよ」

「青春だろ」

「そういうことにしておきます」

「あんたが四人目か、七荻鏡花」

「知っています、石田与一です、これでも符術士です」

「じゃ見せてよ」

ハンドガンの訓練用の的に符を投擲し刺さる前に意思で爆発させる、その破壊力は意外に大きく標的の的を吹き飛ばした。

「へ、へー、凄いわね」

「威力が増しているようだ」

「それはあんたが発動したパーソナルの加護よ、常時は加護を与えるから気をつけなさいよ」

「そうしておきましょう」

「あたしのを見せてあげる」

エルフの血を引いているのか、法術の法印が現れ、発動させ熱線が扇状に放射され、見事に的の急所を撃ちぬく。

「たいしたものですよ、精密に法術を使うのは」

「科学が進めば誰でも使えるようになるわ、あんたのは」

「そうですね、科学が仙術を解き明かせば可能かと」

「仙術ね、まあ面白いじゃない今度は名前で呼びなさい」

「与一ですよろしく鏡花さん」

「さんは要らないは」

「よろしく鏡花」

「よろしい」

「俗に言うツンデレでな、仲間以外には高圧的なんだ」

「教官、法術放ちますよ」

「悪かった、しかし、やっと四人揃った拳句符術士とは楽なものだ、他は個性励起装置のみなのに、術士が二人、超能力者が二人驚くほどに凶悪な戦闘集団だ」

「ちなみに私には物理攻撃は効きませんよ」

「どういう意味？」

「簡単です、氣功で体重を自然と同一化し無にするからです、羽の様にひらひら舞いますよ」

「面白いわ試してあげる」

法術を紡ぎ、法印から先程と同じ熱線が集中して放たれるが、軽氣功の技で掠めることも無く避けられ、誰もが唖然としていた。

「仙道をご存知ですか」

「あたしの法術が効かない？」

「効きませんよ、物理にある限り意味をなさないのです」

「なら」

「そこらへんにして置けよツンデレ」

「弱点は物理以外なら効くわけですが」

「与一用に新しい法術を習わないと」

「まあやるじゃないか、これじゃ金剛力も役に立たないぜ」

「ええ役に立ちません毒等なら効くかもしれませんが」

「そこまでしねぇって俺は自己紹介した通り新開武人だ、一応先輩だから新開にしておいてくれ」

「分かりました新開さん、石田与一です、与一で結構です」

「噂は聞いているぜ、ガキの頃から凶悪な奴が那覇に居るってね」

「噂どおりでしたか」

「ある意味な、凶悪の意味が違って桁も違う」

「よろしく頼みますよ同じ前衛は」

「ああ、心強いものだ、物理系を無力化するからなツンデレには丁度いい」

「目測で身長は１６２ｃｍ　血液型はＢ型　スリーサイズはＢ８４　Ｗ５８　Ｈ８３」

「よく分かったな、そのスリーサイズまで当てる辺りが凄い目測だ」

「いずみの方がスタイルはいいですね」

「いずみに手を出すなよ」

「落ち着きなさい、一日あっただけの人と恋愛に発展するのは行き過ぎた妄想でしょう」

「いや、それを超えるのが青春だ」

「教官さん、それは偏った偏見です」

「そうかな？」

「そうですよ」

「どうやらそのようだ、あれほどの将来いい女になる女子を見ても何も感じないのか？」

「目の保養にはなりますね」

「お前な」

「仲良くやりましょうね前衛同士」

「おう！」

こうして二度目の守るものを得る事になった。

2－1守るべきもの、最後の果てに（前書き）

作者の力不足で現代物は難しいようです、誠に申し訳ない

２－１守るべきもの、最後の果てに

２－１最後の果てに

昨夜があり去年の年収で借りている賃貸住宅、フリーゾーン、二十世紀にこの島に作られた制度のエリア、それが今は拡大し港区、商業区、工業区、居住区、メガフロートの海上都市に行くためのモノレール、空港からも運行しているために入る人は多く、二両編成から四両編成に変ったほどだ。

居住区の賃貸住宅から出ると、太陽が背になり輝くようにいずみと鏡花が居た。

これだけの美少女が自宅の前に居ると噂になりかねないので急いで、登校するのが一番だ。

「おはよう与一君」

「おはよう与一」

「おはようございます、いずみ、鏡花」

「じゃいきましょうか」

「ええ」

「疑問は無いの？」

「グロッグにＧＰＳが付いている事ですか？」

「まあそうだけど、与一の家を探すのは簡単よ担任が教えてくれたから」

「素敵な回答ありがとうございます、担任とは迂闊な」

歩き始めると二人も歩き始め追いつくと、困った、身長差の結果足の長さが問題だ、元々帰化した東欧系の為に手足が長い方で、それにモノレールの時刻に間に合わすために急いでいる癖がついていた、それを落とし二人に歩調を合わせる。

二人に歩調を合わせて十五分、もの凄く目立っていた、赤毛に銀髪が二人、もちろん三人共目の色は灰褐色、シックなデザインの制服ながら完璧に見えしまうのが恐ろしい。
駅にエスカレーターで登り、駅で待っている一人の仁王が居た。

「おいおい、何でだ」

「疑問に答えておきましょう、担任が口を割ったそうです」

「違うよ、今日は初登校だから」

「そうか転校生か」

「そういうこと」

四両編成で男女に分かれ、男性専用の車両に入り、モノレールで次の駅で降りる予定が、新開が下りず、同じ制服の者は降りていく、結局メガフロートの海上都市の名門校で定員が無い、倍率が桁違いの小中高一貫教育学園の駅で降りることになった。

「日本エリアの特務機関の育成所だ、一応名門校の看板をかけているが」

「意外と平和で退屈に暢気な生活よ、さようなら」

二人を待ち、忍び笑いをかみ殺している鏡花が居た、済まなそうにいずみが頭を下げ、私は歎息して歩き始めた。

校門からして嫌味なほど高級そうな意匠が施され、もちろん前回の様に贅沢な物を作ったりしたが、基本的に質素な部屋に暮らしていたわけで、高級品には見慣れているが、これは少しやりすぎのような気がする。

校門から入り広い島では一月に咲く桜の並木があり、並木道を通り高等部の方角に進む。

高等部は嫌味なほどに意匠がされ、高級感溢れる校舎だった。

職員室まで案内され、軽い説明を受け、適合者ではない平凡なサポート要員育成コース、適合者の他に能力を持たない者が通う適合者コース、適合者且つ他の能力を持つ者のコースに分かれており、最後のコースに通う事になる。

素朴な疑問で適合者ではなく能力を持つ者はどうなるかと聞くと、能力を持つ者は適合率９０パーセントで、残りの一割は他の育成所に行くらしい。

何故こんな諸島にあるのか疑問だったので聞くと、被害が出れば今は近くの自衛隊空軍基地から飛ぶそうで、昔あった米軍基地はもう無いそうなのが聞いてよかった点だ。

基本的に軍が対応しても十分とも思うが、物理攻撃が効かない相

手には意味が無い。
最低でも訓練を受けた適合者が望ましい戦力だそうだ。

そして二年生以上の能力を持つ適合者が実働部隊に近い候補生が実戦経験を持つ為に比較的弱いものを倒す、エルフ達の世界には存在しないが、こちら側は時空が不安定で漂流物が流れ着き実体化する、それは多くが野生生物だが、稀に人間である場合もあり彼らは魔人と呼ばれ、一つの町を壊滅するほどの力を持つが、理性は無く破壊衝動のままに活動するらしく、今のところ世界で確認されたのは沖縄の米軍基地の兵士、基地を壊滅させ実行部隊が総動員されて倒された厄災中の厄災。

世界で確認されたたった一人の兵士だったのが悪かったようで、日本政府はその結果米軍基地を海外に移し、何ヶ所か残す事で同盟国の面子を立てたに過ぎない、本音を言えばエルフという千年以上先の技術を持ち、時空のゲートを一方的に行き来する無条件の味方の為に、同盟国は軍事的にそれ程必要なパワーバランスではなくなったせいでもある。

日本という国が技術、資源の点で世界最先端を軽く二週するほどの大国になってしまったのは、そのエルフ国の影響で、鎖国に近い政策すら提案され始めた頃で、各国としてはそれが非常に不味く、国連に協力的なエルフの行動から、それを防いでいるのが現在の政治情勢らしい。日本という伝達が、地球の技術分野のキーマンになってしまっているのだと。

それらの政治情勢から国連の特務機関は微妙なところで、日本エリアを作った理由も、日本エリアの南西諸島の本島に様々な政策を打ち出したのも結局のところ、昔と変らず、厄介ごとを押し付ける事が一番だと考える政治家の事から、根本的にエルフの祖先が並列

世界の何系だったのか疑問に思うが、考えても仕方が無い。

長々と説明したのは相応の理由があってのことだ、要すればこの島は一番危険で一番厄介ごとを押し付けられる性質があるという事だ。

小さなところが騒いでも世論は動かない、世論が動かなければ政治家も動かない、政治家が動かなければ官僚が変るはずも無い。

最初の頃と米軍基地の変りに特務機関の育成所が作られただけで、マシになっても厄介ごとを押し付けられる性質は変っていないらしい。

大分マシになったが、要すれば暇な訓練の説明を受けている間に考えていた事だ。

「おい石田」

「なんでしょうか」

「訓練が嫌いか」

「無駄が嫌いなだけです」

「ほう、無駄」

「ええ」

「なら対戦してみるか」

「攻撃が掠れたら一千万贈呈しますよ」

格闘技の教官が憤怒の瞳で近寄ってくる、軽氣功を使わないで、単純な動きを繰り返す。

軍隊式の方が遥かに有効な実戦で武道を使う気らしいが馬鹿だ。

武道とは語弊があるが、学んだ場所が悪い、剛拳のところでは強いといわれても、相手は人間の枠組みに入らない、そんな相手に力技で勝とうと思う方が少し考えが足りない。

避けるのも飽きたので軽く金的をした、あっさりと泡を吹いて気絶。

「弱すぎる、これが教官だと思うと人材不足は否めないな」

担架で運ばれる教官を見送って次の授業の銃技訓練所に向かった。

銃技もマグナム神話をこよなく愛する馬鹿だったのでグロッグ二丁とマグナムを使うデザートイーグルを一丁、お互いに離れ抜く、横に移動しながらペイント弾を顔に二発、心臓に二発、下腹に二発、太ももに二発ずつ、一発撃って掠めもせず、反動から次に移る前に当っていくのだから、文句の一つも言えないほど完敗した。

「分かりますか、そのタイムラグが命取りなのですよ、人間相手に負けるようなタイムラグを発生させるマグナムなんて誰が使うのですか」

「相手は異形だ」

「元々人間の身体能力より優れている動植物に混ざった魔物と態々時間を与えてどうします、マグナムは貴方の趣味で現実的ではないですね、使うなら片手で使える短機関銃の方が遥かに効率的です、少なくてもタイムラグが違いますから」

「学生に負けるなんて」

「もう少し考えた方が良いですよ、貴方の職務の為に、学生には銃を使う方が珍しいでしょうけど」

「なら何の武器を使う」

「簡単ですよ、己の術とパーソナルに決まっているじゃないですか」

クラスメイトから拍手が送られ、グロッグを収め道化師の様に一礼した。

次の授業は元実働部隊出身者の様で無意味な解説はなかった。

白兵戦、このコースにおいて最も重要視される物の一つだ、理由はそれを使った己の術が多いからだ。

それ以上に銃器、格闘技と違い両者には無い特質がある、今までの経験から己の術の中に殆どのものが覚えはあり馴染んでいる、要すれば慣れ親しんだ使い勝手の良さだ。

理由は日本の場合銃の歴史が浅い、そして殆どの武術が白兵戦は基本だからだ、格闘技ではなく格闘術なら馴染んでいる者も多いだろうが、素手で戦いたがる者はどうも少ないようだ。

その少数派に私は居るわけだが、手裏剣を選んで、二、三回投げてみた、軽く投げただけでも的にしっかり突き刺さり、これは使えると判断して何度か試してみた。

その他の能力を持つコースで、このクラスは武門の流れを組む者が多いようで武術的な訓練を行うものが多かった。

どうも教育者の教官が二人ほど経験の無い者だったために、無駄な授業の二つになった。

午後の昼休みになり購買部で弁当を買って教室に戻ろうとしたときいずみと鏡花に鉢合せ、探していたらしく一緒に食べる事になった。

「聞いたよ無駄な授業を二つほど潰したとか」

「元々存在意義が無いのよね」

「二人とも毒舌ですね」

「後少しで僕らのクラスに来るよ」

「そうそう」

「どういう意味です」

「説明が無かったけど、より実戦に耐えられる者はクラスの組が先に進んでいくんだ」

「まっ敢えて説明しなかったんだけどね」

「そうですか」

昼食を食べ終わり高校生活に花が咲いた午後の昼休みだった。

午後の実習己の術を試す番だ、符を十字手裏剣に四枚刺し投擲し己の意思で力を解放する的を破壊してついでに背後の壁まで破壊した。

「見事一クラスに移動したまえ」

「頑張れよ」

「かっこよかったぜ」

「無駄な授業を潰してありがとよ」

男子からは感謝の言葉、女子からは一クラス行っても偶には遊びに着てねと言われた。

1クラスに移動し六名が居たそれぞれ自己紹介し、四人が組んでいるらしい嫌味の無い実戦に裏づけされた自信家だった。

二人と挨拶し、実技の訓練後、いずみに前衛を任すのは難しいと判断して、訓練に付き合い少しでも強くなるために鍛えてみた。

いずみの武器は大鎌のデスサイズ、鏡花の武器は意外にも魔物を飼いならした鳥、変身するとロッドになる。

午後の実習が終り、放課後になる、元の高校にモノレールで向か

い、旧館で装備を受け取り、エルフ製のメタルスーツを身に付け外から学生服を着込む。

夜の待機時間は訓練に当てられ、私が教官になり三人をそれぞれ鍛えた。

緊急ランプが付き、旧館から駐車場まで走りワゴンに飛び乗る。

「確認されたのは複数、現在サポート要員が匂いで誘導している」

タイム五分下りた、

誘導されていたのは厄災中の厄災、魔人が三体もいた。

「魔人!?」

「2体を相手にします、残り一体をよろしく」

「分かった、死ぬな」

「まだ死にませんよ」

二体の前に立ちふさがる、それに気づき二体は力を放射する何のエネルギーか分からないが、とっさに飛んだので避けきれ、接近した後に心臓のある胸に手を当てて氣を爆発させた。

それで一体は倒れ、残る一体はエネルギーを放射して私は硬氣功でダメージを最低限に押さえたが装備はボロボロ武器も破壊されていた。

白魔法で転移し背後から心臓に貫き手で貫通し氣を爆発させた。

二体を倒したが功夫が足りず負ける寸前の仲間の下に向かった。

「ズダボロじゃない」

「話している時間はありません、囮になりますから、全力で」

「分かった」

「うん」

ルオォォォ

「あるぜ、取って置きのヘビーな奴が」

「ください」

「ああ、やるよ」

煙草を貰い羽で噛み文字魔法で火をつける、そのまま吸い込み、何度もすっては吐きを繰り返し、眠くなってきた。

「どうやらそろそろ終わりのようです、眠くなりました」

「魔人を三体も倒した英雄だ、誰も文句は言わないって」

「ごめんね僕が仲間に入れなかったら君は死なずに済んだ」

「あたしの力不足で」

「過ちから学びなさい、失敗から学びなさい、そして今度は勝てるようになりなさい、いいですね、新開、いずみ、鏡花」

「ああ」

「分かったよ」

「分かったわ」

咥えていた煙草が零れ落ちる、どうも最後らしい、初めての殉職の様だ。

三人が泣いていた、私は慰めの言葉を最後に紡ぎ息を引き取った。

私は微笑みを浮べて、それは満足げな表情だった。

獰猛な肉食獣が、大切な何かを守り抜いて死んだように、そんな微笑を浮べていた。

「守る剣よ」

「お久しぶりですね」

「お前は勇者だ、一つだけ何かをしてやろう」

「仲間の傷を癒してください」

「分かった、また生はある、行くか？」

「今度はファンタジーの世界にしてくださいよ」

「分かった、行くぞ」

2－1守るべきもの、最後の果てに（後書き）

評価、感想をお待ちしています

３－０＋１守る剣？

３－０語り部の交代

肉体が分解され分子まで細分化され、異なる惑星に赤子として生まれた。

そして成長していき魔法の無いファンタジーの世界で、暇を持て余し、仙道を極めると現代に渡り、地球を放浪していた。

そんな一人に賢者の石の複製を渡した、私の語る事は無く次の者が語る。

３－１守る剣？

僕が生まれたのが双卵生双生児の兄妹が五歳の頃、子供としてはっきりとしており五歳までのんびりした幼児ライフを送っていた。

十歳で兄妹が総合アカデミーに入り、姉の護衛だったアベルも入った、そのおかげで暇を持て余し容姿は美形の両親に、美形の兄姉、もちろん僕も美形に生まれた。

五歳から白黒魔法、文字魔法、符術を習い、兄が雇った忍者から引退した極忍と呼ばれる仙術、対仙術を習った学び、鍛えて過ごしている。

９歳の頃にグレートヴァリに戦を仕掛けられ、バニッシャーと呼ばれるマナ粒子砲で相手国より賠償金と領土を勝ち取った。

それからは賢者の石で色々と学び、時間の遅滞化させ長い間白黒魔法、文字魔法、符術、仙術、対仙術、魔法装置について学んだひたすら学んだので、アカデミーレベルまで学んだ事になる。

数えで十歳になる頃アカデミーに入り、兄は飛び級して大学生で、姉は飛び級しないで5年生で精神的に兄姉はかなり大人に見えた。

一年生、魔法学科全般を取り、同じく皇女、武神傭兵団の双子が同じだった。

同じように選択したが、どうも微妙だ容姿はそれぞれ家系の者だが、皇女は風呂好きだし、武神の双子の姉の方は知的好奇心の塊、弟はどことなく知り合いに似ていた。

前期はそれぞれ満点で合格し後期から二年生に上がる、それまでの夏休みの一月、実家に帰る事になったが、何故か居候が居た、僕を訪ねてきたと言って居座り実力で排除し様とした者を文字魔法で吹き飛ばしたそうだ、そして呼ばれたお茶会であの日見た花の名前を僕達は知らないと手紙に記し送ったそうだ。

呼ばれたのは皇女、双子の姉弟の三名。

「十年後の夏はどうですか」

「白を切る必要は無いか、そうだね生まれてから十年目、あの時みんなが怪我をした事」

「十年目、じゃ暁淳？」

「そうだよ」

「あたしは変りましたが安曇群雲」

「私達は真柄姉弟」

「久しぶりですね皆さん精神的には１６歳ですが」

「これからは仲良く出来そうだ」

「ええ」

「互いに今の名前で名乗ろう、アカツキ・ヴァン・リシュテン、見てのとおりリシュテン公爵家の次男」

銀細工のような銀髪に澄み渡るような灰褐色の双眸、白い乳白色の肌、桜花のような口唇、顔一つとっても美形で、細身の体は日夜精進してきた結果１０歳で１６０センチ、長年研鑽を積んだ東洋武術家のよう。

「あたしは妹ナグモ・ハーバード・グレートヴァリ、見てのとおりグレートヴァリの長女よ、おかげで要らぬ苦労ばかりよ」

まっすぐした黒髪のストレートが腰まで伸びる、黒曜石の双眸に強気な自信家の強い自我を見せつける、惹きつけるような顔立ちに１６０センチ程度の身長、魔法王国を象徴するような稀な魔力を感じ、強力なルーンを防壁の様に纏わりつかせている恐らく装飾品が元と思う。

「今度は私ね、武神傭兵団の長の末っ子の双子の姉よショカ」

紺色の髪が腰まで伸び、知的な瞳が蒼色で好奇心を垣間見せる、学者風に成長しそうだがどちらかといえば科学だろう、透き通るようなきめ細かい乳白色で体格も鍛えられたのか１６０センチ前後ながら引き締まった僕と同じように問うよう武術家のよう。

「私は同じく末っ子の弟のリットウです、しかし、どなたでしょうか手紙を寄越した相手は」

こげ茶色の髪を切りそろえ、双卵生双生児とわかる、顔は美形というより爽やかな印象を与え真紅の双眸、とある怪物のようだが、全く違うのは無害そうで訓練を受けているのか姉と同じように鍛えられた細身。

「私よ、貴方方の惑星のとある人物が作った成長型アンドロイド」

１５０センチ程度の身長、他の者が１６０センチ前後なのに彼女だけが年齢に比例した平均的な身長で、体全体に文字魔法が刻まれ、見る相手を引かせる。

狂相ではないが、常識を逸した場違いなまでに作り上げられた文字魔法を体に帯び、全身から強力なルーンを感じさせる。

一般的な白黒魔法、黒は攻撃的なものが多い大四元素、小十四元素などの元素からだされる魔法が多い、白は防御的なものが多い代表的なもので様々な効果を持たせたプロテクト。

才能、魔力によるが、概ねこの大陸に国家が成り立つ前からあるとされている。

文字魔法は正確にルーン文字を描き、日本語の旧漢字に近いが一つで発動するものから、文章の様に書き上げたものをキーワードで発動するものまで幅広く、微細な魔力でも使い手次第で強力になる。

兄が教えた符術などは応用術、作られたバニッシャーは文字魔法の集大成といえる、えてして才能は必要だが、白黒魔法より必要なものが少なく古い賢者が生み出した魔法として知られる。

その文字魔法はグレートヴァリに受け継がれるだけで、後は禁制となった。理由は誰でも使えれば身分社会を脅かすとされたからだ。

「創造主より言伝を持ってお手伝いに参りました」

《え？》

見事に四人揃ってハモった。

「恋せよ命短し乙女と例えるならそうです」

《は？》

二度目のハモり具合、何かを言おうと思ったが、電波的な印象が強いタトゥー娘に何を言うべきか迷う。

「恋愛のキューピットです」

もはや誰も言葉を発しなかった、明らかに常識が通じない相手に痛い人というべきしかない。

「名前はアヤナミ・アスカ、これもルーン文字からとりました」

「もういいから紅茶でも飲もうか」

「あらあら皇女殿下よ」

「はいはい痛い人」

「む！」

テーブルに四人が座り、最後に僕が座るアヤナミと名乗った成長型アンドロイドとは言い換えれば、人間に限り無く近い存在のような気がするが、気にしたら負けた。

「夏休みといえば？」

「海、もしくは川ね、要すれば水遊び」

「今は無理、将来的には大丈夫、未来を知っているから」

「そう、それは聞かないで置くわ。楽しみが減るし」

「賛成ですね」

こうしてまた四人で遊ぶ事になった、歳相応のカードゲームなど、夏休みは遊びで終わりかけたが、残された宿題を全員で分担して行い終わらせて後期の二年生に上がった。

魔法関係全学科の為に忙しく後期は終って三年生に進級する事になった。

一ヶ月の休みがきて、文字魔法の略式に成功した双子の兄姉は、王国では知らないものは居ない有名人になった。

略式のおかげで今までの魔法装置より、遥かに短期間で低コストでの良い物を作る事が可能になり、僕らもその恩恵を受けた方で庶民にも広がった。

双子の兄姉は部活動で研究していたらしく、マナ動力炉を完成さ

せ、兄より設計図を見せてもらうと改良点を指摘し、改良する技術を編み出した。

その事でマナ動力炉が王都を満たされ、様々な用途に使われるが、現代レベルの動力に時代は追いつかず、明かりを灯す事、冷暖房装置に使われる事になって、それを国中に張り巡らしさすがに王国の事業となったが、他国より流れた火縄銃を兄が改良しライフルに作り変え、バレルに略式を書き足す事で様々な用途に使われた、もちろん刀剣類や防具類、衣類にも使われ、医療品にも使われた。

国家としては小さな小国から中堅まで上り、同盟国に様々な物を輸出して利益を上げていたらしい。

春休みは三人にアカデミーの八年生までの勉強を教え、兄は大学生兼教員、姉は飛び級を断り6年生になっていた。

その姉から渡されるお菓子は日本で作れていた物に近く、姉が何者か疑問に思ったが図書室で見つけたレシピと教えられ、疑問は解けたが、それが王国中に広がったの割愛しておく。

数えで12歳の仲間達、このまま行くと14歳で卒業する事になるので、さすがに大学の方をしっかりと勉強していた。

「勉強ですか、こうしておきましょう」

部屋の外からの音が遮断され、極普通に勉強していたが、何時までも勉強の時間が終らず、さすがに不信に思った皇女のナグモが口を開いた。

「まさか時間を凍結しているのですか?」

「いえ遅滞化させているのです、貴方方は高速に勉強していると思えば間違いないでしょう」

誰もが絶句、時間すら操る文字魔法を知っているらしい、僕も知っているけど滅多に使わない。

仲間は気にしないそぶりで勉強に集中し大学受験まで行き着いた。

翌月から三年生、夏休みがきて後期は四年生、そのまま順調に飛び級を重ね１４歳で大学に受験し、姉が二年生に上がる頃に一年生になった。

それまでのアカデミーの生活から一変し、兄と仲間は卒業し、姉とアベルが残って大学二年生になっていた。

本来家督を継がなければ高い公職にはつけないが、兄は魔法研究所所長、兄の友人のメイスさんは精霊魔法研究所、ホムラさんはロイヤルガードの長、フブキ、シオン、シルクさん達は女性の社会地位向上を目的とした公職についた。

それは次期国王でナグモの１０歳年上の兄シュリオンが、無理やり仕官させた事になる。

姉が二十歳になると周りに居る男性から求婚され、兄も求婚され、姉は大学卒まで保留し、本格的に僕らも微妙になった。

僕らが１５歳、双子の兄姉が２０歳、アベルさんが２４歳、シュリオン殿下が２５歳、メイスさんが２５歳、ホムラさんが２４歳、フブキさんが２４歳、ファルシオンさんが２３歳、シルクさんが２

1歳、シュリオン殿下が姉と僕らを除いて全員を公職につけているので微妙。

3－1－1週間？

－1

とある人物から譲り受けた賢者の石を使い様々な知識を得た、魔力は無いので魔法は使えず、変りに科学分野の技術は相当なものだ。
それを使い得た超能力で、過去の自分の分岐点に戻った。
自分の能力の一つ分岐点に戻る能力、それは数多にあり最初の悲劇を変えた。
彼女は名前も知らない心優しい少女、その原因の車が幼児に轢かれそうになる前に車を止め、少女は助かった、それが小学校を通して何度もあり、どうも彼女は死神に愛されているらしい。
何度も助けると何度も同じ場面に居るので、彼女はストーカーと呼んだが、住所も名前も知りませんと答えた、そもそも小学生でストーカーは無いだろうと思う。
「なんで毎回、居るわけ」
「君が死神に愛されているから」
「ハァ？電波、それともサイコ」
「サイコの方は当っている、ただサイキッカーだけど」
「スプーンを曲げるわけ？」
「毎度車を止めた訳だ」
「はい？」
「君は死神愛され本来なら最初で天に召される、だけど運命を変えたわけだ」
「何度も死にかける訳はそれ？」
「どうもわかっていないようだが、超能力を与えてあげるよ」
「え？」
サイキッカーとしての能力を開花させる、彼女は混乱気味だが、いずれ力の使い方をわかるはずだ、僕は未来予知などの能力は無い、そんなものはつまらないので止めた。

これで彼女の悲劇の死は防げるので、問題は無い。
はずだったが善行は続き彼女は死ぬ寸前に行き着き何度も癒し、生きを吹き返らせた。
彼女に能力の使い方を伝授し、いくらか楽になった。
彼女も十二分に超能力を使い人助けに奔走しているようだ。
中学に上がり、特許申請した技術おかげで金に不自由せず、両親が財産管理していた。
中学に上がってからも、彼女の行為は変らず、毎度助ける事が様々にあった。
中三に上がりクラスメイトの自己紹介で彼女の名前を知ったが、あまり意味か無い事だった。
中産の夏休みて見覚えがある全身タトゥー娘が家に尋ねてきた。
「覚えていますか」
「なんとなく見覚えがあるかな」
「また手紙を出しました名前添えで」
呼ばれた三人は彼女とクラスメイトの双子だった。
「また十年目の夏です」
「そうね」
「そうですね」
「どういうことだ」
「あ?そうかグレートヴァリ」
そこで忘れていた過去を思い出す、あれからまた十年目の夏になる。
「思い出したよ、ナグモ、ショカ、リットウ」
全員が快活の笑いに包まれる、互いに昔の名前で呼び合い、昔の古馴染みの様に語り合う。
「二人に与えれば」
「それもそうか」
「仲がよろしい事です」
「クーデレ娘が何を言うの」
「なんですツンデレ娘、スレンダーでよろしいようで」

「はっ、昔からあんたも正直じゃないわね」
「まあまあ落ち着いて二人とも」
「忘れましたかあの日の水遊び」
注意がそれたら格闘術の喧嘩に明け暮れていた、女同士容赦ない本物の殺人術で相手の攻撃を返すように演舞の様に舞う。
「お二人共仲がよろしいようで」
戦いがこう着状態に陥ってからとめた両者共に体力派の様だ。
「よろしくない！」
「まあ再会に免じて仲直り」
「一杯付き合いなさいよ」
「私のは夕食ね」
二人が嫌々ながら握手する、それにリットウが手を起き僕も手を置いたついでに残る二人に超能力を開花させた
「どうします今度は海にいけますが」
「もちろん海よ」
「私的には図書館が良いんだけど」
「あんた馬鹿、夏といえば海でしょう」
「その馬鹿に成績で負けてない」
「総合的に勝っているのよ」
「言い合いはそこまでこれから買い物して海へゴー」
「そうですね私も久しぶりの海ですから」
その後散々買い物に付き合わされ二人共資産家の生まれらしく高価なブランド品を買いまくった、リットウは気にせず荷物を持ち相変わらず爽やかな風貌に性格だ。
「たく、散々だ」
「散財ですね」
「お前も毒を吐くようになったな」
「いつもの事ですから」
「最高の夏休みにしよう」
「ですね」

「しかし、現代で再会するのは皮肉ですね」
「そうだな」
お喋りしながら買い物に付き合い、容量オーバーになるとそれぞれ帰宅した。
翌日海に繰り出し一週間遊びに遊んだ。
その次は山で、小川で遊んで散策をするその夜には花火また一週間遊び、翌週は軽井沢でバーベキューにまた花火、夏休みを満喫していたが最後の週は宿題を解いている。
後期が始まり季節は１０月、受験勉強で忙しく受験する高校は決まっていて忙しく受験勉強をしていた
１２月に入りクラスでクリスマスパーティを行う事になり、綾波も誘いかなりゴージャスなナイトドレスで現れる。
一週間の冬休みを過ごし、初詣などに行って楽しんだ。
後期の受験、僅か一週間で高卒の資格が得られる怪しげな学校に入学するために受験したが、意外に人が多く定員を超すほど受験生居たが、こちらも綾波に頼んで時間を遅滞化させて受験の準備はしていた。
その甲斐有って春の合格発表に全員の名前が載っていた。
学費は公立並みの値段で生臭くなるが、あまりに怪しいので両親は別の高校と言い出し次期が遅すぎると切り返して、学費はいずれ払う奨学金で出す事になった。
その学校の新入式、一年生ばかりで一週間で離れるので仲良く出来るか心配と思う。
新入式が終り、教室に案内されカプセルがずらりと並んでいた。
トイレに行くように言われ、長い時間待ち終わると教室に戻り教師から更衣室に向かうように言われた。
更衣室に個人個人のプラグスーツがあり着替えて教室に戻る、女子の場合スタイルがわかるので男子は眺めるが、女子と男子の間に間仕切りがされ、カプセルに入るように指示されて入った。液体が注入され体がロックされてプラグスーツに接続機器が接続されて意識

を失う。
起きると教室にいて教科書、ノート、筆記用具が配られ、極普通の授業が始まる誰もが疑問が一杯でホームルーム中質問が多数ぶつけられた。
早い話しが十二時間で一年分の３６５倍の時間感覚になり十二時間後、要すれば一年後に帰宅になる。
極普通に授業が始まり昼休みは無く放課後までぶっ通し、放課後は三時になり、学生には覇気が無い、ゲームの世界で授業をぶっ通し受け寮に戻ろうとする生徒は多い。
その大多数に居たが、元気な仲間に連れられ冒険者ギルドに連れてこられた。
「いらっしゃいませ、入るなら夜間学校に行く事になりますよ」
「いくいく」
「もちろん」
「私もです」
「俺も行く事になるのだな」
「もちろんよ、私は銃士」
「私はマジシャン」
「私はヒーラー」
「前衛かよ、戦士という事で」
「ではこちらに各書類に名前を」
読むだけでうんざりするほどに長い書類の束に目を通し初期クラスに操縦士とあって二足歩行機らしく、使いようによっては強力な戦力になる全長３メートル程度でそれ程嵩張らないために初期クラスにした。
夜間学校で放課後の五時から十時までの五時間授業で、今日は説明を受けて帰寮した。
翌日の学校、放課後までぶっ通しで続けられ、放課後になると仲間に連れられて冒険者ギルドの夜間部に入って授業を受けた。

3ー2、次世代の教育

3ー2

半年が過ぎ、やっと夏休みだと思ったら長期休暇が与えられたが、殆どの生徒が部活動に所属し理由は他にする事が無いからで励んでいる。

冒険者の適正テストを合格し、やっと半人前で夏休みは長期間の学習と訓練にいそしんだ。

後期、夏休みが終って気の抜けた期間、毎日勉強ばかり、最近では実機に乗せて貰い動かせるようになった。

卒業までそうしていた。

第一期生卒業式で名前を呼ばれ、校長のところまで言って受け取りそれは現実の出来事。

最後に卒業パーティーを行ってみんな高校は卒業したが年齢的に幼いので、精神年齢は十八歳程度。全員に会社を立ち上げるので入らないかと誘い、今なら大学院まで学費を出すといったら飛びついた。

会社とは機械産業に位置し、今まで習ってきた機体の開発にいそしんだ。

学校のスポンサーになり、大学院まで揃えて貰った。

今度は大学院までで、六日間十二時間の休みがあって六日間で博士号を取った。

あだ名は社長だったが、実際は会長職で経済学を専攻した者の中で飛びっきり優秀な人物を社長に就任させ、適材適所を信条に配属

した、主に研究段階の二足歩行機だが、エルフから実用化の技術的な提供、及びノウハウの提供で顧問がついた。

新規に開発した次世代ＯＳが飛ぶように売れ、シュアをほぼ独占状態、元々機体のためＯＳだった為に政府は黙認し、作り上げられた二足歩行機のＡＬ（アーマードフレーム）を１０式戦車と戦わせて見た。

まず砲弾が当らない、接近されると機銃を撃つが敏捷性から当らない、背後に回りロックオンした結果。政府に納める防衛企業としてのし上がり、土木産業に使い、警察用にも作になった。
他の企業もライセンスを借り、独自に開発し始める。

ＡＬの現実での開発成功で乗りたがる者は増え、その為の教育機関（スポンサーの学校）を作り、乗りたがる者の為に法整備、操縦資格の国家免許を作ってもらった。

さすがに規格はまだなく、一機ずつ作るしかなく、生産能力を高めるために地元に工場を作り、政府に納める、零号、初号の二種類を工場に作る事になり、期間従業員を正社員にするために制度を設け、ゲーム学校で公開していい技術を教育機関に提供し、ゲームが学習してもらった。

成長を続ける暁メーカー、一年で株式二万パーセントの大躍進、おかげで株式の６０パーセントを持っていた内９パーセントを売り払い、数千億の富を得て、社員にボーナスとして配った。
そんな順風満帆に進んでいたが、ライバルの会社が現れ始め、大量生産から高品質で珍しいほどに次世代に移っている。

軍には陸海、警察には軍と同じように陸海に収め、土建産業にも影響を与え、顧客は増える一方。

休みになると週休二日で、仲間と共に国家免許を取って、ゲームの世界に入った。

今ではゲームの世界で勢力が群雄割拠し、国家免許を持ってないと乗れないＡＬは重要な戦力で、それを統括するギルドがある、名前はレイヴァン・ザ・アーク中立を保ち依頼を斡旋するギルドだ。

それに所属せず、一つの勢力に所属していた。

デスサイズ、名前は物騒だが、大陸の東北部を制圧し、徐々に拡大している勢力だ。

軍政の総司令官が政務を行い、各部署の将軍が補佐し、政務に長ける者を各都市に行政官として送り出す、その総司令官の直轄がＡＬ乗りのレイヴァンの指揮系統で、首都で行われるコロシアムでの戦いの成績が順位を持つ。

ゲームの互換性を持つＡＬと、互換性を持たないＡＬは、人気は前者の方が高く後者を使うものはまず居ない。

ランキングは１００位から、というのも、レイヴァンの数が丁度１００名の専属だからだ。

１００位でも同じような機体はまず無い、フロムの様なアイディアからメーカーは専属であろうと、中立であろうと金を払えば提供するので特に気にならない。

古参で優秀なレイヴァンのメルヴィが一位で十位以内に仲間たちはランキングされ俺は5位につけている、時々負けているために勝率は七割程度。

それでも5位につくのは負けても直ぐに勝つからだ、おかげで五本指の壁とも言われる。

スカイブルーのカラーリングから、飛べない鳥とも呼ばれる専属内の揶揄されたグループ

３メートル級から次世代の機体は大きくなり五メートル級、動力は電気を使い燃料電池でまかなわれている、
装甲も積層装甲で、内部は生物的な人工筋肉繊維を使ったために、今まで必要だった様々な補助器具がなくなり整備性が非常に高くなった、それに腕、脚部積載量、旋回速度が上がり、重量、消費電力が下がり、強力な動力、冷却装置が乗せられ、総合的なエネルギー供給、エネルギー容量、冷却性能が跳ね上がったが、扱い辛いという操縦性、安定性能が劇的に下がった。
それでも魅力的な機体ではあるが、根本的な問題を抱えている。
武装面が追いつかないのだ。
新商品も次々に公表されるが、全くのリメイク品で、本当に新しい武装は出てこない。
五メートル級は次第に主流になり、真に新しい武装が出ないままなったが、今までの３メートル級はＳＬ（リトルフレーム）と呼ばれるようになり、廃れていった。

ただ３メートル級のライセンスを買い取り、各勢力が開発に乗り出す時代になり、３メートル級のＳＬに俺達は乗りつづけた。
順位は下がり全員十位以内だが六位、七位、八位、九位の順。

その中でデスサイズは独自にＳＬの開発に成功したそれは規格から外れる勢力規格の登場、ゲームの歴史の中で初めての勢力規格というものが生まれたが、単独では無意味で互換性を捨てた機体開発を行い始めた。

それは失敗に終り、独自の互換性を持つものに切り替わった。

現在のＡＬから技術的にＳＬに応用し３メートル級の復活劇が始まる。

現在まで何とか十位以内に収まっていたが、勝率は平均６割に落ちていた。

開発が進み、勝率は平均七割に上った。

それが上がっていき八割にまで上って二位、三位、四位、五位の順位に上がった。

ＡＬと呼ばれるようになり、主流派を脅かすほどに躍進を遂げている。

大きな図体のＧＡＬ、小さなＡＬ（ジャイアントアーマードフレーム）は小回りが効き、戦い次第でＧＡＬを打倒す、さながら大人と子供の差があるが、それだけ小さいと当りにくいのも当然の事。

何よりも低コストで最新鋭が買えることだ。

おかげで腕前次第では大金が稼げるＡＬになった。

雪原の戦乙女騎士団領に侵攻する事になり、ＡＬ、ＧＡＬが侵攻作戦によりそれぞれの破壊工作地点をポイントされた。

「少し待て」

「何だ」

「何故メルヴィが首都ではなく我々が首都なのだ」

「後で説明する」

作戦説明が終り、総司令官のミラが新型機を見せる、始めてみる可変型ＡＬ、戦闘機状態と二足歩行状態が可変できるずれ物だ。

「うちの技術者達がお前達にと、早い話し小さいながらよくやり、そして勝っている事だ」

「実物は作れないだろうな」

「作る意味が無い、まあ高くて高射砲を避けられるなら」

ミラの顔に苦笑が浮かんだ、次に政治家の顔が浮かぶ。

「勢力として西方制圧は避けられない課題だ、南は激戦地だ、どうしても西方に向かわねば、
次は我々が敗れるのは必定、暫くは持つだろうが、勢力の機体を使ってもらうぞ」

「互換性はあるのか？」

「可変式を捨てたければ変えても良いぞ、これからは可変式の時代だ」

「自信あり気ね」

「この世界での技術は高く売れる、それを元に成功した企業もあるぐらいだ」

「疑問だが、軍事技術のライセンスはこの勢力に有るのか？」

「基本的には総司令官の許可が要るが、開発者から買い取っているので他は無い」

「そうか、戦闘機の訓練は受けていないが？」

「何、君達なら直ぐに馴染むと思うが？」

「全く違う、空を飛ぶならそれ相応の訓練がいる、しいて言うなら雛が飛べられるまで訓練をするように」

「相応の訓練がいるか、ということは全くの別物、新種だな」

「新種か、亜種かはこれからの開発次第だメルヴァなら分かって貰えるが」

「そういえば機械工学の博士号所持者だったな、専門化としてどうだ」

「まず、可変式のデータ、仕組み、素材、様々な応用技術を知らないので一般的には複雑から整備性の悪化、コスト面の増加、生産量の激減、操縦に癖があり、専用の訓練が必要になる、その場合の訓練から専門家が必要だ、つまり新種とみなされる成果を上げられるほどの性能と成果を出さなければ亜種として破棄される」

政治家としてこれから肝心な時に、自らアキレス腱を作ってしまい、逆に制圧を完了できれば専属のものに相応の訓練が施せる。

それはチャンスでもあり、リスクを負うことになる。

「それと武装面の問題もある」

「それは今後の開発課題だ」

「同時に鳴れる為の訓練とコロシアムの拡張、常々思うがツーマンセルを行った方がいい」

「参考意見にしよう、で乗るか？」

「訓練後、捕獲されたくないからな」

「実に残念だ、が参考にはなった」

「愛機で向かうが？」

「致し方有るまい、相手は専属なしだ、勢力として弱小の集まりだからレイヴァン・ザ・アークに依頼するだろう」

「毎度、倒すたびに引き抜きの依頼が舞い込むが、一々試さないでもらえるか」

「すまないな」

苦笑から微笑に変り、今度は俺達が苦笑するしかなかった。

「何故、専属についたかいつか聞きたくてな」

「簡単だ、デスサイズのやり方が気に入ったからだ、可能な限り被害を減らし、可能な限り国民、流民、難民、どれも受け入れ、サポートと自立を徹底する勢力だからだ」

「それはリーダーとしての意見かな？」

「俗に言う共通の認識だ、一度言ってみたかった」

「言わなかったら大人と思うが、本当に大学院を卒業したのか、済まないプライベートだったな」

「しっかり経歴に載っていたが」

「無名の大学だったが」

「実力は確かさ」

「なら研究員に」

「お断り、現場から離れる予定は無い」

「なら出撃を命じる、四機とも出撃せよ」

軽く敬礼し、執務室から出た。

他の指揮系統と違うが、一騎当千のレイヴァンに専属のために兵卒としても微妙ながら互いに敬礼して通るのが慣わしだ、兵卒に会うと互いに敬礼し通ったその後は静かな歩み。

ハンガーに到着し愛機を眺めた、三人は乗り込み、俺も乗り込んだ。

3－3平和な時代？

3－3平和な時代

愛機に乗り、超低空飛行で輸送機は首都方面に向かっている。
無用な電波を出さず、マッハ2に相当する速度で飛行する。
ただ使い捨ての為に無人機だ。
戦乙女騎士団の主な拠点は13箇所、一箇所に7機から8機、首都のみ四機。
各地で交戦の音が聞こえそうなほどに、アークから斡旋されたレイヴァンと専属が戦い、同時に多数の戦闘車両が砲火を交えている。
輸送機が首都に到着し四機を投下する頃に高射砲の砲弾を浴び爆発した。

「ウルフ1よりウルフ2，3，4各機拠点及び抗戦相手を潰せ」

「ウルフ2了解」

「ウルフ3了解」

「ウルフ4了解しました」

各機が歩行で遮蔽物を使いながら抵抗する者を倒していく、歩兵では有効な攻撃は無くRPGなどのロケットランチャーで攻撃するしかないが、現在の装甲を貫徹する事は無いために無力化されているに等しい。

首都の拠点を破壊しながら抵抗する車両を破壊してアウト組みを出す、さすがに死の痛みは無い為に安心できる。

《ランカーＡＬです、ナンバー１３位、スレイプニル、ＧＡＬに位置し、強力な火力で圧倒する火力主義の機体です、実弾、エネルギー弾共に効果的です》

「ＳＬこれで終わりだ」

「傭兵の花は戦場にあり、それを倒すのも兵の花なり」

「戯言を！」

両肩のミサイルランチャーから、幾条の白尾の軌道を残して橙色の明かりで、ＧＡＬに装甲を貫徹すると太陽光が眩むほどの大爆発を引き起こした。

《ランカーＡＬスレイプニル撃破、周囲にランカーＡＬ無し》

「何者？」

現れて数秒で倒れたＧＡＬを飛び越え、王城に向かう。

最終破壊拠点、歩兵や車両が大量にいてこれは難しいと判断して遠くから左手にあるグレネードランチャーから発射し壊滅させる、また密集するように集まるとプラズマライフルでプラズマを何度も撃ち出す、池などの水を瞬時に蒸発させる破壊力から大爆発を引き起こし、何度も撃ちこむことで降伏を促した。

《各拠点の制圧を完了、残る首都のみ、残るウルフ２，３，４が接近中》

相手から白旗が揚がるのを見た、後は制圧を続け、後続の歩兵や戦闘車両に後継ぎするまで待つのみ。

八時間後、輸送機が空港に着陸し、後続の師団が制圧の後継ぎをして、輸送機に乗り込み帰還した。

帰ってきたレイヴァンに待っていたのは戦闘機の教官でみっちり二年間鍛えられる事になった。

休暇の二日はそれで消え、翌日からは極普通の日常生活、俺はコネクションを利用して空軍の戦闘機のパイロット育成所に入った。

練習機ではなく最新鋭の２１式甲賀に乗り込み、早速帰らせるために手厚い歓迎を受けた。
しかし、仮想世界で二年間訓練を受けていたので、飲み込みが早く操縦は荒っぽいが筋はいいと教官が悔しそうに話した。

五日間はそうして終り、休暇は自宅に戻った。

プラグスーツを着てログインし、ヴァーチャルの世界にインした。

平日の十年間で勢力としては磐石なものになっており、東北部、大陸北の雪原も完全に統治されていた。

基本的に休日以外はやらないプレイヤーが多いためにそれほど被害は無く、二年間可変式の勢力規格品が大幅に増え、本格的に可変式が定着し始めた。

ランキングの成績が劇的に変化する中、一位のメルヴィ、それから五位までの俺達は変らないランキングを位置付けている。

戦闘機での空中戦が増え、地上で戦う事が減った当たり前だが、少し極端になったのも事実だ。

戦闘機の状態でミサイルを長距離、近距離、機銃を装備し、ミサイルを撃ち尽くしたら機銃で戦う、その時の腕前で実力の差がよくわかる、翼を被弾したら地上に降り遮蔽物を利用して戦う、がこの時も差が生まれる、俺達の場合戦闘機の状態で接近して機銃を浴びせ、二足歩行に変形して落下しながらプラズマライフルを撃ち出し、戦闘機状態に変化して離脱、ヒット&ウェイを繰り返す、もしくは狙撃銃でじわりじわりと削っていく。

時々白兵戦になるがその時も有効な可変式でもある。

時代を先取りした形になるが、南の国焔に増援を出す事が増え始め、負け始めている事がわかり、従属国になる代わりに規格を統一した。

規格はＧＡＬとＡＬの二足歩行のノーマルと可変式に分かれ、三種類に分かれることになる。
可変式の良いところは作戦後直ぐに離脱できる点は飛びぬけて生存率を高める。

ＧＡＬの点は重火器を大量に持てる点だ。

ＡＬノーマルの利点はコストパフォーマンスに優れ居ている点だ。

反面、可変式はジェット燃料が要り重量がかさむ上に被弾したらリスクも並みの非ではない。

ＧＡＬはコストの高さだ、トップランカーと戦って勝てば最新鋭が一つ変えるほどだ。

ＡＬノーマルの場合はもはやコストパフォーマンスの強みのみだ。勢力として五本指に入る勢力に台頭し、独自の機体を持つようになったデスサイズに破壊活動の工作が絶えない、反面専属になり始めるレイヴァンも増え始めた。

西方のレイフォンンス帝国と外交面で話し合い、和平及び不戦条約などの細かく外交的な要すれば同盟国を持った、それにより北部の戦いは終り、南方に進軍し、従属国を臣従国に変え、圧倒的な同盟力との戦力で大陸中央まで進出した。

各種メーカー、多数の南方諸国は同盟を組み、これ以上の戦乱は無意味と判断し南方諸国と外交を通じて勢力を国家として建国シミュレーンションに移行した。

軍事から民事に重点が置かれるが、専属は減らず可変式が主流になり、小国ほどメーカーに依存し、大国ほど独自の開発を進めた。

二年間が終り、日常に戻る、甲賀の訓練はついたが、今までの経験から楽々に操れ教官が舌を巻くほどに腕前が上がった。

「天才だな、コップの水も揺れない」

「ありがとうございます教官殿」

「自衛官でもないのに、これほどの腕前を持つとは驚きだ」

「教官殿それは差別用語です」

「甲賀をここまで操れるのも少ない上にこれほどの操縦テクニックは神業だ、よって本日を持って卒業とする」

「今までありがとうございました教官殿」

「着陸してからいえ」

上空を旋回して減速しながら滑走路に下りていく、その際も水がこぼれなかったらしく教官は惜しむように嘆いていた。

帰宅して会長としては暇でヴァーチャル学校などを通い、学びながら人脈を増やしていった。
実機テストを繰り返し、休みは新たに新設されたサーバーに移るために、デスサイズに事情を伝えて辞職した。

新設されたサーバーにログインすると最初から始まり、最初からの始まりだった。

数多くの新規プレイヤーが参入し、最初の町はビギナーで溢れ返っていた。

「うわ、最初って感じがするわ」

「本当ね、最初ね」

「土木作業に取り掛かるのが一番でしょう」

「そういうこったな」

サービスの課金制度で必要な物を取り揃え、あちらこちらで村おこしをしている中で物を貰う代わりに土木作業、建築作業に携わりメーカーが参入し、ＡＬを売り始めた。

メーカーは安曇重工業、真柄重工業、暁総合企業、如月社、アトラ社、ミレージュ社、バリアリーフ社が参入し、乱立状態でコスト的にも高いものから低いもの、幅広く商売をしていたが、

リアルマネーに関係は無いが技術的な挑戦は続いた。

レイヴァン・ザアークは作られず、それぞれのグループに分かれ活動していた。

現実の十二時間が過ぎ、翌日再開することになった。

翌日携帯にメールが届いており、綾波から御退屈なら素晴らしい用意がありますよと有ったために、一応用件を聞いて向かった。

時代は戦国時代織田信長が明智にやられる寸前で、ＡＬで粉砕した。

織田信長に気に入られ、織田信長が天下統一をするまで手を貸すことになった。

義務教育の必要性を訴え、男女平等を訴え、法律の必要性を訴えその代わりにＡＬの基本の基礎から人材育成して部品も作り出す機械も教え込んだ、この時代ではありえないほどに学習し僅か十年で作れるようになった。

後は普及だけとして織田信長に男女平等、教育の機会、初等部、中等部、高等部の義務教育を提案した、渋ったが承諾し代わりに鉄砲の改良を命じられた。

雷管を作り実包を作り、弾薬を作ったリボルバーを作り、施条銃。長い銃身を備えた銃で、威力・精度ともに拳銃をはるかに凌駕する。ライフルとは本来、銃身内に施された腔線（ライフリング）を意味しており、これは螺旋状の浅い溝で、銃身内で加速される弾丸に回転運動を加え、弾軸の安定を図り直進性を高める目的で施されている。

それを作って織田信長は天下統一後も家臣ではなく、家族として協力して欲しいと頼んだ。
あの織田信長の頼みに断れるはずも無く、承諾し、末っ子の兄弟となる。

ＡＬの義理の兄弟となった織田信長の家族は微妙だったが、別に当主になるわけでもないので豊臣秀吉の中国平定、九州平定、四国平定は長宗我部を懐柔して従わせ西方平定は終った。
義務教育を施し１０年、子供は賢くなり強くもなった。

織田信長に進言し各地で役人を派遣して村村の再開発、町々の再開発を提案した。

莫大な費用は今までの功績で帳消しにすることになり、再開発がはじまって鉄道を作った。

六年係りで開発を終え、ＡＬの応用からプロペラ機が作られ、これで東方は平定された。

織田信長６５歳の天下取りだった。

立憲君主制を訴え、織田信長が君主になり、朝廷、天皇は無視される形になった。

国内の再整備を行い蝦夷のアイヌ、南の琉球を対等に扱い国として認め、国内の工業が盛んになると大名を華族に迎え、元々居た家臣たちは織田家に仕えることになった。

自由経済を推し進め、家臣でも法を破った者は罰し、植民地支配に苦しむ東南アジアに水素電池式プロペラ機を送り、あっさりと植民地を解放して日本との同盟関係を結び、オーストラリアに移住者を募り地元のアボリジニーと戦わないで話し合いで終らせ、オーストラリアに暮らすようになった。

織田信長が統治する中信長が９８歳で大往生し、君主で居たのは３７年の天下人だった。

３７年間、義務教育を受けた子供達は各分野に流れ功績を立てることになった。

信長の死後武士による反乱が相次いだが、ＡＬの前に倒れ反乱は自然となくなった。

荒波が現れ次の時代へ移った。

あれから鎖国があり、仏教、神道、儒教等の東洋宗教が盛り返し欧州の植民地支配を東南アジアで防ぐことで全力だった。

もちろん日本が誇る陸海のＡＬ名前を変え志士号は、世界でも類を見ない最高機密の兵器で、何故英語が使われているか謎だった。

そして第二次世界大戦、同盟国と参戦するかどうかの瀬戸際だった。

立憲君主制で、長い年月織田家か統治していたものだから、日本人の人気は高く、日本に他する人気も強かった。

日本は多民族国家で日本連邦と開国した際改名し、同盟国も一員になり日本語は日本連邦の標準語で、長年戦をしなかったために経験が未不足で海外に武官を派遣して情報収集を集めていた。アメリカが何れ世界に君臨する事になることを伝えると、それは機密情報として国家の威信をかけて国力を高めていた、連邦は陸路での戦いは無いもの、一度海から領海侵犯をして攻め込んできた清、ロシア、アメリカ、欧州な陸海空の中で海空だけは戦闘経験を持っていた、その為に陸軍の予算は少なく海軍、空軍の予算は多めで、それが陸軍の不満だったが、織田信長の遺言で陸軍は防衛に専念すべしとあった、その結果陸軍の質は最悪の一言。

賢者の石で無能、酷い行いをした者を織田家に手紙で送りつけ、読まれるとその者たちは引退させられた、また共産主義者も解雇され、戦争が終るまでマークされる事になった。

様々な技術が進歩して、連邦ではアサルトライフルなどの近代装備が整えられていたが、陸軍の脆弱さに太平洋、インド洋を統治する連邦としては歴史が正しければソビエトが侵攻する事になる、１９４２年の事で、今は西暦１９３８年。

陸軍の脆弱さを補うために補助ＡＩを作り補う事にした。

会社を立ち上げ志士号の開発許可を貰い、賢者の石の知識で第二

次世界大戦後期に出る５０式志士号、陸海の強襲機を生産ラインに乗せた、連邦は採用し今まで国家機密だったものが、民間でも開発できるレベルに達したと判断され、技術的に可能なら採用する法律を制定した。高高度対応戦闘機を作り、それもまた採用された。

僅か二年でここまで上ったが、陸軍の質の悪さは改善しつつあった。大英帝国、フランス、スペインを同盟国として連合軍を結成した、その際変わった歴史ではあるが賢者の石から得た情報で大英帝国、フランス、スペイン、北欧のスゥーデン王国、デンマーク、フィランド、ノルウェー王国と連合軍に参加してもらい、さすがにドイツもソビエトもイタリアもアメリカも悔しがったが、日本からの武官、技術者の顧問を派遣して戦力の高上をはかり、フィンランド、デンマーク、ベルギー、フランスには陸海空の軍が派遣された。

１９４２年、ソビエトが痺れを切らしフィンランドに攻め込んだが、連合軍の前に粉砕され圧倒的な物量作戦を取ったが歯が立たず、あえなくスターリンはクーデターで処刑された。

１９４２年、ドイツ・イタリアも参戦が、連合軍の前にあえなく散った、国土を焦土変えられ１９４３年第二次世界大戦は一年戦争と呼ばれる戦争で幕をとじた。

唯一北アメリカのアメリカは中立を守り、結果として時代に取り残される形になった。

現代に戻るとエルフが日本と同盟関係にあり、歴史の教科書は様変わりしていた。

立憲君主制は残り日本人の人口は約五億人、８０億中の割合の為に、４０人に一人は日本人という計算になるアメリカ、ソビエトは

冷戦が出来ず、連合軍が勝ってからは植民地を解放しドイツは戦争を教訓に防衛軍にとどめていた、各地の紛争に連合軍が作った国連で多国籍軍を派遣しては、紛争は止めていた。

3－3平和な時代？（後書き）

すいません趣味です申し訳ない

４－０全然平和じゃない

正直賢者の石を持っている限り綾波は干渉しそうなのでとある厨二病全快の少年に渡した。少年は喜んでもらい、ご褒美に何かをプレゼントすると話すと知性を上げてくれといわれ、賢者の石で知恵の水を作り飲ませたそして綾波に紹介して綾波が残念そうに少年を送った。

「綾波飛鳥と申します」

もの凄い美人が挨拶する、和風美人でメタルスーツがよく似合う。

「これから参ります世界で何か必要なものは有りますか」

「賢者の石はずっと見られるの」

「ええ」

「なら頭を良くして欲しいな、後全体的にビジュアル系で」

「他にはございますか」

「貧乏は嫌だけど金持ちも嫌だ」

「中佐階級ですね」

「だと安心するかな」

「これから渡る世界にヴァーチャルゲーム機などはありませんが」

「残念だな」

「何かご予定は有りますか」

「マニアックな注文だけど戦車を作れる環境があったらいいな」

「さようですか、他にございますか」

「死にたくは無いから僕がひ孫まで見るまで生きて両親も同じように生きて、兄姉も同じように生きてくれると嬉しいな、あまり家庭的な環境じゃなかったから」

「何か勘違いしていますが、まあいいでしょう分子分解して他の惑星に移ります」

「え、転生とかチートとか今までの話の流れは・・・・・・」

遠くに飛ばされ、とある惑星の大陸で育った、戦争ばかりで嫌になるほど逃げ惑い、何とか無事に戦争は終り、その当主が姿を消した、そしたら腐敗が始まり、僕の住む雪原の町バッカスで定住して早や二年、戦車作りで名前を知られ、まだ幼い十二歳の子供でしかなく、生きるために身につけた狙撃の腕前と光の魔法で脅してきた連中は隠れて暗殺した。

王党派が蜂起し、今の腐敗政権よりマシだと確信して戦車を提供した、それを整備できる家のものも居て従軍整備員になった。

S―タンクの異名を取る第二世代の主力戦車で車高が低く固定砲

台に、エンジンが正面につき、水素電池で燃料は水、それを大量に生産しコストを押さえてセシル軍に提供した。

もちろん利益もあったわけで会社を創設し、次の新型戦車の生産を依頼された。

次はメルカバでS―タンクと共通点が有る何とかツーマンシステムに切り替え、搭乗員が増えたが大変人気が根強く大量に生産を依頼された。

戦争から二年、政権は崩壊し、首都の制圧を行いあちらこちらの王党派の勢力圏になり、ドワーフ、ゴブリン、リザートマンに囲まれ、現在は女王として君臨している。

それからは雪原の町で軍事メーカーを発展させ、第二首都と呼ばれるほどに発展させた。

僕の名前はルノ・ワルーロ、一代で軍事メーカーに発展させた功績者。

男兄弟で末っ子、兄達は戦車指揮官として従軍して戻ってきた。

久しぶりに会い戦車に付いて熱く語った。兄達はドン引きしていた。

戦車乗りの経験や実戦での話を聞いて、別の大陸から渡ってきた近代装備の軍と同盟を結ぶか否かで意見が割れており、元ノルルー王国の貴族派を一掃し同盟を結ぶ予定である事が伝えられ、軍事メーカーとして技術顧問団を派遣してくるらしく、興味新進で待っていた。

顧問団がバッカスを通るとき、無理を承知で軍事メーカーの商品を見てもらった。

そしたら目つきが変わり、色々と説明を求められ、答えられる範囲で答えた。

顧問団と仲良くなり、自社製品を買いたいと申し出た、それはセシル女王の許可が必要と話すと急ぎ出発した。

一ヵ月後、ホワイトファングに提供してもいいと通達がきて顧問団と技術交流をしてメルカバの百両生産を依頼された。

完全受注制で、対戦車ミサイル、対戦車ロケット、自走式対空砲、対空機銃、対空ミサイル、高射砲も受注を受け雇用者を増やして品質管理を徹底させ大きく軍事メーカーとして成長していった。

もはや軍事メーカーに僕が作るほど弱くは無くなりルノノー王国に仕官した。

いきなり准将から始まり、将軍扱い、慣れない軍の技術部で開発に専念した。

その功績が認められ実戦部隊の戦車師団を任されたが、それを断り、自走式対空砲師団に師団長として希望したら、あっさりと承諾された。

ドワーフの空軍機に頭を悩ませていた、ドワーフ方面に進軍し、作戦会議室で女性の様に華奢な事を馬鹿にされたが、整備員を引き抜きますよと脅したら黙った。

作戦で前方を引き受け、しんがりも引き受けた。

師団の兵の士気は低かった、幕僚達と話し合うため作戦説明を行った。

その時の顔はなんともいえない。

「頭が痛いですな」

「そうですね、経験から言わせれば対空自走砲部隊の必要性を一転させる事になるのは確実です」

「歩の無い戦争は無いってね」

「しかし豪勢ですな、対空自走砲、歩兵、工兵、補給部隊人員合わせて一万、三千名の補給他部隊及び工兵、歩兵が四千名、一千両の自走式対空砲ファミリー、初めての快挙になればよろしいのですが」

「とにかく準備は任せる、終ったら出撃だ」

翌日準備が終り、作戦説明になると各部隊は困惑の色を見せた、作戦の奇妙さに今までのようには行かないと。

ドワーフの領地の荒地に攻め込み、戦車部隊を後方において前方に出る。

ドワーフご自慢のアンドロイドの巨人兵、空軍機の通称一発屋。

「作戦はじめ」

横隊になり空軍機が接近し対戦車ミサイルを発射させるとフレアを発射し、対戦車ミサイルがフレアに食いつき爆発する、今度は９１式携帯型地対空ミサイルを発射して、その白尾を靡かせ空軍機に食い込み爆発していく、その結果空軍機を全滅させた。

アンドロイドは前進し対戦車ロケットのＲＰＧ－７で討ち取られていく、ドワーフの砲撃が聞こえ始めるとダミーの音源を発射して空軍機が居るように見せかけ、ドワーフの士気は崩壊したようで残ったアンドロイドも全滅させた。

ドワーフの拠点では白旗を揚げ、大将は逃げ出した。

首都に凱旋するとパレードが行われ、苦戦していたドワーフを倒した事で一気に人気が高まったのも事実で、准将に見合う働きをしたことで将軍達から嘗められる事は無かった。

報酬として師団に休暇を与え、これからの戦いにファミリーを改良し、両脇にフレア発射筒２連装、対空誘導弾を四連装、７・６２ミリ機銃、迫撃砲を二門の重装備と化した

ファミリー２式と名づけられ、改良が施されたが、重装備の結果コストが上がり、行動距離も下がり、加速力も下がり、速力も下がった挙句に装甲も複合装甲にしたために戦車並みの強靭さを得たが、エンジンの開発を実家のメーカーと共同で行い電気エンジンを改良して時速１００キロ、バック８０キロの高機動を可能とした、そのエンジン９１年式と呼ばれ、それは他の戦闘車両に搭載され、速い物で１５０キロを出すほどだ。

実家のメーカーが改良されたファミリー２式を改良し、ツーマンシステム、指揮車両のみ三名、複合装甲に積層装甲に改良し、照明

弾発射筒、フレア発射筒、デコイ発射筒、対空誘導弾、迫撃砲を二基ずつ装備させ、９１年式エンジンを搭載し、従来の７０口径４０?から３０?に変更し、即応弾３０発、積載弾２４０発の改良を見せ、搭乗員三名に限定したおかげで劇的にコストダウンが図られ、現在の師団の車両を下取りに提供する事になり千両の生産を行う事になった。

歩兵が乗るのは装甲車両でその生産も受け持って、実家は薄利多売ながら大儲けの状態だ。

千両の生産は一年係りで、空軍、海軍にも手を伸ばし研究されているらしい。

実家のメーカーでドワーフの空軍機をモデルに研究されていると聞くと

一年間の休暇の為に実家に戻り空軍機の開発に乗り出した。

プロペラ機を作る事にして王国とホワイトファングの技術者と合同で開発し三ヶ月で試作機が開発され、テストパイロットになり、何度も失敗を繰り返し単葉機の紫電が作られた。

練習機として一夜が作られ、空軍の本格的な育成が始まり、テストパイロットだったために空軍の訓練も受け予備として卒業した。

陸軍のファミリー二式改の、師団長として舞い戻り、五つの領土を奪われ、王国の危機でよく一年も使わずに居られたなと思う。

ロードリロード雪林に攻め込んだ、敵軍は前回同様同じように攻め込んだが、前の作戦を改良した輸送車両から一発屋の対戦車ミサ

イルを撃つと、歩兵からフレア発射があって食いつくと対空ミサイルが射出された、それが歩兵連隊で討ち取り、巨人兵をファミリー二式・改で撃ち倒して行く。
３０？の砲弾が食い込み、次々と大破していく。

「一機も逃すな全滅させろ」

「レーダーに反応空軍機の援軍のようです」

「歩兵に任せろ」

「歩兵連隊に通達空軍機が接近中、対応せよ」

《了解》

４２０両の自走式対空砲、１２２０名の人員及び指揮官の機甲旅団、一個個連隊の四千名
残りが工兵及び補給部隊に師団長指揮車両。

「空軍機全滅しましたが、さらに増援です」

「歩兵はもつか」

「歩兵連隊現状を報告せよ」

《了解》

何分か話、報告が済まされると次の増援には、自走式対空砲の真価を発揮する事とになる。

「作戦変更、歩兵が巨人兵を対応せよ、援護もする、増援の空軍機はファミリー二式改で対応せよ」

オペレーターが作戦の変更を説明し、激しい攻防が続き、弾が尽きかけて全滅した。

後方で待機していた補給及び工兵が進軍しているところだ。

「第二警戒態勢」

「歩兵連隊、機甲四個連隊第二警戒態勢」

「じゃ僕は降りるよ」

「了解しました」

副官のケビルー、幕僚長のチグーリが頷き、指揮車両から降りる。

体に悪いと思いながらも煙草を咥え、オイルライターで火をつけた。

五人の男女が近づいてきた、歩兵連隊長のアル、機甲連隊の四人は女性が二人の奇妙に相性の良い姉妹、残る二人が双子、とちらかといえば問題児を押し付けられた感じだ。

ただし全員指揮官としては最高のレベルで、経験も豊富だ。

その五人は僕をスルーして行くので。

「楽しい」

「これは師団長、てっきりオペレーターかと」

「敢えて無視したね、懲罰ものだよ」

「いやいや師団長が、そこまで狭量ではないと信じております」

「持ち場から離れるのは、感心しないな」

「安心してください、有能な副官がついておりますから」

「人のこと言えないから、食べに行って良いよ」

「了解」

後から副官達がやってきたが、「君達を信頼しているのだよ」と話して説き伏せ、そしてあの五人を止めるには、レベルが足りないと注意するに留める。

ひとまず一つを奪還した事には代わらないのだから。

４－０全然平和じゃない（後書き）

改変しました

4―1天下統一（前書き）

1万ＰＶ感謝、評価してくれた方ありがとうございます、感想なども受け付けていますのでそちらもよろしくお願いします

4―1天下統一

4―1

「師団長報告です、ドワーフが改良し一発屋から二発屋に改良、ロケットランチャーが効きません、一個小隊分の重火器で倒せましたそうです」

「ちょっと実家に戻る」

「逃げ出すのですか！？」

「馬鹿、これを作ったのは元をたどれば師団長だぞ、それに元技術部の主任でもあった」

「いやいい、改良するために戻るだけだ」

「安心しました」

「すみません馬鹿な事を言って」

「いいって」

輸送車両で移動して実家に到着すると、対戦車ロケットを改良し、重量が重くなったが、基本的に一発で倒せなければ無意味なので、改良したＲＰＧ―８（勝手に命名）の生産を依頼した。実家から戻ると、雪林に陣地が作られ一種の町の様子を匂わせている。

一ヶ月ほど待つと補給部隊が満載してつんできた。

今までの7は持ち帰らせ、8が基本になった。

「さあーて諸君ドワーフの連中に一泡吹かせよう」

《おおぉ―》

進軍し、次の拠点のトリートに進軍した、奪還作戦が行われているが、現在のところ対空関係の装備を生産中で全軍にいきわたっていないのが実情で三個戦車師団、一個歩兵師団が首都の南を奪還して多数の死傷者が出ている。

防衛するかと思えば、あっさりと後退し、町を奪還できた、ドワーフの生産工場があって、汚染対策などは全くといっていいほどしていない。

町の住民の話を聞き（ドワーフに働かされていた人間の人々、ドワーフの人々）

ドワーフは改良した物を温存し、反撃作戦に出る予定らしい。

生産工場からどのような技術が使われていたか理解し、それを元帥に報告した。

RPG―8から9に変更されて生産され、戦車の師団が援軍に来た。

「初めましてメルヴィ准将」

「初めましてルノ師団長」

「自慢話をする気はないですが、戦車師団の出る幕ではありませんよ」

「何後続の護衛ぐらいはできる」

「ありがとうございます」

「いや全軍で唯一被害なし、二個の場所を奪還した英雄だからな、おまけに兵器の改良をあっさり行う、技術部が、喉から手が出る程ほしがるのも頷ける」

「はぁ」

「あまり興味がないか、後続は任せておけ」

「ありがとうございますメルヴィ准将、今から進軍ですがよろしいですか」

「無論だ」

「行くぞ」

荒野の大地に進軍し、ドワーフもついに反撃作戦に出た。

二発屋、強化巨人兵を歩兵とファミリー二式改であっさりと全滅させ、本拠地に隣接した、それからの攻防戦は毎日のように起こり、激しい消耗戦になっていった。

ドワーフも空軍機に改良を加え二発屋改、強化巨人兵改と改良しそれでも攻防戦を続け、ついに来ない日が訪れた。

奪還作戦が始まってから半年になる。

女王に報告し、各方面から進軍することになった。

ドワーフの戦力は激減しており僕らを見ると、士気は崩落し無人機のみが残された。

首領は当に逃亡しておりドワーフから奪われた領土を奪還し、本拠地を降伏に追い込む形で、ドワーフとの戦争は幕を閉じた。

凱旋し、少将に昇格して部下には勲章と恩賞が与えられ、半年間の休暇が与えられた。

年上で戦友でもあるメルヴィ准将も、少将に昇格したそうで祝いのビールを贈った。

実家に戻り生産されている物の改良を加え、何度も繰り返し軽量で、コンパクトで、コストを抑えた歩兵装備、ファミリー三式・改、メルカバ三式・改、紫電三式・改等、ありとあらゆる面を大幅に躍進させ、それでいてコストはわずかに上がった程度。

当然のように生産が両陣営から依頼され、受注を受け町の郊外に工場などが作られた。

科学のみの純科学製品、魔法を織り交ぜた魔科学製品を作り出し、民間にも流せる物を作り十二の州で販売したので、ぼろ儲け。

十六歳で少将の僕には同じく少将のメルヴィ、兄達以外反感を買っており、逆恨みもいいところだが、それでよく兵同士が喧嘩する。

戦車師団４個、自走式対空砲師団２個、歩兵師団４個、空軍の防空師団一個の戦力。

約１１万名が兵となっている。

戦車師団1個、自走式対空砲師団1個、歩兵師団1個、防空師団のみ防衛に専念する。

7個師団が進行の師団だ。

「お呼びですか」

「はいルノ少将」

「嫌な予感がしますが、軍人ですので行くしかないですね」

「案内します」

休暇から戻って首都で部下と飲んでいたころだ、色々と問題児ぞろいだが嫌いではない。

王城の会議室で元帥など将官達が集まっていた。

「早速だがホワイトファングに派遣される将官を決めたい」

「自分が行きましょう」

「ふむ。今年で十六歳か、戦功も大きい、といってもほかの将軍には行ってほしいという者も居るな、しかし、ルノ将軍を手放すのはかなり難しい」

「ホワイトファングには知人も居ますし、問題ないかと」

「そこまで言うならギャラック将軍、メルヴィ将軍と一緒に派遣

されてくれ」

「何故俺なのですか」

「非常に簡単だよ、派閥のように二分された勢力から、二人ずつ派遣するわけだ」

「納得がいきません、こんな子供に任せられるとは思いません」

「ならギャラック少将と、メルヴィ少将で補えばいいそれで決まりだな」

お上手と言いたいところ、兄達は苦虫を噛み潰したようになり、逆恨みを持つ将軍も苦虫を噛み潰したことに、印象的ながら表情に出すなと言いたい。

「どうも本当に二つの派閥に分かれているようだ、この中で戦功から言えば三本指が派遣されることになるが、それでも争うか」

「いえ対空砲がないのが心配で」

「人材なら居る、ルノ少将には悪いが、双子の連隊長を准将に昇格させ自走式対空砲師団2個を作る」

「癖が強いですよ」

「安心しろ、すでに昇格済みだ」

元帥のセシル女王はよい人柄だが、どこか天然気味だ。

「会議をこれで終了させる、派遣は一ヵ月後までに準備を終え援軍に向かえ」

会議が終わり、そのまま師団のところに向かう。

補給大隊長、工兵連隊長、歩兵連隊長、機甲連隊長の7名を集め、准将に昇格する双子を盛大に祝った、副官は連れて行くらしく、新しい昇格でまた一般人のような平凡な男性に見えるが、愚連隊とも呼ばれる連隊でまともなはずもない。

もう一人は女性で無意味に色気を振りまいているかのような薄着、よくこの寒さでその衣装がつけられるかと思うほど、個性的だ。

「正式に許可はおりているこれからは大佐だ、退職金が違うぞ」

「はあ、ありがとうございますルノ少将」

「よろしくね、少将」

「名前と階級を、いやいい後で」

「はあ、ウィラー中佐であります」

「コリン中佐よ」

「うちって軍人気質なところあまりないね」

「美少女のような少年将軍だからではないでしょうか」

副官のケブリーに裏拳を食らわせた、本音を言えば偶にはまとも

な奴は居ないのかと疑問に思う。

ある意味この師団で死者が出なかったのが、納得できる、無理はせず兵を大切にしていた。

だからほかの将軍から嫌われるのもまた納得できる、部下を大切にするあまり進軍しなかったと、だから自分達にしわ寄せが来たと。

しかしあの激戦を一人も欠けることは無く、生き抜いたことは最大の賛辞に値する。

「欠けた指揮官は新米から使ったほうがいいな、人事は任せる」

「了解しました」

「了解」

「そこですよ、将軍のよいところは」

「よくわからないが」

「専門家は専門分野の経験者を無碍に扱わない、現に二人を信頼して人事を任せたのですから、ウィラー中佐はどう思います」

「はあ、正攻法の専門家ですね、偶には奇襲などもよいかと」

「私としてはぶっ放せね」

「面白い人材が多い、奇襲ね、まあ偶には使ってみるか」

「勘弁してくれよ、奇襲で被害を受けるのは俺たちなんだぜ」

「必ずしも歩兵が奇襲をする必要も無いでしょう」

歩兵連隊長は一安心と嘆息する、何故嘆息なのかは疑問だ。

「じゃ解散だ」

《了解》

各隊も最新鋭の車両に装備になり、指揮車両も最新鋭のものになり、各種武装がついたばかりだ。

二週間で準備が終わり、メルヴィ少将、ギャッラック少将の師団と共に援軍に向かった。

ホワイトファングは南を皇国軍、東をオーク、リザートマンに囲まれ、防衛で消耗戦を送っていたが、空軍が善戦し一進一退攻防戦を維持していた。

草原地帯と砂漠地帯、荒地地帯の状況下で、ホワイトファングとルノノー王国との共同作戦で北街道、東荒野、北ゴースト、中央交易地を占領下においてゴブリンを一掃することが決まっていた。

「現在の状況を説明します、ホワイトファングが皇国軍、ゴブリン軍、リザート同盟戦況は一進一退の攻防戦を日夜続けており、消耗も激しいです」

大陸地図の西ノルルー、南エスポート地域が移されている。

「私的な発言だが、空軍はどうしたのか」

「空軍は善戦しております、今のところ死者は出ていません」

「それは良かった、同期のものが居るからつい」

「いえ」

「空軍は海軍攻撃隊と奮闘しスコア１００以上のエースも居ます」

「何より、どうせダテの事だろう」

「ご存知のとおりです」

「それより会議を進ませてくれ」

「４個師団で前進しノルルー軍と合流することです」

「でその師団は」

「野戦砲師団です、後方から野戦砲で破壊します」

「破壊ばかりだな」

「戦争とはそんなものです、それともゴブリンに統治されたいですか」

「それはお断りだ」

「なら戦うしかありません」

「解りあえるなら当に解決した問題か」

「そういうことです」

「なら　戦うしかない」

作戦は簡単だ、一直線に制圧していけばいい単純な作戦だけに特に策も考えず、打ち合わせをした後に解散した。

一直線に直進するだけなのでゴブリンの騎士団のような戦士団はあまりにも楽勝でウィラーが単純作業ですねというほど歯ごたえの無い戦いだった。

コブリンのボスは戦車に突撃し１２０ミリライフル砲で即死、ゴブリンは隔離され雪林に追いやられた、理由はその異常なまでの繁殖力で、それを抑えるために非情な政策が採られた。
次はリザート同盟でそれは外交的に話し合い友邦として独立を認め公国からの独立を認め、技術援助で劇的に成長していった。

派遣は解除され、元に戻ると軍閥に女王が上手く纏めていた。

南東方面陸軍少将メルナ軍の援軍になった。

メルナ准将のところにつくと蒼き狼の木が生えている場所まで制圧したが、兵を二分するしかない状況までは良かったらしい、逃げ出したドワーフの技術者が南方の３勢力に雇われ、対空能力が歩兵しかないために、制圧した個所の防衛で全力、海からも攻撃を受け、消耗しつつあった。

「そんなに技術が広まるものですか」

「現に広まったのだ、少将には指揮下に入ってもらえないか」

「普通なら断りますが、その方が合理的でしょう」

「済まない」

「で僕はどうすれば」

「将軍の場合は一つの防衛地点の旅団を率いてもらいたい」

「その前に再編ですね」

「そうなるな、師団の中で話し合ってくれ」

「では失礼します」

准将の事務室から出て、師団の尉官から会議を始めた、反対する意見も多かったが、正面切った戦いには戦車の機甲部隊が有効な打撃を持ち、現在の師団と併せて指揮するほうが遥かに効率的だと説き伏せ、何度も話し合いを設けて意見を纏め、二週間が経過したが、纏められたおかげで再編は上手くいった。

ただ下士官、兵卒は困惑気味だったのが、反省点だ。

二つの師団で二万人、防衛に五千人、師団長が最高司令官になり旅団長が現場の指揮官だ。

任された拠点は大樹海の前の平原、通称森の出入り口。

混成旅団で戦車連隊、自走式対空砲連隊、歩兵連隊、工兵連隊、通信連隊。

防衛に専念するより攻め込むことを、作戦を出して許可を求めた。

許可され、拠点は予備の旅団が維持する事になった。

道を作る際に工兵連隊の護衛に歩兵大隊、戦車メルカバ三個大隊、自走式対空砲ファミリー二式・改二個大隊、司令部で事務処理の毎日、師団長時代前方に出た突撃馬鹿と言われたが、戦闘車両の発想を覆す歩兵併用作戦でドワーフを倒し統治下に置いた、今は地道に道路を作る日々、時折襲ってくる空軍機は無人機で、一発屋のところは変わりなく、フレアで回避して対空誘導弾ジャベリンで撃ち落されている。

圧倒的に不利な勢力の二つに、降伏勧告を求めた。

もちろん一発屋を捕獲して手紙を貼り付けてから。

二つの勢力は降伏した、これ以上森を壊させたいため。

後はノルルー王国の外交次第で旅団は活動を止め、もう一つの防衛拠点に向かった。

歩兵、工兵は輸送車両に乗せて運び、旅団長としてタクニ王国との攻防拠点で援軍に来た。

沼地の国がタクニ王国で、魔法が広まった王国でもあり、そこで苦戦するのは魔法のクリスタルを使った魔力爆発、消耗品の様に使

い、科学も取り入れ、技術的に厳しい戦局を迎えているのは事実で、消耗を覚悟して突っ込んでも全領地を抑えるのは不可能。

旅団長から援軍は感謝されたが、攻め込むのは不可能と判断して、師団長の許可を貰い一旦首都に戻った。

王国は旧貴族が貴族の復活を求めていたが、現代では不要と判断し、取り合わない、私にも話が着たが取り合わず、王宮に入った。

豪華絢爛の物は無く、質の良い調度品で囲われていたが、質素な感じでもあった。

執務室に通され、現在は二十歳の女王で政治、軍事、外交面で非凡な才覚を見せる才色兼備の女性だ、ホワイトファングの最高司令官と良い仲と聞くが、それは今は関係ない。

「入れ」

「失礼します」

部屋に入って敬礼して、タクニ王国との攻防戦の報告をした後、とある計画を提案した。

計画が承認されて一年、成果を上げるために歩兵師団を率いて援軍に向かった。

歩兵の装備は対空ミサイル、対戦車ロケットを二人に分割し、一万人の内補給部隊は工兵と共に道路を作り始めた、タクニ王国から攻められると歩兵の重火器で応戦し撃退、それを繰り返し一つの軍事拠点にたどり着いた戦車で城壁を破壊すると降伏し、その魔法と

科学の技術者を本国に送った。

成果を上げられたのは沼地を作り、そこで訓練するホワイトファングの教官から学んだ。

おかげで首都まで道を作り降伏に追いやった。

陸軍の活躍は終り、防衛拠点の再整備などに追われていた。

内海制圧にホワイトファング、ノルルー王国、リザート民主国と実家で共同開発していた、潜水艦、駆逐艦、巡洋艦、空母、輸送艦を完成させ、着工に取り掛かっている。

タクニから得た魔法技術をどう扱うか現在は研究段階、幅広く民間も含めて研究が行われているらしい。

ついにホワイトファングがジョージア海を制圧し、島に上陸して上陸した島で皇帝を倒し、公国は降伏し、内海の制圧が終わり、戦争は終わった。

実家に戻り、今までの活躍から資産を分割してその資産を全軍の兵士にボーナスとして出した。

実家は一社の寡占状態はよろしくないと陸海空軍の合計九社に別れ、さらに子会社を持ち、時代は復興へとつき走っていった。

またあの和風美女が出てきて、「つまらない」の一言で意識は途絶えた。

4―1天下統一（後書き）

申し訳ありません、まだ戦記書きたくて書きます

4―2―1

中一、中学に上がって入学式を終えた後両親の事情で地元に戻ることになった。
地元に戻り、久しぶりに蔵を掃除していたなかなかの縦鏡を見つけ自室にもって行きいつでもトリップ可能のように道具を揃え鏡の前で着替えていた。
気づけばどこまでも白い世界、ついにトリップかと思ったら冴えない風貌の男性が現れ。

「済まない痛い格好をしないでくれ、代わりに能力を与えてやる」
「世界を行き来できる能力、帰るのはこの土地」

男はさも嫌そうな顔になり顰めた。

「送ってやる」

「うおー」

送られた場所は変な個室だった。

「おお召喚が成功したぞ、これで俺も国王だ」

いかにも悪といった感じの風貌の青年、何も言わすに捕まえて元の世界に戻った。

「貴様、何をする」

「おいコラ、舐めんなお前は此処で暮らすのさ」

「何だと帰せ」

「嫌だね」

ぶん殴って失神させ、近くの交番に連れて行った浮浪者として、保護した警察に礼を言われ、複雑な気分で戻った。

当然のように鏡の前に立ち着替えを繰り返した。

同じように白い世界に気づけば居て、冴えない風貌の青年が土下座して。

「すみません、二度と悪戯はしません」

「おう、気に入った世界に案内してくれ、後誰とでも話せること、世界地図」

「分かりました」

連れて行かれたのが知りもしない世界、不満があればまた繰り返せばいいと思い、混沌の森から王都に入った。

なかなかの町並みで、また混沌の森に戻り自宅の自室に戻った。

鏡は倉庫に戻し、丁重に箱詰めした。

台所から香辛料を頂き、それをもって異世界に旅だった。

香辛料を王都に持って行き、換金してあっさりと金貨三百枚が手に入った、銀行に半分を預け、残りを持って路地裏で戻った。

親に金貨を見せると、何も言わず説教され、親が蔵から取り出したと思い親が換金して、それを元に事業を行ない、不動産業で一山当てるらしい。

半分預けて正解だった。

「入学式よ」

特に何と無く入学式の学校に向かった。

「分かっているよ」

別に異世界で暮らすのだとは思わない、異世界に行くのは土日だ。

入学式で昔の幼馴染の築地久遠、久慈アキロ、遠阪美鶴、酒井袖に再会した。

築地は筋骨隆々の大柄な体格、久慈は細いながら頭が良い、東坂は相変わらず騒がしい健康スポーツ少女、酒井は小柄な勉強家。

俺の場合Ｐ３Ｐの主人公のような外見だ。

小五から居なかった時間を埋めるように五名で遊んだ。

一年が過ぎ中二、中高一貫の為に勉強しなくていいわけではないが、時々昔を思い出す戦乱だった頃だ。

四人からは大人びた凡人と言われたが、顔は良いほうだと反論した。

水素電池の特許を取り、戦車の内部機関の部品の特許を取り、資産は親が管理し、月十万の小遣い、それを時々香辛料、甘味料等を買い揃え異世界に渡り換金し、貴金属買い取ります、その看板の店で換金して、口座を作り貯蓄した。

何度も繰り返していたので一年で数億が溜まった。

両親の事業は上手く行き、殆どが俺の資金が元になった。

サッカリンを大量に買い、異世界に渡る。

少年行商人として知られているほうで、今度は王家に品を献上することになった。

国王に面会し献上して、何か望みは無いかと言われると無いと答え、それが国王に喜ばれ後景人になった。

春休みで商いを興し、あちらこちらに関係が持たれ、国王が後景人なら安心だと商人がやってきた、商談を何度も済ませ一ヶ月で何十億の大金を得た。

それを使い男女別の大学を作り、学問の研究に貢献した。

今で貯めていた翻訳した書物を大学に納め、必ず一つを複写することを義務付けた。

学校の授業はＶＲＭＭＯに変わり、一日八時間の休み時間を入れ

て四時間、午後を挟んで四時間、放課後は五時から、八時間で二十四時間、体育の日は纏めてやる。

その体育の日は、学生からアスリートの日々、と呼ばれるほどハード。

毎月丸一日を使うために、体育祭などは無い、代わりに文化祭、学園祭と行事が目白押し。

一年で中学生活は終わり、次の一年で高等部の生活も終わる。

義務教育内で学園生活は終わり、四人はそれぞれの進路を選び、俺も大学部で防衛大学に入り、機甲科の特殊車両科通称ＫＡ（ケイ・アーマード）を選び、製造過程、整備過程、操縦過程の三つをこなし四年で卒業し、防衛産業のテストパイロットになった。

１９歳で入社してオールマイティに働けるが、半年で不渡りを出し倒産。

地元に戻ると、両親の事業はすでに成功しているので、大きくなる順風満帆だった。

4―2、異世界で立身出世

あまった資金はリスク分散し、その内一千万を手元に残して、そこからは割愛しよう。

現在地は混沌の森というトリップした世界、しかも精霊が相当嫌がる行き来可能な能力が与えられたので、脱ニートを大志に抱き、買い集めたリックサックに有りっ丈の香辛料から甘味料を持って、精霊から、もう現れないでください、といわれた際に渡された世界地図、その世界地図で調べた近くの王国、立身出世をやる気はないが、商売はやる気が出る。

その王都で旅人ほど汚れず、かといって清潔でもない格好の、行商人の青年を呼び止める者は居なかった。

街中に入ると痴話喧嘩で盛り上がっている男女を見つけ、声をかけこんな場所で惚気ないでくださいと言ったら、二人は周囲を見て慌てて青年の腕を握り近くの宿屋兼酒場に連れ込まれた。

「すみません、周りが見えなくなって喧嘩になるとですが」

「すまない、ちょっとした行き違いだ、決して惚気ているわけではないのだ」

「一般的には惚気ているようにしか見えないのですが、それは置いて甘い水を飲みませんか」

「みるからに行商人のようだが、商品か」

「ええ、ただほんの一部です」

「そうか、水を頼む三人分な」

店員が注文を受け、その後水を運んできた、予想した青年の通り金を支払った。

リュックサックから小瓶に入ったサッカリンを僅かに入れた、それをまず自分が飲み、本当に甘くなっていることに軽く驚いた。

「甘い水です」
「それだけで甘くなるのか？」
「飲めば分かります」

二人は半信半疑で飲み、一口で驚愕の表情。

「その粉は砂糖なのか」
「砂糖を凝縮して作ったものだそうです」
「そうか、それなら商売が成り立つな」
「そうですか、その文字が読めないのです、教えてもらえませんか」
「そうですね二杯分で手を打ちましょう」
「安くないか」
「高く売ろうとすると仇になるものですよ」
「なるほど勉強になります」

それからもう一杯二人に振る舞い、私塾を開いているモンクの女性のところに、やっかいになりながら勉強したまだ１９というとかなり驚かれ年下と思われていたらしい。

一ヶ月で丸暗記してかなり難しい応用も理解したために、問題を解いてお礼にサッカリンの数十杯分をビンに入れ替えて渡した。

「今までありがとうございました」
「よろしいのですか、相当の金額になりますが」
「今までの寝泊りから食事まで何から何までしてもらいましたから、そのお礼です、他の方々にも飲ませてやってください、糖分は

取りすぎると病気になりますが、僅かなら栄養になりますから」
「ありがとう」
「いえ」

私塾も閑散としており今時流行らないのだろうが、最低限の礼儀として渡した、それでも少量、ただ青年が思うほど安くもない量になる、私塾の屋敷が改装をできるほどだ。

「それと商いの話なのですが、立ち会ってもらえませんか」
「ここの相場が分からないと言うわけか」
「そうなります」
「貴方ほど報酬を弾む教え子も居ない上に教養もある、よかろう」

彼女はモンクのアノヒ、彼女の恋人が騎士のナノル、この王国では一般人から騎士の試験を受けて入った現代風に言えばノンキャリ。

「まず通貨は青銅、銅貨、銀貨、金貨、それぞれ百を合わせれば換金できるが相場にもよる、まず仲のよい両替商を作るべきだ、幸い知り合いに居るので案内しよう、それでもち金は」
「財布は荷物と交換しました」
「なるほど、遠路から来たみたいだから言っておくが、あまり期待しないでくれ」

青年の名前は貴地鳳、この世界と現代を行き来する強くはないが反側的な能力の持ち主。
精霊の加護でどの言語も分かる、文字は無理でも話は出来る。

大商会と掛け合い、香辛料を小売して資金を得た、今度はナノルが現れ、物件を探していたと話、案内すると庭園の見事な邸宅を案内された。

「いい邸宅だろ、お前さんぐらいなら買えるかなと思ったわけだ」
「素晴らしい、これはお買い得だ」
「ただ値段もすごいぞ、金貨千枚だ」
「貴方ね、もう少し値切らなかったの」
「庭園に手をつけないなら半額だと」
「分かる、金貨５００枚、貴方が稼げる」
「いや何とかなるでしょう」
「案でもあるの」
「荷物をなるべく小分けして売りさばく」
「小分けのほうが貴重に見えるしな」
「さあ行きましょう」

あちらこちらの商会で小分けした香辛料を売りさばき、初日で金貨五十枚。
ケチらないで高めの宿屋に泊まり、警備に休暇を貰ったナノルが付いた。
それが要らないほどに豪商の様な人々が泊まっていた、ナノルと持ってきた日本酒を飲み交わし、酒に強い二人は一本で自重してナノルが警備に付き、機知は眠りに付いた。
そこにモンクのアノヒが来てノックする、本来警備についているなら起きるが、疲れと酒で寝つき、アノヒはため息を盛大について警備に立つ、彼女が騒がない様子から予想したとおりの結果だったらしい。

翌日ナノルに起こされ、貴地が起きる、荷物をチェックして盗まれたものはない、代わりにきついお説教が待っていた。

「この馬鹿たれが、警護が寝てどうする、それでも騎士か」
「言い訳できない」

「今回は盗まれなかったので、それとこちらの落ち度でもありますし」
「ほうどんなものかな」
「一人で飲むのは何とも子心苦しかったのですが、二人ならと思いまして無理やり付き合ってもらいました」
「ふむ、まっ私が警護に付いたから良いもの、休暇返上で商いを手伝えよ、私は寝る」
「分かった」
「次はないぞ」
「了解」
「入って来い、次酒の匂いがしたら」
「分かっている」
「将来尻に敷かれますね」
「言い返せないことがつらい」

アノヒとナノルの将来は貴地との出会いで大きく変化する、それも劇薬のように。

「ひとまずどうする」
「大きな商会は一通り回ったし、小さな商会」
「妥当なところだ」

小規模な商会は山ほどあり、一日で五十枚の金貨を稼いだ、それを嗅ぎ付けて襲ってきた盗賊一味を、さすがに騎士なだけあるナノルがばっさりと一太刀で切り伏せて衛兵に引き渡した。

「ナノル物凄く強いほう」
「それ程でもないが、強い者なら良く知っている、アノヒだ」
「将来喧嘩しないことを強く勧めるよ」
「女に拳は振るわない、騎士の腕は安くないのだ」

「いい性格をしているよ、だけど襲われたらさすがに反撃したほうがいいよ、アノヒの為に」
「それは、そうだな伊達に商人じゃないな」
「それは関係ないかと」

一日が終わりかけ、夕食を三人で取った。

「うーん、食生活が貧しいですね」
「文句言うな、安くて美味くて量がある、文句は高級店で吐け」
「しかし牛が安いんですね」
「ああ牛が農民に使われている、潰すより販売して金に買えるのさ」
「私のところは馬でしたけど」
「国違えば考えも違うが、馬ね、どれだけ豊かな国なんだよ」
「代わりに牛が高級でした」
「分け分からん国だ」

食べ終わり、今日は昨夜と待ったホテルで、ナノルが警備に付き私は眠った。
早寝早起き、なれないことはするものではないとつくづく思う。

早く起きたせいで宿屋の食堂は大賑わいで、二人と食卓に着くが眠気が取れない。
ナノルも徹夜で、二人して眠り、午後起き、すっかり眠気が取れ、落ち着いて商売が出来る。
商いの方針を部屋で行うことになった。

「現在金貨１００枚で、まだまだ余裕がある」
「騎士の給料月一枚なんだがな」

哀愁に満ちた瞳で朧気で青年を見る。

「それは関係ない、今後はどうするかだ小規模な小売で二日で稼いだ、順調に行けば十日で終わるが、その前に商いの残りが出来るかどうかだ」

「なるほど商いの続きが出来るか、答えは出来る、何故なら余りまくっているからだ」

「だと思ったよ」

「さて商いの方針は小売で販売する」

「なら知られていない商会だな」

今度は無名の商会に行く、小売でもその商会からすれば大チャンス到来だ、何とか多く買い取ろうと必死に食い下がるが、しつこいならもう二度とこないと話すと、次をお待ちしていなすと言われた。

そんなこんなで三日目は何とか目標の五十枚を集めた。

ホテルの代金を支払ったのが、アノヒだと思い出し、お礼に小瓶の酒を渡した。

二人で交代して警備に当たり、俺は遅くで眠りに付いた。

翌日の朝食の時間に間に合い食べて、よくよく考えると風呂に入っていないのでアノヒに荷物を預け、風呂に入りナノルも入った、二人で話しながら商いの話をして、他の商人は聞き耳を立てていたが、特に重要なことは話していないので気にせず、風呂から上がり着替え、ナノルと同レベルという感じで引き分けに終わった。

今度はアノヒが入り、なかなか時間をかけて出てきた、モンクだけあって鍛えられ、ついつい苦笑してしまうことにナノルが少しだけ胸を見ていた。

「鼻の下を伸ばすと伸されるぞ」

「おおう、男としてのつい」
「男性は気づかないが、女性は気づく、ちなみに嘘も」
「女の勘か」
「そういうこと」
「さて行くぞ」

確認を済ませ、荷物を持ち相変わらず行商人風だが、また大商会に小売して、色々と質問されたが、財布と交換した物と答えるに留めた。

それで引き下がる商人はそれほど居ないが、大商人は分かったようで付き合いが長くなるなら根掘り葉掘り聞くのは不利になると判断したようで、三人が昼食を挟んで得た資金は、今回は多く金貨七十枚だった。

翌日からも順調に集め小売で七十枚、次からは百枚になる。
その次の日に貴族が直接買いたいと申し出、どう考えても踏み倒しそうなので丁重に断り、逆に来なかった貴族で良識者と評判な貴族に少し多めで販売してみる。
それで百枚が集まり、商いが順調に進み、千枚を目指して毎日良識者の貴族と小売して稼いでいた。
その噂を聞きつけ様々な人々が群がったが、騎士とモンクに守られ何とか無事に過ごせた。
二人から剣術と拳法を習い、毎日練習するようになってからハマリ、商いをせずにひたすら鍛えていた、素質はあったようで、幼児の頃から高校生まで剣道をしていたことが良かったらしい。
噂を聞きつけて様々な人々が、色々なを物を売りつけに来たが、断り王都で暮らすようになって二ヶ月目が過ぎようとしていたときドラゴンスレイヤーというグラムの剣を買いませんかと言われた値段は金貨百枚、惜しくもなかったし、ドラゴンスレイヤーならいいこともあるかなと思い貴地は買ってしまった。

後から二人に説教されて一応帯剣する為のベルトを買い、帯剣した。

「あと少しで千枚なのに」
「まあまあどのみち庭園には手をつけないので買いに行きますか」
「あれだけ立派な庭園なら文句はないな」
「なら行くぞ」

王都の高級住宅街、その一角にある見た目も素晴らしい庭園の邸宅に到着し、庭師が出てきた。

「騎士様ですか、五百枚は集まりましたか」
「ああ」
「で」

金貨五百枚の袋を置いた、庭師は数え嘆息して済まなそうにこちらを見た。

「実を言うと追い払う方便で、持ち主は国王陛下です」
「そうかそれなら致し方ない、似たような物件は無いか」
「探しておきましょう一週間後おいでください」

三人は肩を落とし、庭師は済まなそうに頭を下げていた。
宿屋で食事を取り空元気で稽古を付けてもらい、腕前はぎりぎりで半人前、それでも上達が早いほうだ。
それから一週間稽古を続け、ついにナノルから一本が取れた。

「こりゃ驚いたその木刀で一本取られるとは」
「教える人が熱心だったからでしょう」

「ハハ、今回は祝杯でも挙げよう、次はもっと厳しくなるぞ」
「是非もなし」
「おうおう、商人の商売に剣術は要らないが、襲われたとき反撃できれば良いな」
「そうそう」
「じゃ飲みますか」

その日ニートだった青年は、一回り人として成長したかのようだった。
その日から青年に覇気が宿った。

4―3、ブラックドラゴン

次の日庭師の所に向かう頃に騎士に緊急招集がかかって集められた、心配になり城の近くで荷物を持ちながらアノヒと一緒に待っていた、ナノルが出てきて笑ってドラゴン退治をすることになったと話す、体長に合わせて欲しいと頼むと了解し、会ってみた甲冑の上からは分からないが、金貨百枚を渡し、「道中遅くなることも多いですね」と話した。
隊長は簡素に「何故」と尋ねた、「友人の生死がかかわっているからです」と話した
隊長は「そうか」と簡素に答えるに留まった。

荷物と大半の金をアノヒに預け、馬の良し悪しが分からないがよい馬を頼み金を見せると二頭名馬ですよと紹介し、二頭を買って馬具を買い揃え、噂のドラゴンを倒しに走った。

黒竜が眼前の全身漆黒の巨竜は、その鱗の色が如実に示すとおり黒竜であった。猛毒を吐く獰悪な種類の竜である。しかも掲げた頭部までの高さは、優に家屋の二倍以上の高さがあった。
頭頂までの高さと後方にくねる尾までの竜の全長は１８メートル、黒き邪竜の凛列した、その永劫の氷河の様な目が、彼らの視線と正面で衝突する。視線だけで身体を恐慌させる力を感じる程だ。

ウァァァァァァァ！

青年の獅子吼が広い空間に木霊する、それが戦闘の叫びになり、俺が右側に走る、遅れて傭兵のルシが左側に走る、手榴弾を投擲し爆風の中、黒竜は死の吐息の目標を分散させられたことに攻撃を迷った。

疾風となる貴地が腰の帯からを三本引き抜き、投擲を行う、それを無視した山肌の岩盤を紙細工の如くに破砕しながら、竜がその黒鱗で鎧われた巨躯を乗り出す。

だがそれは誤りだった、リミテッド反応の手榴弾が高速燃焼し、竜は痛みから咆哮を上げる、焦げた臭いが周囲の遺跡を満たす。

それだけで大地が鳴動し、大質量の生物が放つ、高圧の圧力が岩山の空気を張りつめる、同時に巨樹を何本も捩ったような筋肉の束の左前脚が、俺に向かっていき横薙ぎに振り払われた！

破壊槌の破壊力と風の速度を併せ持った、その超質量の一撃を貴地は落雷の速度で体を屈めやり過ごす。槍の如き竜の長爪が装甲の表面を掠めて走り、青い火花と悲鳴を上げさせる。

刹那後、たわめた体を伸ばし、貴地が竜の懐へと弾丸の低空跳躍を決行する。

その腕に持っている刀を竜の軸足、城の大広間の支柱を思わせる右前足に叩き込む！その刀身が竜の高硬度の鱗を断ち割り、肉を切り裂き、赤黒い血が迸る。竜が苦悶の咆吼をあげる。

薙ぎ払った左足を返して俺を叩き潰そうとするが小癪な人族は後方に素早く飛び退きかわす。

貴地が持っている反りは１０。刀身の長さは９００ミリ、鍔はなく代わりに金属製のプレートがはめ込まれ厚みがあり刃が鍔のところで外側に反れており受け流せるようになっている、柄が金属で作られ握りが革製のモノで滑り止めされている、竜の黒血が禍々しく濡れて光っている

竜は巨躯を後方に退き、胸腔を急激に膨張、死の吐息を吐くべく大量呼気吸入を行う体勢に入る！

竜はようやく気づいた。

眼前の人族が単なる獲物ではなく、偉大な竜族たる自分を傷つける力を持っていることに。

竜の喉元がせりあがり、まさに死の息吹を放射しようとした刹那。

腰帯から投擲し、閃光手榴が爆光を夜の闇に光らせ、竜の目を潰す黒竜。瞬時に吐息を無造作に吐き出す。

竜は瞬間的に臭いから位置を探り当てたのだ。

両目を失う激痛に細めた竜の瞳に、瞋恚の炎が色を強める。

竜が溜めていた息吹を吐く。

吐息の猛毒の本流だ。それを浴びれば生きながら溶解するという地獄の苦痛の、初にして最後の体験しながら絶命するだろう。

濃い死の本流が熱烈に貴地を抱擁する寸前、猛禽類の強襲、速度で走り込んだ傭兵が貴地を抱え、横転する。

白煙幕に紛れ青年と傭兵はさらに転がり、竜の強酸のさらなる追撃をかわす。

白煙が周囲に一帯を多いつくし、風景すら一変させていく竜の超破壊力。

完全にかわせず、青年と傭兵は背中や足に猛毒の飛沫を浴び、姿勢を崩す。

惨状の大地に這いつくばる貴地を一別して傭兵は竜へと向かって再度の疾走を行う。

竜はその長大な尾、地上最大の鞭をしならせ、傭兵が寸前までいた地面に叩きつけて視界を塞ぐほどの爆煙を起こす。

轟音で大気がびりびりと震える。

貴地は唸る尾をかいくぐり、さらに右前足を失った、竜の死角、右方へと疾駆する。

彼らが狙うのは竜の最大の急所たる逆鱗が存在する喉しかない。

飛翔しようと長身をたわめた俺に竜が軽い吐息を吐く、それでも地上の生物なら装甲なしでは

確実に即死する神経ガスだ。それを貴地が受け止める神経ガスから貴地を守ったのは防護マスクで呼吸器官系が破壊されず、ただ口から血反吐が零れる、だが戦闘能力はある攻撃の、ドラゴンキラーのグラムで黒竜の失われた前足の鱗に斬りつける。一撃を天に届かんとする竜の脳天にたたき込む。竜は首を後方に反らせ、必殺の刃をかわす。

このまま貴地が着地すれば、竜の追撃で無惨に引き裂かれるのは容易に想像ができた。

そこに傭兵が跳躍し一瞬で位置を変える、身軽な二人の着地点が

外れ、竜の尾が低重音を響かせ地面に振り下ろされた。破壊できない一撃であるが、質量からの衝撃はすさまじく床の石版が破砕する、同時にグラムが降られる尾を断ち切る。

どす黒い鮮血が俺に降り注ぐ、時間は稼いだ。

着地点の左前足首に回転したグラムの渾身の刀身がめり込ませるっ！

苦痛の咆哮をあげる竜が吹き飛んだ右前足で貴地を薙ぎ払おうとする。右前足の長さが足りないため貴地の顔面を掠める。貴地が後方に飛びすさり、額から流れる血を舌先で楽しむ貴地の横顔が見えた。

毒ガスの浴び負傷した絶望的状況だったが、貴地は隣に覆われた鎧の背中は全く闘志を失っていなかった。

怒れる巨竜は間合いの遠い尾と吐息を主体に隙のない必勝の戦法で貴地と傭兵を襲う。

岩壁は倒壊し岩畳が腐食する。この世の終演が来たかのような、竜の破壊の力を、貴地は受け傭兵は受け流してかわすが、そう長くは耐えられない。

それに竜が気づき、猛毒の吐息を吐こうと首をたわめる。

青年が投擲したグラムが竜の下顎を半端断ち割るように突き刺さり、死の吐息の放射を強制阻止する。

爆ぜる自らの猛毒で顔面を灼いた竜は激昂し、俺を喰い殺すべく

上下顎を開き強襲する。だが竜は戦法を誤った、瞑府の底で後悔することになる、竜に概念があれば理解できる話だ。

繋がっている刀身と腰の違法改造スタンガンに貴地がボタンを押す途端に刀身を伝導体として、竜の体内に電撃が迸らせる。

殺戮の電子の奔流は頭部脳髄から首、胴体、内臓を灼き、沸騰させながら、左前足から地面へと駆け抜けていった。

驚異的な体力も脳髄自体が沸騰すれば全身の神経網と内臓を灼かれては発動すら許さない。身体中の穴から白煙と沸騰した汚泥のような黒血を零して大きく痙攣する竜。

貴地と傭兵の長い間の戦い、何重にも重ね続いたお互いの連携は自然にとれている。

死に瀕する黒き竜。

だが、熱で白濁した竜が苦痛と凶気に見開かれたかと思うと、貴地をその巨顎でかみ殺そうと爛れた首を疾走させる。

竜の瞑府への道連れに選ばれた俺は真正面から突進を受け止めた。即死の激突衝撃のはずだったが、傭兵は今日何度目かの新鮮な驚き驚異的な戦慄を味わう。

貴地は風の速度で襲いくる巨竜の、その下顎部に刺さった自らの刀の長柄を握り両手に握り止めていた、しかし死に狂う竜の頭部の勢いは止まらず、衝撃で俺が空中に浮く。

「がぁぁぁぁぁぁぁ！」

鬼神の咆哮とともに岩肌を破砕して最大剛力で剣身に回す。鱗と筋肉と骨を焼き切り砕き地から天への弩雷となり虚空へと走り抜ける、黒竜の頭部はそのまま半分切断され血が、星が煌めく夜空に中空へと舞い飛び、岩壁の一つへと激突しそして黒い血の痕を引きながら落ちていった。鼓膜が痛くなるような沈黙と静謐。

「黒竜よ、襲い掛かる者以外は殺さないでくれ」

「人の子よ、殺さぬのか」

老人と童が話すような声で話す。

「迫害を受けたのは分かる、安らかに逃げてくれ」

「人の子よ、我とて万能ではない、もう息絶える」

「グラムを抜いたから癒せるはずだ」

竜の瞳に疑問が沸くが、試しに再生を行う、一瞬で再生され、竜は苦笑のような顔で体を震わせ血を振り払った、その血が二人にかかり、竜のような力が漲る。

「分かった襲うものはなるべく穏便に押し払うか、危険なら倒そう、自らは襲わぬ、さらば人の子らよ」

黒竜が蝙蝠の羽に酷似した翼を羽ばたかせ、飛び去っていった。

「やれやれ報酬にしては大きいな」

「どのみち長くいられない、どうする」

「行商人に戻るよ、あんたは」

「傭兵から騎士にでもなってみるよ」

「そいつはいい、ここに留まり竜を追い払ったといえば良いだろう、その内騎士団が来る」

「そうするか、じゃ短いような長いような旅だった、どこかであったら飲もう」

「飲か、じゃ」

馬に跨り貴地は去っていく、その後騎士団が到着し夥しい血痕から竜が追い払われたと分かり、それを追い払った傭兵を騎士に取り立て、もう一人は去ったと話しそれ以上は言わなかった。

4―4―1

4―4―1

誰もが不況のあおりで職を失い、開業医だった久慈アキロは資金繰りに行き詰まり破産した、築地久遠は上官命令を無視したために、軍法会議で資格剥奪。

東坂美鶴は経営学を学んだが職が無かった、酒井袖は弁護士資格を持ったが、地元に戻ってきた。

幼馴染を集め秘密を打ち明け、四名とも半信半疑だったが、一旦信じ、異世界にわたった。

「いやマジがよ」
「どうやら本当のようだ」
「そうみたいね」
「っというより洒落にならないんですけど」
「一旦戻るぞ」
「衣類か？」
「そういう事」

戻りアルフォーニア王国の衣類に着替え、王都へはあっさりと通れ。

そのま酒場に入った、好奇の目に見られるが東洋人は珍しいから致し方ない。

「ひとまず説明だな」

一通り説明し、質問に答え、結果としてアノヒの私塾に通わせた、中学一年の頃から足を運んでいるので、かなりの知識が翻訳されている。

一ヵ月後、四人は文字を覚え辞書を引きながら単語を読めた。

貴地はさほど苦労せず覚えたのは先王の頃から居たからだ。

商いはそれなりに行なっていたが、大学に行くので一旦商いを閉めたこともあり、最近商売を再開したばかりだ。

イスラム圏とヨーロッパ圏を足して割ったような感じの国ではあるが、日本文化が浸透しており、書物の翻訳が好影響を及ぼしている、もう7年になるが、生身で大学の授業を聞くのは久しぶりで、ＫＡが試作されているが現在は暗中模索で実用化には至っていないが、近代的な陸海空軍が設置され、どれもまだ発展途上。

大学の魔法科を通っている五名で、壮年の男性が教鞭を取っており、挨拶代わりに禁呪を教えられた。

一般的に枯れた枝のような外見をイメージするが、さすが鍛えられており筋骨隆々でモンクに似ている。

魔法は廃れていたが、教授が教えることで何とか確保しているのが現状。

大学で研究されているＫＡに参加して、魔法の技術からプログラム操作が可能になった。

ただし一応、一応とは動かす稼働時間が僅か一分、何の意味も無い。

肝心なＯＳ技術が無いのだ、それを無くして動かすほうが無謀といえる。

その無謀な試みに時々手伝いこちらの素材を学んだ。

一年が過ぎようとしていた頃、誰かに見られている気がして、斜光を利用して注意深く観察した。どうもかなりの美人さんらしい。

腰に届く艶やかな艶のある黒髪、顔は惹き付け飾らない素顔の美麗、優美な眉から瞳は黒曜石の輝きで大きく、高めの鼻梁、濡れた花弁のような小さな口唇、首から上だけを見るなら満月の輝きような艶やかさと抱擁感のある極上の美女。

では首から下はモデルのような痩身ではない、見事な砂時計体型の発育が進みすぎた、完熟する前の目を見張るような悩殺的で感動的な容姿だ。故に蠱惑的な妖女と言う言葉が似合う。

それに対して貴地は平凡な日本人に長身に、少し影の入った女子から可愛いと言われる愛嬌の有る顔立ち、ただ眼光が鋭く、逞しい肉体をしている。

その視線は何故か遠い故郷を思い起こす様な双眸だったのが気がかり。

声を掛けようと近寄ると臆することも無く、堂々とした威厳の有る立ち振る舞いだ。

「失礼ミス、どこかでお会いしましたか、その双眸はそんな気が

して」

女性はニコリともせず。

「ミスター、本当に覚えていないのか」

返された言葉に俺は混乱したが、商人時代から培った冷静さで混乱を収束させ。

「ミス、失礼ですが覚えておりません、強いて言うなら珍しい黒髪、黒目ですね」

「ストレート、キチッチ、ツキジー、クジア、ミツル、ソデ」

「もしかしてストレート？」

「そうじゃ、他の者も気付いておらぬ、寂しいのぅ」

「そりゃ済まなかった、みんなを集めるよ」

「待っておる」

他の四人を集めると懐かしい面々が揃い、学食で久しぶりに騒いだ。

懐かしく夜遅くまで騒ぎ、解散した。全寮制で禁呪の研究をして男子は眠りに付いた。

女子は集まり酒盛りして眠りに付いた。

一年が過ぎ、全員が二十歳になると、一旦二ヶ月の春休みを利用して日本に帰ることになった。

その前にナノルとアノヒと一緒に食べながら飲む、資金について話し合い、一介の騎士ながら献上するなら問題ないとして国王に、サッカリンを全部献上することが決まった。

庭師から案内された物件を買い、見劣りするがなかなかの良作で気に入って金貨二百枚を即金で支払い、庭師に頼み使用人の募集を依頼した。

「すみませんね、他に当てもなくて」

「いえ、騙した様なものですし、これぐらいなら引き受けます」

「ありがとうございます」

お辞儀すると庭師は朗らかに笑い、「任せてください」と言って道を戻っていった。

王宮に上がるのに必要な衣類を買い揃え、一ヶ月の付け焼きで覚えた作法、どうもモンクはこの国では侍女になったりする、所謂女性専用の教育機関兼人材派遣の元らしい。

王宮に謁見が認められてから上がり、青年からすれば世界遺産の一つに数えたほうが適切な、豪華絢爛な所だった。

国王の前に膝を付き、名前を口にする。

「面を上げよ」

顔を上げると厳しい顔には童子のように悪戯小僧のような、遊び心がある碧眼をしていた。

「聞けば僅かな粉でコップ一杯を甘くする砂糖を献上したいとか、偽りはないか」

「はいありません」

「ならばそなたが飲んでも問題は無いな」

「はい」

侍女から水が満たされたコップを渡され、用意していた小瓶から一つまみ取り出しコップに入れる、そして飲む、少し多かったようで子供向けの激甘になっていた。

「少し多かったようです」

「ほう、そんなに甘くなるか、ならその小瓶から僅かに入れればよいのだな」

「はい、ただ献上する品は持っては居ますがこの小瓶より大きい袋です」

「ふむ、おぬしも商人ならいかほどの価値があると思う」

「大商人の財産を数十倍にした価値です」

「その通り、いやそれ以上じゃ、じゃってそれを献上してどうする」

「は？よく意味が分かりませんが」

「遥々東方から来たようだが、面白い行商人も居たようじゃ、何の目論見も無く献上するとは、面白いワシが後景人になろう、お主の様な者なら悪行もせぬだろう」

「ありがとうございます、ついでに後景人とはなんでしょうか」

ついに堪えきれず国王は爆笑し、侍女に献上するサッカリンを全部渡した。

「潔いの、面白く言えば国王が保証人じゃて」

「それは止めていたほうがよろしいのでは」

「いやいや、お主が大商人になる事を期待しておるぞ」

「はい、それでは」

「うむ」

最後に頭を下げ、立ってから胸に手を当ててお辞儀して横に向かって歩いていく、そこから帰る。

それからは国王が後景人となるので安心して商いが出来るとして様々な商人が商談を持ちかけた、様々な商売を通じて人脈を広げ、経験して大商会を無名の商会を吸収して作り、そして王国でも指折りの商いをするまでになった僅か三ヶ月の出来事、何度も旅立っては荷馬車一杯の香辛料や甘味料を持ち込み、それを売りさばき、そ

して一定の金貨が溜まるとインゴットに作り、金の延べ棒を持ってきた荷馬車に入れてまた出て行く、それを繰り返す。

薄利多売、即金、即物で商いを広げ、王都で知らないものは居ない程に立身出世した。

短期間でこれ程早く成長した商会も無く、歴史的に非常に稀有な例に挙げられる。

剣士としての腕前も高く、襲い掛かった賊をあっさりと返り討ちにして、それでいて生かして衛兵に引き渡す程に強かった。

青年は成長したが、日本に戻れば庭に金塊を埋めていた。

そんな日々を過ごして集まった金をナノルとアノヒに渡し結婚資金にしてくれと大金を置いていく始末、そして飢饉が起こった地域に直ぐに物資を即運び、国王から養子にしたいと言わせるほどに善良な面が強く出ていた。

悪い面と言えばツケが利かないこと。

貧乏な市民や王国内の国民に毎月僅かではあるが苦労金、酒を送った。

そんな中、商いを任せられる人物が現れ、よく商売のことを理解した理解者で学者でもある、その人物に任せ、絆のある人々に一度里帰りをしてきますと言って馬で国から出て行った。

とある県の片田舎、金の延べ棒を通販で買っていたアタッシュケースに詰め込んで、貴金属買い取りますという業者に持ち込んだ、

金のインゴットに意匠がされているので、埋まっていた金塊ですと話して、明らかに不審だが、かといって盗難届けの物でもないので交渉は成立し数百億の大金に変わった。

それをリスク分散と警備員を雇い塀で取り囲み、敷地内を自由に動けるのは貴地のみになった。

そんなこんなで一週間が過ぎ、地元に作った歴史館に相応の資金を流して、それから作られた道具等を覚え、また甘味料、香辛料、またその種を買い集め数千万を使い屋敷の倉庫に収め、通帳、印鑑、カード、残った警備費を十年間分支払い。

仲間と共にあちらに荷物を運び、何度も往復して運び終え、それを樽に入れて隠し、現地で雇った儀者に護衛の傭兵で国境まで運び、そこまでは順調だった。

「これは貴地殿」

兵士達の顔に安堵の表情と、隊長の真剣な顔で事態が変化したことが分かった。

「あれから国王陛下が崩御して、国王陛下の弟のデイリッヒ公、長男のアルワシ王子が王位を争い、共倒れになって今は王女様が女王になられて良かったのですが、内乱で国土は酷い荒れようですよ」

「やれやれと言ったところですね、隊商を組んできたので通れますか」

「通れますが、よろしいのですか」

「国王陛下には良くしてもらいましたし、縁のある人々も居ますし、第二の故郷のような国ですし、死んだらそれまでのことと思ってください、もちろん剣の腕前は立つほうですから」

「分かりましたどうぞお通りください」

隊商を組んで王都に付いたのは一月後で、その間あれ程豊かな緑が見えていた土地が焼けていたりして、戦争の悲惨さを分かった。

商会は残っていたが、国民に出せるほど利益は減っていた。

隊商の荷物を降ろし、隊商に金を払い、ついでに隊商の荷馬車等を与えた。

「またよろしく」

「励みなよ」

「もちろんですよ」

荷を頑丈な倉庫に保存した、その半分を王家に送るために隊商に運ばしたようで、貴地の縁ある人々が手厚く持て成す事もしばしばあって、時間をかけて通り、王城についた。

王城に着くとかつての傭兵は騎士団長まで出世して、拳をぶつけ明日にでも飲もうということになった。

王宮は帰ってきた貴地を懐かしそうに挨拶し、遅くなりましたと謝ってたていった。

ナノルとアノヒが待っていた二人とも近衛の格好をしており貴地がにこりと笑い。

「ご結婚おめでとう」

「遅いぞ、まああれだ、まさか騎士団長と知り合いとは思わなかったぞ」

「遅いですよ、王女がお待ちです、かなり待ちわびていたようですよ」

「はて王女に面会したことは無かったと思うが」

「ええ私達も不思議ですが、ネトゲと言えば」

「はい？」

「それぐらいしか言伝を預かっていないので急いで」

「ちなみに王女はお幾つ」

「２０です」

「よく今まで未婚だったね」

「前国王が、政略結婚などもっての他、恋愛結婚のほうが遥かに良い、と言い残しまして」

「話が良く見えないが、察するに恋愛相手を探しているのか」

「いえ子供の頃に決めたそうです」

「そりゃまた気長な話で」

「ネトゲって何です」

「俺に言われても」

「ひとまず個室に案内せよとの仰せなので案内します、こちらに」

「分かった」

歩きながら三人は昔話にふけり、今は出世して伯爵家として領地を貰いというが、内乱で両者に加担したものは没落し、中立を維持した王女の下で働いている。

領地が王家直轄領になり内乱で、荒れた国の復興が今の希望だそうだと話している。

部屋にノックして入れと有った、貴地だけが通され驚くのはその美貌。

「懐かしいの、貴地」

独り言のように

「異世界に放り出されそれを助けて家にかくまったじゃろ、夏の暑い日にアイスをくれたり、食事をくれたりまったくの庶民だったが教養ある親御さんじゃった、他にもクーラーとか、ミネラルウォーターとか、一番驚いたのは車かのう」

一旦言葉を切りよく相手を見るように貴地を見ていた。

貴地は大混乱の真っ最中、誰も知らないはずの名詞を知っていたり、次々と出てくる現代の品々。

「混乱しているようじゃな異世界からの来訪者の貴地よ、そしてドラゴンバスター」

商人の経験から冷静さを取り戻し、彼女が十年前保護して夏休みを過ごした聡明な女の子、しかし、変わりすぎて全くの別人のようだ。

「成長したねストレート」

「そうじゃな、この指輪が何よりの証拠じゃ」

指から外された指輪、どこにでも売っているような玩具の指輪だが、このヨーロッパ圏とイスラム圏を足して割った王国にはない。

着ている物も長袖のローブのようなもの、彼女ははち切れんばかりの胸を真ん中から大きく開いている、本人の趣味か、それとも別か。

「どう思う」

「お主が魔法で行き来していることか」

「はぐらかすには少し義理もあるな、で昔の馴染みが何の用だ」

「うむ、結婚して欲しい」

「はて？身分の壁があると思うが」

「父上の遺言じゃ、もし王家に一人しか残って無ければ貴地を王家に入れよとな」

「あの方は立派だった」

「お主もな、飢饉が起きれば直ぐに財産を使い王国より先に窮地を助けた、誰もが出来ることではないが、お主はそうした、昔から優しい居面があったが甘いの」

「それが性分でな」

「でどうする一日ほど考えても良いが」

「そうだな受け入れよう」

そうすると彼女は破顔一笑の笑顔、念願の婚約から結婚になった、彼女にとってかけがいのない存在だったようだ。

「そういえばお互い名乗ってなかったな、アルベルタ・デ・フィーナ、フィーナでよい」

「貴地鳳、よろしくなフィーナ」

「よろしくなオオトリ」

「婿入りだが商人を続けても良いぞ」

「つまり貢げ、か」

「何かと物入りでな」

「さすがに王族が商いは出来ないだろう、整理してくる、それは隊商の荷物がある婿入り道具と思ってくれ」

「う、うむ」

「綺麗になったなフィーナ」

それにフィーナは頬を朱に染め、嬉しそうに上機嫌で送り出した。

部屋から出ると二人から矢継ぎ早に質問され、答えられる範囲で答えた。

「しかし、商いを他人に任すか」

「そういう男が居る、なかなかの逸材でな」

「そうか、何と無くだが、王女に気に入れたのか」

「色々有る、驚くことも多いだろうが、いずれな、今度は恩返しが出来そうだ」

「どちらかというと俺達が返す番なんだが」

「どちらかではなく、はっきりとして返す番だ」

「さてと久しぶりに商会に戻るか」

「思いっきり話題を変えるなよ」

「まま、気にせず」

王宮から去り、隊商には王家に献上してくれと話した。

かなり価値のある物だと知っていても盗みを働くことは無かった。

大商人の商会が集まる場所の目立つ一角で立ち止まり、ユーカサという者に任せていた人物に全て任せると話、全権を委ねた。

残った者にボーナスを与え、騎士団長と飲み会を開いた。

二ヶ月前のことから始まり内乱の中王女に仕え、落ち延びてきた没落貴族や兵士を束ね、現在の騎士団を創設した、あまり戦力が無かったために攻められるとは無いが、両者が共倒れした時は飽きれてものが言えなかったと話、杯を交わす中騎士団に入らないかという誘いがあったが、明日にでも分かると話、煙に巻いた貴地。

飲み会の後春を売る店に入り、脱童貞に成功した。

自宅の前で分かれ、家で風呂に入り、使用人に溜まっていた給与を割り増しして払い、眠りに付いた。

仲間は学生寮に戻っていた

4―5、新婚生活

翌日、上質なベッドから起き上がり、風呂に入り朝食を一人で食べた。

王宮から使者が来て、シンデレラ・マンとでも言おうか、王宮に着くなり王女から厚く持て成され、翌日結婚式を挙げた。

招待された貴族、騎士、商人等は驚いていた、そして明かされたドラゴンバスターの証、騎士団長が話し、誰もが驚いた。

「やれやれ結婚式は肩がこるな」
「そういうなオオトリ」
「婿養子なんだから文句は言えないか」
「で何かしたいことはあるか」
「特に無いかな国政のことは分からないし、フィーナに任せるよ、今までやって来たのだから大丈夫だろう」
「私としては国政に参加してもらいたいが」
「そうかな?これでも商人だよ」
「ふむ。実を言うと女王になりたい、そして子供が欲しい」
「色々と持ってきたいので大きな部屋はないか」
「そうだな、個室なら幾らでもある適当に案内してやってくれ」
「はい姫様」
「爺も相変わらず変わらないな」
「申し訳ありません姫様」
「まあいいさ、案内してもらえれば文句はないが、前国王の部屋は使いたくない、あの方には良くしてもらった」
「承りました国王陛下」

二人で苦笑するしかない頑固な老人は後宮に案内して、誰も使っていなかった大きな部屋を見せた、人目で気に入り、そこに決め、人払いを頼んで半日かけて電気製品などを持ち込み、太陽光発電の為に屋上に上りパネルを貼り付けた。

パソコンに可能な限り情報を収め、貴地の妻、女王に役立てるために買い込んだ様々な書物をパソコンのメモ帳に翻訳していた。

さすがに季節は夏、昼休みが置かれ朝、五時から十一時までの仕事時間でそれから四時間は休み時間だ。

「おう」

「冷えておるな、やはり文明の違いは此処にある電化製品など、この世界広し、といえどここにしかあるまい」

といって冷蔵庫から、冷えた高級なコーヒー豆を使ったアイスティーを飲んでいる。

「全部飲むなよ、俺の分もあるのだから」

「であった、で何をしている」

「異世界の知識を翻訳している」

「まことか！それは素晴らしい、あちらの知識があればこの国も変わる」

「さすがに全部とはいかないけどね」

「十分だ、あちらは数百年進んでいるからな」

「完成したら読むと良いよ」

「こちらの文字に自動的に翻訳できる装置とか無いのか」

「無いね、そもそも異世界にいくこと事態が架空の話で、言ったとしても言葉がまず分からない、文字も」

「お主は確かアノヒに学んだそうだな」

「俗に言う私塾って奴」

「お主が作った大学にも知識を増やしたいの」

「根気よく頑張るさ」

「所で他のものはどうしている」

「さあな、生まれ育った街から、高卒後、連絡は取れなかったし、今となってはどうし居るやら」

「であちらの資産はどれくらいある」

「こちらでいう大商人の財産並」

「ひとまず、制度を教えてもらえないか」

「分かった」

日本の制度、他にも良い制度があれば教えた、その制度に至るまでの経緯はパソコンからプリントアウトして読ませながら読み聞かせた。

その日は初夜の前までひたすら読ませながら、読み聞かせていた。翌日朝の朝食を二人で食べる、その間も読み聞かせ、食事が済むと貴地を連れて宰相の爺のところに向かった。

相変わらず姫様、国王陛下の二つで頑固さには敬意が払えるほどだ。

様々な制度を説明し、宰相は微かに驚きながらも感嘆のため息を出した。

「国王陛下の国はよほど進んでおりますな」

「あまりいい国ではなかったけどね、偉い人が言ったけど、物は豊かだ、心が貧しいと」

「そういうこともあるでしょう、分かりました改革といきましょう、もちろん国王陛下にも」

「いや他に重要な仕事がある、私と爺でする」

「それほど重要なことならいたし方ありませんな」

「ご老体、どうか許してもらえませんか」

「許すも何も、貴方が着てからこの国は変わり始めました、女性

の大学、貧しいものに毎月送った金や酒、正直自分が情けなりました、若き頃の大志を忘れ、宮廷の権謀術数に溺れておりました、弱き者に豊かな生活を考えていたのに」

「ならば今から始めればよいではないですか、今なら邪魔立てするものはおりません」

「そういってもらえると嬉しいですな、さて姫様、予算との格闘です」

「相変わらず家計簿は大変そうだ、そういえば国債は知っているかな」

「コクサイですか」

「国の借金だ、十年間で返すための利子付きの債権だ」

「なるほどお国にはありましたか」

「二千年前からある」

「歴史ある国ですな、今頃その借金で頭を抱えているでしょうが」

「今の政治には不可欠だよ、ご老体も慎重に」

「ええ」

「じゃ篭るわ」

「成るべく早くな」

「ああ」

貴地は後宮に戻り翻訳の作業、フィーナは宰相とどれを優先するかでもめていた。

どの国にも予算は必要な分がある、貴地が齎した財宝に等しい様々な甘味料、香辛料とその種に苗、それらは未だ手付かずの状態。

夜まで頑張り、今度は読み聞かせ、そんな日々を一週間ほど続けていた。

「ふう、さすがに軍事までは行けませんな」

「さすがに債権を購入しないのか」

「新しい発想ですし何より、この王家が全力で支払ったとしても十年は長すぎるようで」

「なら五年で利子は半分」

「そうですな、その辺が妥当でしょう」

執務室でノックされ、近衛隊長に出世したナノルが入ってきた。

「失礼します。国王陛下に面会を求めている者が居りますが」

「用件は」

「魔法使いと名乗っております」

「魔法使いか、夫に会う前に会おう」

「ハッ」

「所でナノル隊長、軍隊をどう考える」

「は？」

「まだ日が浅いか後で騎士団長を呼んでくれ」

「了解しました。客室に案内しております」

「分かった」

客室は身分の高いものが案内される場所、低いものは謁見の間の控え室だ。

豪胆姫とも呼ばれていただけに剣も持たず、知ら無い客人に単身で向かった。

客室には白髪の生えた逞しい老人が居た、魔法使いよりモンクと言った方が適切。

「やれやれ、ドラゴンバスターに会いにくればその妻か」

「かなりぞんざいな口の利き方だな、で用件は」

「魔法を教えに来た」

「ふむ。魔法か」

「ついでに異世界の品でも見てみようと思って、未来を見ればこの国が最も進む、そして困難に追いやられることも、シバシバある

のでな」
「ふむ、本物か」
「偽者が異世界だの未来だの言わぬだろう」
「確かに、しかし夫が頷くかな」
「それは本人次第だ」
「それもそうか、ナノル隊長案内してやってくれ」

ドア越しに言われ、ナノルがドアを開ける、老人は眉一つ動かさず、ドアに近づく、ナノルが案内し、後宮の友人であり国王でもある、根っからのお人好しのところに来た。

「入るぞ」

ドアを開ける、一人翻訳作業を続けている、見知らぬ装置の数々、どこから持ってきたなど故郷からと言うが、一体どこまで進んだ国家なのか疑問に思うが、女王より質問するなと言われており、質問してもはぐらかすか、煙に巻く程度のことは平気でする、そこらへん商人時代と同じだ。

「魔法使いだそうだ」
「へー」
「お前に魔法を教えに来たと、どちらかというとこの部屋の品々が魔法の品々と思ったほうが早いが、敢えて言わない」
「あの時は助けてもらい、感謝する」
「へー、あんたあのときのドラゴンか」
「いかにも」
「魔法ね、今の所暇が無くてな、午前中は手一杯で昼休みはフィーナと話さないといけないし、その後に習いたいな」
「良かろう、それまでは騎士団長にでも教えておこう」
「ド、ドラゴンを撃退したのは本当なのか」

「ああシルと一緒にな」
「全くどこで何をしているか予測不可能だな」

二人が去ると、貴地は翻訳作業に追われていた。
フィーナが来ると珍しく質問せず、シロップをかけたパンケーキを食べ、冷凍庫から氷を取り出し冷やしてある果実酒をグラスに注ぎ、氷を入れてさらに冷やして飲む。

「新しいことには困難が当たり前だ、国債は五年で半額の利子になった」
「そういう国債もある」
「それを先に行ってもらえれば苦労は少なかったが、で魔法を習うのか」
「ああ、昔助けたドラゴンだ」

暫しの沈黙後、フィーナは酒を飲み、黙って剣に手を伸ばした。

「大丈夫、襲わなければ危害は加えない」

「なら良いが、さてと」

いきなり貴地に抱きつき、そのまま二人は寝台に向かった。

4―5、新婚生活（後書き）

甘い時間ですね、それが結構続きます

4―6仲間達

結婚して半年、側室の話などが出たが、フィーナが一蹴し、貴地も断った。

新しい制度が一月ごとに打ち出され、国民は新しい制度に十二分に夫妻の政治手腕を理解した頃、こちらでも使える印刷機を発明した、文字の銅版を作り、インクを皮の部分に染み込ませ、何台も使うことで新聞を作ることに成功した、それに留まらず、水車、風車、さらに共同浴場、銭湯の考えからきたものだ。

軍隊の改革にも乗り出した、階級制度を設け、大佐から将軍、佐官は部隊長、尉官は士官の最低ライン、下士官、兵卒はそのまま、騎士は能力次第で乱高下したが、基本的に新しい発想の為に、定着するのに時間がかかることは、分かっているつもりの二人。

魔法を習い始めて半年近い、そのドラゴンの人に化けた姿は他の者からするとモンクにしか見えず、魔法を実際に使うときに見ると驚きの声が上がったが、個人的なことに過ぎない。

苗木や種は大学に持ち込まれ、農学者が適した土地を探しているが、これもまた時間のかかる話。

世界地図で場所は混沌の森と呼ばれる危険な獣がはいかいする場所がある、トルコあたり。

一応国家としては中堅程度で、半年で成長し飛躍的に革新的な制度を導入した、現代で言う先進国に当たる。

貿易で繁栄している国でもある、それは同時に海から攻められる危険を持つが、攻めて得るものが無い、内乱で荒れた国土は半年で回復し、王家直轄領が多いが優秀な人材が揃っているために国政はうまく行っている。

軍事的な書物を翻訳し騎士団長のラムソンと改名したシルに渡して、本人はあまり軍略に強くは無かったが、大量の書物を読み漁り、猛勉強中、それにナノル、アノヒが加わって勉強会の連日。

今までの徴兵制から募兵制に変わり、緊急時のみ徴兵制がとられる。

故に平時は募兵で、攻められたとき国防の責務を負う。

法律体系にも手が加えられ、憲法を制定し、立憲君主制に近い。

「だろ、昔のように話せるあたりが変わっていない、俺ぐらいかな高卒で入社して一年で倒産、その後は仕事を転々として最後は大商人に成り上がったのは」

「最後は国王だ、これで知識層が増える」

「そういうこった、全員後宮で暮らすのか」

「当座はそうして、表に出ることが可能になったら王国から物件を与える」

「食事のときが賑やかになる」

「違った意味で二人とも美人になったほうかな」

「全くだ、クォーターにハーフだからな女性二人は、ちなみに四人とも大学卒だ、調べたが三流企業に入って、俺の話を聞いてあっさり辞職してきたようだ」

「全く面白いな、あの小さな坊主かあんなに大柄になって、片方は武道家になって、残る二人はなかなかの逸材だ」

「ちなみに久遠は武家の出身だ、防衛大学卒、片方は医学部卒、美鶴は経営学の専門家、袖は法律学の専門家」

「悪くないな、唯一三学科卒か、それでも王国随一の大商人になったから話は盛り上がるな」

「明日のお楽しみ」

夜を過ごして、エッチはせず、ひたすら昔話に花が咲いた。

翌朝、もはや興味が尽きないものは無いと言った所の四人が食卓に参加して、女性二人が材料から料理人に伝えながら、手料理を作った、それが絶品で大食漢の久遠は何度もお代わりした程。

食べながら昔話、王国の話、王女時代の話、大商人までの上り詰める話など等夫婦と昔の仲間は笑いが響くほど賑やかに話した。

「ああそうそう日給は手渡しだから週末に払うよ」

「やれやれ無粋だぜ、こんな面白いところで金を稼いでいたとは」

「何せニートだったからな、あの時代は貴重だ」

「所でなんだけど、子供は」

「結婚して七ヶ月」

「おめでとう新婚さん」

「やっかみが入っているぞミツル」

「貴方はほとんど別人じゃない、あんなに可愛くて愛らしくて、それがこんな凡人と結婚するなんて」

「いや凡人ではない、ドラゴンバスターに魔法使い見習いだ、この国で知らない者は居ない大商人で大学作り、苦労金、酒を送った程の高潔な大商人だ、父親が養子に入れたがるような」

「昔からお人好しの所はあったが、此処まですると奇特な商人だな」

「飢饉が起きたときは王国より先に様々な物を輸送したから、根強い人気を誇る、俗物貴族には嫌われたが、そんな連中も内乱で没落して今や単なる騎士や兵士、もしくは残っている貴族の保護を受けているな」

「逆に言えば、俗物ではない貴族の受けは、良かったわけか？」

「そういうことだ、そことは繋がりが強く毎月格安で品物を提供したほどだ、それに王家を後一つの王都を作るほどの献上品もある、コツコツ繋がりのある貴族に提供して収入を得られるほどの物だ」

「良かったな、ニート」

「残念、今は田舎町の名士さ」

「さて楽しいお喋りは此処までだ、食べ残さないように食べてから勉学だ」

「ある意味適正よね」

「そうね」

「頑張ってな大卒組」

「高待遇に高給与、三食付、休み時間が短いのが難点だ」

「その内慣れるよ、一ヶ月が基本だぞ」

「努力しよう」

「フィーナ、後で話を聞くわよ」

「楽しみにしているわ」

「何と無く懐かしいな」

食べ終わると解散し、それぞれ役割に向かった、貴地は相変わらず日本に戻り必要な物を買い集め、宅配で運び、置き場所において、すでに支払いは済ませ、そしてあちらフォーラリアに運びを繰り返して、各人の個室に運んだ、電力が足りなさそうなので太陽光パネ

ルを買い揃え、後宮の屋上に設置して電力供給のケーブルを繋げ、逐電装置も設置した。

食卓は毎日が騒がしく、アノヒやナノルにラムソンが驚くほどに、フィーナの顔に笑顔が戻っていた。

四人とも週末には戻り、週給の２０万を貰って故郷に里帰り、その間四人から注文された品々をそれぞれの個室に運んでいった。

別れを告げたわけではないので四人とも週末だけ帰り、週休二日で、一ヶ月で文字を完璧に使いこなした。

ただ各人の専門分野の専門用語や歴史には触れていないためにそれぞれの部署に起き、大学に医学部が置かれアキロが教鞭をとった。

防衛大学卒の久遠は将軍になり陸軍で士官、兵卒にいたるまで教え込んでいる。

経営学はフィーナの補佐官に付くのは当たり前のようで、様々なことを伝え、助言していた、法律学の専門家の袖は弁護士の育成に全力で当たり、大学で医学部、法学部は常に定員を超える倍率で秀英たちの集まり。

食卓は共にして昼のみ新婚さんの二人だけの時間、楽しげに冷えた飲み物を飲みながら、虫除けの小道具を腰に付けている。

制度から官僚、役人、警察官、軍人、傭兵を集めた兵站機構、公務員も増え、王国は国家としての形を成していた。

絶対王政ではない、立憲君主制に近い王制はある意味適していた、

国王でも憲法は女王、宰相、元帥の四人の内全会一致が現在の体制だ。

疫病が流行らないように土葬から火葬に、衛生面から各家には石鹸が配られた。

貴地はフィーナに日本で集めた知識を翻訳しながら、教えていた。

それ以上に、七ヶ月前に持ち込んだ苗木や種は、一部が適した土地に植えられ、農学研究が進められている。

防衛大学卒で鉄道好きだった久遠から、国鉄の話が持ち出されたが、それを支える石炭が無い、肝心な技術が無い、それを整備する者も居ない、それを支える財源も無い。

そういう訳で久遠に資産から一部を渡し、国鉄のノウハウから技術及び整備法に材料とミニチュアと図面を買い揃えてもらうことになって、週末返上で働いてもらい、それまで国鉄の情報を貴地が集め、それをフィーナに伝えながら翻訳して、様々な知識が翻訳作業から得られるようになると、許可できる範囲の知識は幅広く印刷され本になり、残っている貴族、学者、技術者、騎士、兵士、大学生、各家に提供された。

膨大な知識の為に翻訳を日本人の五名で担当し、翻訳しながら国営銀行を創設し、金融面で大改革が行われた。

すでに郵便局は定着し、国債も五年国債、三年国債に別れて販売され、国鉄に向けて準備が着々と進んでいった。

時代で言えば十九世紀に近くなった国家である。

四人がこの国、アルフォーニアに着てから二ヵ月後、国鉄のめどが立ったが肝心な石炭が無い、そこでドラゴンに頼み、本来はしないが、石炭が採掘できるように魔法で一つの山を変質させてもらった。

その時に貴地も学んだが、多用できない危険があるために、成るべく使わないようにドラゴンから言い渡されて、禁止に近い魔法の一つとなった。

資源が多ければ国防に徹しても亡国の運命がまっているから。

禁止はされていないが、使い道が多岐に渡る魔法もあり、探査魔法、別の名前の魔法だが要約すればその名前が適切だとドラゴン本人?より教えられ、使用して資源地を探しながら帰還した。

4―6仲間達（後書き）

書いていて面白いです、感想などがありましたらお持ちしております。
別のタイトルで作っていたものですが、再利用です

4―7鉄道と困難

「よっしゃ鉄道を作るぜ」

「クオン、喜んでいるところは良いんだが、どうやって蒸気機関を作る」

「現在研究中」

「おいおい、まだ技術が発達してないのかよ」

「発達したが初の試みでもあるのさ、実際ミニチュアから国鉄まで時間がかかったろ、この国では初めての挑戦なんだ」

「やれやれだぜ」

「むしろ、土木工事が重要な技術だ、各地の線路、街道の整備、灌漑事業、トンネルの作り方、鉄橋の作り方、土木、建築の技術発展し続けているそれも急速に、クオン礼を言うぞ」

「よせあい、俺にとって楽しみでやったことだ、実際戦争するときなんて整備をしていなかったために勝ったり負けたりしたのが昔話かもしれないが、結構重要だぜ。俺としては国鉄のために集めた技術だが」

「医者としても嬉しいものだ、これで助かるものも増える、薬草も解毒剤も届きやすくなる」

「経営の面でも嬉しいわ、情報伝達の速さは重要なのは当たり前

だしね」

「法律の面では少し心配ね。整備に資金は居るわ、もちろん維持費にも、それは国庫から出る、いざとなったとき徴兵から逃れやすくなるわ」

「全体的には良い面が多かったと判断したほうがいい訳だ」

「爺どうした」

「姫様、懐かしすぎて昔の友を思い出します、前国王と一緒に若き頃を励んでいた、今亡き者たちがみれば喜んだでしょう」

「爺」

「ですがまだ引退はしませんぞ、姫様の子供を見なければ、前国王陛下に合わせる顔がありません」

「診察したところ、健康だな、煙草も、酒も、暴飲暴食もしない、健康に人一倍気を使っているようだし、問題はこれといってない」

「だそうだ」

「まだまだ新婚生活は続くさ」

「しかし、見事に全員が黒髪ですな、姫様特有と聞きましたが、どうやら東方の方々は黒髪黒、黒目のようですな、肌の色は人それぞれ」

「今度は爺さんが話す番だぜ」

「何老人の愚痴を聞いても、強いて言うなら若者の暴走を止めるようなものです」

「言い返せねぇ」

「一番趣味に走っている者が居るからな」

「だってよ、工兵が居ないんだぜ？どうやって野営地を作るんだよ」

「頑張りな、年収１４４０を稼ぐために」

「それは金貨ですか」

「金貨で言うなら１４４枚」

「ほうそれは安く雇われましたな」

「良いって」

「そうですよご老人、新しいことをするのは若者の特権、それにどれ程の金銭的価値を出すかは人それぞれ、好きなことをして週休二日、毎年１４４枚の金貨、十分ですよ」

「これは凄い袖が」

「男としてそれ以上は言わないことを忠告する」

「言わなくても分かるって」

「しかし、あの地図は凄かった」

「世界地図のことか」

「世界地図？」

「ああ、此処に来る前にとある人物から渡された物だ、生きた世界地図、魔法の品だ」

「微妙にホラーね」

「いや立派な世界地図だぜ、座標から高低さ、詳細な地理、そういえば資源も書かれていたな」

「早く言え！」

「姫様、落ち着かれたほうがよろしいかと、それがあれば防衛に役立ちますか」

「役に立つってものじゃないぐらい貴重なものだぜ、ありゃ国宝だ」

「いや俺の私物なんだが」

「まあ一度見せたほうが良くないか」

「じゃ今日の昼休みに面子を揃えて見るか」

「ふむよかろう」

朝食を食べ終わり、それぞれの仕事になる、機知は相変わらず翻訳作業、他の者はそれぞれの仕事をしているが、休みになる前に切り上げて国家機密の塊のような世界地図を見るために相応の面子が揃った。

国王の貴地、女王のフィーナ、宰相の爺ことヘロデ、騎士団長の大将のラムソン、近衛隊長のナノル、近衛から女官長になったアノヒ、侍従長のメイヤは老婆に近い歳。
何よりも国で最も有名な四人、国王の友人で、女王の友人でもある東方から来訪した進んだ技術や知識を齎した四人だ。
以上十二名。

「まずこれが世界だ」

世界地図というと紙や洋紙を思い起こすが、本で開けると球体が現れ世界が映し出される、現在位置と、それを押して百分の一に拡大される、周辺の国などが分かり、また押すと百分の一になり王国の地域が分かる、さらに押すと百分の一になり王国周辺国が分かる、さらに押すと王国内になり、村々、町々、王都、様々な施設の印、天然資源の印が記載される。ちなみに地球地図からアフリカを除いた地図がこの世界の地図だ。

「といった具合だ」

「非情に凄まじい品物だ、天然資源はわかったが、施設まで分かると困るな」

「こればかりは俺だけしか使えない」

「ふむ、今のうちに書き写そう」

それぞれがその分野の必要なところを書き写して時間が流れる、いずれこの国が困難に陥ったときという言葉が貴地の中には芽生えていた。

それは誰もが直面するが、この国ではまだまともな国防軍は無い、拡張路線を歩むわけにも行かない事情もある。

それは中堅の国だから成長が早く国政も乱れない、それ故に内乱でも長く続かず共倒れという今となっては良かった王家の話で、悲惨な立場の弱い国民からすれば、共倒れしてくれたほうが早く内乱が終わる出来事でもあった。

全員が書き写し、拡大して周辺諸国を見せる。

「私が得た情報では、北の小国連合は内紛で亡国になった国が多く、後は内乱で亡国の流れだ、南の砂漠半島はすでに亡国、そこで南から併合しようと思うがどう思う」

「天然資源の宝庫だしな、国が無いよりマシだと思うぞ」

「なら将軍の二人には頑張ってもらわないとな」

「統治領域を拡張するか、まあ何とかなるだろうよ」

「反対する意見はありませんが当座の防衛は誰がにないますか」

「ナノルだ」

「聊か不安がありますが、何事も経験でしょう」

会議が終わり、南の無統治地帯を併合するために二人の将軍が二手に分かれ東と南のルートで進軍した、その間賊は討伐し、統治する代わりに五年後税金を納めることを知らせた。

僅か一月で半島を手中に収め、五年間の無税措置がとられた。

帰還した二つの師団は凱旋し、女王、国王より褒賞が与えられる。

その間に北の内乱が終結し、予想通り共倒れで小国連合は滅亡した。

早速二人に行ってもらい、五年間の無税措置と併合することが、僅か二週間で終わって合計四ヶ月、その間に王家直轄地として州制度にして行政官を送っていた。

「こうしていると昔を思い出すの」

「始めるか」

「う、うむ」

意外と貞淑だったりするフィーナだが、周りの者から言わせれば、雌豹の肉食系猫科だったりする。

草食系に思われがちな貴地だが、意外と肉食系、ただ側室は全部断っている。

夜の営みを終えて眠る。

翌朝、いつもどおりに浴場に入り夫婦水入らずの時間を過ごし、着替えてから朝食に向かう、すでに電気工事がされており後宮は眠らない城と呼ばれているほどにＬＥＤの照明が点っている。

「おはよう」

全員が挨拶し、一家団欒というより王国の首脳陣一同といった感じだ。

基本的にマナーも成っているために誰も文句は言わないが、夫妻にここまでアットホームな友人も貴重。

大理石の上に絨毯を一枚で室内の床になるほど手間のかかった場所だが、誰も気にしない。

「そういやドラゴンの旦那はどうしたんだ」

「腹を満たしている最中だ」

「聞かないほうが良かった」

全員が座り宰相も馴染んで来た、食事の前に頂きます、食べ終わればご馳走様。

「東方の習慣が身につきます、姫様、地図からの件ですが、任せてもらえませんか」

「失礼、公害をご存知で」

「医師の言葉は重みがありますな、それはなんですか」

「工業排水による病が主です」

しばらく沈黙があり、宰相たるヘロデが口を開いた。

「クジ殿にも話し合わなければなりませんね」

「済まない」

「いえ、態々国が病を作っても本末転倒、民あっての国ですから」

「爺からすれば王家のほうが、可愛いいのではないか」

「それはございます、しかし今は民を優先しなければいずれ滅亡します、北と南が滅亡したように」

朝食のときに珍しくドラゴンが現れた、それも瞬間移動でさすがに一人を除いて全員が驚いたが、唯一貴地だけは暇そうにコーヒーを啜っていた。

「少し困ったことが出来た、四年後の年末東から十万の盲信者の大軍がやってくる」

「困ったものだ」

「確かに」

「お二人とも立派になられて宰相として嬉しいですぞ」

「ご老体、何も泣きまねをしなくても」

「忠告はしたぞ」

また瞬間移動で消えるさすがに今度は驚かなかった。

「時期が不味い」

「いや準備しだいでどうにかなるぞ」

「金は惜しまないぞ」

「宰相殿少し遅れます」

「分かりました」

後宮に戻り二人の男友達と一緒に日本に戻る、あの手この手で兵器を集めて百億が消えた。

それを後宮の武器庫に運び、何度も往復して図面や必要な訓練マニュアルを買い込んだ。

そして一人の傭兵を紹介された、自衛官として主席で幹部入りして順調に出世したが、命令違反で予備役になった技術士官だ、久遠とは古い馴染みのようで自己紹介の後、早速飛んだ。

「へーここが異世界ですか、空気から分かりますね、しかし久遠一尉も大変だ」

「すみません三尉殿、時間が四年しか無くて陸軍のことを伝えて

もらえますか」

「何、一尉殿のお仲間の為だ、励みましょう」

「では早速」

軍に技術士官として入り、応募したら試験や面接を受けに来るものが絶えなかった。

技術士官は少将で止まり、海軍は大将まで引き上げた。

それぞれ大臣職を設け国で逸材な者を地位につけた。

予算との格闘でもあるが、国として発展させるために毎日会議を設け、残った騎士団を軍隊に取り込み、種や苗から実る物を大量に国内で売りさばき、その富で軍隊を強化し続ける。もはや帝国と化していた。

周辺国と同盟を結び、一つの経済圏を形作り、その盟主に位置した。

リボルバー、ライフル、頸椎方、古い武器が作られ、最終的には無反動砲が作られた。

戦車（第一次世界大戦のマーク1みたいなもの）も作られ、車も作られた、国内の産業革命に等しいパラダイムシフトが起きたのは言うまでもない。

一年目が過ぎ、国内を蒸気機関車が走るようになり、時代も剣から銃へと移り変わろうとしていた。

時代は第一次世界大戦に近づいている。

戦車はメルカバを模して生産工場も作られた、しかし国の軍隊は海軍建設もあり、陸海併せて三万といったところ。

その中に技術士官や下士官なども居るために、実際の戦力は二万程度。

大学を卒業したものが軍隊に入り、殆どが技術士官、それでも富国強兵によって国内は発展し続けた。

士官学校を卒業した士官も入り、軍隊としての機能を高めていった。

国内に貿易船から攻め込まれる噂が広がり、募兵に来るものは絶えず、兵站を任された庸兵団が鍛えて、また軍隊の中で何度も訓練を受け兵卒として半年で正式な兵卒になる。

騎馬隊も作られ、砂漠での移動も鉄道を通して移動し、それから騎馬に乗り込み隊として機能する、それは遊撃部隊に使われ、士官学校卒のものが選ばれた。

貴地は相変わらず翻訳作業を続けているが、それは王国にとって重要なことである、その知識が広まるにつれ様々な第一産業、第二産業、第三産業の三つの劇薬となり発展を遂げていった。

開戦まで三年になり、すでに国政は安定し軍隊も騎士の時代でもあり、ガンマンの時代でもある、軍議を何度も重ね、貴地も時々参加し新しい翻訳した書物を出し、新しい発想で軍隊が近代化を進め

ていった背景に、攻められる噂が強くなっていったからだ。

国民の危機感で、民間にも民間武器を許可せざるに終えなくなる。

リボルバー、ボトルアクションライフルが販売された。

貴族もそれを買い揃え、武装して領地を守っていた。

開戦まで後三年。

4―8、開戦まで三年の思わぬ誤算

第四章．開戦まで三年。

「まっ、これが現在の防衛計画だ」

出された計画は海峡を渡ってくるであろう、盲信者の軍団、それを海峡でせき止め、海軍を使い敵軍の上陸を阻止する、騎馬隊を増やし国内の治安を維持する、騎馬警官も増やして治安維持に全力を挙げる。

多くの地域で未だ、木製の農機具を使っているので、鉄製の農機具を無償で提供する。

水車、風車の普及を急ぐ、戦車の質を向上させるために自動車産業を強く推進する。

要すれば国上げて上陸作戦を無力化することが主な計画だ。

灌漑も行なったので、水路も張り巡らされている、それが飲み水になるために浄化設備を設置して生活水に使っている。排水は水路ではなく下水に流し、緑化に役立てている。

有機肥料のことは広まり、森を傷つけず腐葉土を採取し、あちらこちらの荒地の農家に無償で提供している。

天文学も発達し暦も作られ、歴史から建国五百年の節目だ。

もう貴地達は二十五歳、フィーナが二十三歳、他の者も二十代後半や三十代前半、宰相、侍従長のみ六十歳を超えている。

「技術計画は遅れています、戦車の質を維持するために生産量は僅かです、ただ砲は大量生産可能です、後は小火器、重火器の生産も始まっています、問題は蒸気機関車が少ないことです、海軍の鉄製は時期が遅れます」

「ありがとう紀野少将」

「いえ、尉官の傭兵が将官の最高職に付いたのですから」

「東方の方々は謙虚が美徳のようですな」

「実際そうだろうと思うが、こんな場合オオトリの魔法に頼るしかないな」

消える魔法と転移の魔法という事になっているのが、行き来の能力。

「国庫から金のインゴットを二百個あればもう少しましだな」

「惜しみなく出そう」

「いたし方ありませんな」

「では次の議題に」

会議は続く、ナノル、アノヒ、ラムソン、ヘルデが参加しているが、付いていくのが精一杯、

膨大な知識を持っているに等しいために、この国の常識では考え

られないことが山ほどある。

例えば天然ガス、石油の採掘、それを技術浸透と共に伝え、直轄地の天然資源は王家のものになり、惜しみなく軍隊に回され、余った分は貯蔵しているのが現状。

それでも職場が増えたことで失業者は皆無に近い。

紀野が少将にまでなっても勤勉で惜しみなく睡眠時間を割いて勉強する、そのおかげで製油、化学物質、水素電池の研究に大きく貢献した。

今では教科書が変わり、現在の王国で教養の範囲内の知識が詰められている。

小中高までは義務教育期間を創設したために、子供の働き手が居ない代わりに子供が賢くなっていく、そして大人も影響を受け、本をよく読む。

国が変わり始めた頃なのだ。

元貴地の商会は、幅広く商売を続け、国民に苦労金、酒を送るまで成長していた。

女王は政治的課題をこなす日々、新制度が普及してから年月が経ち、王家の直轄領が多いと騒ぐ没落貴族が多く、今では名前だけの貴族で領地も無く家臣も居ない、保護されている貴族に養ってもらっているものも多い。

現在は女王がかなりの権力を握っているために、没落貴族が騒ご

うが、特に関係ない。
しかし、身分を傘に横暴を働くものが増え、衛兵に捕まり監獄に入れられる、その監獄で没落貴族が反乱計画を作るまで悪化しているのも、見逃せないことで、態々刑務官を増やすしかない。

まるで明治維新の頃の日本に似ている事で、戊辰戦争などがおきそうな感じでもあるために、厳しく弾圧するしかなった。

他にも天然資源の開発費用、維持費、輸送費、様々な問題が山積みだ。
それを宰相のヘロデと、補佐官の美鶴が行なっているので、軽減されているほうだ。

「えーい、多い！」

「減ったほうよ」

「このままだとセックスレスになるわ」

「最近、日本の文化に触れているわね」

「政務官を増やせば良い」

「残念だけど富国強兵と直轄の行政官出手一杯よ、来年なら増えるけど」

「全く盲信者共目、仕事を増やしよって」

「開戦すればもっと増えるわ」

「何故襲うのだろうな」

「簡単じゃない金よ、香辛料は金になるわ」

「じゃ誰がそんな大軍を率いる」

「大軍で勝てるなら戦術は必要ないわ」

「ふむ、さすがに分かっているようだ」

補佐官の美鶴は後世、始祖と呼ばれるほど厳しい。

時代の戦い方としては隊列を組み突撃する、騎士が馬に乗りランスで突撃するのが常識だ。

時代としては十三世紀、ただ火薬の作り方を知っているのはこの国ぐらいだ。

「だけどストレート、あの冴えない風体もあがらない男のどこがいいの」

「風呂場で話そう」

仕事が終わり夕食の前に、珍しく浴室からになって男女別に分かれた。

「どうしてあの素直でスレンダーな女の子がこんな風になるの」

袖が早速質問するが、フィーナは湯船にお膳に日本酒を載せて一杯やっている。

「そうじゃのぅ、食生活と激しい運動かの」

「何故に老人口調」

「何、仕事柄じゃて」

「質問、どこがいいの」

「逆じゃをどこが悪い、あれでも一代で富をなした者、確かに日本と行き来したことは伏せられているが、それでも商才が無ければあれ程に躍進するかのぅ」

「それはそうね、そこはさすがに才能ね」

「で、ソデッチ、誰が意中じゃ、独り身も長く入られまい」

「ただいま吟味中よ」

「ナノルって結婚しているのよね、その奥さんが女官長っておかしくない」

「ナノルの側室でもなるつもりか、止めておけ、あれは尻に敷かれている」

「ヘタレね」

「いたし方あるまい、相手は国きってのモンクじゃ」

「不思議よね、モンクが女性の出世街道なんて」

「お国柄じゃ」

「考えてみれば久しぶりじゃない」

「女の同士で飲むのが？」

《貴方だけ》

男性陣の浴室で

「しかしよ、卑怯じゃないか」

「そう思う」

「災い転じて福となす、不幸の後は幸運ありとも言うだろ」

「そういうものか？」

「人生の負け組みが異世界で成功して勝ち組になるか、奇なりだね」

「誰かとお見合いするか」

「その話はうんざりだ」

「僕もうんざりだ」

「で、美鶴、袖か」

「二人で考えていることだ」

「そういうことだ」

「あがるぞ」

「何気に負けた」

「そこは技巧派ということで」

「お前らな、高校生か」

「色々あったな」

「済まない」

「いいって楽しいこともあったし」

そのまま上がり着替えて、持ち込んだ日本文化の品々に影響を受け、後宮にも新しい風が生まれているのは、推して知るべし。

夕食後、何度も肌を重ねてきたあいた間柄の夫婦は、今宵も重ねていた。

翌日、翻訳作業が終わるとその知識を買われ、紀野少将と国内を視察しながら適切な農機具、農作物、様々な甘味料の種を伝えた。

そんなささやかな事が国の発展に強く影響することになる。

そして嬉しい誤算もあった、米軍の技術者が迷い込んでいた、話すと涙を流し国に帰りたいと言った、いつでも帰れますよと言うと帰してくれというので帰した。

それが後に思わぬ誤算を生むのは今は伏せておこう。

視察のたびをして三ヶ月、大いに収穫があったので、一旦全員で国に帰ることになった。

「久しぶりの日本だ」

「全員、人材とそれぞれのこれを集めてくれ」

渡されたリスト、種から苗、必要な道具と国際法、経営学、政治学、外交系の書籍等。

「さすがに翻訳作業も終わったし、フィーナも日本語が分かるようになったし」

「分かった、久しぶりに里帰りだ」

「ですね」

別れ、電話がかかってきて取ると、この前助けた米軍の技術者で軍隊から除籍されたので雇われたいと申し出た、こちらに来ているらしく面会した。

「こんにちはミスター」

「こんにちは」

「名乗ってなかったねホーマル・フィーギナ・スミス」

「それでいかほどで雇われたい」

「紀野少将の下で、あの方はなかなかの技術者、本当に頭が下がるよ」

「どこの軍属で」

「陸軍、最も、最初は海軍だったが」

「雇いましょう、異世界でよろしいですか」

「もちろんその為に日本語を熱心に学んだんだ」

「それは良かった、必要な物を集めてください」

「分かったよ」

白紙の小切手を渡した、スミスが去るとマルサが入ってきた、家宅捜索し、中からは何も手に入らない、失敗に終わり、国税局はいずれ尻尾を掴んでやると言って去った。

お掃除をして片づけをして暢気な生活がまっていた、全員が必要な物を探して戻ってきたのは一週間後、新しく入ったスミスは気さくに話しかけ、フレンドリーな感じだ。

全員が荷物を持って、一人ずつ行き来して六往復で最後に、自分の片づけをして戻った。

「おうさすが異世界、しかも国王、これは頑張られば」

「ミススミス、よろしく」

「よろしくミスターキング」

他の者にも挨拶し、相応の立場においた。

スミスは良くも悪くも根っからの技術者で聞けば何度も大学を通った天才児だったそうで、万能的な技術者にしては聊か空軍経験が無いが、紀野を非常に尊敬している。

技術士官の階級を大将まで上げ、乃木が大将、スミスが中将、後は現在出世競争中。

「紀野さんスミスはどうです」

「息子のようなものですよ、健気な天才肌が玉に瑕ですが」

「まあそれで、技術者たちが、底上げされるなら問題なしでしょう」

「それで留まればいいのですが、少しでも品質管理を怠った生産工場に態々苦情を言いに来る始末で、そこが工場側としては複雑なもので、苦情が適切なものですから改善でき、苦情だから剣幕に推されてついつい詫びるしかなく、もう少し和らいでもらいたいものです」

「紀野さんも気に入った様子ですね」

「申し訳ない、あんなに健気な青年を見るとつい若者だなと思いますよ」

「まあ飲みましょう」

「いやはや、ここで日本酒が造られるとは思いもしませんでした」

毎月送っていた日本酒が元になり、米を使った酒造工房ができ、様々な地域で日本酒が作られている。そしてそれは貴重なもので、高値で売り買いされている。

様々な書物が各家庭にあるために勉強に勤しむ者も多く、特に新しく統治下に置かれた所では熱心に勉強されている。

紀野と飲んでいる暇人国王は、仕事をしっかりとしている情報収集だ、いち早く情報局を作り勢力圏、貿易国の情報を集め、それを新聞に記載できるものをのせている。

殆どの事業を国営で行なっているが、今のところは上手く行っているほう。

ラムソン、ナノル、久遠、アキロが集まり飲み会に発展した、それぞれが経験談や専門知識からの薀蓄を話、大いに楽しむ時間を持った。

女性陣が昼休みに入ると酒盛りをしているにしか見えない、五名に説教しそのまま飲み会に突入、美鶴、袖、アノヒ、フィーナは酒を飲むが、ウイスキーがお気に召さないのか、ブランデーをストレートで飲んでいた。

ヘロデも呼ばれたが、本人は断り、代わりにスミスが入った、米国の話をして皆に珍しがられた。

「紀野さん、珍しい坊主ですね」

「坊主じゃないこれでも二十三だ」

「俺は三十四だ」

「歳だけは勝てないって事よ」

「くそーいかにも職業軍人が」

「いかにも軍人だが」

「そうそれだ、いかにも叩き上げが」

「スミス私もたたき上げだが」

「すみません紀野さん、ミスターラムソン失礼しました」

その代わり様に全員が笑い快活な笑いが客間に響く、スミスもそれに釣られ笑い、酔いが回っているようだ。
様々な話が飛び交い、最終的には酔い潰れるまで飲む事だ。

「やれやれ皆酒に弱いな」

「俺達が強いだけど思うぞ」

「さてそろそろ部屋に連れて行ってやろう」

女官に言って運ばした、二人は寝室で直ぐに眠りに付いた。

翌日、二日酔いに効く薬草料理が並べられ、誰もがうんざりする中食べていた。

「ミスタースミス、どんな感じだ」

「ふふ、分かっていますよ、戦車が列記とした主力戦車になるには2年は必要です」

「ついでに海軍も頼む」

「ボーナスゲット！」

「まあ安いものだ」

「あまり暴走するなよ、この国は近代兵器に慣れていないのだから」

「もちろんです」

紀野は四十代前半の中年だが、その接し方が技術者に浸透し紳士的な事が当たり前になっている、唯一暴走しがちなスミスはその中で個性が際立つ存在だ。

しかし、異性には潔癖でレディファーストの紳士的な態度から人気は意外にある。

「分かっているのか悩みどころだ」

「ミセス、クィーン、自分が悪さをしましたか」

「いや、ただクレーマーというのか、工場側が非常に恐れている」

「その方が改善しやすいのです、その為に兵士が死ぬのなら彼らの責任です」

「正論だな、失礼したミススミス」

「いえミセスクィーン、貴方が言うとおり自分は苦情を言います。それで兵士が助かるのなら何千回でも言います」

食卓に暖かい笑いが響いた、こんな性格でも立派な信念を持っていることに貴地が笑うが、それは非常に暖かく、人を認めるような笑いだ。

「ミスターキングありがとうございます」

「好いって、そういうのは何万回も言ってくれ」

「はい」

「少しばかり工場側が気の毒ね、少しだけよ」

「分かっておりますレディ」

「将来女垂らしにならないか心配だ」

「紀野さん、それは違いますレディファーストこそ、米国が古きよき時代の名残です」

「文化は大切にしないとな、全員の給与を年金貨２００枚に底上げはしよう」

「失礼ミスターキング、金のために働いているように思われます」

「違う、これから本番だ、あと二年の九ヶ月時間との勝負だ」

「相手にフィガロの戦いを演じてもらえばよいでしょう」

「だといいが、その前に船が水没すると思うがな」

「じゃ働くぜ」

「気合入れていくか」

全員が担う仕事場に向かった。

4―9国の形

軍属の5名、久遠、乃木、ラムソン、ナノル、スミス、医学部の部長兼医学部の実習担当のアキロ、法学部の袖、美鶴は補佐官で来年から相当緩和されると読んでいる。

貴地とフィーナとヘロデは執務室でひたすら政治課題の解決、基本的に悪い寄生虫のような貴族はなくなったが、逆に国民の力が増し色々と作って欲しいと陳情が多い。

それは決して悪いものではないが、軍も行い、国民の陳情も行なうとは片手で円を書いて片手で三角を書くような政治能力が求められ、それを四人でこなしているのだからすさまじいものだ。

今は年末に近い、それだけ蓄えがないと生きていけない、それ程温暖さが激しく冬場は探訪が必要だ、その頃に東方では十字軍のような盲信者達がこのアルフォーニアに進軍していた。建前は新しい国づくり、本音は膨大な香辛料を求めて。

季節ごとの祭り事はすでに定着し、春は春祭り、夏は夏祭り、秋は豊穣祭、冬は建国式の冬祭り。

「建国式の冬祭りか」

「珍しいよ、冬に建国したのが」

「他の国でも珍しいわ」

「そうなのか？」

「そうだよ、普通は春場とか最低でも秋場」

「ならちょうど良い各国の大使も呼ぼう」

「何、夫婦の熱々ぶりを見せ付けるわけ、湯気が出るわよ」

「美鶴、その口で男が捕まえられるか」

「ただいま奮闘中よ」

「後は子宝だな」

「きついね」

「二人のときに言いなさい！」

「アイアイマム」

「何それ」

「イェサーの女性に対するもの、つまり了解」

「スミスね、あの子ももうちょっと周りを見ればいいのに」

「そうすれば新妻の誕生だ」

「紳士だからね」

「古い良き時代の男性よ」

「ある意味絶滅危惧種」

「そうね」

「そうか？」

「で、この元ニートは」

「紳士的だぞ、ただ王族の庶民派だな」

「日本文化も根強い人気ね」

「色々伝えたからな、ほれ前の乃木との国内視察、それで貴族の領民も、直轄地の民にも分け隔てなく適した果樹園、香辛料、甘味料等を伝えたそうじゃ、その結果秋の収穫時の収益が跳ね上がっていただろう」

「そういえば上がっていたわね、意外ね」

「翻訳作業で覚えた」

「ふーん、意外に翻訳家に向いているわね」

「それに貫禄も有る」

「否定できないわ」

そんな話をしながら執務を行い、冬に暖房がつき、エアコンが張り巡らされた王宮と後宮で、働く人々にとってありがたい科学の恩

恵だった。

王宮は古くから居住性を良くして来たが、このエアコンは快適さを売り物にしただけある。

「失礼します」

ナノルが入ってくる、そして書類の束に微かに眉を顰め。

「ヘルナンデ公爵が謁見を求めています」

「はてな、そんな人物いたか」

「身分だけの没落貴族だ。一応公爵になっているが領地は没収された」

「その理由は領民に重税を課したからだ」

「こりゃザックリといった方が早いな」

「ふむ、その案を採用したいが罪状が無い」

「ヘルス居るか」

窓際から一人の男性が現れた、魔法で隠れていたらしい。

壮年の男でドラゴンの魔法使いと同じように筋骨隆々、むしろ拳士と名乗ったら納得だろう。

「ヘルス罪状とか無いか」

「現在反乱計画中、一網打尽にした方が早い」

「ならそうしてくれ」

「分かった、明日当たりに警察の内通者と一緒に逮捕しよう」

「まて警察に内通者だと」

すでに消えていた、フィーナの言葉が空しく室内に響く。

「どういうことだオオトリ」

「どうもこうも情報局だよ」

「魔法使いも居るのか」

「居るよ、暮らし易いって、俺も見習いから半人前に上がったばかりだしね」

「警察に内通者が居れば」

「おかげで行動が簡単に分かってよかったよ」

「意外に仕事をしていたのね」

「それでその公爵はどうなさいます」

「予定が開いた日に面会しよう」

「ハッ」

「ナノル頑張ってな」

「分かっているって」

ナノルが出て行くと近衛兵が扉を閉め、女王がカンカンのご様子。

「私に断りも無く情報局だと」

「残念だけどストレート、貴方が許可したものよ」

「記憶に無いが」

「書類にはあるわ」

「ふむ、不注意か、しかし妙に人材が集まるな」

「そうね、人徳って奴じゃない」

「ワッチにも人徳はあるわい」

「意外にもこの国王は魅力的に写るんじゃない、基本的に庶民派出し」

「寂しいのぅ」

「ドラゴンから教えてもらっているから、魔法使いも集まり易いんじゃない」

「考えてみれば、オオトリが集めたのが大半じゃ」
「安心して友人だから」
「美鶴感謝するぞ」
「いいのよ、私みたいなのが、女王の補佐官なんて大抜擢よ」
「おお、持つべきものは友じゃ」
「なあ二人とも執務しようよ」
「姫様」
「うむ」
「はい」
四人で執務をこなし、官僚も居るが国営が多いために不足気味だ。
執務をこなし、宰相は陳情の多さに嘆くばかりだ。
「昔言った言葉が的中しましたな、物は豊かでも心が貧しい」
「そうだね、でもこれで仕事が貰え食っていく人々が、より良い物を作れるのなら悪くないんじゃないかな」
「お人好し」
「何、経済と工業の橋渡しだよ」

「うむ、よく分かるようになったかこれで多少は楽になれる」

「そういえば具体的にどれぐらい増えたの」

「そうじゃな、億の単位かの」

「国家予算が半端じゃないわ」

「その前までは数千万の単位」

「・・・・農業一つで此処まで変わるものね」

「それまで無理をしていたからだよ、要すれば適切な農作物に変えたから、適切な農作物が実ったわけだ」

「そういうこともあるのね」

「そういうわけじゃ領主達も喜んでおるぞ」

仕事を始めて六時から十一時までの五時間、やっと終わり昼食の時間になる全員が集まり和洋折衷の料理が並べられる、それをフィーナや一同は懐かしそうに食べていた。

料理レシピの翻訳も済ませ、料理人に渡し、印刷して各家庭にも配っている。

食べ終わるとそれぞれの仕事話をして、情報交換を行なう、国としては王制では有るが、絶対王政ではない、その前に憲法を制定したぐらいだ。ただ強いて言うなら半絶対王政半立憲君主制の混ざり具合だ。

原因は貴族の激減、内乱で多くの貴族が没落したからだ。

夫妻や六名が仕事をしているとき侍従長の指揮の下後宮は大仕事、電化製品の洗物は出来ないことがすでに伝わっており、引き篭もりの国王は最近執務をし始め、やっと夫妻の居ないところで、エアコンが効く中お喋りしながら仕事が出来る。

「どなたも独身なのに、誰にも手を出さないのは東方の慣わしかしら」

「そうじゃない、だってね」

「寝室はいつも凄いし」

「あれでよく子供が出来ないわよね」

「意外と奥手なのかしら他の方々は」

彼女達侍従は相応の養子に相応の教養があるが、教鞭を取るほどの女傑の日本人はシャイな民族で、強い宗教をもたない代わりに歴史から親から子へモラルが受け継がれている。

その事を知らない、唯一スミスだがレディファーストの紳士が女性に手を出すわけも無い。

彼女達と根本的に価値観が違うことが聊か分からないのも無理はない。

日本に戻れば苦労の中でやっと掴んだ仕事もいつ失うか分からない、この王国は平和で暮らしやすく、何より楽しみが多い国なのだ。

一見娯楽の少ない国では有るが、王都は地球で言うトルコのアンタトキアにあって、アフリカ大陸が無いので大西洋に面している。

5―1

4―4人類もその一部なのか

人類は99、9パーセント死滅しており、今は過酷な異常生物との闘争の時代だ。

地球に誕生した生命の歴史を振り返ると、それは繁栄と絶滅を幾度にもわたって繰り返してきたことがわかる、原始海洋生物いつの絶滅から始まり大量絶滅から始まり恐竜の絶滅に至るまで、あらかじめ仕掛けられたように、地球上の生物はある時期に絶滅し、そこから復興するというサイクルを繰り返していた。

そして人間もまた然り、原因は定かではない過去の厄災によって人類はその数を激減し、住処を一部に残すのみとなるに至る。

幾多の歴史学者、社会学者が厄災の原因を調査し、複数の仮説が乱立した。曰く、自由経済と人口増加に原因を求めるもの、技術体系の急速な発展による資源の枯渇と自然破壊、さらに国家間の戦争の暴走し地球全土を巻き込む戦乱によるものによってすべてが灰燼に帰したと推測する者、いくつもの説が生まれて消えていったが、決定的な原因は定かではない。

しかし原因はともかく厄災がかつての人類と社会構造を絶滅寸前に追い込んだのは事実である。これも過去からの繁栄と絶滅の繰り返しなのだろうか、人類も地球環境の一部である地球主義者ならそうだんげんできるだろうが、確かなことはわからないまま。

と教科書で読んだ、賢者の石で探れば分かるだろうが、今は関係ないこと。

ＶＲＭＭＯＲＰＧで学習している、八時間の規制があるが、その規制時間の三倍の時間感覚で、生物によっては寿命により時間の感覚が違うという説もある、何よりスポーツ選手が感覚的にハイスピードの感覚に陥ることがある、時間が遅く感じるあれだ。

今まで小学校でＶＲＭＭＯＲＰＧを使い学んできた、今度は中等

部、それを卒業したら防衛学校に入る、日本の復興しつつある微かな繋がりで政府が生まれ、中学校卒業後防衛学校で学びながら実践をこなす。

「せっかくの休みにＶＲＭＭＯＲＰＧだと、お前正気か」
「新作が出たんだよ、まずやれって、送っておいたからもうじき付く」
「ありがた迷惑という言葉を知っているか」
「悪い、電波の調子がおかしいようだ、一番上のサーバーにログインしてくれ」

切れた、なんとも言い難い友人である、しかし不思議と楽しみに感じる心もどこかにあったわけで、届いた新型の物を部屋に設置され、寝台が二つあるような感じだ。
部屋といっても相部屋だった個室だ、元々この街に建設された小中高一貫教育の学園を使っているので、特に問題は無いようで、再生可能な自然エネルギーで補っているらしい。

中等部の新入生の入学式まで一月、暇をもてあましていたのも事実で説明書を読んだ後プラグスーツを着込んでシナプスヘッドを被り接続する機器を接続しすぐレム睡眠状態になる、ログインで一番上というが一つしかなく、それを選んでログインした。
プレイガイドで全員が銃器で武装しているらしいが、それだけでは意味が無いらしい、依頼をこなし、ストーリーを進めていくと心力が強くなりボス、もしくはレアモンスターに効果的な精霊弾が撃てるそうだ、同時に自らに撃てば守護精霊具現化しアビリティを発動するらしい。

銃の種類も豊富で単発装填式の拳銃、散弾銃、長銃に最初は別れ、次第にバリエーション豊かにアップグレードしていくらしい。

単発装填式の長銃を選ぶか迷っていたら、隣から見知った人物がいた。

「やあ末尾さん、相変わらず綺麗だね」

「え、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

小学校からの幼馴染、和風美人で黒髪の長髪、グラマーなスタイル、長身の身長、両目は黒曜の瞳、ただ性格はお転婆の一言、こういう風にほめられると苦手らしく大人しくなる。

「翼から」

「ああそれで、僕もだよ」

「いや、明らかに負けていると思うわ」

妙なところで綾波は操作しているのか、どうも美形の顔立ちにすることだけは忘れない、それ以上に頭のよさも忘れないで良くする。

「そうでもないよ、和風美人じゃないか、まあ拳銃のほうがいいかな」

「えーとなんで」

「自分を撃ちやすいし消費も少ない」

「なるほど、じゃ私も」

二人で拳銃を選び、説明を受けて初心者パークの依頼をこなしていった。

依頼をこなし、モンスター討伐がついに依頼の中に現れた、それをなるべく回避して他の依頼をこなし、それしかなくなると請け負った。

「戦闘だね」

「怖くないの？」

「さあね、怖くもあり怖くも無いそんな感じ」

「骨があるわね、今時少ないのよね」

「まるで誰かの受け売りだよ」

「ま、まあそういう感じ」

この依頼は結局ビギナー向けのプレイガイドで、あまり意味は無かったが、どう戦うかは分かった。

全ての依頼をこなすと、拳銃がグレードアップして、リボルバーのような弾倉がついた。

次の依頼で自らの打ち込む精霊弾の方法が分かり、青白い硬質な薄氷が散らばり渦を描きその中から守護精霊が現れた、精霊というには聊か心もとない一角獣が現れ、回復、有り触れた四代元素のアビリティ、なかなか使える物理攻撃アビリティに具現化させている間の防壁フィールド、使い込めばさらに向上していくらしい。

末尾さんは巨人、明らかに物理攻撃系オンリー、本人の性格を現したかのような荒々しい姿だがすぐに消える。

「強力な反面具現化時間僅か五秒ですか」

「強力なことはそれだけで長所」

「しかも精霊弾を三発も消費している、相当消耗も激しいですよ」

「ハハハ、きつい」

「僕の場合は一つですけど一分間は具現化しますよ」

「切り札にします」

「使わなければ成長しませんよ」

「切り札連発します」

「その前に心労で倒れますよ」

「微妙な守護精霊」

「ボス戦に一撃、余裕があればもう一撃で後退して休み、その間に装填すればいいじゃないですか」

「さすがは学年トップ」

「では次のステップに移りますよ」

「はーい」

次は近未来都市の様な、魔法文明の様な、不思議な街だった。

「やっときたか、一番上って言った筈だが」

「無かったよ、一個だけ」

「そうなのよ、一個だけにしかログインできなかったのよ」

「え、マジ？」

「マジ」

「マジですたい」

「オヤジくさいぞ、どこぞの女子」

「何よ翼の分際で生意気よ」

「ツンデレかよ。今時流行らないぜ」

「殴られたい」

「すいません」

「まあまあ言い争っても意味が無い、折角の春休みだ、遊ばな損」

「そうね、で翼何のゲームなの」

「おう、新作のゲームでストーリーをつむ事で数千億のバリエーションを持つ銃に変身する、守護精霊も売りなんだが、何より魔法をプログラム化して持ち運びができるんだな」

「全然売りじゃないじゃん」

「いやこのゲームＨＰＭＰ無いから、魔法を使うたびにエーテルを飲まないといけないんだ、そんな不評もあって、プログラム化して持ち運べるようにしたわけ」

「持ち運べる利点より、ストックできる利点の法が強みだね」

「頭の違いでこれほど差が出るのね」

「言い返せねぇ事がへこむ」

「ひとまず、データ交換しようか」

「お、おう」

「そうね」

三人でデータを交換し、僕の守護精霊はユニコーン、精霊弾の種類は回転弾倉式心弾拳銃、

翼は守護精霊ナナタイシ、万能的な英霊、器用貧乏になりやすいタイプで、精霊弾は自動拳銃の念弾。

末尾さんは守護精霊タイタン、物理攻撃系、岩石系、自動効果アビリティ、精霊弾は回転弾倉式岩石弾。

「それでプログラム化してくれる場所は」

「あることはあるが満員だ」

「何箇所かあるでしょ」

「これだけの街だぜ、どう探す」

「GMに聞けばいい」

「あ、なるほど、聞きに行くか」

「暫定リーダーあたし」

「別にかまわないけど」

「五秒女子にはリーダーは不向きだな、俺の代わりに鳳凰がなれよ」

「分かりました末尾さんもよろしいですか」

「あ、うん」

「美形に弱いな」

「美形、頭良し、スポーツ万能、文句の付け所の無い男子じゃないい」

「あ、意外にへこむ」

「そうへこまない、中等部に入れば分かるでしょう」

「あ、意外に実戦向き」

「ないない」

「いえ、素質はあると思いますよ、今まで一人で依頼をこなしきたわけですから」

「おお、マイフレンド」

「さてＧＭのところに行きましょう」

「おう」

翼に案内されＧＭのところに行き事情を説明する、困った顔で何箇所か案内してもらった、礼を言って別れ学ぶ所からはじめた、それで一週間が過ぎ本来なら何年もかかるが、補佐するＣＯ２の機械から、魔法をプログラム化して十二個もストックした。

「色々とありがとうございました」

「ありがとうございました」

「ありがとうです」

「いいのよこれが仕事だし、何より暇だし、鳳凰君は凄腕ね」

「マイフレンド、ついに年上に」

「発情期が早いのよ」

末尾さんから蹴り脛に入れられ、悶絶している翼がいた。

これから冒険が始まるわけだが、少し年齢が問題か？

5―1（後書き）

久々にこんなストーリーを書きました、我ながら楽しみで書いています、久しぶりで新鮮に感じます、では次で

5―2（前書き）

少しだけ使います

5―2

「基本的に単に魔法をプログラム化してストックする、それは知っていると思うけど、結局は人が操ること、使い方しだいでいくらでも効果は変わるわ、さてと此処からが問題よ、これからちょくちょく学びに着て使っていく、さて問題です気をつけないといけないのは」

「CO2を奪われないことです」

「そそ、それは高いから、盗まれないプロテクトをかけているけど、万能じゃないは、口先のひとつで騙し取ることは可能よ、それじゃ気をつけて」

「お元気で、今までありがとうございました」

《ありがとうございました》

「良い子達ね、教え甲斐があるわ」

別れ、非戦闘系の依頼をこなし、八日目が終わった。

翌日まで魔法のプログラム化を学び、一定の法則があることを理解して様々な魔法はその数的法則に則りそれぞれの魔法の基礎が存在し、それを発展させることが腕前の違いだ。

そろそろ学食で寮生が集まり夕食を食べ、相応の会話をしてトレイごとを戻し、それぞれの部屋に戻る。

後はプログラムの勉強をして眠った。

翌日、朝食と朝の掃除で時間が過ぎ、直ぐにログインした今度は二つあり一番上を押した。

十二歳で喫煙をしている友人の翼が、暇そうに煙草を何度も吸っている現場を目撃した

「翼、１２で喫煙は」

「ちげぇよ、ハッカだよ」

「女子からすれば同じにしか見えないと思うぞ」

「そろそろ止めておくか」

ハッカを捨て周囲の吸殻を拾い集め、それをストックしていた魔法で燃やした。

かなり臭うが、敢えて突っ込まずハッカの臭いが風に吹かれ無臭になる頃、末尾さんが現れた。

「やれやれ遅いぜ」

「女子は色々あるのよ」

「おそらく男子も色々ありますよ」

「女子も色々、男子も色々、なんかの歌にありそうだな」

「それより依頼をこなしましょう」

「じゃ行くか」

何度も街中を巡り、依頼をこなして銃が三段階にグレードアップ

した、自動式拳銃、装弾数は１４発、４４口径、ガバメントに近い構造だ。

守護精霊も変化してスレイプニル、継承した能力と新しく出てきた能力があり、その内要らないものは発動欄から外しオリジナルにカスタムした。

末尾さんもグレードアップしたようで、ガバメントのコピー版ハードポーラーだった。

お互いにデータ交換し、要らないアビリティを交換して、それぞれバランスよくなる。

非戦闘系の依頼をこなし、グレードアップと資金を貯めひたすら依頼をこなしていった。

それが三日目になるとほとんど無くなり、戦闘系が残った

１０段階の銃はデザートイーグル、反動の強い５０ＡＥ弾を撃つ奴だ。

５０口径、１５発の心弾装填済みの拳銃でフルオートも可能な、バーストも可能なものだ、末尾さんは短機関銃のイングラムで九ミリパラペラムを撃つ奴だ。

翼は投擲機関銃、グレネードを打ち続ける翼には得意とする分野の火砲。

段階がレベルのように扱われ、今まで貯めていた資金から実在するロボットスーツの、人工繊維の人工生体筋肉繊維のドレスで着込んで、必要な物を買い集めた。

今までのグレートアップで守護精霊もレベルアップして僕はフェンリル、翼はクーフーリン、末尾さんはアイアンゴーレム、要らないものは交換してさらに要らないものはストックに戻した。

「そういえばジョブチェンジがあったな」

末尾さんが右フックを入れ一発でＫＯする。

最近慣れたのか、復活する速度が上がり十秒で起き上がり、文句を言って説明する。

その後に街の役所でジョブチェンジの説明を受け何に重点を置くかでそれぞれのジョブが変わるらしい。

僕は迷わず仮情報魔道師を選び、末尾さんは仮ガンマンを選び、翼は仮火砲マイスターを選び、それぞれメインジョブは決まって副ジョブで迷っている中、仮の僕は精霊使いを選び、前後を使えるようになる、末尾さんは精霊ジョッキーを選び、搭乗することができるようになった。翼はボマーを選び、技巧派も兼ね備えた、このジョブはいくらでも変えられるために十段階のプレイヤーなら自由に構成できる。

段階が２０に達すればさらに上級にといった感じで、十段階で上級にあがっていく。

段階の二十までの戦闘系の依頼は簡単に終わった、あれを倒してこれをもってこいなどの狩猟兼採取の有り触れた依頼をこなし段階が二十に達した。

正式情報魔道師に昇格し、正式精霊使いに昇格し、それぞれ使い慣れた物を使い昇格させていた。

見習いから正式なジョブへと昇格したことになる。

選んだジョブから正式な近代魔道師を選び、プログラム化する能力が試されたが合格して昇格が認められた。

守護精霊使いを選び、これも腕前を試されたが合格し、近代魔道師、福ジョブは守護精霊使いが僕になった。

それに刺激され末尾さんはガンマンからガンマイスター、守護精霊ジョッキーを選び、ぎりぎりで合格した。

翼は天職らしく気に入っており気にしなかった。

銃の方は僕がハードボーラーの二丁、末尾さんはＦ２０００、翼はアームスコー４０ミリＭＧＬ、殆ど強力無比な物に見えるが、２０段位がスタートラインのようで多くが２０段階の後半から３０段階前半。

「今日は疲れた、オフろう」

「そうだね」

「そうしますか」

ログアウトして余った時間で賢者の石を初めて使い、魔法をプログラム化できるか調べた、その中に文字魔法があり、それを現代のハンドブックＰＣに打ち込んだ、発動するか不安だったが、発動し

プログラムが発生した。

それを地元の公的な研究機関に送り、賢者の石で未来を多少知り、使い手に選んだ者に送った。

それからゲームの後は文字魔法の習得と、プログラム化して圧縮する技術でハンドブックＰＣに打ち込んだ。

日本でしか発動しないらしく、日本限定の局地的な技術といわれていた。

形としては英語の文字だが、最終的には詩の文章になる。

中等部の入学式、数少ない人数で一クラス程度。

初等部からの付き合いのためにいざこざは起きない、ただ僕のポジションは微妙だ。

精神的に相当老けているために、大人びたと言われクラス一の馬鹿とツンデレ娘が唯一の友人で昼食も一緒にしている、時々二人の他の友人も入るが、時々だ。

告白されることもしばしばあったが、どうも精神的に無理なのできっぱりと断った。

中一は午前中の教養、午後は実技訓練、男女分けされ行われる。

放課後はヴァーチャルで実習、ひたすら軍事訓練を受ける

帰寮するのは八時、夕食を食べ自室で洗濯物を洗い乾燥機で乾か

し、それをクローゼットなどに片付ける。

いつもどおり文字魔法の訓練、文字魔法のプログラムの研究を続けていた。

夏休みになる前に期末テストがあり、こういうときに翼と末尾さんが来て勉強を習っていた、教えるのもなんだが、毎日勉強する習慣を身に着けろよと突っ込みたくなる。

圧縮したプログラムを弾薬に偽装して、機関銃剣を作り出した、その方法を悪用しない者に伝え、さらなる発展に尽力した。

5―2（後書き）

次回はバトルですと言いたい所ですがまだレベル1みたいなものですので次の次ぐらいですたぶん。
申し訳ないです

序章ヴァルキュリー（前書き）

今までのはまたいつかの機会に、新作はＶＲＭＭＯのポータブル版です、以外にねたが浮かびます。ではご賞味あれ

序章ヴァルキュリー

序章、ヴァルキュリー

今現在、笑うべきか、それともいつの間にか疲労が溜まり幻覚を見て精神科に行くか、どちらにせよ、現在の状況を再確認した。

大学の帰り道、久しぶりに一杯飲み、これから自宅に戻り宿題とテスト対策をしなければならない、留年は洒落にならないが、その平凡な我ながら寂しく思うが、甲冑姿の帯剣した女性がこういった。

「転生者よ、貴様は神に仇なす存在、これから消えてもらう」

どこかの新興宗教の勧誘でもこれは無いと思う、もちろん一杯程度で酔うわけも無い。

現実を脅かすのは法律違反の精神患者の存在だ。そして僕はこういった

「遅くは無いですよ、法律違反は精神的に参っていると言えばいいですから」

そうすると女性は帯剣した剣を抜こうとするが、甲冑が重いのかなかなか抜けない。

「早めに治療しておけば速く治ります、決して遅くは無いですよ」

「私はヴァルキュリーだ、決して精神的に困っている僕ではない」

「現実を受け止めましょう、貴方は相当な疲労が蓄積していますから」

「精神的におかしくない健常者だ」

最初の淡々とした冷たい寛治の無機質な声ではない、むしろ本気で話しているようだ。

「精神科も悪くないですよ、特別にお教えしますが、リスパダール内複液はなかなかの味です」

「そんな事どうでもいい、貴様は」

「貴方の妄想だと転生者の人だそうですね」

「妄想ではない本当だ」

「いえいえ、僕はれっきとした１９歳です、来年成人式ですが、厨二病の果てに現実と思っている貴方は傍から見れば痛い人です」

「私は精神患者ではないし、厨二病でもない、本当に神の僕なのだ」

「では証拠は」

「これから見せる、抜くのを待っておれ」

もがいて剣を抜こうとするが抜けず、女性は途方にくれたようなさしずめ、くじ引きで世界一周旅行に当たって喜んでいるときにリストラにあったＯＬの様だ。

その物悲しさは、これ以上は言い表せないようだ。

哀愁漂う痛い女性は帯剣の剣を抜くのを止め。

「転生の記憶が無いのか」

「残念ながらその設定には僕は当てはまらないよ」

「設定ではない！」

感情的になり今度は素手で殴りかかるが、フルプレートアーマーの女性の動きは緩慢で、避けてそのままコンビニに立ち寄った。

女性は追ってこず、やはり痛い趣味のコスプレ患者のようだ。

自室でテスト対策をしている途中で視界がブラックアウトした。

気づけば何所にいるか分からず、よくよく見ると一人の青年が倒れていた。

「おい大丈夫か」

「時間が無い、これを受け取れ」

クリスタルを渡され、またブラックアウトして自室に戻った。

一分程度のこと、混乱の中クリスタルが光膨大な知識が頭の中に入ってくる。

結局二日間寝込んだ。

さすがに知識の本流は止まり、今は頭痛薬を飲み夕飯のラーメンを作っていた。

こういうとき一人暮らしはきついです。

はっきりというが、賢者の石がもしあっても使い道に困る、何故なら知識はあってもそれを使いこなす知性が伴わない。

そんな訳で混乱中であります。

五連休のゴールデンウィークを自室で混乱を収めるために、ひたすら知識を理解していた。

知性を上げる薬品を作り、色々とありまして所持金が哀しくなりました。

おかげで大学の講義内容は大抵理解した、元々情報科に居たために、大学時代に新しいコンパクトで軽量なＯＳを作りベンチャー企業を立ち上げ、有限会社で本社をアメリカに置き、とはいっても電話番ぐらいだ。

ＶＲＭＭＯが流行りだし、大学卒行時ポータブルを発売した、値段にしてお手ごろな価格で有料サービスもお手ごろで、一億台用意した物は世界中で売れ切れが続出した。

数年でポータブルが主流になり、売れ行きは好調だった。

ポータブルの仕組みはクラウトでＯＳを使い、ソフトによって使

い分ける、数世紀先の技術だ。
問題は僕の寿命が来ていることだ。

秘術を使い子供に若返った。

遺書の暗号を解き、正式に後継者になった。
今度は有り余った資金で砂漠の緑化、学校建設、国境無き医師団の様な医療団体に援助して、ここが七姉妹都市であることを理解した。

学校は通信教育で済まし、高校に進学することにした。
近くの冬木高校に通うことになった上の下程度の高校、気に入ったのは色とりどりの並木道だ、常に何かの花が咲いている木が並木道に植えられている。
知性を上げるミーミルの水を飲み続け、頭はかなり良くなった、その結果的に超能力を実際使えるようにした、それが時間の巻き戻し、有る意味最強の能力で未来のことを知って巻き戻すタイムトラベラーができそうだが、自分まで巻き戻されるために限界は中学まで。

そんな能力からこの学校には2勢力がある、一つは外宇宙から現れた宇宙人のアンドロイドの様な者、超能力所有者、誰かが言った力は力を引き付ける法則らしい。

その中で二つの勢力が衝突しないのは創造者と呼ばれる天空大陸、海底都市、電子世界を作り上げる天才にして最強の矛、超能力者を率いるのは癒し手の最強の盾、アンドロイド達を纏めるのは上級ヒューマンタイプ。

三人の名は暁千春が超能力者の統率者、蜜月上弦が最強の矛、黒潮琴音が上級ヒューマンタイプ、新入生の入学式を終えると個人名の下駄箱に未来で使われるナノ積層合金の手紙を置いていた。

文科系の手芸部、今は廃部寸前で、四人が集まって初めて成り立つ部だ。

予想通り三人が来た。

「お前何者だ？」

「九年後から来た君たちと死闘を繰り広げた、とある企業の最高責任者だ、九弦一夜というな」

「未来から来たか、過去には戻れない法則があるが」

「おうちょっとした手品さ、最強の矛に最強の盾、上級ヒューマンタイプ」

「人前では言わないでもらえると手間が省けます」

「言わないさ、言ったところで誰が信じる？」

「九年後どうして居ました？」

「質問の多い下級管理職だな、すでに俺の知っている未来から変わったが、俺達は知らずと知らずに、色々と関わっていって死闘を繰り広げ、最終的には高卒後の大学も同じ、飲み友達になっていたな」

「そしてその未来は無くなったわけですか？」

「そうなる」

「こうして集まったからですか」

「その通り、こうして知れば死闘は無い、勘違いも無い、当事者同士が集まったのだから」

「それで、俺に何のようだ」

「非常に簡単最新作のポータブルＶＲＭＭＯＲＰＧをしようと思ってな」

「どういう意味です」

「九年後の未来を知りたくないか」

三人は考え込み、最終的にゲーム部に所属した、支給は明日なので、今日は解散。
生徒会の手続きを行い、学校の部活として、ゲームが市民権を持っていることにかなり嬉しい限りだ。

翌日まで二つの勢力から監視されたが、情報産業、娯楽産業の国際企業の為に、それほど厳しくは無かった。
翌日、朝早くから戦闘訓練を行い、最新作の支給品を貰って学校に向かった。

朝食は購買部で弁当を買い飲み物と一緒に食べた。

クラス分けは同じクラスに所属して、予想通り黒潮辺りが圧力をかけたのだろう。
ホームルーム後定番の自己紹介、これは誰もが傍から見れば可愛い暁、黒潮辺りが質問攻めにあったが、暁は無言で通し、黒潮はにこやかに簡素に答えた。
蜜月は傍から見れば冴えない少年Ａで、俺も代わらず授業が終わってからそれぞれの交流が始まった。
蜜月と俺はそれなりに仲良くなり、知識が豊富な者同士科学的にかなりマニアックな会話をしていた。
それは割愛しておこう。

放課後、部室に行くと支給されたポータブルと機材のヘッドマウスディスプレイマインドフェイスシステム、省略してＨＳを被りポータブルにソフトを差し込んでクラウドと繋がりオフライン状態で意識がゲームの中に入った。
チュートリアルが始まり、天空大陸、海底都市、海上都市、電子妖精界の開設を終え、移動コロニーの説明が始まり、最後には軌道上のステーションに転移した。

それぞれの外見で一生懸命説明書を読んでいる三人が居た。
煙草を買いローテクながら使い道も多い防水燐寸を買って、吸っていた。
三人が説明書を読み終えるのに、一時間程かかり、短時間で覚えたようで近くで煙草を吸っている俺に気づき、ひとまずパーティ構成して、リアルマネーをつぎ込んで戦闘機タイプ、人型可変式戦闘機タイプに変形する優秀な機体を購入してそれぞれに装備を選んでもらい、しっかり選んで吟味した後に好みのＡＩを搭載した。

三人ともＰＫを警戒して実弾系、エネルギー系の両方を装備してレーダー機能を底上げして対ＥＣＭ機能も底上げした。慣性制御装置もいれかなりの額。

機体のカスタムも火力、防御力、バリア機能、機動力に資金を投じて創り上げたどの機体も一見小型で華奢だが性能は一級品、さすがに特一級品まで操縦できる自信はないよう。
大型の重量級は１０メートルになるが、小型はその半分の５メートルで、実弾とエネルギー弾を発射するオラクルガンポット、内蔵する半径１０キロの高性能レーダー、両腕には右が予備バリア機構、左がメインのバリア機構、外装の４連装長距離大型ミサイルの二基、ナノ積層アーマー、予備武装のオラクルハンドガン、オラクルナイフ。バックパックに増加燃料。

飛行タイプ、最高速度Ｍ８、通常速度Ｍ２・５、巡航速度９８０キロ、歩行タイプ最高１８０キロ、通常８０キロの高性能、特にブースト点火時の最高速度は一級品以上。

大気圏内の水上を除いた場所なら何所にでも着陸できる。

鋭利的な外見に、重武装の装備から俺達は黙々とテストを繰り返

していた、その甲斐あって2時間でこつを掴んだ。

「今度は生身での武装だ」
「また買い物か？」
「それとも脱出した瞬間エネミーに食われたいか」
「分かった」
「分かりました」
「了解しました」

最初が暁、次が黒潮、最後が蜜月、生身の際のパイロットスーツの変わりに展開型アサルトスーツを買い、それぞれが好みの武器を吟味していた。

俺はオラクルツーハンデットソードの和風版の大太刀を購入し、九年後に世界中に広まっていたテラフォーミングの機械因子それから副産物としてテクノロジーマジック、通称テクノマジックのマグピットでやっと一人前の装備、さすがに最新作だけあって非常にリアルで未来的ながらファンタジック。

装備から、魔剣士の俺、銃士の暁、テクノマジシャンの蜜月、ガンマンの黒潮。

今度もテストで微調整を繰り返した、それで一時間が過ぎ、下校時間になった。

「ログアウトするぞ」
「意外に生身もいいな」
「ＰＫには遭わないでしょうが」
「帰宅ですよ、皆さん」

ログアウトして意識がヴァーチャルから現実に戻る。
それぞれ高評価を貰い開発者陣は喜ぶだろう、ついでに部費は下りるのだろうか？
三人に説明書という名の辞典を渡し、三人はうんざりした顔で受け取って帰った。
日誌を書いて、部屋の掃除、金庫にゲーム類を置いて３６桁の暗号を入力してロックする、後は電気を消して部屋に鍵を掛け帰宅した。
会社関係の書類が溜まり、のんびりとブレンドした珈琲を飲みながら書類に目を通し判子を押していた、さすがに今の新作が大ヒットしいるものでバージョンアップを繰り返すことになった。
翌日、いつもどおりモノレールで冬木高校まで向かい、購買部で朝食を買い教室で食べ終わり、日常になりつつある三日目が始まった。
いつもどおり日常は始まり、そして昼食のときすでにグループ化されていて、適応力が薄い、もといい作る気も無い蜜月と俺が一緒になった、昼食は購買部で弁当を買い自販機で飲み物を買う、教室で食べてゲームのネタで盛り上がった、ただ九年後この蜜月が作り上げる世界だけに苦笑しきれない。
体育で運動神経はさすがに黒潮には勝てない、アンドロイドとは違い人の体に宇宙人の脳が入っているだけだが、下級管理職ならそれなりに運動神経も良い。
鍛えたつもりだが、誰にでも得て不手は有るものだと負け惜しみを述べておく。
放課後、部室で三日目のログインをする。

序章ヴァルキュリー（後書き）

久しぶりに更新します、感想などがありましたらできれば書いてください、作者のモチベーションが上がります。
ちなみにタイトルから分かるように最初に出たヴァルキュリーです。
コメディ風に書いてみました

第一章はまってしまった

「外見が笑えるな」

首からしたは極薄の色々と困るパイロットスーツで、その上から傭兵の明かしてしてかなりの種類のある制服を着ている、女子の暁はミニスカート、黒潮はハーフパンツ、男子の蜜月はスラックス、俺は袴で理由は脚の動きを見られないようにしたわけ。

制服を着るのは殆どが傭兵で、傭兵とは言うが一般プレイヤー。

大太刀を背負い、マグピットを浮かして、練習中の未来での大気内の静電気を集めて機械因子によって電磁バリアを張り巡らす防御マジックを練習していた。

機械系、電気系に相性が良いらしく、好んで学んで、それなりに使えるつもりだ。

「でどうするんだ」

「どうするとは」

「この四人で行動するか、個別に行動するか」

「ふむ、盾さんはどうおもう」

「四人で行動するべきだろう、理由はそれぞれの目的、それと交流かな」

「なるほど、一理ありますね」

「では矛は」

「別に良いが」

「なら盾、矛、黒潮、俺のパーティになるが、リーダーは矛で良いか」

「あいにく脇役が好みでね」
「私も辞退する」
「残念ながら規制がありまして統率者にはなれないのです」
「必然的に俺か」
「一応今の機体を使うが資金がたまれば最初からやり直しだ」
「それが良いでしょうね」
「不満は無い」

こうしてリーダー確定し、ゲーム内で一級品の機体を乗り回し、空賊の賞金首を狙って四時間ほど狩りまくった。
こまかなステータスは閲覧できず、プレイヤーのレベルが試される過酷なゲームでチートしたわけだが、下校時間になり、いつもどおり戸締りをして解散した。
翌日は三連休で部活の為に登校し、部室で朝食を食べて部員を待った。
一番早く現れたのは黒潮で、制服姿の女子だ、いつも簡素でにこやかなために人気もそれなりにあっても、本人の行動原理は矛盾の存在だ。

「おはようございます部長」
「おはよう黒潮、なんだその主そうなバケットは」
「昼食です」
「確か料理の腕前は高かったな」
「未来から過去に戻る未来人としては、自覚が無さ過ぎますね」
「組織じゃない個人だ」
「てっきり組織ぐるみかと疑っていましたよ」
「悪いな、個人的な能力で」
「いえ、医療産業にはどうなされますか」
「もう少ししてからかな、俺にも都合があってね」
「人間で言う神に与えられた試練ですか」

「そう突っ込むなよ、誰もが万能ではないのだ」
「では二人を待ちましょう、珈琲でいいですか？」
「ああ」
「珈琲の好みは」
「バーボン珈琲」
「香りがいいですからね」

用意していたらしく、バーボン珈琲をバケットから取り出し、珈琲メーカーを準備して入れる。数分間の沈黙後、珈琲の匂いが良い朝を演出している。

暁に比べ黒潮は平均的なスタイルに美形の顔立ちをしているが、今まで告白されたことは無いらしい。

部室のドアが開き暁と蜜月が入ってくる、黒潮が珈琲を淹れ全員分用意する。

「いい香りだ」
「そうね」

それぞれの席につき珈琲を堪能する。

「でポータブルは」
「急がば回れ」

珈琲を堪能した後、金庫から取り出す、時価にして二十万はする高級品。

機具をセットしていつもどおりログインする。

軌道上ターミナルのロビーで、賞金を山分けして機体を買える額になるが、相当恨みを買っているために当座は先送り、個別に買い物に出た。

唯一の前衛としてばバッシグを取り捲り、アクティブは学ぶしかない、技もそれなりに覚え、平均レベル２０ぐらい、刀鍛冶を探して放浪していると人気の無い通りで鍛冶屋が有った。

「すみません、大太刀を作って欲しいのですが」
「あいよ、でどんなものだ」
「テクノマジックと相性の良い頑丈なもので、切れ味が良かったらなおいいです」
「注文の多い客だな、まあいいだろう、ちょっと待っていろ」

鍛冶屋は露天を閉じ、後ろの工房に入って行った。
待つこと三時間、出来上がったらしく現れ、長さ１５００ミリ、幅３０ミリの大太刀が見せられた、値段は言い値で払うと、鍛冶屋は苦笑して色々とスロットに取り付けてくれた。

「兄ちゃん、ちゃんと値切りるもんだぜ」
「鍛冶屋の良心を信じていますから」
「修理代は半額にしておく、いつでもきな」
「ありがとう」
「いやいや礼を言うのはこちらのほうだ、相場の三倍だからな」
「また打ってもらうかもしれませんね」
「そりゃない、そいつはこのゲームで作られた一番頑丈な純鉄で作られている、本来なら産業革命だ」
「現実に研究されているとか」

それから少し話し込み、防具の良い店を紹介された、別れを告げ、防具の店に向かいその店で紹介状を渡し、頭からつま先までアサルトスーツの部品一つまで作ってもらい、ペンダントに収納した。

≪もう終わったか≫
≪全員終わったみたいだな、ちなみに三十分前から待っている≫

パーティーチャットで会話を終え、待ち合わせの店に向かう、丁度通りかかったところで珍しい召喚系の情報獣が居た、値札を貼られ、購入すればいつでも使役できる、今の所人気は無いが、採用されたシステムだ、未来では矛盾の会社の専用品になっていた。

「兄さん買って行かないか」
「遠慮する、ソロじゃないものでね」
「そうかい」
「で値段は」
「三万円だよ」
「十倍払うから、電子権利を全部くれないか」
「まあ相場の倍か、いいだろう」

トレードを成立させフェンリルと名づけられた大型犬を上回る二メートル近い高さに、人が乗れるほどの大型獣、レベルは無いが覇王の威厳を持つと名前の上に有るエネミーレベルで例えればハ最上級のワンランク下の神格レベル、ちなみに今から向かう場所はレベル中堅レベル

「よろしくな、フェンリル」
「ガウ」

早速収納して、電子化する、そして相場の二倍の為に大量の高級餌を渡してくれた。

「やっと来たか、オフるぞ」
「昼食です」

「ジャスト12時だ」
「じゃリアルで」

ログアウトすると、機器を取り外し、三名が戻ると黒潮が珈琲を温め、バケットの手料理の大量のサンドイッチ、バーガーが有った、時間をかけず大量に作れるが四人分としては多めだ。

暁が二種類を取り、一口齧ると顔つきが変わり、黒潮にレシピを聞いていた。

それが起爆剤になったのか、蜜月が食べ始め俺も食べてみたが、まさに美味、サンドイッチとバーガーを交互に食べ、黒潮も食べ始めた、暁は悔しそうな顔で食べ始めた。

食べ終わるといつの間にか三十分立っており、バケットは空だ、黒潮がバーボン珈琲を淹れ香りと味を堪能して13時まで休むことに決定した。

黒潮と暁はガールズトーク中、蜜月は備品のソファで寝ていた。

十代の胃袋はすごいと思う。

このままの生活を続ければ確実に太るが、朝かなりカロリーを消費する戦闘訓練を受けているので、かなり筋肉にいくところ。

アロマに火をつけて一服していた、基本的に非常識の塊のような部員だけに関係なかった。

アロマと珈琲を堪能していたら13時になり、始まる。

ログインした先では店の亭主が不機嫌そうににらんでおいる、その不機嫌さをなくすために消耗品を買い込んだ。

「最初は天空大陸だったっけ」
「そういうことだ」
「じゃ行きましょう」
「ちなみに転送装置が無ければ行けないぞ」
「じゃ案内して」

仲間と共に転送装置のところに来た、誰も居らず人気が無いようだと思うが、ハイレベルの為に誰も近寄れない前人未到の領域なのだ。

転送装置から転移して、天空大陸に降り立つ、帰りは無料なので、現在の人気の無い都市部から近くの草原に出た、本来は公園だが、かなりの荒れ放題になっていてエネミーの巣になっている、全部アクティブなのできつい状態になるのは必死だ。

エネミーに反応してペンダントが展開される、甲冑のようだがステータスの全てに加算される優れものだ。

最初に遭遇したディノサウルスの一群。

「気合入れていくぞ」
「レベル高！」
「我々も十分チートですから適切でしょう」
「だべっている間に来るぞ」

テクノマジックの氷結系、液体窒素の槍群が数十現れ、天空大陸の為に零度近くでマイナス１９６度の槍がディノサウルスを襲う一

群に一撃ずつ当たり、氷結系特有の氷の塊に包まれる、近くの機械因子が結合して封じたものだ。

残る二人のマテリアルライフルで頭部を打ち抜いていく、前衛として突進して行動不能中のディノサウルスに電気系の電磁バリアを大太刀に付与して直撃させる、効果覿面で一撃で焼き焦げる、二頭目も同じようにぶつけると一撃で倒れた、オラクルライフルは凄まじい勢いで削っていき、俺が五体を倒したところで初戦は勝ちを収めた。

仲間のところに戻り。

「テクニカルポイント、残弾は」

「十分だ」

「五百発単位で買えるから、有り余っているわよ」

「同じくです」

「一応言って置くがオラクル系はテクニカルポイントを消費するぞ」

そういうと二人も確認し、残りのゲージが少ないといったので、自然回復強化の回復薬を飲ませたら、薬の味といった。薬なのだから当たり前だと思うが、突っ込まないようにする。

「そういえば、こんなものを買った」

腕輪を蜜月が全員に渡す

「なんでも熟練度が上がりやすくなるそうだ」

「ふーん」

付けてみると特にこれといったバットは無いようだ。
三名も装着し、そうすると

「あれ自然回復速度が低下したけど」
「たぶんこれは荒行の腕輪、それ以上は分からないけどね」

それから休憩した。

十分疲れを取ると、エネミーを駆逐していった、攻撃力も半減していたが、何とか持ちこたえた

第一章はまってしまった（後書き）

次は紹介です

第二章紹介

九弦一夜、時間を戻る能力を持つ、一度賢者の石の知識を受け入れ、その製造法を知っているように桁違いの知識人ながら、十九世紀の技術者が電子機器を知らないようにその知識は限られた範囲でしか使えない。

身長１７１センチ

体重７０キロ、

国際企業のオーナー兼最高責任者。

装備及び今までの経歴

ＶＲＭＭＯＲＰＧの世界ではその平凡な外見とは裏腹に人型変形機の凄腕、スコア３００を超える、リアルマネーを換金したために、現在は億単位の額がある、ちなみに為替相場は１／１０００、装備も高値で本来なら初心者クエストで装備を整えるのがセオリー。

装備

マグピット、一級品のテクノマジック補助に特化した演算機兼その他もろもろの補助。

刀匠の正宗製作のテクノマジックと相性の良い純鉄で作られた大太刀を持つ、カードはセットで耐久力、切れ味、テクノマジックのボーナス付き。

ペンダントはハッピーセットの幸運値を引き換えに他のステータスを倍加する。

腕輪は荒行の腕輪、全員は知らないが、一等神格の腕輪でその熟練度の上がる率は２０００％。すべてのステータスを半減する。

召喚の情報獣を持つ、フェンリル神格レベル。

蜜月上弦

矛盾の矛、現実で最強の攻撃力を持つ破壊の申し子、その能力を活

用せず、九弦により衝突は防がれ、九年前とは違い同じゲーム部に所属している、ひそかに裏家業をして有名な技術者として知られる。
身長１７０センチ
体重６０キロ
現在は学生
装備今までの経歴
人型変形機の時は一撃離脱を得意としてスコアは２００、それでも驚異的なスコアになる。
テクノマジックロット、一級品のテクノマジック全般のボーナスを与える、テクニカルポイントを倍加する。
ペンダントはすべてのステータスに＋１０％
腕輪は全員共通。

暁千春。
矛盾の盾、現実で最高の防御力を持つ、医術に長けた飛び級で医学部を卒業した現在は年齢の関係から高校生。
身長１６５センチ
体重５５キロ
装備今までの経歴
人型変形機の時はドックファイトを得意としてスコアは４００、一番多く倒したが、その殆どがガンポットの一撃。
装備
一級品のオラクルマテリアルアサルトライフル、通称オラクルライフル、五百発＋手榴弾＋地雷ワンセットの五セットを持つ。
アサルトスーツは機動力を特化した珍しい紙装甲、速度関係に三倍化マグピット、付与系に特化した演算機その他もろもろの補助系を担う。
腕輪は全員共通

黒潮琴音

外見はいいが、中身はヒューマンタイプのバイオアンドロイド、宇宙人が確認した未知なる存在に興味を持つ勢力から創られ送られた存在。様々な特技を持つ、宇宙人から見てこれくらいがベターと判断された下級管理職の実質高校の
身長１６０センチ
体重４９キロ
装備及び経歴。
人型変形機の頃は支援に徹してかく乱を続けるためにカオスの異名を持つ本人が知らないところで呼ばれているので特に意味は無い。
スコアはゼロながら一風変わった熟練度を持つ。
唯一テクマジを使わない、その為に装備は贅沢だ。
オラクルライフル、オラクルハンドガン、レーザーカッター、手榴弾、地雷、罠、毒、解毒剤その他もろもろの装備類、消耗品類を持つ。
弾薬量は二種類とも２５００発。
アサルトスーツは材料を買い集め、独自に防御力を特化したタフなスーツに全属性に＋１の耐性を持つ、残りは平均的なもの
熟練度も他の三人と違ったところにも上がっている。
腕輪は全員共通。

第二章紹介（後書き）

次は天空大陸の草原戦の続きです

第三章、賞金首

「休憩できないぞ！？」
「仕方ないだろう、銃声が響くのだから」
「銃の欠点ね」
「不味いですね、ライフルの弾が品切れになりそうです」

数時間戦い続けている、あの一度の休憩中、エネミーが集まって来た。理由は銃声だ。

四人で四方を背合わせ、全力で戦っている、幸い減る傾向にあるために数としては減っていくが、質の面では上がっていっている。

都市部まで接近した頃にはライフルの弾切れ、レーザーカッターを持って黒潮は戦っている、　その捌きはプロ顔負けで天才的な体術と組み合わされると死神のように舞う。

オラクルハンドガンでセミオートマチックの拳銃で、ひたすら撃ち続けている盾もいるが、それ程優れた能力とはいえない。

テクマジをひたすら連発して氷結系から幅広い無音マジックを解き放ち、確実に支援になっている、その才能は本領発揮のように消耗系を消費しながら戦い続けている。

俺は大太刀に電流を纏わせ、固定されているエネミーをひたすら当たる瞬間に電磁バリアを形成し、それで斬るというより電流で神経系を破壊して即死させている、そういった意味で体術はないものの、黒潮並に戦い続けている。

ここまで戦えたのは熟練度が上がりＨＰ、ＳＰ、ＴＰが確実に成長しているからだ、その為に自然回復量の激増でもうここで戦うには適した段階に至っている。

「しゃらくさい」

Ｘ線を収束させた伸縮自在な大太刀の遠距離用のテクマジに切り替える、前方を薙ぎ払うと一気に半円形の空白が生まれた、ついでに草原の草も焼ききれた。

「最初から使えよ！」
「生憎、得意じゃないのだよ」
「振動がするぞ！？」
「お出ましだ、賞金首のエネミーファイアントチャリオット」
「弾切れよ！？」
「他の武器で戦うだけだ」
「違うな、二人には都市部から転送して、弾薬を補充してくれ」
「それだけ強敵というわけですか」
「そこらのリーダーレベルの数段上だ」
「行きますよ、暁さん」
「ええ、ふんばれ」
「さて九弦、弱点は」
「耐性のない銃弾系だ」
「やれやれ」
「テクノマジにも耐性がある」
「そうか、死亡フラグが旗揚げだな」
「実際死ぬわけではないが相応の激痛を受けるから覚悟しろ」
「その前に私達が戻る、折角の賞金首だ、踏ん張って逃すなよ」

暁なりの変化球気味の優しさだった、要すれば死ぬなよ。
黒潮は暁と一緒に都市部に入っていった。

「銃の長所は殆どの敵に通用することだ、欠点も多いがそれを帳消しにする長所があるわけだ」
「その欠点を補うだけのものを持ち合わせているのが黒潮か、しかしあの動き戦いたくないな」
「実際には奇襲以外では無理だろう、最強の矛は全てを灰燼に帰す」
「そうだな、我が宿命もまた全てを破壊することにあるからな」
「そういう方向性には無いだろ」
「その通り、今で、いや戦う気だったが、こうして遊ぶのも楽しいものだ」
「ちなみにポータブルでも痛みは感じるぞ」
「ショック死はないよな」
「無いな、それ程の激痛は無い」
「御出でなさった様だ」
「時間稼ぎを行なうか」
「足止めに徹しよう」
「採用」
「お、珍しくリーダーのような風の吹き回しだな」
「少しロールプレイに徹するよ」

地響きを立てて現れたのは古代の戦車に乗った趣味を疑われる造形美のような石版の彫刻だった。

「作戦立案だ」
「前衛が立ち塞がり、後衛が支援する」
「そういえば忘れ物があった」

召喚用機器を使いフェンリルを具体化させる、石版は鞭をいれ突撃してきた、それを俺と蜜月は散開して両脇に移動する、フェンリルはその突撃を受け止め、反撃にファイアーブレスを吐き、彫刻の耐久力が微小に減った、次にアイスブレスを吐き熱膨張を利用してクリティカルを与える。

石版は突撃を繰り返すが、今度はアイスブレスを吐きその猛烈なブレスで突進が止まる。

吐いてはテクノマジの医療系を使い回復し、熱膨張を利用した戦術を繰り返す。

いくらか時間がたった頃、二人が戻ってきてフェンリルを見て驚くが、即都市部から狙撃する俺と蜜月は暇をして構えていた。
まさに覇王のように圧倒的な力を見せ付けた。

石版が銃弾で砕かれＨＰ類が二倍近く上がる。

フェンリルに餌をやり、仲間が集まる前に召喚機器に戻した。
都市部に入り二人と合流する。
リアルな都市部のゴーストタウン名だけに足音だけが良く響く、空も蒼く、標高が高いために酸素量も不足気味だ。

戦闘中酸欠にならなかったのはアサルトスーツにあるのだろう。
都市部は酸素量が通常で、何とか息苦しさから開放された。

「先ほどの獣は」

暁が尋ねる。他の二人も疑問符だ。

「情報獣だ、使役者に関係なく金さえ出せばハイレベルの獣が使役できる」
「しかも知恵があるわけだ」
「ただ忘れていた」
「まあいいさ、あの獣に頼っていたら熟練度が上がらない」
「それよりステーションに戻ろうぜ、腹が減った」
「そうだな」
「便利なアイテムがある」

暁が使うと一瞬でステーションに戻り、そしてログアウトした。

「ゲームして初めて猛烈に疲れた」
「当分は動きたくないな」
「私は大丈夫です、九弦さんも苦しそうですね」
「座りっぱなしできつい、少し動いてくるわ」
「ではバーボン珈琲を良く練っておきます」
「ありがとうな、黒潮」
「いえいえ、正直楽しかったですから」
「そういわれると不思議な気分だよ、だが我が社の製品を今後ともよろしく」
「はい」
「お前ら元気だな」

機器を外し、文科系の部活棟でトイレに行き、用をたすと武術部が使う武道場で体を動かす、武術部の顧問が相手をして互角に渡り合った。

「鍛えているな軍隊式か」
「そちらは八卦の系統ですね」
「またこい、学生相手と思っていたが、これは楽しめる」

「ええ」

体が程よく解れたので部室に戻った。

「汗臭い」

「今日は解散だ」

「バーボンが残っていますよ」

「堪能してから解散だ」

「餌に釣られるなよ」

「バーボンは手に入りにくいんだ」

黒潮が柔和な笑顔で珈琲を淹れる。

よく練っただけに美味さは最高だった。

「何か外で騒ぎがあるようですが」

「ん？」

部室の唯一の出窓から除くと武道系の顧問が集まっていた、文科系の顧問と揉め事になっていた。

「ありゃ武術部の件だな」

誰もが不思議そうにして疑問を口にする前に二回ので窓から飛び降り利他、地面が芝生の為に特に外相は無く高さも無かったために特に痛みも無い。

「君か、久遠と互角にたたったのは」

「全員順番よく相手しますよ、ただし武器を使う相手には木刀を貸してください」

その後三時間に渡る武道系の顧問と連戦し互角か、勝ちを収めるか10対1の割合で勝ちを収めた。

武道系に力を入れている学園だけに、そのレベルは高かった。

武道系の部員から男女問わず兄貴と呼ばれた。

部室に戻る頃二人は寝ており、黒潮がバーボン珈琲を淹れてくれた。

一口に入れるとその美味さが口に広がる。

堪能して味わった後、二人をたたき起こし、解散した。

翌日の暁に起き、昨夜戦闘訓練を長時間行っていたために体中が筋肉痛で悲鳴を上げていた、朝早く痛む体で柔軟体操をして痛みを取り、朝練を行い久しぶりに汗が噴出しまた柔軟体操をしてシャワーを浴び、衣類と木刀を持って登校した、朝練の最中の武道系めぐりをして特に武術部と剣術部は顧問と摸擬戦を行ない互角に戦った。

武道系の武道場のシャワーで汗を流し、制服に着替えると部室に戻った。

全員が集まるのが九時で、朝食は暁のことだから作ってくると思い腹の減った胃袋にカフェオレを流して我慢した。

部室に全員が集まると暁が朝食を用意して黒潮がバーボン珈琲を淹れ、豪勢な朝食を食べて三人が驚くほど良く食べた。

「どうしたのです」

「太るぜ?」

「幾らなんでも食べすすぎは良くないぞ」

三人の心配は意味が無いことを告げた。

「武道系巡りね、そりゃ腹も減るわ」
「準備に三十分、今度は最初のところから始めるぞ」

ログインする準備をして、主にＷＣをした後にログインした。

最初のロビーから最初の街の刀京に転移してクエストをこなし、最初のエピソードをクリアした、はっきりというと昨日の事もあり楽勝過ぎて笑えなかったもらえる円も少なく、小銭程度だ。

午前で刀京のクエストを終わらせエピソードを二番目に持ち込み、昼食でログアウトして食事と体を解し、珈琲を堪能した後にＷＣをした後にログインした。

エピソード２は日本全土で転移で巡りながら攻略して微々たる円と熟練度を貰いエピソード３は大陸で主な主要都市を巡り一日でエピソード１０まで攻略しやっとアフリカに入り、一日は終わった。

武道系巡りをした後に部室の清掃から戸締りをして金庫にいれ帰った。

翌日も昨日と同じエピソードを進ませ、アフリカを攻略した後に欧州をクリアしてエピソード３５、さすがにエピソード３０程度からは歯ごたえがあった。

月曜日は丸一日メンテで、アップデートもあるためにかなりの作業だ。

月曜日、クラスに入ると武道系のクラスメイトから兄貴呼ばわりされて噂も広がっており、人は見た目によらないと噂された。

蜜月はノートブックでテクノマジの研究をしていた、将来役立つか微妙だ。

放課後は武道系巡りをして、部室で珈琲を堪能して、休暇のようだった。

翌日も朝練の武道系巡り、シャワーを浴びてジャージから制服に着替え、バックには着替えが入っている。

武道系の部員から顧問が摸擬戦のお誘いがあると話、昼食の時間蜜月と一緒に巡った。

さすがに最近全力を出し切っているので読まれ始め、他の武道系から教えを受けた。

特に武術部は大歓迎顧問がマンツーマンで八卦掌を教えてくれた、代わりに軍隊式の格闘技を伝え、顧問の久遠抱月は感心していた。

ゲーム部の部長の為に勧誘は受けなかったが、本来なら勧誘されるだろう。

放課後までそれなりに賑やかな話をして、俺を通して蜜月は友人が出来た。

嬉しい誤算だ、未来まで友人が少なかった蜜月に友人が出来るとは。

放課後、珈琲を堪能した後ログインする、ゲーム部だからゲームをプレイするのが活動だ。

生徒会には世界中の人々と交流するためと提出した。

エピソード５０までクリアして、やっとビギナー卒業だ。

翌日、またしても放課後ログインして若葉マークがはずれ、職につくことが可能になった。

傭兵アカデミーに強制転移され、職を選ぶことになった。

色々と組合してつけるので、メインを剣術家、サブを技術魔術師、つまり変わりは無いが合成職の技魔志士になった。

蜜月はメインを技術魔術師、サブは技術魔術師で技術導師に上位職に付いた。

黒潮はメインをガンナー、サブは武術家を選び、東方兵士の合成職になった。

暁はメインを技術魔術師、サブをガンナーに鞍替えし魔弾メインの魔弾銃士の合成職になった。

剣術家と武術家は武器を似たようなもので、体術の使い道が違う。今までの熟練度からバッシグスキルを網羅して、前衛職としてはかなりのレベルになる。

他の面々もバッシグスキルを網羅して、やっと序盤をクリアした。

それぞれの職の熟練度が二倍になり、成長率も高まった。

アカデミーで職の講義を聴き、ステーションに戻ると大半のビギナーから珍しそうに見られた。

ログアウトして今日は解散になった。

珍しく早めに終わり、清掃戸締り片付けを行なって放課後、もう六時を過ぎているので四人で夜食の焼肉屋に入って食べ放題の四人分の八千円を払った。

「これから一人前だけど、最初に行った所はハイレベルのところだったのね」
「そういうこと」
「・・・・なるほどね」
「装備と技量で助かったわけか」
「そうなるね」
「やれやれ」
「でこれからの方針は」
「お使いクエストは終わり、様々なクエストがある、それにビギナーのワールドから一般のＰＫ可能なワールドに転移する」
「思ったんだけど私達の参加料は誰が払っているの」
「部費だ」
「ゲーム部に部費を払うのは少し考えられないわ」
「いや建前は世界中の人々と交流するとあるから」
「ある意味そうね」

焼肉を大量に注文して元を取る気満々。

食べながら説明を開始した、それぞれの職業の特徴、長所、短所、そろそろドロップアイテムを売りに、賞金を貰いに行く事が決定した。

はっきりというと合成職は上位職に勝らない伸び率、両方使える反面その分大器晩成型。

上位職は上がりやすい、スキルも豊富、アクティブは無いがバッシブはかなりの量がある。

アクティブは自分で学ぶしかない。
焼肉を食べまくり帰る際に出入り利禁止が言い渡された。

さすがに十人分を食ったのが間違いだったようだ。
自宅に帰ると一戸建ての賃貸住宅の前に高級車が止まり役員の一人が待っていた。

「会長、お話がありまして」
「俺は無い、首になりたくなければここに来るな」
「申し訳ありませんでした」

といって車に乗り込み帰っていった、あの役員はポータブルで課金システムを変えようとした課金主義だ。

課金主義を取らなかったからメガヒットした理由が分からない、出世欲の強い男だ。無能ではないが、いずれは変える必要がある。

ポータブルＶＲＭＭＯはゲーム業界で異例の二十億を売り上げ、未だに売れ続けているハード機なのだ。

ソフトは好みによるが、現在の最新作が十億を売り利上げたメガヒット作品なのだ。

最新作の名前はフォーチェー、幸せの紡ぎ手と呼ぶ。

自宅で夕食を作り、一人で食べ、勉強は未来から戻ってきたので学業のほうは完璧だ。

書類に目を通し仕事を手早く済ませ、あの役員からのアイテム課金システム導入は却下した。
有限会社だけあり、利益は即俺のもの、ただ一年で1億あれば十分なので、社員の給与や福利厚生、退職金、退職後の年金、開発の投資、後は役員が発展させている。

戦闘訓練と他の武道系から組み込んだ自己流の格闘技を鍛えてシャワーを浴びて寝る。

第三章、賞金首（後書き）

感想名とをお待ちしております、実は主人公のせいでエネミーが集まった結果です、文章はストック切れです、誠に申し訳ありませんが不定期更新です。

第四章ステーションでコーディネイト（前書き）

なかなかねたが浮かびません、愚痴はここまでにしてどうぞご賞味あれ

第四章ステーションでコーディネイト

ロビーで知り合いの刀匠のところに仲間を連れて向かった。
刀匠は仲間がいることに驚き、職を告げると、黒潮のレーザーカッターをオリジナルの品に換え、大太刀を見て相当耐久値が減っているらしく、一体どうしたと聞いてきたのでありのままに話した。

「そりゃまたセオリーどおり動かないな」
「おかげでエピソードは終わって、最後のレットドラゴンは笑えなかったよ」
「しかし、これだけの業物をこうも無制限に扱っていれば下手したらロストだぞ」
「五木さんの品だよ、信頼できる」
「そういってもらえると嬉しいな、マグピッド、テクノマジックロットのほうも造ろうか」
「頼みます」

ついでにドロップアイテムを出すとかなり驚いて相場が無いほど初らしく、四時間かけてマグピッド、テクノマジックロットを作ってくれた、料金は言い値で払い、相場らしい。
それより支払われるドロップアイテムの料金は億単位。

「よろしいのですか」
「お嬢さん、今までに無い品だから相応の額だと思うから渡したのだ、金は受け取っておけ」

ちなみにＮＰＣに売り払ったら十分の一だ。
ドロップアイテムは全部素材になるために主な資金源になる。

銃の露天商を紹介され、二人分の装備を買いに行った。そこで部品から作り直したカスタムのオラクルライフル、オラクルハンドガン、オラクル専用弾、マテリアルアサルトライフルの軽量を主にして限界まで改造したオラクルライフル＋１０、オラクルハンドガン＋１０になった。値段は法外だが腕は確かだ。

４０００グラムまで減量したオラクルライフルは二人にとって使い勝手がいいらしく、職から専用店を紹介された。

合成職の店で制服のカスタムを購入し、ペンダントに収納された防具も専用にカスタムしてもらった、やはり法外な額を請求され支払った。

知り合いの防具屋の露天商のところに蜜月が行っているが、やはり時間がかかる。

待ち合わせの店で黒潮が紹介しただけあり良心的な値段で消耗品を購入し、アロマを補充すると、非難の目で女性二人から睨まれたが、外に出てアロマを吸っていた。

アロマぐらいは偏見の目で見ないで欲しいものだと思っておく。カスタムの際に散々着替えに付き合ったのだから煙草でもないので吸っていいと思うが、女性陣は匂いが嫌いらしい、というより社会の風潮で喫煙することが禁止にされかねない。

今日は生徒会に呼び出しを食らいそうだと思っていた。さすがに下校時間を過ぎているそれも大幅に。

≪やっと終わった、今から待ち合わせの場所に戻る≫

≪生徒会から呼び出しを食らうのは俺なんだが≫
≪すまん≫
≪いいさ仲間の事だ、一応部長でリーダーでもあるからな昼食ぐらいはおごれよ≫
≪悪い≫

急いで戻ったらしく息切れしていた、元々前衛職でもない体力、スタミナ、テクニカルポイントはステーションの初期値になるために工房にでも篭らない限りは知るのも一苦労なのだ。そう思うとオラクルマテリアルアサルトライフルやその他もろもろの装備を持っていた二人の重量は相当行くと思う。

アロマを一箱吸い尽くし、店内に戻ると二人が睨む、近づくと匂いが無いことに気づき。

「あれだけ吸って臭いが残らないのか？」
「のようですね驚きです」
「おいおい、一応未来的なステーションなんだが、それに匂いが残ったらエネミーを呼び寄せるだろ、だからステーション以外では吸わない」
「なら先ほどから失礼しました」
「すまなかった」
「いやこれから来る厄災については回避不能だから、俺限定で」
「悪かった」
「じゃログアウトしよう」

ログアウトするとＨＳを取り外すと、生徒会の風紀委員が待っていた。

「理由は分かっているな」

「はいはい、下校時間を大幅に過ぎた始末書物ですね」
「分かっているなら仕事を増やさないでくれ、おかげで電車に遅れそうだ」
「よし後片付けは任せた、機材は金庫に入れてくれ、自動的にロックがかかる」
「早く歩け」
「校内の競歩ですか」
「とにかく早く歩け」

二年生の先輩の風紀委員は、相当お冠らしく温厚そうな顔が般若のようだ。
生徒会室まで案内され、競歩の様に走る事無く風紀委員の切れしていた。
「ここが生徒会室だ、これで僕は帰る」
「お疲れ様でした、すみませんね先輩」
「さすがにブレイカーは落とせないからな、今度差し入れでももってこい」
「寿司でいいですか」
「飲み物も」
「了解しました、待ってもらいありがとうございました」
「君なりに反省しているようだ、だが同じ事はするな」
「申し訳ありません」
「ならいい」

風紀委員の先輩は近くの階段を下り始め、生徒会室に入った。

「ゲーム部部長九弦一夜です」

メガネをかけた会長がノートパソコンでひたすら執務に追われている。

「あのー」

「少し待ってね、昼寝したら送れちゃって」

天然気味でおっとりとした感じの二年生の会長だった、その横で女性の副会長が必死に執務に追われていた、二人の先輩の女子は問題児らしい。

「ツムギちゃん終わらないね」

「そうね、お互い昼寝したのが問題かしら」

「お茶入れますか」

「ごめんね、頼めるかしら」

お茶を作り、適切な温度で普通茶を淹れ、それを湯のみに入れて二人の近くに置いた。

さすがに四月だけあって海上に作られた都市は寒い。

深夜になるまでお茶くみを行なって夜食に寿司を取って三人で食べ、二人の仕事が終わると自己紹介が始まった。

「生徒会長の牟岐です」

「副会長のツムギです」

「あのーゲーム部部長の一年九弦一夜です」

「本来なら始末書物だけど反省しているみたいだし」

「本当はお茶くみに差し入れまでしてくれたから、怒る気がなくなったわけ」

「そうですか、しかしもう23時ですよ」

「え?ドラマ見逃した!」

「先代は堅物だったけど、こういう感じでしょう、他のメンバーが一生懸命してくれて助かるのよ、今日のところは帰って良し」

「では失礼します」

「ありがとね差し入れ」

「いえ、明日辺りにもう一度改めて差し入れします」

「やった!」

「食いつくのはや!」

「・・いいコンビだ、ボケ役突っ込み役、両方がしっかりと成立している」

こちらにはお構いなしに、ボケと突っ込みを繰り返している先輩の二人を残しして帰り、さすがに戦闘訓練を自己流で行い、元々の格闘技から東方拳法風になってきた。
さすがに三十分で切り上げ、眠る準備をして早く寝た。

六時間も無い五時、暁に起き人知れずトレーニングルームで筋トレ、それぞれの格闘技の訓練法、知識としてある様々な氣の使い方を隠してクンフーを積んだ。

五時から七時まで三時間みっちり行い、子供時代から鍛えているために、細く柔軟で弾力のある筋肉が作られていた。

東洋人は筋肉太りをしない、ただ長年鍛えていると筋骨隆々になるのもある。

ボストンバックに着替えを入れて、朝練に向かった相変わらず武道系は朝早くから訓練していた、武道系を巡り、専用のシャワールームで汗を流し、ジャージから制服に着替える。

近々武道大会があるらしく、この冬木高校の所属する大学部門、高校生部門、中等部部門、小学生部門を行なうらしい。

生徒会に放課後差し入れの電話を要れ、渋ったので一桁上乗せして振り込んだ。

「でどちらに出るんだ」

「でねぇよ、一応文化系だぜ」

ホームルームの前に武術部の友人伸銅影路（シンドウ・カゲミチ）と蜜月が興味心身で聞いてきた。

「兄貴が出ないのは面白くないな」

「生憎文化系なんだよ」

「兄貴出ようぜ」

などと押し問答をしていると黒潮が説得し伸銅は渋々引き下がった。

そんな事がしばしばあり、誰が兄貴を獲得するかの賭け事すら成立していると噂に聞いた。

俺としては経歴がばれるので絶対に参加しない。

様々な勧誘を断り放課後、疲れた足取りで部室に入る、金庫から

機材を取り出し残る面々も入り、生徒会からあまり物として四人分の寿司があった
一応食べ、昨日の事もあり四時間厳守が決まった。
ログインして仲間を確認する。

「今までのは初心者用クエストだ、これからは正式な傭兵として食っていくことなる、まずは賞金を受け取りに行くぞ」
「傭兵というのがなんというか退廃的だな」
「しかし、便利な呼び名です」
「冒険者と呼ばれるよりマシね」
「今までのお使いクエストとは違うぞ」
「どう違う」
「非常に簡単ＰＫ可能、仲間にも攻撃が当たるつまりミスは許されないわけだ、そしてクエストは自分達で見つけるしかない、攻略スレを見ることをオススメする」
三人が操作して画面から攻略スレを閲覧する、ただ大した事々はかかれていない、俺達レベルのプレイヤーが少ないからだ。
それに職に就いたばかりのプレイヤーのほうが多い、要すればビギナーの頃に熟練度を上げすぎた結果ハイレベルに成長した。

「大四聖天なんてどうだ」
「面白そうですね」
「儲かるの」
「おそらく天空大陸並に強い、そして広いから本来なら機体に乗っていくところだな」
「誰かに運んでもらうのが一番ね」
「でしたら知り合いがいます」
「へー、以外に交友関係が広いな」
「いえ声を掛けてきたから無視して歩いたら掴んできたので手を掴みその場でへし折りました、悲鳴が哀れなので骨をくっ付けまし

た、それから医者のところに連れて行き、その際に運送屋だといってました」

俺を含めて三人が無言になる、骨をへし折ってって過激すぎないかと思う、恐らく運送屋はトラウマになっていることは確かだ。

「ナイス、そこ行きましょう」
「おいおい、幾らなんでも脅迫紛いだろ」
「いや行こう、本人がどう思っているかによる」
「では決まりです」

プレイで可能だったかと思い起こすが、無意識ならとんでもないことだ。
無意識でやったなら、怒らせれば死神降臨だ。

ロビーから近くの港にその男は居た、黒潮を見て恐怖で腰を抜かした周りの者が不思議そうにしている。

「運び屋さんこんにちは」

「あ、ああ、こんにちは、何か御用でしょうか」

「運び屋に用事があるとすれば運んでもらうのが用事と思いますよ」

「仕事が入って、いえ喜んで運ばせてもらいます」

「ありがとう運び屋さん、だけど触れたら」

「もちろんです」

首をがくがくして運び屋の青年は首を振った。
それから行き先を告げると１０万円が要求されたが支払い、現実では１００円に相当する。
おそらく燃料代だろう、本来なら数十倍はすると攻略スレに書かれていた。
軌道上ステーションから大気圏突入し、そのシベリアの大地にその場所はあった。
前面雪景色、むしろ永久凍土、ある意味清潔だ。

「降りてくれ、これ以上は進めない、装備がしょぼくてさ」
「これ気持ちの分」

二百万を支払った、船の武装には関係ないが保険料にはなるだろう。

「ありがとよ兄ちゃん、じゃ降りてくれ」

俺達が降りるとペンダントがアサルトスーツを展開する。

第四章ステーションでコーディネイト（後書き）

やっと一般レベルです、四聖はどうなるやら

第五章負荷システムのおつり

情報獣を具現化し百階はあるタワーを上り始めた。

「腕輪を外すか？」
「久しぶりに全快を見たいわね」
「異論無し」
「右に同じ」

腕輪を外すと体中に力が漲った。

「こいつはすごい」
「どうやら半減していたらしい」

ＨＰ類は二倍になり四桁に到達した。
熟練度が上がりにくくなっているが、これなら四時間で攻略できるかもしれない。

「上がるぞ」
「むしろ駆け上がる」

一番遅い蜜月に合わせて移動する、エネミーは俺達のステータスから襲わず逃げ出していた。
１０階ごとに門番がいて５０階までは一撃で倒せた。
それからが問題だった。

５１階風のエレメントの五桁近いゲージのエレメントが現れた。

「汝らが我が住処を荒らす者かいかなる」

高速に接近して縦一閃、それを上空に上り回避したように見えてもX線の密度から大降りの一撃は一撃で１０分の一を削った。空中にいるのでオラクルライフルを連射して風のエレメントは口上をしようとするが削られていく一方。

「ええい人の話を聞け！」

無視してX線の半不可視の斬撃を食らい二度目の一撃でゲージがレッドにまで激減していた、それでも話そうとしようとしたエレメントは製作者には失礼だが、切り替えも出来ない馬鹿だ。

「人の話より戦場か、よかろう、丁重に扱おう」

X線の斬撃のツバメ返しを連発し、何も出来ずに倒された。

紋章が現れ、小さくなったエレメントが、やっと話せる状態になったことに嘆息して話し始めた。

「よいか、人の子」
「なんですか」
「この紋章を受け継ぐなら風の加護を受ける、機体に乗るなら意味は十分だろう」
「へー」
「お主ら人の話が聞けないのか」
「というか戦闘中にお喋りするほうがバカだ」
「世知辛い世の中だ」
「でこのバカを使うのは誰だ」

誰もが一歩下がり、エレメントは鳴きそうな声で

「別に害は無いですよ」
「悪かった、俺が受けいれよう」
「ありがとうございます」

風の紋章を受け入れ、何の効果か速さに関係することが跳ね上がった。

「なかなか使えるな」
「そう？」
「後は土に水に火だ」
「火は俺」
「じゃ水は私が」
「残るは土？まあ風よりはマシか」

五十二階、土のエレメント、重々しく話し始めたところで風と同じく必死にお喋りする前に防御も攻撃もしないのであっさりと倒された。

五十三階、水のエレメント、最初から攻撃の意思は無く黒潮が受け入れた。

五十四階、火のエレメント、いきなり攻撃してきたが風の力で周囲を無酸素状態にして攻撃を受け何十回か斬った後、蜜月の紋章になってから口上した。

非常にバカと間抜けが両立したエレメントだった、唯一水だけがまともだった。

五十五階からは笑えないほどにエネミーが強化されていた、フェンリルの二段下レベルでも十分ハイレベルだ。

風の紋章のおかげで速度が跳ね上がり、電流を流した大太刀を一撃で急所を衝き、電流で神経系を焼き、それ程の連撃で何百体と葬った。

所詮情報の産物の為に光の粒子として消え去る。

未だ速さに慣れていないが、神速の速度で黒潮並みに乱舞する。

六十階にきて、初めて休憩地に着いた。

「洒落にならねぇ」
「喋れるならまだ余裕があるな」
「今日はここまでにしよう、幾らなんでも疲れた」
「ログアウトするぞ」

ログアウトするとＨＳを外し、誰もが疲れて息切れしていた。

「剣速が並じゃないな」
「風の紋章のおかげだろうよ」

休むと下校時間になった、正直動きたくないほど疲れている。

備品のパイプイスに座り込み、息の乱れが戻ると

「おかしい、こんなに負担は無かったはずだ」
「天空大陸のときもここまで疲れなかった異常だ」
「明後日まで休み、ちと出向く場所がある」
「分かりました、明日はここでお茶会でもしておきます」
「すまないな黒潮、さすがに苦しそうだな」

「ええ」

三十分休みそれでも足りないので四人で保健室に行った。

保険医が見る限り単なる過労らしいが、ゲームをして過労になるのは異常だと告げた。

四時間の睡眠後、回復して帰宅した、俺は娯楽部門のところに向かい、手厚い歓迎を受け、ゲームでの過労を告げた、その場のものが凍りつき緊急メンテナンスが始まることになった。
そこで発見された、予定外のプログラムを組み込んだ者と、話し合うことになった。

「会長、申し訳ありません」

「いやあれはあれで使い道はあるトレーニングシステムに、そして君は誰に圧力を受けた」

「とある役員です、それ以上は」

「よく分かった、君は開発部にファイトシミュレーションの現場に行ってくれ、その役員については心当たりがある」

「・・・ありがとうございます会長」

俺が黙って頷くと

「後、会話記録です」

その後役員を緊急招集してとある役員を会話記録から首にした、

後任の人事は他の者を厳選して雇った。

緊急メンテナンスは肉体負荷プログラムを外し、ログインできるのは午後１８時のことだった。

翌日、いつもどおりの朝を終え、いつもどおり弁当を食べて寝た。放課後まで熟睡し、放課後ゲーム部の部室に入った、三人はいて必死に金庫のロックを外そうとしていた。

「それ無理、俺しか出来ない」
「なら速く言えよ」

金庫の３６のパスワードを入れて取り出した。
それぞれに渡し、ポータブルにセットした。

「これから作戦会議を開く、黒潮の弾薬は全部暁に渡してくれ」
「了解」
「未成熟な魔弾を使わず通常で攻撃してくれ」
「分かった」
「蜜月にはフェンリルをつける気にせず支援に当たってくれ」
「ＯＫ」
「作戦は以上だ、後は全力で駆け上る」

ログインして六十階に現れる、弾薬を渡し、接近戦用のレーザーカッターに切り替える。
六十一階からフェンリルのワンランク下程度になっており、神話に出てくるエネミーばかり、少ないのが救いだ。

九十五階、誰もが精一杯戦い傷ついた、激闘だから俺もまたダメージを受けた、恐ろしいことに紙装甲の暁の場合一撃でレッドゲー

ジまで下がる、俺の場合クリティカル寸前で黒潮に助けられた、その黒潮も一撃くらいゲージが半減した。

正直全滅を覚悟したことは百や二百じゃすまない。

フェンリルの回復がなかったら全滅だ。

そのフェンリルに餌を３５個与えた。

３５個で腹一杯らしく、昼寝していた、時間を確認すると後五分程度で、フェンリルを戻し、ログアウトした。

ＨＳを外し、機材を取り外した部員の機材を金庫に戻す。３６桁のパスワードを変更して覚えやすいように歌にした。

「お疲れ」

「お疲れ様」

「お疲れ様です」

「おつ」

「よくよく考えれば回復役がいない」

「フェンリルには助かった」

「回復テクノマジを学んでおくべきだった」

「皆さんハマっていますね、私もハマっていますが」

「唯一テクノマジを取っていないからな、回復薬は大目にも取った方がいい」

「そういえばストーリーとか無いのですか」

「あるぞ」

「あるのかよ！？」

「四聖に認められれば真のエレメントの加護が与えられる、俗に言うチートだな」

「今でもずいぶんチートだが」

「フェンちゃんが警戒心丸出しで歩くぐらいだしね」

「フェンリルだからフェンちゃんは、安易なネーミングと思う」

「フェンちゃんはいい犬なのだ」
「いやフェンリルは狼だ、それもロキの子供だ」
「あれで狼？てっきりいやなんでもない」
「いや、これ以上は時間が無い、急いで片付け」

片付け、珍しく四人で駅前のカフェに入って珈琲をそれぞれ注文した。

「暇つぶしにちょっとした問題だ、Ａという世界が、Ｂに届いた、そしてＢから先があるわけだ、さて問題です現在の状況をどう説明する」

「そうですねＣという世界に行くと思いますが」

「偶然が重なり世界は動いている、Ｂという世界に行くのではないか、まあどちらにせよだが」

「俺は別のことになると思う」

「清聴しよう」

「では、珈琲が重要な要因だと例えればその分だけ重なり別れ、様々な世界を作る、しかしだ重要な要因が密集し影響し有ったら、Ａという世界そのものが物凄く不安定になるのではないか、その結果Ａという世界から創られる世界は未だに不安定なのではないか。
結論から言えばＢもＣの世界も未だに不安定の世界で現在進行形、そして高校に入る前の誰かさんが戻ってこなければ世界は安定していた」

「正解なんて無いのがこの問題だ、それは長舌に話した矛の言葉

通りだからだ、影響力が強すぎる世界はその分不安定だ、この先どのような困難が待ち受けるか楽しみだ」

「巧くはぐらかされた気分だ」
「私は何と無く分かりますが」
「時空に関係することか？」
「さあ珈琲ブレイクだ、定評がある珈琲店らしい」
「今週の土日が楽しみだ」
「すでにゲーム部は噂では生徒会を懐柔したと噂になってますよ、部長」
「生徒会の問題児二人組みが騒動でも起こして繰れば面白いが、先輩だけどな」
「しっかり部員の質問に答えろよ」
「言っただろ問題児二人組みと」

珈琲が運ばれウェイトレスが置いていく伝票。

「さてさてどうなるやら」

三人の顔に？の色が浮かぶ。
珈琲を軽くかき回す、他に客は居らず、ウェイトレスは一人だ。

「ロケットランチャーのご到着だ」

ウェイトレスが構えているＲＰＧ―７、そんな軍事用の品々が俺達の席に向けられていた。

「やっぱりこうなったか」
「後で説明を聞くぞ」
「何もしなくていい、末端から得られる情報など高が知れている」

外では盾こと暁の手下が戦闘中で、店内のウェイトレスに仮装していた戦闘員の末端Ａは混乱の中逃げた。

第五章負荷システムのおつり（後書き）

ヴァーチャルで苦労してリアルでもバトルが始まったものだから作者としてもモチベーションが上がります、ちなみにこのそうと騒動も今まで明かされなかった、誰かさんの不幸が主な原因です。
感想などがございましたらお暇でしたら感想の程を作者のモチベーションが急上昇します

第六章色々な今（前書き）

遅れてしまい申し訳ありません、腎臓の状態が悪く、不摂生がたたったようです。入院するまでに書きまくります

第六章色々な今

「戦争ですか」

黒潮が美形の顔を嫌悪の顔色に変えた。

「簡単に言えば複雑に絡み合った糸かな」
「全然簡単じゃ無い」
「この面子で？」
「なるほどね」
「機関と呼ばれているね」
「世の中の不思議探険家の集団か」
「ああ武装化した過激派の」

警察が到着し重火器で武装した集団と超能力で戦う集団についていけず、応援を呼んでいた。

「そろそろお出ましだ、手下を引き上げさせることをお薦めする」

超能力集団が引き上げると残った武装した集団にレーザーが射出され何名か攻撃を受け死んだ、現れたのは都市伝説に聞くアルカイザーと呼ばれる男女二人組みの破壊神。
残った者は混乱の中持てるだけの火気を使うが、電磁バリアの前に無力化された。
一撃必殺で武装集団を数分で全滅させた、そして応援に来た警察車両を無視して跳躍して逃げた。
そして俺達も裏口から逃げ出していた。

「特別になんて有り触れたものだな、この様子だと」

三人は息を切らしているが、鍛えただけあり息切れはない。

「大通りを歩くぞ、そうすればおとなしく帰れる」

「それ以外だと厄介事か？」

「ああ」

路地裏から大通りに出て、帰宅に道に付くために駅に上って分かれた。

帰宅していつもどおりの日課を済ませて夕食を食べて寝た。

翌日、いつもの朝をこなし教室で弁当を食べながらホームルームまで三人前を平らげた。

「よく食うな」

「将来当たり前になるぜ」

「なりたくないな」

「今日はとびっきりの日だ」

「やっとタワーがクリアできるぜ」

「昨日のこと気にしていないな」

「些細なことだ」

「些細ね、裏ごとじゃないか」

「さてね」

蜜月は顔色一つ変えずに答えたが、裏街道を歩く者なら聞いたことはある技術者だ。

ゴルＯに出てくる技術者もびっくりな技術者で、有限会社のオーナー兼裏家業で荒稼ぎだ。

放課後まで蜜月は白を切りとおし、部室に入りいつもの面子で作戦会議を開く

「９５階後五階だ」
「予想、ボス戦の連続」
「予想通り」
「と思います」
「口上中に攻撃、おそらく前と同じだ」
「このゲームの製作者は、口上中に攻撃してくることを考えなかったのか」
「普通は攻撃しないからな」
「ログインするぞ」

蜜月の言葉でＨＳを装着して直ぐにログインした。

「作戦通り行くぞ」
「最近、リーダー気質になったな」
「成長したのさ」
「駄弁ってないで行くぞ」

暁に急かされ急ぎ階を上った。

「我は風、真なる風なり我が」

口上を述べている間に、エレメント系に有効なＸ線の収束の強化をマグピットで可能にした、他にもエレメント系に有効な氷点下１９５・８度の、マグピットで並列発動し何百本の液体窒素の槍群をぶつけた。

Ｘ線の半不可視の刃で恐ろしいほどの速さで神速の連撃を与える。

盾はオラクルライフルで短連射を繰り返し、１２・６？×９９口

径の大型弾薬を軽々と扱っていた。

黒潮は今まで得られたスクロールを使い、連続して固定砲台のようなロケットランチャーを生み出しては撃ち込んでいた。

「我より生み出されし眷属に、刃を向けたのは愚かといえよう」

口上を続けるが、連続した話も聞かないプレイヤーの俺達は体力ゲージが半分に来ても止めないで、口上が完全に終わる頃にやっと攻撃しようとしたら、最後の不可視な刃で斬られて体力ゲージは消えた。

「真なる我を倒すとは、しかし我の話も聞かないで攻撃するのは卑怯と思うがな」

「負けた奴に負け惜しみを言われても関係ないね」

「真なる紋章を宿ろう」

風のエレメントが真なる風の紋章に変わった。

「一時回復」

大太刀を振るうが今までの数倍は速い、今は残像が残るほどの速度。

慣れるまで剣術の型を繰り返し連続技の工夫を凝らす。

汗が滲み出るほどの練習と試作を繰り返して、落ち着いたら休憩の時間で飲食する。

「これって」

「いやいや四元素とはね」

「次もバカだと期待するぞ」

「だと楽ですね」

一時間ほど休憩して上った。

次は土のエレメントだった。

「我は大地、大地は我、紋章を持つ者に宿らん」

土の真なる紋章が暁に宿った、上って水の紋章は土と同じように宿った。

１００階になると真なる火の紋章、わずかに話宿った。

制覇したと思ったら屋上があり上った。

「真なる紋章を持つ者よ、真なる月の紋章を与えん」

全員が共通して真なる月の紋章を宿した。

「風だけかよ！」

「風だけがバカだったんだ」

「やはりバカなんですね」

「バカってしぶといから」

「帰るぞ」

真なる風の紋章で全員を包み、一瞬で宇宙ステーションの緊急ハッチに到着し、手動で開け、内部に入ったところでハッチを戻した。

それぞれアイテムを纏めて整理してから山分けし、貴重品は残した。

「じゃ前の店で待ち合わせと」

緊急の場所から出ると一瞬で風景が変わり傭兵アカデミーに強制送迎され、二次職に付くことになった。
そこで時間になりログアウトした。

「もう二次職か」
「速いのか」
「速いでしょうね、若葉マークのプレイヤーが多い時代ですから」
「そうだな」

いつもどおり金庫に戻し、掃除してまたまた四人で帰った。
夕食を共にして、今週の土日の話で盛り上がった。
いつもどおりの夜を過ごし、いつもどおりの朝を過ごして放課後ログインした。

二次職の解説を受け、第一、第二、第三のクラスを就けることになった。
今までクラスに武術家を入れて技咒武剣士の合成職。
蜜月はウィザードを入れて三番目の魔咒師になった。
暁は今までのクラスにガンナーを入れて、技咒重銃士になった。
黒潮は超能力者を入れて超武銃士。

ステーションに戻されて知り合いの買取をする人々を集め、全部出したらオークションになり相当な額になった。

「確かリアルマネーに換金できましたね」

「１／１０００だが」
「換金して部費にしましょう」
「賛成」
「賛成」

「まあ別にいいが百万も何に使う」
「色々です」

その日で換金して久しぶりに時間前にログアウトして、掃除片付けを終わらせて、黒潮が口座を確認し百万を元手に株式で売買して数倍に膨れ上げ、電話を入れて調度品から珈琲メーカーまでありとあらゆる物を下取りし新品に買い換えた。

「残りは将来の部活動に貯蓄しておきましょう」
「疲れたから帰るわ」
「私も」
「俺は休んでから帰るよ」
「じゃお疲れ」
「お疲れ様」

二人が帰ると黒潮がバーボン珈琲を入れて、二人で新品の椅子に対面して座った。

「黒潮、明日から二人が消える土日には戻ってくるが、その間に成層圏に天空大陸が八つ、移動コロニーが十六、海上移動都市が三十六。
一年後、戦闘機から人型戦闘機に変形する人型可変式戦闘機、通称スレイプニルが誕生する」

「ふむ、それは報告しないとね、しかし二人の技術は何所から手に入れたか謎だね」

「そして大陸と都市は移民を受け入れる、そして境界だ、それは俺達が２４、つまり九年後現れて翌年実用化される、異なる惑星への移動手段だ、それは全部矛盾の二人が所有する」

「未来から戻る能力は便利だね」
「黒潮には頼みがある」
「そうだね、これだけの情報をくれた君に便宜を図るのも頷ける」
「双子の片割れに俺の会社と矛盾の会社を運営してくれ」
「要すればコピーですか、明日までに用意します」
「いや二人が戻って来るまででいい」
「それまでは根回しでもします」
「俺も用意しておく」
「次会うのは何時やら」
「意外に早い」
「では私も帰ります」
「ああじゃあまた」
「ええまた」

誰も明日とは言わなかったことが、心にとどめておく事だ。
翌日まで手続きを済ませ、黒潮の自宅に届け、会社に九年間の技術発表の賢者の手帳を置いた、それによりある程度確定した未来に誘導できる。
それから忙しく土日まで政治的根回しまたは圧力を掛け捲った。
土日に二人が戻ってくると一瞬で気絶させ、そして手はず通りコールドスリープの装置に入れておいた、そんな技術が世に出て、困難な病気や怪我、もしくは障害者の人々に使われるようになった。
サイドストーリー遺伝子の病気を直し、リハビリ生活を送っていたら両親が交通事故で他界し、遺産目当てに腐った連中がハイエナのように集まったが、とある実業家が引き取ることになっていたので手続きを済ませ、その自宅に行った。
誰も居ないかと思われたが、執事が受け入れシンデレラの様にお金持ちだった。
一年間執事の人と暮らし、今では日常となった膨大な賢者の石の

知識の理解、それを執事の人はよく手助けしてくれた。
実業家は同じく遺伝子の病気で僕が高一に上がるときに治療が終わるそうだ。
九年後。
矛盾の二人が創造した八つの天空大陸、十六の移動コロニー、三十二の海上移動都市。
コールドスリープから目覚めた矛盾の二人から思いっきり溝を殴られた。
年齢的には全員十五の高一、コールドスリープ中にテクノマジの元素なる機械因子を注入し、現在では公式に魔咒因子と呼ばれる元素になる。

その研究も国際的に基礎を終え、国際条約を締結し、八つの大陸の境界を越えるには魔咒士であることが国際的に決められた、そして技術として真新しいＳＲ、スレイプニルが主な航空、陸戦、海上、海中の主力となっていた。

二人とも実家に戻り、一年間実家で暮らすことになってから、経営は引き続きコピーに担ってもらった。

俺の会社は事業を展開し、情報、医療、娯楽、ＳＲの部品製造、機械因子の先天性、後天性に問わず、教育する保育から大学院までの生後半年から２４歳まで、一貫した厳格な学園を作り出し、よく遊び、よく学び、よく食べて、よく寝る、の人口一千万の大学園都市を形成していた。

その為か、エリート意識を持つような生徒も、増加傾向にあることが悩みの種。
矛盾の二人の許可を取り、八つの大陸ごとに生徒を分散させることが決まった。

それから三ヶ月で敷地と施設は完成し、内装は学園長に一任することになったので、それぞれ特色ある内装になってしまったのが、一番の良作だった。

合計して１０００万人を八つの大陸ごとに割り振ると１２５万人になり、それでも巨大な学園都市に成長した。

黄色系、褐色系、白色系、黒色系を合理性の上に偏らせなかった。

移民政策を続け、赤道上の成層圏を回り、国際的に問題の無い海域は海上移動都市の主なルートになっていた。

主に資源の無い天空大陸は移動コロニーから資源、人材、移民、その他もろもろの受け入れるべきものを受け入れ続け、アトミックキャンセラーで核を無力化する装置を作動させているために、主なエネルギーは宇宙に同じ軌道を回る、太陽光発電所から電力ケーブルを繋いで電力を得て、主な技術から製品を輸出していた、大陸の大きさはオーストラリア大陸の半分ほどで、豊かな牧草地帯から農業、放牧などの第一産業も主な産業の一つで、それを束ねる矛盾の企業は大陸ごとに良い所を取り入れ、悪い所を改善することで成長を続けていた。

そんな訳で安定した九年間だったようだ。

そんな訳で、今まで同じように運営されていた二つの有限会社が、独自に動くことが、二人が大学院卒業後の八年後に決定した。

公式に発表されると大問題になったが、元々別の有限会社、故に誰もとめることは出来なかった。

第六章色々な今（後書き）

いきなりの急展開、境界は今後の楽しみです

第七章初めての新入部員（前書き）

第二編突入です

第七章初めての新入部員

矛盾の二人は地上の実家で一年を過ごし、俺と黒潮は近未来的な最初に作られたニルヴァーナ大陸の学園から通信教育を受けながらリハビリを行い、黒潮にも氣功の鍛え方を教えた、代わりに魔咒士の魔咒術を教えてもらった。

氣功の定義は自然界に存在する生命に関係するもので、今でもあやふやな使い方しか知られていない、それを科学的に成長させた大蛇流の術から仙術と魔咒術を組み合わせ、コールドスリープ中にリハビリを必要にするほど遺伝子レベルから俺達をカスタムした。

結果全てのポテンシャルが高まり、リハビリを必要にするほど鍛えれば面白いほど上がっていった。

一年間で極め、マスターになった大蛇流仙術、隠れた魔咒士のレベルでいえば境界の許可が下りるレベル、大学院を上位で卒業して国際免許のB＋～A－を持つ範囲の領域。

つまり戦闘能力は現代の陸戦SRと対抗できるレベル、知れたら大問題だ。

マグピットも開発されており、高価な品物で廉価版を持つだけでも一人前だ、ただレベル的にはC－レベル、通常版でB－、それからは専用的な業物に入るそれが高級品。

高二は二人を誘い、天空大陸に転入した、今まで厳しい校風から自由で自主的なものを尊重する校風に変わり、転入試験は難問だったが、テクノマジを経験しただけに解けた。

試験の結果を受け転入し、会社の配慮で四人が暮らす自宅が与えられた。

そんな頃に魔王ティアマットと名乗るテロリストが、東京を一夜にして東京湾の一部に変え、首都機能は京都に移され、政治の混乱が続いた。

アメリカは新たな州に組み込もうとして、中国は自治区にするべく極東戦争が勃発した。

それに成層圏を移動する大陸、コロニーは援軍を送り、三つ巴の会戦で圧倒的な経験的ＳＲ操縦士の貢献もあって、大勝利を収め、日本はアメリカとの同盟を破棄、中国との国交を断絶し、矛盾有限会社との関係だけに留めて鎖国した。

その甲斐あって半年で政府が機能して移動コロニーを通して貿易を行い、国内産業の育成に留める事無く、空のコロニーにＳＲ闘技場を開設、それに伴う学園の建設に乗り出した。
それは後のこと。

高２の春、再び再会したときは愛嬌たっぷりの蜜月に散々殴られ、少し大人びた暁に散々嫌味を言われた。

自由な校風ながらも武術、魔咒術に力を入れ、今でも三十億人がプレイするＶＲＭＭＯのポータブルゲーム機のフォーチェーン?、データを引き継いで熟練度と真の紋章を引き続き受け継いだ。

午前中の必修教養が八時から１２時までの四時限、午後の六時までの５時限、六時からは放課後になるが、翌朝が最低七時起床の為に部活動も２４時までの６時間。

部活動はすでに人間関係や先輩後輩があるために、またしてもゲ

ーム部を創設、顧問は科学部の顧問をしていた教員に頼み兼してもらった。

「たく、九年ぶりに実家に帰ってみれば両親は老けているし、同年代は大人だし、泣きたくなるぜ」

「そうそう」

「まあまあ、そのおかげで安定した世界が構築され、戦争が起きなかったですから」

「これで機嫌直せ」

最新型のポータブルハード機及びソフトならびに超軽量、小型化されたＨＳ、それらを装着して黒潮が手配した癒しの空間をイメージした部室の各人のリクライニングシートが完備されていた、調度品もそれなりの値段のするニルヴァーナ製、楽園に名づけられたこの一番最初の天空大陸は今でも移民を受け入れ、成長する大陸でその魔呪士になるための学園に入れたことはステータスにもなり、世界人口の０・００１２５％、恐ろしく少なくいずれは社会を変革するだろうと新時代の申し子なのだ。

これからはもっと増えるだろうと思われる、何せ去年八つに分けたから最低八倍にはなって欲しいものだ。

八倍になっても０・０１％だが。

「こいつか噂のデスゲームなんて」

「噂は噂、実際死人が出るようなゲームなんてゲームじゃないよ」

「しっかし、見ない間に筋骨隆々になったな」

「そうでもない二人も前より社交的になったね」

「田舎暮らしも悪くない」

「そうだな、田舎の田園などを見れば活発にもなる」
「そうだな、田舎も悪くない、十年後のように」
「また未来から戻ってきたのか」
「まあな、ちょっとした大問題の解決法を探すために舞い戻ったと思ってくれ」
「境界ですか」
「いやとある大規模破壊者の改心かな」
「そうか、なら始めよう、世界の敵とやらと」

「久しぶりですね、感慨深い一年ぶりですね」
「約一年ぶりに訂正するべきじゃないか、そもそも宇宙人がなんでまた干渉なんかを」
「非常に簡単です、お二人の能力も優れたものですが、それよりも興味深い能力者がいるわけです、それが九弦というわけです」
「ちなみに技術的に現時点で再現できる十年後の世界だ、リアルマネーで十億ほど換金しておいた」
「実を言うとＳＲは受け継げないのですが、フェンリルは受け継げます、
十年間の技術レベルを知ることが出来るそうですよ」
「そいつは楽しみだ」
「ひとまず説明書読もうぜ」

説明書には今までの熟練度制に紋章、現代では実用化された魔呪術がテクノマジで、武術から仙術、古今東西の戦闘技法が再現されている。
種族こそ選べないが、その職種は千差万別、主に戦闘系、操縦系、生産系、製造系、医療系、商人系、政治系、整備系に分かれる。

「パス、何と無く嫌な予感がする」
「じゃ夏休みまで延期だ」

「その間に情報収集できそうだな」
「暁も慎重になったのですね」
「その間に鍛えてやるよ」
「そいつは頼もしい」

部活動で大蛇流仙術を教え、同時に魔咒術を休みに教えた、二人から鬼教官と思われていた。それが一ヶ月も続くと実感が湧いたようで、五月の中間テストで上位に食い込んだ。
転入生として相手にされなかったが、試験の結果話しかけて来る相手も増え、結果的に馴染めた。

デスゲームの噂は信憑性がないと結論を得たが、鍛えるのが面白くになったようで部活動で鍛え学び、二人の能力も使い分けることが出来るようになった。
今ではポータブルに使われているクラウドのサーバーは垓（がい）のレベルに達している、
それ程のレベルの為に一度は解除された疲労システムが採用されているのが、デスゲームの噂の元。

期末テストまで鍛え、教え、その結果１０以内に全員が入って、新入部員が入り始めたが、厳選して一年生が一人、三年生が一人の六人になった。

一年生はいかにも軽めの印象を与えるが、一年主席、全学科で満点を取った天才少年の門崎・スミス・リ・チャー、日系アメリカ人、中国系日本人の間に生まれた奇妙な縁で結ばれた元七姉妹都市の幼児だった後輩。

三年生は投票権を持つ成人式を終えた留年生、今年で満１９歳の天空大陸に帰化したタイ人、留年の原因は主に教養で赤点を取った

竜・宗次。

「部長として歓迎しますよ、後輩、先輩、ただし一週間きっちり戦闘術を学んでもらいますから、後はゲームで覚えてください。実際の肉体的スペックが反映されますので、初期値にばらつきがでますのは心にとどめて置いてください」

「おう」

「うっす」

「ついでに武術と魔咒術を教えますので朝は五時から、夜は二十四時まで鍛えぬきますから、ご容赦の程を」

「睡眠時間五時間か」

「ゲームやるのにそんなにハードなんですか？」

「もち、初期の頃はチートが出来たそうだが、今は無理」

「後、休み時間は合計して2時間だけ、その間に説明書を読むこと、テストに失敗したら一日だけ延期」

「お、おう」

「お初のゲームに説明書は一日だけかよ」

それから夏休みまでの八日間を一週間の兵士でも過酷と話す、対人戦、各種エネミーとの戦闘術、サバイバル技術、武術は白兵戦の武器、銃撃戦の武器を教えて、最後に説明書テストを行なったが二人とも惜しくも一点を外し、一日だけ延期した。

その翌日は詰め込み式で暗記させ、理解まで導き、テストでパーフェクトを取らせた。

夏休み初日、機材が届き、リクライニングソファーに専用の負荷システムの緩和装置付きのポータブルハード機、魔咒士専用のＨＳ、

最初から第一クラスは魔呪士と決まっていてそれで生徒会が許可した。

第二クラスは揉めたが、万能職の仙術士が元々の四人、前衛職に槍術士に竜先輩、後衛に銃士を選んだリ・チャー。

第三クラスに志士は俺と黒潮で、銃士に暁、蜜月、武術家に竜先輩、操縦士にリ・チャー。

ログインして初期のエピソードは長くお使いクエストだけに不評で、今度は傭兵アカデミーで第三クラスまで決め、解説と専門の訓練を受けた後にステーションに送られる。

その訓練にＳＲの支給機で訓練を受け、整備、様々な戦場を想定したカリキュラムを終えてロビーにビギナーとして現れた。

「最初は空賊狩りだ」
「最初からＰＫＫですか」
「このシリーズの基本だぞ」

支給機では勝てないので、全員から資金を受け取りスレイプニルの仕立て屋に注文してそれぞれの熟練度、素質、タイプにあった細かくアンケートを出され、書き込んで提出した。

真なる紋章の二つが大きく作用してどれも呪装に組み立てられ、新入りの二人は科学が基本となったスレイプニルになる

それから昔懐かしい縁ある職人達及び商人に会い徒歩の装備を整え、昔懐かしい荒行の腕輪を購入して全員で着けるのが、パーティの決め事になった。

第七章初めての新入部員（後書き）

誤字、脱字、訂正文、改善して欲しいところがございましたら感想などで教えてください。

２万にアクセスが達したので次は紹介です。

第八章（前書き）

紹介です、意外な点が出ますので不味いと思われる方は感想のほどをよろしくお願いします

第八章

第八章紹介。
熟練度は全部本人しか確認できない、成長するごとに様々なバッシグスキルを習得でき、その熟練度に応じて全ての能力が決まる。

全員共通荒行の腕輪（全部の数値を半減させるが２０倍の熟練度の成長率）
マグピット（個人専用につきばらつきがある）
桜花社、旧知の職人達が集まって起こした会社、ゲームから現実のニルヴァーナの歩兵の武具開発を担っている。代表者は刀匠の正宗・雪風。
絢爛社、旧知の商人達が立ち上げた総合商社幅広く展開しており海上移動都市から天空大陸まで支社、支店を持ち、独自に魔装ＳＲを開発したコストがかかることがネックな企業。
舞踏社、最近ＳＲ産業で頭角を現す急成長企業、コスト、性能はバランスがいい。

マグピットなしでは魔咒術は効果を適さないが、四人はマグピットなしで発動を可能にするが第五位が限界、それ以上はマグピットの補助が要る。
残る二人はマグピットを八基使うが、地力での発動不能。

九弦一夜年齢１７歳、戸籍的な年齢は２６歳。
何もいわず主人公、未来から過去に戻る能力を持ち、賢者の石を体に取り入れ、二度にわたる歴史介入を繰り返した経歴を持ち、本業は学生だが、世界屈指の有限会社を持つ、その基本方針から公式の場には出ないが、名士のようなもので、現在の世界を仮想で現したと噂される、国連にも圧力を掛けられる財力、権力者でもあるが、

あまり使わない。
主に孤児や避難民、亡命者を企業で支援している。別の物語で養子の幼児が同世代として登場する
ゲームでは最速を誇る。
身長１７４センチ
体重７１キロ

クラス１・魔咒士・２・仙術士・３・志士
真の紋章・風・月
制服、胴衣、袴、革靴の黒一色
絢爛社製専用機、魔装の月光風
戦闘機時
マイクロミサイル４８基
ファミリア（マグピット代わり）
両方時
様々な魔咒術のＳＲ版を発射するガトリングポット６連装２０×１０２？
人型時
ジャイアントサムライブレード、３メートル・二刀（個人的な専用装備）
チャクラ機能（仙術再現機能）
格闘機能
小型軽量級の５メートル、シャープなデザインに無骨さを感じさせる武具を身にまとった印象の真風の魔装ＳＲ
戦闘機
最高速度Ｍ１２
通常時Ｍ２・９
巡航速度９９０キロ。

人型時

最高速度Ｍ２
通常３６０キロ

非搭乗時の装備。
桜花社製、正宗製・魔咒士専用大太刀＋１０
長さ１５００ミリ・厚さ３０ミリ・幅・３０ミリ。純鉄製
桜花社製、正宗製・マグピット＋１０、四基の思念操作補助機関
魔咒術を使わないときは本人の得意分野の電磁系である電磁バリアを無意識に微弱に展開中。
桜花社製、ナノカーボン繊維積層ペンダント収納式展開型隠密服。
桜花社製品の正宗装備の為にスロット＋５の紅い彗星セット、幸薄の変わりに三倍のステータスを実現する小数点は切り捨て。

蜜月上弦・１７歳、戸籍上は２６歳
有限会社矛盾の暁との共同経営から共同オーナーに、最強の矛ながら魔王ティアマットを総合的に上回ることは無いが、破壊力なら最強、コールドスリープを勝手にやられたことに一時は怒り心頭していたが、田舎の実家でかつての後輩、別の高校の先輩と関係を持ち１０歳の子供が一人ずついる、共に実家に身を寄せている。
当然ながら認知しており、子供からはお父さんと呼ばれると、機嫌が右肩上がりになる。
しかし、転校するときに子供達にまた来てねと言われて軽いショックを受けた。
大蛇流仙術の第四位の最下層、ただ仙術が必要ではないほどの破壊の申し子。
魔咒術はその天才的な頭脳と元々の研究肌から四人のうちで一番巧みでバリエーション豊かだが、必要以上に使わない。
矛盾の力を合わせれば無から有を生み出す、それが現在の世界に存在する天空大陸など。
ゲームでは最大の火力を持つ

１７４センチ
６７キロ。

クラス１・魔咒士・２・仙術士・３・銃士
真の紋章・焔・月
制服ジャケット、ボウタイ、ワイシャツ、ハーフパンツ、革靴も黒一色
専用機　魔装の月光焔
戦闘機時
マイクロミサイル４８基
ファミリア（マグピット代わり）
両方
様々な魔咒術のＳＲ版を発射するガトリングポット６連装２０×１０２ミリ
オラクルガンポット。６連装２０ミリ×１０２ミリ
人型時
チャクラ機能（仙術再現機能）
格闘機能
小型軽量級の５メートル、シャープなデザインに無骨さを感じさせる銃器を身にまとった印象の真焔の魔装ＳＲ
戦闘機
最高速度Ｍ９
通常時Ｍ２・９
巡航速度９９０キロ。

人型時
最高速度９６０キロ
通常１８０キロ

非搭乗時の装備。

桜花社製、ツバル製・オラクルマテリアルアサルトライフル＋１０の１２・７ｍｍ×９９口径・　　純鉄製の超軽量モデル
桜花社製、ツバル製・オラクルハンドガン＋１０の５０口径の純鉄製の超軽量モデル
桜花社製、正宗製・マグピット、四基の思念操作補助機関
桜花社製、ナノカーボン繊維積層ペンダント収納式展開型魔咒士服

ハッピーセットで創られ、幸運が齎されるが、通常のドロップアイテムが手に入りにくくなる。

暁千春・１７歳、戸籍上は２６歳
有限会社矛盾の暁との共同経営から共同オーナーに、最強の盾ながら魔王ティアマットを総合的に上回ることは無いが、防御力なら最強、コールドスリープを勝手にやられたことに一時は怒り心頭していたが、田舎の実家でかつての同年代と久しぶりに会い、相変わらずの男性口調だといわれてキレた、沸点が低くなっており転入するまで大人になったう人たちと遊んでいた、おかげで社交的になった。
大蛇流仙術の第三位の、ただ仙術が必要ではないほどの防御の申し子。
魔咒術はその天才的な頭脳と元々の研究肌から四人のうちで一番の治療士、必要以上に使わない。隠すためにクラスも取っていない。
矛盾の力を合わせれば無から有を生み出す、それが現在の世界に存在する天空大陸など
ゲームでは最高の防御力を誇る
１７０センチ
５９キロ。

クラス１・魔咒士・２・仙術士・３・銃士

真の紋章・土・月

制服、ブレザー、シャツ、ボウタイ、スラックス、革靴、水色と赤のカラーリングの派手な衣装

専用機　魔装の月光焔

戦闘機時

マイクロミサイル４８基

ファミリア（マグピット代わり）

両方

様々な魔咒術のＳＲ版を発射するガトリングポット６連装２０×１０２ミリ

オラクルガンポット。６連装２０×１０２ミリ

人型時

チャクラ機能（仙術再現機能）

格闘機能

小型軽量級の５メートル、頑丈そうなデザインに無骨さを感じさせる銃器を身にまとった印象の真土の魔装ＳＲ

戦闘機

最高速度Ｍ８

通常時Ｍ２・９

巡航速度９９０キロ。

人型時

最高速度８６０キロ

通常１６０キロ

非搭乗時の装備。

桜花社製、ツバル製・オラクルマテリアルアサルトライフル＋１０の１２・７ｍｍ×９９口径の　純鉄製の超軽量モデル

桜花社製、ツバル製・オラクルハンドガン＋１０の５０口径の純鉄製の二丁

桜花社製、正宗製・マグピット、四基の思念操作補助機関
桜花社製、ナノカーボン繊維積層ペンダント収納式展開型銃士服
ドラゴンセットで創られ、魔咒術抵抗値は最高峰、防御力も最高峰、それ以外は＋は無い珍しい―なし。

黒潮琴音・１７歳・２６歳
九年前コールドスリープに入る前に双子の設定で作り出した下級管理職と二つの有限会社を運営してもらい、本人はコールドスリープで九年間を過ごした。
現在は強硬派と呼ばれる対立勢力と、監視派と呼ばれる三人を観察する情報収集役になった、大蛇流免許皆伝の腕前で馴染みの仲間の魔咒術の教師、優れた肉体スペックにポテンシャルから遺伝子レベルまでカスタムされ、気づいているが、貴重な体験だと思っている。
ちなみに個人的に九弦に興味がある
ゲームでは唯一水中に関する専門家、水素を自由に操られ最高の自然回復力
身長１６９センチ
体重５８キロ。
クラス１・魔咒士・２・仙術士・３・志士
真の紋章・水・月
制服、ジャケット、ワイシャツ、ボウタイ、ミニスカート、革靴の黒一色
絢爛社製専用機、魔装の月光風
戦闘機時
マイクロミサイル４８基
ファミリア（マグピット代わり）
両方時
様々な魔咒術のＳＲ版を発射するガトリングライフルポット
人型時

ジャイアントサムライブレード、３メートル・二刀（個人的な専用装備）
チャクラ機能（仙術再現機能）
格闘機能
小型軽量級の５メートル、シャープなデザインに無骨さを感じさせる武具を身にまとった印象の真水の魔装ＳＲ
戦闘機
最高速度Ｍ７
通常時Ｍ２・９
巡航速度９９０キロ。

人型時
最高速度８００
通常１６０キロ

非搭乗時の装備。
桜花社製、正宗製・魔咒士専用大太刀＋１０
長さ１５００ミリ・厚さ３０ミリ・幅・３０ミリ。純鉄製
桜花社製、正宗製・マグピット＋１０、四基の思念操作補助機関
魔咒術を使わないときは本人の得意分野の重力系の質量軽量化を使っており　体術は超一流。
桜花社製、ナノカーボン繊維積層ペンダント収納式展開型仙術服。
桜花社製品の正宗装備の為にスロット＋５の紅い彗星セット、幸薄の変わりに三倍のステータスを実現する小数点は切り捨て

門崎・スミス・リ・チャー、１６歳。
奇妙な縁で結ばれた両親の間に生まれた学園の初期からいる古株、一番の魔咒士と自負していたが、四人のしごきを受け心変わりして魔咒士の高みを目指す、頭が良く魔咒術の特許をいくつか持ってい

て生活には困らない、そして両親に仕送りする親思いの少年。
四人と竜の後輩に当たる一年生主席。
色恋沙汰より高みの上ることを信条として敬語は殆ど知らないが、蜜月を相当尊敬しているが、一番強いのが部長の九弦だと半信半疑。
身長１８０センチ
体重８０キロ
クラス１・魔咒士・２・銃士・３・操縦士
制服ワイシャツ、ハーフパンツ、革靴意外とラフ
紋章無し
舞踏社、専用機サンダーボルト
戦闘機時
四連装長距離大型ミサイル。
両方
最高峰のレーダー
最高峰のＥＣＭ
最高峰の対ＥＣＭ
オラクルガンポット、６連装２０×１０２ミリ
人型時
格闘機能
白兵戦ナイフ

最高速度Ｍ８、
通常速度Ｍ２・５、
巡航速度９８０キロ、
歩行タイプ最高１８０キロ、
通常８０キロの高性能、

非搭乗時の装備
桜花社製、ツバル製・オラクルアサルトライフル＋１０
７・６２ｍｍ×４５口径の超軽量モデル

桜花社製、ツバル製・オラクルハンドガン＋１０の５０口径、超軽量モデル
桜花社製、正宗製・マグピット＋１０の八基、並列演算機能、単一高速演算機能付き。
桜花社製、ナノカーボン繊維積層ペンダント収納式魔咒士服。セット無し。

竜宗次・１９歳
一年留年して卒業できず成人を迎え煙草も酒も大丈夫になった豪快な巨躯を誇るが、さすがにノーマルだけに四人の扱きは厳しく、休憩中に半分寝て、半分起きて説明書を読む一週間で元々武芸者だけに武術の面は良かったが、魔咒術の面は厳しく訓練された。
その甲斐あって立派な魔咒士になることが出来たのが運が良かったのか、悪かったのか微妙で、進学に向けて勉強中。
両親が帰化したタイ人だけに九年前から学園に入り、厳しい校風の中で裏表無く過ごし下級生から人望がある。
身長２・１メートル
体重１２０キロ
クラス１・魔咒士・２・槍術士・３・武術家
紋章無し
制服、ワイシャツは白、スラックスは黒、革靴は焦げ茶色のラフな格好。
舞踏社、専用機サンダーボルト弐
戦闘機時
四連装長距離大型ミサイル。
両方
最高峰のレーダー
最高峰のＥＣＭ
最高峰の対ＥＣＭ
オラクルガンポット、６連装２０×１０２ミリ

人型時
格闘機能
白兵戦ナイフ

非搭乗時の装備
桜花社製、正宗製・重槍＋１０、
桜花社製、正宗製・マグピット＋１０の八基、並列演算機能、単一高速演算機能付き。
桜花社製、ナノカーボン繊維積層ペンダント収納式重魔咒士装甲。
セット無し。

第八章（後書き）

ご指摘があれば改善します、感想などで連絡ください

第九章始まったＰＫＫ

初期のビギナーが行なうのは二つある、一つは空賊になることでＰＫ・ＮＰＫ、一つは傭兵としてＰＫＫ・ＮＰＫをして慣れていくこと。

≪いい仕事をする≫
≪どうも、新入りでキャンペーンに当たったので、豊富な装備をしているわけだ≫
≪報酬は円でいいな≫
≪もち≫
≪ではドックで≫
≪あいよ≫

狭いコックピットでヘッドディスプレイに映されたレーダーを見ながら周囲を、蛇行飛行するそれは巡航速度で飛ぶ、空中移動コロニーを襲撃していた大規模な空賊は殲滅され、空中へと落ちていった。

空は蒼く、下には雲海がある、時々海が見え、今向かっている天空大陸はエンブリオン同じようなゲーム部の交流がある。

話は変わるが蛇行飛行をするのは空中移動コロニーの速度が７００キロで合わせたら燃費が悪い。節約というわけになる。

≪新入部員のお二人ミサイルが尽きたら、オラクルガンポットでもいいからドッグファイトに努めろよ≫
≪すまん、ＳＲは初めてだ≫
≪同じくです、しかし合計スコア三十って桁違いですよ≫
≪ミサイルに頼ってばかりじゃ勝てる相手にも勝てなくなる、そ

れはわかっているのか、戦闘機乗りなら諦めず戦え、いつでもフォローしてくれる仲間がいると思うな、次逃げたら自腹だ≫
≪分かった≫
≪アイアムマム≫

「やれやれ」

無事に衝くまでに慎重に護衛したが、もう一度中規模な空賊団に襲われ、迎撃して累計スコア５０を突破した。
新入部員の二人は囮のように逃げ回っていた、その結果ベテランと呼ぶべきか四人で撃ち落とした。
ある意味しっかりした連係プレイのようにも見える。
ドッグに入り、操縦席からベルトを外し、ハッチが開くと外に出て背伸びして軽く柔軟体操を行い、整備員から白い目で注目される。
空中移動コロニーの報酬は傭兵事務所で支払われ、二度の襲撃で色が多少ついていたが。
補充、点検、整備を注文し、六機分支払い、スコアから勲章が授与されて経歴に載った。
仲間を集め傭兵が行く酒場で打ち上げした。

「当座の担当黒潮が財政担当、目指すは母艦を持つことだ」
「母艦？」
「ゲームは初めてだから聞くが、軍事用の天空大陸が所有する、空中ＳＲを使うための母艦か？」
「その通り」
「でしたらエンブリオンのゲーム部と合流した後に、話し合ってみればよろしいのでは」
「採用だな」
「賛成でっす」
「オレも一票」

「どちらかといえば話さないで情報集めに徹したほうが良くないか」
「何故だ」
「母艦を乗っ取られないため」
「慎重にしたほうがいいわけか」
「そうなる先輩としては」
「裏表を作るのは面白くないが、危険な要因を作るのも賢くない」
「ふむ、なら蜜月の案でいいか」
「う～賛成」
「賛成です」
「賛成だ」
「賛成っす」
「よし全会一致だ」

飲み食いした後に、少し休み制服姿で、エンブリオンのゲーム部のある、学園に入ることになった。
モノレールで移動して別に学園ではない場所でも十分と思うが、交流の為に学園に招待されたら、純和風の平安京もびっくりな個性的な学園だった。
ウサギに包帯を巻きつけた痛い人が、ゲーム部歓迎の看板を持っていた。

「ニルヴァーナのゲーム部です」
「奇抜な格好はしないのですね」
「ええ、本音を言うとかなり痛いですよ」
「罰ゲームで負けしまいこのよう格好に、ただぬいぐるみでよかったです」
「付いて行く俺達からすれば痛いのですが」
「じゃ、離れて付いてきてください」
「そういう問題？」

そういう前にぬいぐるみの看板を持った中性的な声の持ち主は歩いていった、それを追って歩くが、学園は閑散としており人気は殆ど無い、というよりもゲームしてまで学園に入る用事はないと思われる。

案内されたのは美術部、そこでニルヴァーナゲーム部歓迎の紙が張られていた。

そこには珍しいことに俺の過去、今まで支援してきた人々からの手紙が所狭しに置かれていた。

「実を言うとゲーム部は幽霊が多くて今回はこのような形になりました、今まで感謝します」

「そうか、君はあの時の」

「そうなります、実際もう成人を済ませているので実質的な親子の関係ですが、これからもお元気で、ではこの辺で」

ぬいぐるみはログアウトしたようで消えた。

その後全員で手紙を読み漁っていた、どれも感謝の文字で、営利的と国際貢献を両立した方針は変わらなかったのが、今まで助かった人々の文字はどれも丁重にその国々、その学んだのか日本語で書かれていた。

久しぶりに嬉し涙がこぼれた、これ程の人々が助かったことだ。

「良かったですね」

「ああ、酷い時代が来る予定だったのが変わったようだ」

「そうか、我々に足りなかったのは生き急いだからか」

「ああ」

それから四人が起こすはずだった歴史を説明した、それは誰も望

まない地球規模の争いだった。
それを人々はあまりにも血が流れたこと、深い後悔からから深紅戦争と呼んだと。
それから復興の兆しが見えれば天地戦争、人々を絶望に追いやったからこそ、起こしてはならない戦争だった。

「戦争の世紀に近いな」
「マジパネっす」
「マジですかい」
「今となれば外史だ」
「今度は何を回避する」

「大都市の消滅だ、それにより世界のバラスが崩れて、多くの人々が泣く、多くの人々が逝く、多くの家庭が消える、世界が狂気に変わる」
「これ全部読んだら」
「すまない」
「いいって、歴史を変えて結果次第よ」

それから何時間も読み続けた、その間五人は外に出て母艦の話で盛り上がっていた。
写真入もあれば助かった場面を絵にしたものもあった、どれも感謝の言葉が添えられ、最後の一枚はあの時助けて養父になった、あの子から未来の義父にとあって、それは割愛しておこう、その文は倅（せがれ）のものでもあるからだ。
手紙を全部アイテムボックスにしまい、一人の成功者として倅に自慢できることが出来た。

部屋から出るとすでに母艦購入で支払いが済まされ、改造面から装備拡張していた。

「おう、値切ったぜ」
「む、交渉したのは私だ」
「子供じゃあるまいし、沸点が低いぞ」
「先輩方、折角の小型航空母艦の記念式なんでから」
「で、幾らだ」
「これぐらい」

出されたのは今の国際紙幣の円からすれば、一銭まで削った額が、担当者は始末書ものだろう。

「まあ相場だな」
「新品を中古の値段だ」
「いや古い型式と思うぞ」
「なかなか通だな」
「調べたからな」
「手配済みだ、幸い操縦士のクラスがいる」
「よくやったリ・チェー」
「良くないっすよ、ＳＲに乗れないじゃないですか」
「役割分担、それにＳＲとは違った操縦熟練度が手に入るぞ」
「あんまし嬉しくないっす」
「ちなみに操縦関係は全部伸び率が高いぞ、それに関連もするし」
「船乗りっすか」
「整備用アンドロイドも手配して置いた、値が張ったが学習機能付だ」
「他にも買うものがあるっすよ？」
「乗り気になったところで次の仕事だ」

経歴から依頼が舞い込み、金を払ってギルドを創設し、フェンリルを開放して人の言葉を話す船長に付いた。リ・チャーがぶつぶつ

と愚痴っていたが、大人になれば豊かな経験だと思えるだろう、何せ初期から眺めていた生き字引の様な神格の聖獣なのだから。

学園から出ると校門がしまり、最新鋭の小型高速母艦に六機の戦闘機を収め、整備用自己学習アンドロイドに整備を頼み、問題なく良好な関係を持った。

「九年ぶりか古き友達よ」
「お前は老けないな」
「相変わらずふさふさ」
「ブラッシングしたほうがよろしいでしょうか」
「というよりよくまあ受け継がれたものだ」
「いたし方あるまい、これでも自由に？、？、？、？を冒険したが旧知の仲間は多い」
「ちょっといいですか、船長」
「何だ」
「情報獣が野放しに」
「まあな真の紋章を集めるのに苦心したものだ」
「はあ、こんな子供が船長かよ」
「子供からすれば幼児に思えても、この世界では最古参の神格獣だぞ」
「そりゃご立派で、じゃ依頼の仕事に向かうぜ」
「とうせ空賊狩だろ、ダニは多いな、遭遇したら殲滅して置こう」
「経歴は」
「除いてみろ」

搭乗員の経歴を操縦席から閲覧すると除いたらしく、すぐさま謝った、世界にある３６の真の紋章を持っているスコア一万を超える超弩級のトップガンだと、分かったのだろう。

次の仕事は戦闘機が出る前に真なる風の紋章で、錐揉みして雲海に落ちていった。

「次はなんにしようか」
「すげぇ、兵器の前に真の紋章のほうが強力だぜ」
「次は門の紋章で異世界に飛ばしてやろう」

そういうが噂は早いもので、今では紋章を持つことが難しく、全部となると五年はかかるといわれているほど貴重で、ゲーム内で真なる紋章を持つものは２０人も行かないそうだ。

大口の依頼が舞い込み、それで大金を稼ぎ、一日で投資額の元を取った。

「うわ、疲れた」
「鍛えがなってないな一年」
「鍛えすぎて太ってないですか」
「お前は脂肪が多そうだな」
「筋肉だよ」
「俺から見れば子供だな」
「俺たちからすれば巨人族と巨躯の人間が争っているようにしか見えない、ところで黒潮」
「もちろん用意しました、暁さんもご協力しましたし、大量ですよ」

大きな冷蔵庫から軽食のフルコース、ジャンクフードにシンプルながら美味しいバターパン、それをバーボン珈琲で食べる。

「しかし、船長チートすぎないか」
「船内から使っているから限定され、限られた範囲だ、もし白兵

になったら最高の運勢と思ったほうがいい、真の紋章をコンプリートした伝説の神格の獣だしな、ただＰＫで激痛を味わうだろうが」

「今頃昼寝だろうよ」

「後で餌をやろう」

「餌？」

「高級品しか食わないんだ、それ以外だと不味いだと」

「舌が肥えているな」

暢気に会話している俺と蜜月をスルーして新入部員は食べまくり、二人も食べている、話し終えると食べ始め、結局最後の一つを俺が食べて終わり、軽く十二名分あったが、足りないらしく新入部員は購買部に向かった。

平和な日である。

第九章始まったＰＫＫ（後書き）

なんとかフェンリルを出しました、主人公が霞むほどチートに成長していきます、しかも連続して受け継がれたのですから冒険談は貴重な相談相手でしょうと思って書きます

幼少期から青春期まで（前書き）

九弦の愉快な仲間たちの九弦の息子ですが、主人公は次からです

幼少期から青春期まで

第一編、幼少期から青春

0―1

まだ小学校に上がったばかりで遺伝子の病気で十年も生きられないと知った。

正直、幼かっただけによく分からなかった、そんな時に実業家と名乗る子供でも知っている会社のオーナーが治療を申し出た。

両親は何も言わず承諾し天空大陸で半年間コールドスリープで遺伝子を直した、そんな病気だったそうで、地表の七姉妹都市に戻ってその実業家のお兄さんと出会った。

こんな会話だった。

「よく無事だったね」

「治療してくれてありがとうございます」

「礼儀が好いな」

「これでも武門の生まれですから」

「将来困ったとき、これを」

渡されたのは紙切れの電話番号と住所とクリスタルだった。

それを受け取り、お兄さんと別れ自宅に帰った。

その後興味本位でクリスタルを弄って噛んだ、それが発動とは知らずにその後三ヶ月間こん睡状態に陥って、病院から退院したのはさらに一ヵ月後、学校に戻る前に、知識の本流をどう扱うかが分からず、自己流で理解できる点を書き出した。

両親から見れば勉強している様子で、よく家族で勉強会を開いて楽しんだ。

その両親は三ヵ月後に交通事故で亡くなった。

遺産目当てに親戚が集まったが、執事と名乗る人が来て紹介状を

見せ、覚えていた電話番号と住所を伝えた。
そしたら養子縁組が決まっており、お兄さんは成人には届かないが結婚年齢で縁組は出来るので承諾した、親戚達は醜い争いを繰り返していたが、遺産管理人が大物らしく、あっさりと引き下がった。
それから天空大陸で作られた、現在確認されている新元素の、研究の勉強をすることになった。

それは大学と呼ばれる場所で七歳の子供が来るところとは思えなかったが、あの優しげなお兄さんの子供になったからにはと思い、必死に勉強して独自に研究して、喧嘩に負けないように成長薬、知性の水を作り、試しにモルモットに与えてみて効果が確認されてから、そのモルモットを安楽死させて、自分に使った。

効果は一週間で実感できた、抜き打ちテストで何度も知識から答えを導き、主席を取った。

今までまともに字もかけなかった子供が、と大学生達は大人気ない態度をとって、正直こんな連中が残れないことは分かっていた、未だ篩いにかけられている最中。
自宅と大学を行き来する生活が一年続くと顔ぶれも減っていき、新たに入ってくる者も増え始めた、そこで自分達が篩いにかけられていることにようやく気づき、必死に勉強し始めた。
勉強が目的ではなく、その倫理が試されていることに気づいていない事が根本的な勘違いだと気づかない辺りが発想の貧しさだろう。
二年目で三年生になり、最年少で最古参になり、新入生も増え始めたが、半年で大半が変わり、また半年で十分の一に割っていく、それが一年生の難問、二年生は何所まで理解しているが、最終的に理解度と知識量、何よりも倫理的に優れた者が残る。

そんな訳で残ったのは三年生で二人だけ、１０歳の僕と１２歳の

彼、唯一の同期の為かお互いに、よく新元素の研究室からデータを盗む等して、新元素の基礎的な研究を続けていた。これがバレたら終わりでも研究するためには四年生まで待たなくてはならない。

それがハッキングのような遊びに繋がり、何所までハッキングで切るか競い合ったこともあり、暇なときはフォーチェーのゲームをして楽しんだ。

四年生に上がり、三年生が全滅したこともわかって、どの研究室も引く手あまねく。

基礎研に入り、二人で新元素の基礎を半年で完成させた、その結果ありとあらゆる学会から非難されたが、生物的機械因子が本当の元素で、それを魔咒元素と名づけた。

理由は基礎からでも判明した、フォーチェーンのゲームに出るテクノマジと同じ現象を励起させることから、名づけたために、公式的な建前としては良かったが、他にも取り組んでいた基礎研究者から、名前の改善を申し込まれることが日増しに強まった。

どのみち、基礎を完成させたものの早い者勝ちで、おまけに新元素のために名付け親も速の勝ちちだ。

魔咒は生物に自然界に分散し年々増加、それを呼吸のように取り込むことから咒力とも呼ばれる魔咒を扱う根本的な力が誰にでも吸収された。

マグピットを完成させ、軽い現象を励起させると、大学から保育園から大学院まで本格的に基礎から教え始めた、大学院生は極少数のために僕らが上ってくることを待っている状態。

根本的にテクノマジと同じ原理を使えるのでその研究は深まり発展した。

その頃には魔咒が一般的な元素の名前になり、元素記号は研究途中のために付けられず、魔咒という漢字が記号名になった。

天空大陸は八つありニルヴァーナ、エンブリオン、アサルトメンツ、ブルーティッシュ、ソリッド、メリーベル、ハウンズ、ムラダーナの八つの大陸、どれも四年前に現れ空中移動コロニーが十六、海上移動都市が三十六、そして人型可変式戦闘機スレイプニル、ローマ字の頭文字からＳＲとも呼ばれる、新種の兵器が生まれ、この四年間でもはや陸海空の主力兵器になった。

それからニルヴァーナは拡張工事を続け、人口一千万の大学園都市を生み出した。

十一で大学を卒業し大学院で基礎及び補助機関のマグピットの研究を始め、二年で卒業し発表した今まで自力で発動しようとしていた研究者を驚かせるマグピット無しでの発動は非常に困難という題名の論文を発表して彼と一緒に批判を浴びた、根拠が無いという基礎研究者、マグピットのライセンスを借り受け研究する会社の桜花社、魔装ＳＲを研究する絢爛社、ＳＲを開発する舞踏社等と協力して開発に当たった。

自宅には毎朝、彼が来る一緒に大蛇流仙術を学ぶためだ、僕は幼い頃からやっているために筋肉の付け方が違う、呼吸も一分間に数回だ。

彼は１２の頃からはじめ今年で五年目、基礎を終え本格的な鍛錬に入るところだ。

翌年、僕が満１６歳になる頃に義父が目覚めた、感謝のつもりで今まで義父によって救われた人々から手紙を預かった。

それは膨大な量になり彼にも手伝ってもらい研究が遅れたがそれでも十二分に必要だった。

満１７歳になる頃、ニルヴァーナの人口が多すぎるとして残る七つの大陸に学生を分散させることが決まった。

それから夏休みまで必死に集め、全部揃ったところでエンブリオンのゲーム部に連絡し、事情を話してから一日だけ部室を借りた。

僕自身も文章をしたため手紙に添えた。

フォーチェーン?で夏休みにログインするらしく、未来を確率で予想する能力はあてにならないことが分かった。
ゲーム部と調整してその日にぬいぐるみを着て待っていた。
ゲーム部交流の建前でプラカードを持って待っていた。
ゲーム部一行がやってきて色々いわれたが、その場所まで来て。

「実を言うとゲーム部は幽霊が多くて今回はこのような形になりました、今まで感謝します」
「そうか、君はあの時の」
「そうなります、実際もう成人を済ませているので実質的な親子の関係ですが、これからもお元気で、ではこの辺で」

そして僕はログアウトした、あの時のお兄さんが成長した姿だった。

「やれやれ相棒の父親がコールドスリープに入っているとはな」
「そういうなよ、画期的な医療だろ」
「時代を飛ばしすぎだ、まっ、お前みたいな仙人もいるしな」
「間違っちゃ困るよ、あれは対仙術用が基本だよ」
「他に知らないんでよく分かりません」
「当座はフォーチェーンを出来ないな」
「その分鍛錬につぎ込めるって」
「君が魔咒研究者と知ったら誰でも驚くね」
「お前もな」

彼の身長は１９０センチ、重戦車の息子のようなもので、体重も１００キロを超える。
僕のほうは１８０センチに届かない１７９センチ、体重は約７５キロ。
いつも見上げて会話するので首が疲れる。

「境界の噂は聞いたか」
「聞いたね」

境界とは異なる惑星と繋がる回廊のことだ、一本道で一旦入れば一方通行、入ったら行くしかなく、また入ったら帰るしかない。

八つの大陸に今まで不安定で調査も出来なかったが、安定化の技術が発表され、確立できたので調査団を送ったそうだ、しかし音信不通、何度も調査団を送っても音信不通、今では手に入らないお宝のようなものだ。

研究の成果で元素記号はＭＺと決まり、これまた僕らが最初だったので非難轟々だった。

呪具の開発もはじめ、関わる企業は厳選して信頼関係のある今までどおりの三社。

それを半年で完成させ、競争する企業が争ってライセンスを借り受け魔呪士のマグピット、呪具の市場は急速に拡大し現在の一万から一銭まである国際紙幣円の相場から一兆円を超えた。

彼は生体強化系、変化形を得意として、僕は化学系と電磁系と相性が良かった。

未来を予想したような賢者の手帳も最後の一ページを終えたのが僕が１８の頃。それ以降は義父と仲間たちが発展させるらしい。

遺伝子の知識から、彼を説得して遺伝子を強化するために一週間ほど二人でコールドスリープに入った。

一週間後病室で目覚めた時は、リハビリが必要なほど強化されており計算どおりだった。

彼と一緒に卵を掴むことから始めて力加減を掴むのに二ヶ月を要した。

それからは順調にリハビリをこなし大蛇流仙術の鍛錬を始めると面白いように腕前が上がっていった。

高名な剣術家を招き、手ほどきを受け半年で免許皆伝、お互い線が意識すれば見えるほどの、レベルに達し達人レベルに行き着いた。

それから研究を一時的に凍結して、三社に任せた。

それは世界を回り腕前を鍛えるためだった。

一年、世界で強いと呼ばれるものに対戦し、何度も負けたり、勝ったりを繰り返した。

その間に生体機械因子を体内で製造する遺伝子を生み出し、二人で使ってみた。

激しい激痛で何とか沈痛剤を作り二人で飲んだ、痛みが激痛から沈痛になり世界中を旅しながら戦闘技術を磨いていった。

野宿することもある、たまに戦場に迷い込むこともシバシバ。

僕が十九になる頃、全滅していた調査団の計画が一歩進み、調査が成功したと報じられた。

二人で小学校まで若返り、学校は通信教育でひたすら魔咒術の研究、仙術の鍛錬、剣術の鍛錬を繰り返し中卒まで通信教育だった。

その間に調査も地道に進み、不確定な未来は相変わらずだった。

高校には行かずニルヴァーナ学園の大学院を受験して見事合格、十五歳で大学院に入ったその後二年間知らなかった知識を貪欲に吸収し、それぞれの得意分野を研究して、卒業時に倫理に関する論文を二人で発表して博士号を手に入れた。

今まで避けてきた高校に入学して十八で質問攻めにあった。

「学生は騒がしいな」
「だから避けてきたんだけどね」
「何所のどいつだ、最低学歴高卒って」
「休暇と思って楽しもうじゃないか」
「やれやれ相棒の特技何事も楽しもう」
「それは口癖」
「そういえば二つの有限会社が分離して独占市場からなくなったね」
「オーナーはどうしているやら」
「境界を越えたんじゃない」
「何でまた」
「非常に簡単スリルを求めて」
「金持ちにはありそうだな」

そんな訳で一年間初めての高校生活を送ります

1―1（前書き）

モンハンのようです

1―1

世の中分からないことがある、天才として名をはせた九弦家の次期当主は行方不明、その父親も行方不明、いっそのこと呪われているということを信じることはないにしろ、不可思議な話だ。

高3になり受験シーズンだ、進学の為に勉強するしかない頃に遺伝子の病気が判明し余命半年といわれた、両親は泣いたが、コールドスリープがあると伝えられ眠りに付いた。

半年間で治療は終わり、無事治療できた、それからが問題だったのが困った話だ。

リハビリが必要なほど感覚が分からなくなり、同じようにリハビリしていた二人と仲良くなって共にリハビリをこなした。

名前は月影、空の少年二人だった。

兄弟のように中がよく、年齢を聞けば同じく高3らしいだが、飛び級で大学院を卒業し暇だからニルヴァーナの学園に通っているらしい。

二人からリハビリに武術を学んで、魔呪術を習った。

その二人の誘いでニルヴァーナの学園の最も過酷な戦闘訓練を受ける、戦闘科に入り同じように訓練を受けながら放課後には鍛錬と学ぶ事を毎日行なった。

おかげで平均的な身長の１８０センチに達して体重は９０キロまで上がった。

その二人は少しだけ高い１８２センチに１００キロの重さ。

月影は日系で黒髪、黒目、黄色の肌、空は褐色系で銀髪、オッドアイの赤と黒。

共に長年鍛えたようで筋骨粒々で剣術にも秀でる。
戦闘科で1，2を争う戦闘能力を持つ強すぎる親友だ。
二人から学び、鍛えられながらオレの戦闘能力も毎日の積み重ねなのか１００位に入る。

中間テストで二人は教官達を纏めて倒し、その連係プレイは絶対の信頼感を感じさせるほど慣れ親しんでいた自然だった。正直この二人のレベルに達する高校生がいるかと疑問に思う。

期末テストになる頃オレの成績は上がり、５０位になった。

夏休みひたすら鍛錬と学ぶ日々、睡眠時間は毎日２２時から４時まで、それまでは食事の休憩以外は無い。

最初は疲労困憊で倒れそうになったが日々になれていった、適応力は恐ろしい。
夏休みが終わってから初日、学校に行く前に二人が住む自宅に招かれ、若い二十歳前後の執事の人に案内されみっちり鍛えられた。

後期の中間テストで9位に入り、周りから凄まじいポテンシャルと噂され、卒業テストが見ものと言われた。

剣術も学び二人は刀を使うが、オレは青龍偃月刀、中国の大刀の一種、長い柄に肉厚のある反った刃のようなものがあるやつだ。

刃が８００ミリ、柄が８００ミリの１６００ミリ、二人が速さを重んじるが、筋力的に扱いやすい上に一撃の重さ、そして長さだ。

二人から学んでいくにつれ速さを重んじるのは攻撃回数を上昇させ、小回りを利かせるためらしく、毎月柄が１００ミリ縮んでいっ

て卒業テストの時には４００ミリの１２００ミリに収まっていた。

卒業式は教官達と一騎打ちで一月が要された。

第三位に入り、主席の二人には届かなかったが、最下層から最上位まで上り詰めたのは何も言わず親友で師匠である二人のお陰だ。

二人が境界線を渡る予定になり、俺は二人についていくことにした。

もちろん両親は大反対、しかしもう成人で自立のためだと主張した。

結果的だが、二人が説得して許可してもらった。

「そういえば話してなかったけど苗字は九弦、空の苗字は翼、共に魔咒の基礎を完成させた父親を持つわけだよ」

「おいおい九弦って九弦有限会社か」

「そう三代目になるね、祖父はもう歳だから現役を引退して運営に回るそうだ、両親は世界放浪、空の場合も空の祖父母は反対したけど、事務所の運営に回ってもらった」

「なる、半年間はファイトシミュレーションか」

「訓練にはもってこいだよ」

それから半年間、成人男性三人で、六時間のファイトシミュレーションで汗を流し、ニルヴァーナの境界線を越えるための摸擬戦を繰り返していた。

境界線を越えた日、背後には一方通行の波打つ海面のような境界がある、それを境界線と呼ぶのだから納得だ。

一面に広がるのは基地のような施設ではなく学園のような施設だ。

二人が慣れた様子で案内して傭兵として登録された。
それからは毎日傭兵としての訓練の日々、それで半年が過ぎた。
二十歳になり、訓練生から駆け出しに昇格した。

二人の場合慣れていないもの、優れた学習能力で、一月で訓練生を卒業し、すでにレベル１の範囲の調査を行なっている。

久しぶりに再会すると二人は退屈そうに昼飯を食べていた。

「やっとレベル１だ」
「遅いぞ、あんな訓練に半年もかけるな」
「いや兵士としての訓練は難しく、すまないな」
「いいって空が不機嫌な理由は本能的なものだ」
「性欲か？」
「おめでとう大当たり」
「レベル１で稼いだら一旦戻るか」
「そうしよう」

昼食を食べ終えると、ペネルＭ４、グロッグ１７ロングカラムマガジンの二丁、法則に則った物質を質量分解し必要最低限の弾薬で終えている。これでも苦労して内職の講義を行なって稼いだ品々だ。

「なかなかの目利きだな、しかし火力が足りないカスタム屋に寄ろう」
「奢ってくれるのか」
「神が直々に命じても貸しにしておく」
「借りか、まあなんとかなるかな」

施設内の兵器商が立ち並ぶ一角にある、財布の中身を壊滅させる

ことで有名な嫌な予感のする銃器店に入り、空が払うらしいが、月影が選び、超高価なオラクル系はエネルギーを加速力に弾頭を飛ばす弾薬が安いが、その品々は馬鹿げたように高いハンドガン５０口径を二丁、オラクルマテリアルリボリング式ショットガンは１００口径マテリアル専用弾に８ゲージの弾頭を込めた六発同時発射の六連装の銃身を持つどれも桜花社製品。

今までの品々を下取りに出し残り分を空が支払った。

「泣きたくなるぜ」
「安心しろ、弾薬も買っておいたよ」
「安心できないって」
「カスタム屋に行くぞ」

次に向かったのは破産覚悟で行けと言われる善意が全滅した看板の、破壊好きのならず者なら寄って来いという看板のカスタム屋。

「ようお二人、いつもどおり良い物に作りかえるぜ」
「じゃこの三つを」
「桜花社製か、高いぜ」
「気にしない」
「もう十分だ」
「全部」
「おう」
「重いね」
「気にするな、これは月影の奢りだ」
「さすが人格者」
「オラクル系は高値だ、覚えて置け」
「へい」

五時間ほど待ち、二丁の桜花社製正宗１５が帰ってきた、競技用並に軽量化、試し撃ちの反動も扱いやすいレベル、火力もマテリアルライフル並みの２５ｍｍ並み。

次の２時間でショットガンが戻ってきて、六連装ながらフルオートのドラム式の弾倉が予備二個装着でき重量４キロ台。反動値も薄く破壊力は軍事兵器のＳＲ並だ。

「装弾数も上げて置いたこいつはおまけだ」
「月影感謝するぜ」
「いいよ、どうせ金は余っているし」
「金持ちって楽でいいね」
「祖父から受け継ぐからね」
「俺も稼がないとな」
「じゃレベル１に行ってみますか」
「ああ」

弾薬を近くの店で買い込み、質量分解で背中に背負うバックに詰め込んだ。

エネミーが嫌う煙草を買い込み、防水燐寸も買い込み、次は歯のホワイトニングと娼婦代で消し飛ぶだろう。

レベル１の範囲のヘリで運ばれ、降りた地点に補給基地があり、捕獲された原種が学術的な調査を受けていた。

大学院を卒業し高校では主席地同士だった超大企業と超有名研究者の息子とトリオを組み、狩に向かった、調査というがゲームのようにエネミーとの戦いだ。

この日の為に確認されたエネミーを随時分析したものをダウンロードする情報分析器、外見は丸渕サングラスで確認した、恐竜を現代風に例えると竜だ。

ブラックドラゴンが眼前の全身漆黒の巨竜は、その鱗の色が如実に示すとおり黒竜であった。猛毒を吐く獰悪な種類の竜である。しかも掲げた頭部までの高さは、優に家屋の二倍以上の高さがあった。

頭頂までの高さと後方にくねる尾までの竜の全長は２０メートル、黒き邪竜の凛列した、その永劫の氷河の様な目が、彼らの視線と正面で衝突する。視線だけで身体を恐慌させる力を感じる程だ。

情報分析器に判明したのは生後一年ずつ一メートル成長し、二十年生きたブラックドラゴンらしい、蛇の毒に似た生成された毒には人体の細胞を分解する化膿連鎖球菌など、血管を破壊する総称を持つタンパク質分解酵素が含まれ、血管の破壊による酸素欠乏症でしに至らしめる猛毒を吐く、そんなドラゴンが暮らすのがモンハンのようなドラゴン楽園なのだ、皮肉にも境界線が楽園を楽園が破壊する、人類が繰り返している間違いと同じに見える。

しかし、こちらも餌になる気は無い、ドラゴンが襲わないならいい、襲うなら戦うしか道はないのだ。

二人は素早く両脇の死角に回り込む、ブレスで一毛大尽に追い込もうとしたドラゴンはブレスを諦め、弱そうなオレを無視して二人に攻撃を仕掛けたのが間違いだ。

六十発のマテリアルショット弾をフルオートで六十発の８ゲージを食らわせた、ドラム式の予備弾倉に切り替え、リロードを終えるとさらに六十発を食らわせ、最後の弾倉で合計１８０発を食らわせた、そのブラックドラゴンの腹は貫通したマテリアルショット弾が、息絶えたブラック　ドラゴンの屍を見せ付けた。

「貸しの分はチャラだ、やるな一番薄いところに連続して、手早

くリロードしてから自由激を続けるとは」
「死んだのか」
「ああ、モンハンの様だろ、楽園が楽園を潰すところが皮肉だが」
思いっきりこみ上げ来た中身を吐いた、人を殺したわけではない初めて生き物を殺した、それも強いか弱いかを見分ける知性を持った、そんな生物の楽園を血で汚した、よく考えるべきだった、他の惑星には他の惑星の楽園があることを。
あまりにも身勝手であまりにも傲慢なのが人類だと気づいたのが、蒼い証拠だといえる。
「誰かがやらなければならない、批判するのも、賛同するのもその実に染み込ませないと」
「分かった」
マガジンを落とし、質量分解していたドラムマガジンを三個物質化させ装弾し、装着した。
「次に行こうか」
「ふん、いっちょ前に勇者様面だな、あまり気張るな、ここでの生存数は一桁だ、特に単独ほど死に易い、軍隊なんかベトナム戦争より低い数字だ」
「酷い話だ」
「だからどこかの慈善家は良心の許す限り贅沢な装備をさせるのさ」
「月影」
「別にそんなわけじゃないよ、祖父が生み出した罪を贖罪しているだけだ、平和な場所で麦だけを食う連中よりましさ」
「行こうぜ、俺達の生き様を見せてやる」
「ああ」

その日で生還率は０・１パーセント３０００人が出て戻ってきたのはオレ達だけ。

「報酬です」
「ここじゃ一番安いのが人間のようだ」
「すみません」
「いや貴方が謝ることじゃない、次からはサバイバルを学んだものが戻るだけだ」
「ありがとう、初めてです罵声を浴びなかったのは」
「いや誰もが不満に思っていることだろうよ」
「よく耐えましたね、明日もまた会いましょう」
「じゃあな姉ちゃん」

酒場に入るとごっそり人が減っていた、誰もが通夜のような顔だ。

「一日の稼ぎがたった百万とな割に合わないぜ」
「新入りだ」

その入った酒場の全員が起立して思い思いの武器を翳した、それが挨拶のようでショットガンを翳した。

「よく生き延びたな新入り」
「今日はマシな方だ」
「よし月影のおごりだ、飲むぞ」
「好きなだけ飲んでね」

今までの暗い雰囲気から一変して陽気な酒飲みの集まりに変わった。
酒場で紅一点のウェイトレスが忙しく酒のボトルを配っていった。

「新入りは悪いが缶ビールだ」
「何だよそれ」
「冗談だよ、何事も真に受けちゃ身が持たないよ」
「良かった、ジンジャーエール」
「カクテルは二度目を終えた者の特権なんだ」
「それは冗談じゃなさそうだな、ウォッカ」
「ウォッカを三本」

それから修羅場を潜ってきた者同士好き嫌いは有るもの、それぞれ最初の話を聞かせた。
ここではサバイバルを学んだものだけが生き残る、生存本能と危機察知能力が長けていることだけが、一番の特技。
泥酔するまで飲み、酒場の個室に放り込まれたらしく寝台の傍で寝ていた。
個室で起きた後、同じ様な者同士朝飯を食べて、生き残るために情報交換をしていた。
それから半年間、ひたすらレベル1の調査範囲で学習していた。
何を学習したか、簡単なことだここで生き残るために、どんな生物がどんな行動を取るかの学習だ。
その間に堪った学術的な論文を一人で書き上げ、学者の方々に審査してもらい、新入りに教える事になって、論文として発表することを強く勧められた。

この学園のような場所で、生存率を上げるため苦心したために、この場所で教える事になったのだ。

1―2

「マスター、今年の新入生は」
「多いですよ、一万人だそうです」
「昔は酷かったからな、今年からはマシになることを祈るぜ」
「宗教を？」
「単に琉球民族なんだ」
「ああ先祖崇拝」
「誰だって先祖は大切だぜ」
「確かに、ですが無くなった方々は無念でしょうね」
「これでも墓場には参りに行っているぜ」
「それはご無礼を、どうですジンジャーエール」
「頂くとしよう」
「空様の研究でレベル1のファイトシミュレーションが出来たそうですよ、ただし料金は取るそうです」
「オレも貢献したんだが」
「ええ貴方の貢献は大きい生存率が上がったほどですから」
「それともっぱら噂だがレベル2が解禁されるだって」
「根拠のない噂ですよ」
「そいつは良かった」

バーのマスターが造ったカクテルを飲み干し、百円玉を置いていく、昔でいう一万円に相当する。

一万人の新入生に実際の映像を見てもらい、その場で吐く者、泣く者、繋がっていたらしい者、その悲惨さ、厳しい訓練をクリアしなければ帰るか、もう一年訓練するか選ばせた。
実戦で鍛えられ、白兵戦から射撃戦までこなすために重宝され、二人が新入りを贅沢させるために、時々パーティーを組むことすら

あったが、殆どソロだ。
それ程の実力者にのし上がった。

「さて新入生諸君、転職をお勧めする、それでも残りたいものは残れ」

大半の者が去った、残った連中をそれぞれの得意分野から現役が教えた、教官達も教えるが、それは補助的なものが多い。
残った連中で訓練課程を済ませ、第二の試練であるファイトシミュレーションレベル1でソロとパーティで戦い、それぞれ性別ごとに別れパーティを組み、レベル1をクリアするまでひたすらクリアを目指し、二人が教える武術と魔呪術、そして剣術を叩き込んだ。

オレもドラゴン達の弱点、行動パターン、絶対回避の条件その他もろもろのエネミー情報を教えた。
ここでは電子機器は危険だ、何故ならドラゴン達はお隣さんに慣れていない、要すれば文明の利器が危険を招くことが先輩方の経験的法則から学んだ。

SRなら簡単だが、それを維持するための資金が個人には殆ど無い。
要すれば軍隊でも回されない高級品は使えないわけだ、何よりも音が大きすぎる。
それに武器の値段、維持費、弾薬費も桁違いだ

「今年の生存率は高そうですね」
「去年は残ったのが三人だしな」
「オレ様から言わせれば甘ちょろいうたい文句に食いついた美味しい話には裏があるというストーリーに気づかなかったわけだ」
「ちょっと」

オレ達が黙る、防衛軍の実力者の高級士官が兵士と話を聞いている、それも独り言の建前で。

「レベル2のところで見ちまってな、ありゃあ確かに人型をしていたが、何と無くアンドロイドのようだった、もちろん酒に酔った戯言だ、証拠も何も無い」

高級士官が金を置き、こちらに来た。

「一年生の訓練もあるが騒いでいる酔っぱらいの話は本当か」
「レベル1から出れないからな」
「レベル2の可変式ヘリが明日空港に出るそうだ、もちろんそんな予定は無い、当然ヘリも無い、七人の小人」
「もちろん独り言だ、明日予定が無いらしい」
「希望」
「あいよ」

高級士官が敬礼して去っていった、兵士は独り言を続け、多くの現役が聞いていた。
行動は素早く、装備を整えて防具にも金を掛けカスタム屋の師弟が、一日というと苦しい顔で頷いた。

翌日まで休み、朝早くカスタム屋に寄った、全部出来ており苦しい顔で金を払うと渡してそのまま閉店。
二人は防具を新調しても軽装だったが、オレは今まで使っていた桜花社の新シリーズＡ－?を購入した、今までの六連装から三連装に小型化し、オラクル系スラッグ　チェーンガンになった、最初からフルオート機能、マテリアルライフルの火力、ショットガンの面的射撃、それが合わさり凶悪な対物兵器にチェンジしたことになる。

装弾数は今までと同じで６０発のドラム式マガジン、小型化、軽量化、それでもオプションは予備弾倉二個装着、狙撃機能付でセットにオッドアイの熱源スコープ付き。

３０？マテリアルライフル弾の８ゲージのショットガンの合作に、三連装のショートバレルのチェーンガンを、ベルト式ではなく弾倉式に変えた対人用ではない、画期的ながら少数生産に留まるだろう。

オラクル系ハンドガンの最新鋭のシリーズ１５から２２、今までロングバレルの銃身から小型化、軽量化、弾を５０口径ＡＥ弾に５０口径なら殆どが使える汎用性を得て、桜花社製小型サイレンサー標準装備の小音性を得た。

マグピッドこれは一番苦心しただろうが、より演算機能が強化され、自動防御システムが採用されているために、面的場所に浮遊する。

大刀の青龍偃月刀の高価な咒具を組み込んだカスタムモデル。

防具は相手を刺激しないように皮製の品々に咒具を組み込んだ高級品。どれも桜花社製品。

質量分解してリュウクの中にしまいこんだ。

空港に入り、もちろん真正面ではなく関係者のところからだ。

格納庫に案内してもらい、合言葉の希望と答えた。

「すいませんね、本来軍人が先走るのはご法度なのですが」

「別にいいよ、それより急ごう、官僚さんが怒りそうだ」

「はい、乗ってください」

オレ達が搭乗すると可変式ヘリが飛んだ、最初はゆるく徐々に高度をあげ速度も増していった。

「敵対的でも友好的でも攻撃しないことが絶対だよ、分かっているね二人とも」
「当たり前だ」
「もちろん」

一時間ほど飛んで、あっさりとレベル2の場所に移動した、そこからは徒歩で、白兵武器を持ちながら、歩いていた、半日ほど歩いたところで村が見え月光の光に包まれた果樹園に囲まれた村だった。
朝まで野宿して、朝早くレーションを食べて村に入った、村人は無関心で、翻訳機があるが話しかけても無言でスルーしていった。
村長らしき女性に話しかけてやっと反応があった。

「煙草あるか」

翻訳機で翻訳されたが、まさか煙草を要求されるとは思わなかった。
煙草を取り出し、防水燐寸と共に渡した。

「ふーん、なかなか良い品だ、我々は機械姫と呼ばれている、女性しか居らず、男性はいない、昔世界を旅している人間にあったことがあるが15年前だ、その者はいずれ男性を生み出してみますといって15年だ、その者は九弦と名乗っていた」

「十分です、ありがとうございました、ただ人間は凶悪です」
「その者も同じことを言っていた、だから無関心でいろといわれた」
「我が祖父ながらよくまあ15年もほったらかしにしましたね、今すぐ男性を生み出してみます」
「しかし材料が無い」

「失礼、髪の毛一本貰えますか」
「かまわん」
髪の毛を一本渡され、それをサンプルのビンに詰め、別れを告げ、帰路に着いた。
近くで可変式ヘリが待っていた。
それから帰路に着いた。
空は高級士官の元に向かい、九弦はサンプルから分析に回った。
九弦なら簡単に生み出すだろう。
オレは酒場で独り言を話していた。
九弦は嫌味なほど有言実行だった、一週間で試作機を生み出し、二週間で完成させた、それを村人全員のパートナーになれるほどのバリエーション豊かな数を作り出し、新機能としてサイキック、超能力を付け加えた。
男性達には最初から人類に対しての知識を持たせ、人類がいかに凶悪か認識させた。
ただ男性達と共に現役の仕事を行い、信頼関係を持つに至った。
男性達には生み出された記憶は無い、最初からいることになっている。
その男性達を希望のヘリで輸送して、製造法、その施設を九弦が作ったそうで、早くもベビーブームが起き、その製造法は二つの機械因子を合わせることでＤＮＡと同じ意味合いを持つらしく、それから教えることで学習していった、現代のアンドロイド技術を超えた創造力、閃き、機械姫なら機械人に変わるだろう。

その間レベル１の範囲で、ファイトシミュレーションを完全攻略したパーティから現場を共にした。
平均すれば三度ほど現場を共にした事になり、平均して一週間の臨時の補佐役だ。
生存率は激的に上昇し殉職する者も絶えないが、七割と行った所だろう。
新入り以外の古参が少ないことから生存率は一桁を斬ることが、新入りにも分かり、古参ともパーティを組むことが増える傾向にある。
とは言っても残ったのは４００名程度で、今は２８０名前後。
基地には機械人もヘリで傭兵になるべく加勢に来て、白兵戦とサイキックで活躍した。
彼らは生まれながらの戦士だ、白兵戦の猛者すら退ける。
彼らは男女問わず現場を共にすればするほど友好的になる。
最初は冷たい印象を与え、絆を持った者には若干笑顔で話す、そして用心深いことでも有名だ。魔咒術が使えない代わりにサイキックが使える。
建前的にはレベル１の範囲だ、しかし実際は彼らの女王が住む、レベル５の範囲まで調査が及んでいる。

問題を起こさなければ人間でも歓迎する王都の住人達だ、魔咒術は珍しいらしく当たり前だが、彼らには使えないが、現在はベビーブームにサイキックの研究で活発的に動いている。
その女王に指名されドラゴンの学者として招かれた。
空が機械人とは子供は作れないぜと体験談のように語っていたが、明らかに呆れた行為に及んで青あざを作ったのだろう。

ゲンブレ０４という可変式ヘリに乗り込んで、五時間ほどのフライト。

その間に機械人の法律を勉強していたら、案内役の機械人の女性が、今回は指名の為にある程度は許されるらしい。
オレは機械人の中でも有名なドラゴンの学者らしい。

実際女王に会えば、美しく玲瓏で妖艶な三十代に届くかもしれない女性だった。

「貴公か、ドラゴンの学者は」

女王が愉快そうに話している、おそらく俺か持っている三連装のスラッグチェーンガンが笑えるのだろうと思う、何故なら彼らは人間を超えた動きで銃器を無力化する、それに加えてサイキック能力でバリアも張られる。

「ご氏名とのことですが、数万年も生きた女王陛下に教えることがありますか」
「あるぞ、人間から見たドラゴンの見識だ」
「では」

長々と六時間も話した、何故ならドラゴンの話を纏めて話すと一週間の毎日六時間で４２時間は要る。
その為に一週間滞在して話し終えた後に質問攻めにあった。
結局予定より二日も延長され、最後に生体アンドロイドに近い機械人の食事の王宮内の物を食べた、薄味でおそらく栄養価も厳密に計算された旨味たっぷりな果実がメインな料理の数々だった。不満なのは平らげる事よりも一口ずつ食べて酒は出ず、清涼飲料水を飲まされた。

「なかなか楽しい時間だった、また会おう」
「私としてはもう十分ですが」

「若いな、さすが青春時代か」

何もいえない、数万年も存在した機械人の女王からすれば一日にも満たない時間だ。

女王は最後まで終始笑顔で愉快そうだった。

性格は印象とは違い活発な性格らしい。

基地に戻ると今度は駆け出し達の質問攻め、うんざりした顔で、三人で借りている６ＬＤＫのマンションの部屋で酒を飲んで寝た。

翌日からも質問攻めだった、それが一週間も続いた。最悪だ

1―3

1―3、１９１３基地。

今年の新入生は五千人、最初の試練で４０００名が去った。

第二の試練で訓練、学習を繰り返してファイトシミュレーションの第三試練で残ったのは半分だった。

それから機械人について説明し、同じように新入りの機械人とパーティを組ませ、交流が盛んになり交易まで行うようになった。

九弦が境界を見つけたらしく、また御指名もあって女王と会うことになる。

今度は質問攻めに会わず、代わりに九弦が質問攻めに遭い、最終的に機械人の国家が境界を管理することになった。

帰る時に女王と夕食を共にした、今回は果実から出来たリキュールが出た。

気品、優雅さ、人柄、性格から外見、仕草、雰囲気、どれをとっても女王だった。

そんな御指名が度々遭った、どうも子供のように気に入ったようだ。

境界が完成すると、無人機が第一調査隊として採用されて入った、即時一機が帰還して今度は方向感覚が狂う迷いの森だったのが、かなりのショックだ。

調査隊が第二十二になってやっと森からの出口が判明し、そして第三十まで調査が続けられた。

その間にレベル１の調査が終わり、九弦が報告書を持って帰還し

た。
　阿呆とバカがコサックダンスパーティーでも開くかのように、軍隊を送り込んでレベル１で壊滅した、一個師団の生き残りは僅か一小隊、帰還して報告したら首だろう。
　師団規模の軍隊が壊滅した理由は忠告したが、電子機器をフル活用したと推測するが、恐らくそれ以上のことをしたのだと思う。
　九弦の祖父から正式な許可を取りどちらがファーストかは置いておいて、条約が結ばれ、機械人が正式に人類との友好関係を築いた。
　惑星全土が機械人の惑星と承認され、一部の国家は拒否権を使ったが、国連の主なスポンサーは矛盾家と九弦家、今では形骸化したのと同じ。
　レベル１が現在の居住区、危険なお隣さんが襲わないようにＳＲが配備された。

　月影が戻ってきてこの惑星の境界を調査することが、傭兵達の次の仕事になった。
　幸い迷いの森は切り開かれ、基地が建設され、第一境界から第九境界のレベル１が迷いの森で、引退するものは居らず、二度目の惑星に入った。
　今回からＳＲが配備され、救援部隊、支援部隊、中間基地防衛部隊が構成された。
　元々お馬鹿な政治家のせいで悲惨な目にあったので、政府の軍隊を信頼せず、何所まで行っても防衛部隊の楽な仕事を行なう職の人々と思うことになっている。
　実力者だった高級士官の軍人は最高司令官に昇格した。
　第１９１本拠地と名づけられ、今度の惑星は地平線の見える大地がレベル１エリアと指定され、僅か二週間で調査を終え、エネミーらしき生物も確認されず、無人機を飛ばし調査を続行した。

「楽で良いね」

「バカたれ、安眠設備が騒ぐぞ」

今では二人の親友と新しく仲間になった機械人の傭兵、紅一点ながら女性的な魅力が薄いほどのスレンダー、安眠設備はＳＲの事だ。

その事をＳＲの操縦士も薄々知っていて、傭兵、歩兵とは別に専用の愚痴小屋と呼ばれる給与で飲む酒の店で、毎日防衛に当たっている。

傭兵から壮絶に嫌われ、歩兵からは絶対に当てにならないと言われるほどの険悪。

非常に珍しく月影だけが嫌悪しない、その為に喧嘩にならない。

機械人からは安眠設備の名前で知られるために、操縦士達の愚痴は止まらない。

「エリア３、４，５でトラブル発生」

≪傭兵に告ぐ、エリア３を調査せよ≫

合計１０００名にも届かない約９００名前後で、輸送機で運ばれた。

今回のトラブルは安眠設備達が待っていたエネミーだ。

１９１３基地と名づけられた中継地点、そこに防衛部隊、非戦闘員が集まった。

施設の完成が終わったら、無人機を飛ばし可能な限り情報を集めた。

「きついわね、これってドラゴンの亜種になる小型原獣群よ」

「どの惑星にも恐竜が住み着くのだな」

「ちげぇよ」

「早い話、これはドラゴンのようにブレスを吐かず、捕食する肉食獣だね」
「動きが敏捷だ、ドラゴンは的がでかく鈍重だからな、まずはオレ達から行こう」
「ツガローメ初陣だね」
「これでも貴方達の何十倍も存在しているのよ、白兵なら任せなさい」
「いつも通りリーダーはツガローネということで、年上だしね」
「何と無く癪に触るわ」
「さあ行くよ」

エアーバイクに乗り込み、殆ど音を立てずトップスピードに達した。
リュックから物質化させた、使い慣れた青龍刀のカスタムモデルの咒具付きなのが業物。
ツガローメが片手の手話で白兵できるのか、なら前方に出ろと出してきたので、アクセルを強め、一気に並列走行から前に出る、その爆音からエネミー群が熱源反応で確認できた。

「学術的な献体にしてやる」

電磁光学系はオラクル系に使われるエネルギー銃と同様でマイクロ波より波長の長い可視光線、近赤外線の光を交互に発生させた磁場で増幅し発振させたふざけたほど長い大刀の出来上がりである、それを振り払うたびに、扇状の光線が群れを減らしていく。

≪ＳＲとも渡り合えそうだ≫
≪質量通信を使うなよ≫
≪やるじゃないか、今までガンマンと思っていたが≫
≪惚れちゃいそうだにゃ≫

≪ツガローネ、ふざけている場合か≫
≪その内分かるってにゃ≫
≪初陣で出来上がってやがる≫
≪いるんだよね、ハイになる人≫
≪後は任すにゃ≫

トップスピードからレッドスピードに入り、さらに加速させていく、群れが先頭に走る爆音を撒き散らすツガローネに群がり、サイコキネシスで首をへし折られていった。

最終的に同じような魔呪術を使った二人と、他の肉食獣を焼き切っていた。

≪わ、私は!?≫
≪正気に戻ったかにゃ≫
≪にゃなんてお前は肉球信奉者か≫
≪ある意味ギャップ?で萌えると所?≫
≪言うな!リーダー命令だ!≫
≪よろしくに≫
≪肉塊に変えるぞ≫
≪じゃぁ全通信回線で≫
≪すまない、言わないでくれ≫
≪言わないって初陣だからな、あれじゃバーサーカーだ≫
≪すまん≫
≪それより、連絡しようぜ≫
≪言わないでくれよ、今回は珍しく大刀で戦った天地丸に≫
≪天地で良いぜ、俺一人だけ三つの漢字を使うわけには行かないからな≫
≪馬鹿者!親から貰った名前を使わず何を使う≫
≪そりゃぁ愛称、通称天地だし≫

≪これでも人間とは長い付き合いだと思ったが、まだ覚えることが多そうだな≫
≪全通信回線、エネミーの解体作業を終わらせたぜ≫
≪こちらオペレーターです、速く戻ってきてください≫
≪わかった≫
≪戻ろう、トラブルのようだ≫

帰ってみれば程度の低い操縦士と歩兵たちが喧嘩していた、無駄なことをしない傭兵達はどちらが勝つか一目瞭然の為に、暇潰しに眺めているだけ
月影が両者を一括して五時間に回る説教をして反省文を書かせた、心の中でお前は教師か？などと思ってしまった。
そんな日に賓客が来た、白鬚を蓄えた月影の祖父九弦家当主九弦一夜、全員を労い財政的な支援を申し出装備の下取りを元値で買い取ることを宣言した。
孫もそうだが、筋骨隆々の侍のような爺さんだった。
酒場で夜の暇つぶしをしていた。

パイロットが医療施設に入っているために、仕方なく歩兵と傭兵が交代で見張り番をしている。
ギャンブルは禁じられているのでポータブルＶＲＭＭＯＲＰＧフォーチェー？、娯楽費用は稼いだ金からすれば小銭程度だ。

「おお、幻想的だな」
「おいおい、やったこと無いのか」
「仕事が忙しくて人間のゲームはやったことが無い、しかしリアルだな」
「こいつは人間の星で何十年と愛されたゲーム機なんだぜ」
「そうか」
「しかもだ、こいつは奇数の場合高い確率で未来を予想する」

「偶数だぞ」
「それが違うんだな、？―？があって実質１３なんだ」
「ほう、それは楽しそうだ」
「どっちもガキだな」
「仕方ないよ、二人とも今までゲームとは無縁な修羅場を潜ってきたからね」
「んで二人とも経験なしか」
《ああ》
「仲のよろしい事で」
「誰かさん、みたいな、ことはしない」
「ありゃあ誰だって経験あるって」
「僕達は子供の頃やったことがあるからね、その場合は本当に現代を見据えたものだった、恐らくどこかに未来に関係する何かがある」
「当番まで四時間暇潰しだ、酒を飲むわけには行かないからな」
「安眠設備め、仕事すら出来ないのか」
「君も結構・・毒吐くね」
「月影は愚痴も陰口も悪口も言わないな」
「ハードボイルドを気取っているのだよ、なんてね」
「軽口は結構言うな」
「それでこのゲームは何なんだ」
「ストレスが解消できるゲーム」
「こいつは１０年後の未来を想像したものらしい、文句は他に言ってくれ」

ステーションに入ると噂に聞く、獣人が多様に居て、ワルキューレと呼ばれる機械人と似た種族、ラピと呼ばれるウサギから進化した種族、フェザークルツと呼ばれる鳥から進化した種族、トカゲから進化したドラゴンニュート、失われた種族と呼ばれていた人類が残った遺体から復活させたニュートラル、機械人、人間、妖精と呼

ばれるエルフ、ドワーフ、ホビット、巨人族のルル、小さなホビットに似たワッタ、夜の惑星で知られるニッティ、水生惑星で知られるマーメイド。

「ヒュー」
「異文明がこんなに」
「異種族がこんなに」
「マイナーからメジャーまで居るね」

一人のニッティがやってきた、優雅にお辞儀し、剣を掲げた。
同じく刀の二人、大剣のツガローネ、青龍刀のオレが掲げた。

「噂はかねがねニルヴァーナの第一で名を上げた九弦様、矛盾の空様、ドラゴン学者として名をはせる天地様、機械人の方は無名ですが、動きから千年単位ですね、私、今度１９１３に向かうニッティのスノーシルフ家の者です、知らないと思いますが公爵家の者です」

「そうか、君か噂に聞く未知の呪術を使う人々の中で、群を抜く天才肌の魔呪士は」
「ありがとうございます、家名に恥じない動きをするつもりです、どうか仲間に入れてもらえませんか」
「うむ、女性だと頼もしい」
「おいバーサーカー」
「ツガローネと言わないと屠るぞ」
「空って矛盾の孫なんだね」
「言い難いが、色々ある」
「すみません、立ち話もなんですがバーに移りませんか」
「よし行くぞ」
「酒に弱いな」

スノーシルフ家のニッティは名乗らず、バーに案内された傭兵より将校のバーだ。
ニッティは身長が１８０センチ台、１７０センチのツガローゼより豊かな括れを持つ。
「全員巨人族の血を引くの」
「僕達は両親が大きくて１９０センチあったよ」
「私の場合は種族の最低身長です」
「オレの場合鍛えたからだ」
「そういえば名乗ってなかったな、機械人のツガローゼ」
「私はスノーシルフ家次期当主の共通語で話すなら雪風・呂・紬です」
「よろしく、で通称は」
「雪風です」
「よろしく雪風、家名は翼、名は天地丸、通称天地だ」
「矛盾空」
「九弦月影」
「ロイヤルガードのツガローネ」
「やはり近衛の方でしたか、何と無く歩きが規則正しかったので」
「まさか歩かせるため？」
「いえ私の惑星の飲み物をと思いまして」
「まあいいわ、奢りよ」
「もちろんです」

今度はガールズトークをしながら次々とボトルを開けていった二人の女性。
男性陣はツマミを注文しながら酒を飲む、どれも変わった味のする酒だ、ただデットラインと名づけられたカクテルは最高に美味かった。
ゲームをプレイしないで四時間がたちそうになり会計して携帯の

登録を済ませ、ログアウトした。

「ああ楽しかった」
「また遊びたいものだ」
「まさかゲームで酒を飲むとは」
「君の場合酒のアルコールを数秒で分解しなかったかい」

その日の当番は四時間立っているだけ、暇すぎて飽き飽きだ。
操縦士達が回復すると今までの険悪さは無くて互いに解消された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2153u/

とあるオーバーテクノロジーの転生者のバトン

2011年11月29日01時03分発行